高氣揚、

字解【竽】……解は、前に見えたり、【瑟】……解は、前に見えたり、【琴】……七絃の樂器なり、【筑】……琴に似て、大にして、頭圓くして、五絃なり、【六博】……六つの采を投げて、白と黒との六つの駒を動かして、勝負を決する遊びなり、卽ち雙陸なり、【蹋鞠】……蹴鞠なり、【戰】……こしきなり、車の心棒の過りたる輪にして、轂(や)の聚まりたる所なり、【矰】……箭物の繳なり、【帷】……垂れ布なり、【殷】……盛んなり、

講義 臨菑の都は、甚だ富饒にして、充實したれは、其の人民は、竽を吹き、瑟を鼓し、琴を彈じ、筑を擊ち、雞を鬬合はせ、狗を競走せしめ、雙陸を弄び、蹴鞠を樂みなどして、種々の遊戲に日を送らざる者なし、臨菑の都の道路は、晝夜往來繁くして、車の轂は擊ち合ひ、人の肩は摩れ違ひ、箭物の繳を連ぬれば、垂れ布を成し、袂を擧ぐれば、幕を成し、汗を揮へば、雨を成すなり、家毎に殷盛にして、人毎に充足し、意志は高尙にして、氣象は揚がれり、

文法 詹惟修の曰はく、事を敘せること曲細なり、李子藍の王專州を過る序に此の語を用ゐたりと、

夫以大王之賢、與齊之彊、天下莫能當、今乃西面而事秦、臣竊爲大王羞之、

講義 全體、大王の賢才と、齊國の强大なるとをもて、天下に臨まば、押して敵對する者なからむ、さるを、只今、西へ向ひて、秦に事へたまはむとす、臣は、內ゝ大王の爲めに御恥辱なりと存ずるなり、

文法 茅坤の曰はく、齊は秦に患へなし、故に特に秦に事ふるをもて之れを辱めたりと、

且夫韓、魏之所以重畏秦者、爲與秦接境壤界也、兵出而相當、不出十日、而戰勝存亾之機決矣、韓、魏戰而勝秦、則兵半折、四境不守、戰而不勝、則國已危亾隨其後、是故韓、魏之所以重與秦戰而輕爲之臣也、

字解【接境壤界】……地續きなり、戰國策には、壤界の二字なし、【戰勝】……戰國策にも、戰勝とあれど、勝敗の誤まりならむ、

講義 しかのみならず、全體、韓、魏兩國の手重く秦を畏れ憚る譯は、秦と地續きなるが爲めなり、秦と韓、魏と出兵して、互に敵對して戰はば、十日を過ぎずして、勝敗存亡の機會決定するならむ、其の時、韓、魏戰ひて、秦に勝たば、敵は强きが故に、兵卒の半分は、折れ挫けて、四方の國境を守ること能はざらむ、又戰ひて、秦に勝たずば、國は已に危くなりて、滅亡せむこと、敗軍の後に引き續きて直ちに來るべし、是れ韓、魏の秦と戰ふことを手重く思ひて、之れを避けて、秦の臣下となることを手輕く思ひて、之れを取はぬ譯けなり、

今秦之攻齊則不然、倍韓、魏之地、過衞、陽晉之道、徑乎亢父之險、車不得方軌、騎不得比行、百人守險、千人不敢過也、秦雖欲深入、則狼顧恐韓、魏之議其後也、是故恫疑虛喝、驕矜而不敢進、則秦之不能害齊亦明矣、

字解【徑】……通り抜くるなり、【方軌】……方は、並ぶるなり、軌は、車立ちなり、車の歯の跡なり、驅立ちを並ぶるは、二臺の車を並ぶるなり、【比行】……並び行くなり、【狼顧】……疑ひ深き狼のやうに、度々跡を振り向くなり、【恫疑】……齊を恐れ疑はしむるなり、【虛喝】……から威しなり、【驕矜】……高ぶり誇るなり、

講義 韓、魏の地勢は、前の如くなれば、秦の韓、魏を攻むることは、容易けれども、齊を攻むることは、然らざるなり、其の譯けは、秦の齊を攻むるには、韓、魏の土地をうしろにし、衞の陽晉の道を通り越し、亢父の險阻を守れば、千人の敵は、押し切りて通り越されぬなり、されば、秦は、齊の地へ深入りしたく思へども、疑ひ深き狼のやうに、度々跡を振り向きて、韓、魏の兵の已れの後陣を伐たむことを評議せむことを氣遣へり、此の譯けなれば、秦は、常々齊を恐れ疑はしめ、から威しをし、已れの强きを高ぶり誇るまでにして、押し切りて進み向はざるなり、此の樣子なれば、秦の齊を害することの叶はぬことも亦明白なり、

夫不深料秦之無奈齊何、而欲西面而事秦之名、而有彊國之實、臣是故願大王少留意計之、

講義 全體、秦の齊を如何樣にすることも出來ぬといふことを深く考へ料らずして、西へ向ひて、之れに事へむと思ふは、是れ羣臣の計策の間違ひなり、今、大王には、臣が說を聽き納れたまはゞ、秦に臣とし事ふる汙名なくして、國を强くする實功あらむ、臣、此の譯けなれば、願はくは、大王の少しばかり尊意を臣が說に留められて、之れを勘考したまはむことを」と、以上、蘇秦の言葉なり、

齊王曰、寡人不敏、僻遠守海、窮道東境之國也、未嘗得聞餘教、今足下以趙王詔詔之、敬以國從、

【新道】……道路の行き止まりなり、【足下】……其の人の足下に居る人を指す、先方を敬ふ言葉なり、

【解】齊王、蘇秦の說に感服して曰はく、「拙者は、不才なるが上に、此の片寄りて遠き處に東海の番をして、陸地の道路の行き止まりなる東の邊境の所に居ることなれば、是れまで未だ一度も餘分の教訓を聞き及びたることなし、然るに、此の度、先生足下の、趙王の教命をもて告げられたるは、何よりの幸なり、拙者は、敬みて吾が一國の人民を引き連れて、先生の說に從はむ」と、

乃西南說楚威王曰、楚天下之彊國也、王天下之賢王也、西有黔中、巫郡、東有夏州、海陽、南有洞庭、蒼梧、北有陘塞、郇陽、地方五千餘里、帶甲百萬、車千乘、騎萬匹、粟支十年、此霸王之資也、

【解】是に於て、蘇秦西南の方楚の國へ往きて、楚の威王に說きて曰はく、「楚は、天下中の強大なる國にして、大王は、天下中の賢明なる王なり、西の方には、黔中と巫郡とあり、東の方には、夏州と海陽とあり、南の方には、洞庭と蒼梧とあり、北の方には、陘塞と郇陽とあり、土地の廣さは、五千餘里四方あり、甲冑を著用したる兵士は、百萬人あり、兵車は、千輛あり、騎馬は、一萬匹あり、兵糧の籾米は、十箇年の間を支ふべし、是れ天下に覇者たり王者たるべき資本なり、

夫以楚之彊與王之賢、天下莫能當也、今乃欲西面而事秦、則諸侯莫不西面而朝於章臺之下矣、

【章臺】……臺の名なり、咸陽の都に在り、

【解】全體、楚の強大なる勢力と、大王の賢明なる威光とをもて、天下に臨まば、天下中に能く敵對する者なからむ、さるを、只今、反りて、西へ向ひて、秦に事へむと思ひたまはゞ、列國の諸侯は、皆大王の眞似をして、西へ向ひて、咸陽の都なる章臺の下に參朝して、秦王の機嫌を伺はぬ者なきに至らむ、

秦之所害莫如楚、楚彊則秦弱、秦彊則楚弱、其勢不兩立、故爲大王計、莫如從親以孤秦、大王不從、秦必起兩軍、一軍出武關、一軍下黔中、則鄢、郢動矣、臣聞治之其未亂也、爲之其未有也、患至其後憂之、則無及已、

故願大王蚤孰計之、

【解】秦の邪魔物として、忌み嫌へる國は、天下中にて、楚に增したる者なし、楚の方強ければ、秦の方弱く、秦の方強ければ、楚の方弱し、其の勢ひは、兩方並び立たぬなり、されば、大王の爲めに考へ計るに、韓、魏、趙、楚、燕、齊の六箇國、合從親睦して、秦を孤獨にするに增したることなし、大王臣が說に從ひたまはゞすば、秦は屹度兩軍を起こして、一軍は、武關より出でゝ、鄢の地へ押し寄せ、一軍は、黔中より下りて、鄙の地へ攻め込まむ、さらば、鄢の地も、鄙の地も、大騷動となりむ、臣が兼ねゝ聞き及びたるには、何事も、まだ亂れざる前に治め、まだ其の事の起こらぬ前に處置すべしとなり、患害已に立ち至りたる後に、之れを心配せば、間に合ふことなからむ、されば、願はくは、大王には、只今の中に早く之れを十分に勘考したまひて、秦に攻め寄せられぬやうにしたまはむことを、

大王誠能聽臣、臣請令山東之國、奉四時之獻、以承大王之明詔、委社稷、奉宗廟、練士厲兵、在大王之所用之、

【委社稷奉宗廟】……社稷宗廟を楚に委託するなり、【厲】……勵ますなり、

【解】大王誠に能く臣が說を聽き納れたまはゞ、臣華山より東の方の列國をして、春夏秋冬四季折りくの獻上物を捧げしめて、大王の明敕なる教命を承けしめ、其の國々の社稷宗廟を楚に委託し、士卒を訓練し、兵隊を奮勵して、大王の御指揮次第に働くやうにせしめむことを請ふ、

大王誠能用臣之愚計、則韓、魏、齊、燕、趙、衛之妙音美人、必充後宮、燕、代橐駝、良馬、必實外廄、故從合則楚王、衡成則秦帝、今釋霸王之業、而有事人之名、臣竊爲大王不取也、

【妙音】……樂器をいふ、【橐駝】……駱駝なり、馬に似て、重荷を負ふ者なり、【外廄】……表の馬屋なり、

【解】大王誠に能く臣が愚昧なる計策を用ゐたまはゞ、韓、魏、齊、燕、趙、衛の國々の鐘鼓管絃の妙音、窈窕艷妍たる美人は、屹度大王の奥御殿に充滿し、燕の國、代の地の橐駝、良馬は、屹度大王の表の御馬屋に充實せむ、されば、合從の計策成就せば、秦は天下に帝たらむ、然るに、只今、大王には、覇者たり王者たる大業を棄て置きたまひて、人に事ふる汙名あらむとす、臣は、內々大王の爲めに、得策として取り上げざるなり、

【文法】茅坤の曰はく、「楚と秦とは、兩つながら大なりとす、故に秦に抗することをもて激怒せしめたりと、○楊愼の曰はく、秦と楚とは、其の勢ひ兩立せず、從合則楚王、衡成則秦帝は、說辭の綱なりと、

夫秦虎狼之國也、有吞天下之心、秦天下之仇讎也、衡人皆欲割諸侯之地以事秦、此所謂養仇而奉讎者也、夫爲人臣、割其主之地、以外交彊虎狼之秦、以侵天下、卒有秦患、不顧其禍、夫外挾彊秦之威、以內劫其主、以求割地、大逆不忠、無過此者、故從親、則諸侯割地以事楚、衡合、則楚割地以事秦、此兩策者、相去遠矣、二者大王何居焉、故敝邑趙王使臣效愚計、奉明約、在大王詔之、

【解】全體、秦は、虎狼の如き恐ろしき國にして、天下を併呑せむとする心あれば、秦は、天下の仇讎怨敵なり、然るに、秦の爲めに連衡の說を主張する者は、諸列國の諸侯の土地を割き與へて、秦に事へしめむと思へり、是れ世間にて取り沙汰せる、我が仇讎を奉養する者なり、全體、此の輩は、人の臣下となりながら、其の君主の土地を割き與へて、外へ向ひて、強きこと虎狼の如き秦に交はらしめて、天下を侵し奪はむとせり、而して、俄に秦の攻め込む患害ありても、其の國々の禍を振り向きもせで、傍觀せり、全體、此の輩の、外は強き秦の勢力を小脇に掻い込みて、內は其の君主を威し付けて、土地を割き與へむことを求むるは、此の上もなき大逆不忠なり、されば、合從の計策和親せば、諸侯は、土地を割き與へて、楚に事ふることゝならむ、連衡の計策成就せば、楚は、土地を割き與へて、秦に事ふることゝならむ、此の兩策は、利害得失、相去ること極めて遠し、大王には、此の二つの中の孰れを取らむと思し召さるゝか、此の譯けなれば、敝邑の趙王、臣をして、愚昧なる計策を進呈せしめ、明白なる約束を差し上げしめたるなり、此の上は、唯々大王より何分の御沙汰を下されむまでなり」と、以上、蘇秦の言葉なり、

【文法】詔以讀の日はく、篇中三たび秦、楚の兩立せざる勢ひを言ひて、利害益々切なることを加へたりと、

楚王曰、寡人之國、西與秦接境、秦有擧巴、蜀、并漢中之心、秦虎狼之國、不可親也、而韓、魏迫於秦患、不可與深謀、與深謀恐反人以入於秦、故謀未發而國已危矣、寡人自料、以楚當秦、不見勝也、內與羣臣謀、不足恃也、寡人臥不安席、食不甘味、心搖搖然如縣旌、而無所終薄、今主君欲一天下、收諸侯、存危國、寡人謹奉社稷以從、

【解】【秦有擧巴、蜀、并漢中之心】……蘇秦の最初に秦の惠王に說きたる言葉の中に、秦は、西に關中あり、南に巴、蜀ありとあり、又張儀の傳に、秦、齊共に楚を攻めて、遂に丹陽、漢中の地を取るとあれば、漢中郡は、本と楚の地にして、秦に取られたるなり、巴郡と蜀郡とは、楚の地にあらず、之れを連言せるは、其の地勢相接すればなり、【反人】……我れに叛くなり、【搖搖然】……落ち著かぬさまなり、【縣旌】……旗竿の先に付きたる鳥の羽根なり、縣は、懸と同じ、【終薄】……薄は、止まるなり、二字にて、落ち著くことなり、

【解】楚王蘇秦の說に感服して曰はく、「拙者の國は、西の方秦と境を接せり、秦は、巴郡、蜀郡を九取りにし、漢中郡を併呑せむとする下心あり、秦は、虎狼の如き恐ろしき國なれば、親み交はれぬなり、而して、韓、魏の兩國は、秦の患害に差し迫りたれば、一所に深く物事を相談せられぬなり、若し深く相談せば、板挟みになることを苦みて、我れに叛きて、秦の方へ折れ込まむことを氣遣はるゝなり、されば、其の相談のまだ物にならぬ中に、我が國已に危からむ、拙者自ら考へ料るに、楚をもて秦に敵對せば、所詮勝利を得られざらむ、又國內の家來共と相談せば、力とするに足らざらむ、拙者は常に此の事を心配して、臥しても席に身を安んぜず、物を食ひても、其の味ひを甘しと思はず、心搖搖然として、旗竿の先に付きたる鳥の羽根の風にゆらめく如く、片時も落ち著きたることなし、然るに、此の度、主君先生の、天下を合一し、諸侯を取り纏めて、此の危き我が國を保存せむと思はれたるは、何よりの幸なり、拙者は、謹みて社稷國家を捧げて、先生の說に從はむ」と、

【文法】薄字の日はく、心如縣旌を此に改めて縣旌に作りて、搖搖の二字を補へり、詩の閒深なるには如かずといへども、義は明暢なるを覺ゆと、

於是六國從合而并力焉、

【解】是に於て、韓、魏、趙、楚、燕、齊の六箇國の合從成り立ちて、力を并はせて秦に抵抗することゝなりぬ、

蘇秦爲從約長、并相六國、北報趙王、乃行過雒陽、車騎輜重、諸侯各發使送之甚衆、擬於王者、周顯王聞之恐懼、除道使人郊勞、

【文法】【使人郊勞】……朝廷の大臣をして、城の郊外まで出迎へて、慰勞せしむるなり、儀禮に、賓近郊に至れば、君、卿をして、朝服して、束帛をもて、勞せしむとあり、

【解】是に於て、蘇秦合從の約束の長となりて、六箇國の宰相を兼帶して、楚を打ち立ちて、北の方趙の國へ歸りて、其の趣きを趙王に報告せむとて、自分の鄕里の洛陽を通り過ぎたるが、其の行列の馬車騎馬、及び衣服器械を載せたる荷車は更なり、列國の諸侯より餞々に見送りとして、差し遣へられたる使者の同勢も、甚だ多數なりければ、其の盛んなること、帝王の旅行にも比擬すべき程なり、周の天子の顯王は、

最初に蘇秦を用ゐられざるのみならず、秦の惠王に文王、武王の祭祀に供へたる肉の餘りを差し遣りて、其の功勞を褒められたることなれば、此の期に及びて、蘇秦の威勢を聞き及ばれて、殊の外恐怖せられて、其の通行の道筋を掃除せしめられ、朝廷の大臣をして、禮服を著用せしめ、手土產の反物を持參せしめて、城の郊外まで出迎へしめて、蘇秦を慰勞せしめられたり、

蘇秦之昆弟妻嫂、側目不敢仰視、俯伏侍取食、蘇秦笑謂其嫂曰、何前倨而後恭也、嫂委蛇蒲服、以面掩地而謝曰、見季子位高金多也、蘇秦喟然歎曰、此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之、況衆人乎、且使我有雒陽負郭田二頃、吾豈能佩六國相印乎、於是散千金以賜宗族朋友、

【昆弟】……兄弟なり、【側目】……横目にて見るなり、【委蛇】……逶迤に同じ、紆曲するさまなり、眞直に進まぬなり、【蒲服】……匍匐に同じ、腹這ふなり、【季子】……蘇秦を指す、末の弟分に當たるが故に、斯くいへるなり、御身といはむが如し、【負郭之田】……負は、背〳〵なり、郭は、城の外曲輪なり、城の外曲輪をうしろにしたる田地なり、卽ち城末の搾せたる田地にてはなく、雒陽城の外曲輪に近き肥えたる田地なり、【頃】……百畝を頃といふ、

【講】蘇秦美〳〵しき行列にて、自分の家に立ち寄りしに、兄も、弟も、己れの妻も、兄嫁も、皆恐る〳〵横目にて其の樣子を窺ひ見るのみにして、押して頭を擡げて仰ぎ觀る者なく、始終首を垂れ、下を見ながら、其の側に侍き事へて、食物を取り進めて、給仕せしかば、蘇秦笑ひて、其の兄嫁に物語りして曰はく、「何故に、前には倨傲押柄にして、後には恭敬丁寧なるぞ」と、兄嫁愈〳〵恐れ入りて、委蛇として、眞直に進まずして、腹這ひながら、顏をもて地を掩ひて、下向きになりて、挨拶して曰はく、「今日、かやうに尊敬するは、御身が位の高く金の多くなりたるを見ればなり」と、蘇秦喟然として、歎息して曰はく、「昔も今も、唯〳〵一人の身なるに、富貴なるときは、親戚身內の人〳〵も、之れを長れ憚り、貧賤なるときは、親戚身內の人〳〵すら、此の通りなれば、況して世間の衆人の現金なるは、無理もなきことなり、且つ我れをして此の雒陽城の外曲輪に近き肥えたる田地の二百畝もあらしめば、吾れは、いかで能く學問を勉強して、六箇國の宰相の印章を腰に付くることあるべき、吾れの今日此のやうになりたるは、全く貧賤親戚の御蔭なり」と、是に於て、持ち合はせたる千金を散財して、一家親族朋友知人に分ち與へて、其の身の出世を祝ひたり、

初蘇秦之燕、貸百錢爲資、及得富貴、以百金償之、徧報諸所嘗見德者、其從者有一人、獨未得報、乃前自言、蘇秦曰、我非忘子、子之與我至燕、再三欲去、我易水之上、方是時、我困、故望子深、是以後子、子今亦得矣、」

【貸】……借るなり、【見德】……恩德を施されたるなり、【望】……不足に思ふなり、

【講】最初に、蘇秦の燕の國へ往きしとき、人に百錢を借用して、路銀とせしが、此の度、富貴を得るに及びて、百金をもて、其の借財を辨濟して、其大の恩返しをせり、其の他、前方に色〳〵の恩德を施されたる者に對しても、殘らず過分の恩返しをせり、然るに、其の家來の中に、一人の男ありて、唯〳〵獨りまだ長〳〵間の供をせし恩返しを得ざりしかば、蘇秦の前へ進み出でゝ、自ら己れの辛勞を述べて、物を貰はむと思ひしに、蘇秦の曰はく、「我れは、御身を忘れて、物を與へざるにあらず、御身の我れと燕の國へ到著せしとき、御身は、度〳〵我れを見棄てゝ、易水の近邊にて、置き去りにせむと思ひたることあらむ、其の頃、我れは、殊の外困難せり、されば、御身の辯もしからぬ了簡を不足に思ふと深し、此の譯けをもて、御身に返禮することを躊躇しにせり、さりながら、御身も、今は望みの物を得べければ、左樣に心配せぬがよし」と、

蘇秦既約六國從親、歸趙、趙肅侯封爲武安君、乃投從約書於秦、秦兵不敢闚函谷關十五年、

【講】蘇秦既に六箇國と約束して、首尾よく合從親陰して、趙の國へ歸りければ、趙の肅侯、其の功勞を賞して、領地を與へて、武安君とせり、是に於て、合從の約束の書面を秦の國へ投げ込みたれば、秦の兵は、閉口して、押し切りて函谷關の外の諸國を視はざること、十五箇年に及びたり、

其後秦使犀首欺齊、魏、與共伐趙、欲敗從約、齊、魏伐趙、趙王讓蘇秦、蘇秦恐、請使燕必報齊、蘇秦去、趙、而從約皆解、

【犀首】……解は、前に見えたり、

【講】然るに、其の後、秦は、犀首の公孫衍をして、齊と魏とを欺きて、共〳〵に趙を伐たしめて、合從の約束を破壞せむと思ひしに、齊も、魏も、其の甘言に載せられて、趙を伐ちたれば、趙王蘇秦に約束の甲斐なきことを責め詰めたり、蘇秦甚だ當惑して、假りに一策を設けて、燕の國へ使ひに往きて、屹度齊に返報いたしと請ひて、其の許しを得て、趙を立ち退きたれば、六箇國の合從の約束は、皆瓦解せり、

秦惠王以其女爲燕太子婦、是歲、文侯卒、太子立、是爲燕易王、易王初立、

齊宣王因燕喪伐燕、取十城、易王謂蘇秦曰、往日先生至燕、而先王資先生見趙、遂約六國從、今齊先伐趙、次至燕、以先生之故、爲天下笑、先生能爲燕得侵地乎、蘇秦大慙曰、請爲王取之、

【講義】秦の惠王、其の妹をもて、燕の太子の嫁とせり、是の歳、燕の文侯卒去して、太子跡目に立てり、是れを燕の易王とす、易王の初めて跡目に立ちたるとき、齊の宣王、燕の忌服に付け込みて、燕を伐ちて、其の十箇所の城を取りたれば、易王蘇秦に物語りして曰はく、「先頃、先生燕に來られて、合從の利益を說かれたれば、我が父君の先王は、先生に資本を給して、趙王に面會せしめて、遂に六箇國の合從を約束せり、然るに、此の度、齊は、其の約束に違背して、先づ趙を伐ち、次ぎに燕を伐つに至りたり、先生の計策の故をもて、世の物笑ひとなりたるは、心外のことなり、先生は、能く燕の爲めに、此の侵されたる土地を齊より取り返さるべしや」と、蘇秦大に慙ぢ入りて曰はく、「大王の爲めに、之れを取り返さむことを請ふ」と、

蘇秦見齊王、再拜、俯而慶、仰而弔、齊王曰、是何慶弔相隨之速也、

【字解】【慶】……喜びを述ぶるなり、【弔】……悔みを述ぶるなり、

【講義】蘇秦齊の國へ往きて、齊王に謁見して、再拜して、地に俯して、喜びの口上を申し述べたれば、齊王の曰はく、「先生は、何故に、喜びの口上を述べらるゝかと思へば、忽ち悔みの口上を述べらるゝぞ」と、

【文法】鄧以讀の曰はく、故さらに慶弔を作せるは奇なりと、

蘇秦曰、臣聞飢人所以飢而不食烏喙者、爲其愈充腹而與餓死同患也、今燕雖弱小、即秦王之少壻也、大王利其十城、而長與彊秦爲仇、今使弱燕爲鴈行、而彊秦敝其後、以招天下之精兵、是食烏喙之類也、

【字解】【烏喙】……一名を烏頭といふ、毒藥なり、【少壻】……若聟なり、【鴈行】……鴈の並びて行くが如くに、燕と秦と事を共にするをいふ、【敝其後】……敵は、敝と通ず、助くといはむが如し、其の後を助くるは、尻押しをするなり、

【講義】蘇秦の曰はく、「臣が兼ねゝ聞き及びたるには、飢ゑたる人の、飢ゑて死なむとしても、毒藥の烏喙を食はざる譬けは、其の愈さ益さ腹に充ちて、空腹を免れたるかと思へば、暫時の間に、毒氣發して、遂ゑ死にと同じやうなる患害を受くるが爲めなりとなり、今、燕は、弱くして、小さき國なりといへども、燕王は、秦王の婿を嫁に貰はれたれば、取りも直さず、秦王の若聟なり、然るに、大王は、其の十箇所の城を得たるを利益なりとして、水代强き秦の國と併敵となりたまへり、今此の弱き燕をして、烏の並びて行くが如くに、秦と事を共にせしめ、强き秦をして、其の尻押しを之しめ、天下中の精銳なる兵卒を齊の國都へ押し寄せしめば、是れ小利に迷ひて、大害を買ひたまふこと、空腹を免れむとして、毒藥の烏喙を食ふに似寄りたり、是れ臣が大王の燕に勝ちたまへるを御喜び申しながら、又御悔み申したる譬けなり」と

齊王愀然變色曰、然則奈何、蘇秦曰、臣聞古之善制事者、轉禍爲福、因敗爲功、大王誠能聽臣計、即歸燕之十城、燕無故而得十城、必喜、秦王知以己之故而歸燕之十城、亦必喜、此所謂弃仇讎而得石交者也、夫燕、秦俱霸王之業也、王曰、善、於是乃歸燕之十城、

【字解】【愀然】……顏色の變はるさまなり、【制事】……物事を切り盛りするなり、【石交】……堅固なる交際なり、

【講義】齊王之れを聞きて、愀然として、顏色を變へて曰はく、「然らば、之れを如何樣にせば宜しからむ」と、蘇秦の曰はく、「臣が兼ねゝ聞き及びたるには、昔の上手に物事を切り盛りする者は、是れは、國家の禍害ならむと思はるゝ出來事も、其の事柄に連れて、幸福を生み出だし、是れは國家の失敗ならむと思はるゝ出來事も、其の事柄を轉じ移して、手柄を立つるなりとなり、大王誠に能く臣が計策を聽き納れたまはば、即座に燕の十箇所の城を燕へ返却したまふべし、燕は、何等の譬けもなくして、十箇所の城を手に入れたらば、屹度喜ばむ、秦王は、已れの聟の譬けをもて、燕の十箇所の城を返却せられたることを承知せば、やはり屹度喜ばむ、此の仕方は、世間にて取り沙汰せる、仇讎怨敵を除き棄てゝ、堅固なる交際を得る者なり、全體、燕と秦と共ゝに齊の恩義を有り難く思ひて、臣下となりて事へむには、大王の號令は、天下中に押し切りて之れを聽かざる者なからむ、唯大王の號令に服從すべし、是れ大王は、何物をも塞まるゝことなく、唯ゝ空虛なる辭令をもて、秦を手に附けられ、己れの土地を尺寸も損せず、唯ゝ燕の十箇所の城を其の持ち主に返却したるばかりにて、列國の諸侯を感服せしめて、天下を取らるゝことゝなるべし、此の仕方こそ、天下に霸者たり王者たるべき事業なれ」と、齊王の曰はく、「至極尤なり」と、是に於て、齊は、燕の十箇所の城を返却せり、

人有毀蘇秦者曰、左右賣國、反覆之臣也、將作亂、蘇秦恐得罪歸、而燕王不復官也、蘇秦見燕王曰、臣東周之鄙人也、無有分寸之功、而王親拜

之於廟、而禮之於廷、今臣爲王卻齊之兵、而攻得十城、宜以益親、今來而王不官、臣者、人必有以不信傷臣於王者、臣之不信、王之福也、

【注釋】【攻】……收の誤まりなり、取り返すなり、【傷】……惡口するなり、

【講義】蘇秦の齊へ往きたる留守中に、或る人、蘇秦の事を燕王に讒言する者ありて曰はく、「蘇秦は、人の國を左へ營りて、己れの利益を計る、寓返の者なり、此の樣子にては、輕な〳〵逆意を企つるならむ」と、蘇秦之れを聞き込みて、罪を得むことを氣遣ひて、齊王に暇を告げて、燕へ歸りしに、燕王元の役目を授けざりしかば、蘇秦燕王に謁見して曰はく、「臣は、東周洛陽の下賤なる者なり、燕の爲めには、僅に一分一寸の手柄もなかりしを、大王には、御自身に宗廟の前に拜謁せしめられて、朝廷の上に禮遇せられたれば、臣は、御恩に感激して、御國の爲めに骨折りたり、此の度、臣は、大王の爲めに、齊の兵を逐ひ退けて、一旦侵し奪はれたる十餘所の城を取り返し得たれば、大王には、其の功勞を褒めたまひて、益〻親愛せらるべき筈なり、然るに、只今、歸り來れば、大王には、再び臣に役目を授けたまはぬは、何故ぞ、是れは、必定、何人か臣は信用せられぬ者なりと、大王に惡口せし者あるに由るならむ、臣が信用せられぬは、大王の幸福なり、

【文法】楊慎の曰はく、燕人秦を毀る等の語を提げ起こして、下文の許多の議論を發し出だせり、文法なりと、

臣聞、忠信者、所以自爲也、進取者、所以爲人也、且臣之說齊王、曾非欺之也、臣弃老母於東周、固去自爲、而行進取也、今有孝如曾參、廉如伯夷、信如尾生、得此三人者、以事大王、何若、王曰、足矣、

【注釋】【忠信】……忠は、實意を盡くすなり、信は、虛言を吐かぬなり、【進取】……進みて人の國を取るなり、

【講義】臣が兼ね〳〵聞き及びたるには、實意を盡くして虛言を吐かぬは、自分の利益の爲めにする譯けにしてはあらぬなり、進みて人の國を取るは、人の利益の爲めにする譯けにしては、自分の利益の爲めにする譯けにはあらぬなりとなり、しかのみならず、臣が齊王に說きたるは、當然の道理を述べて、其の侵したる城を返却せしめたることにて、初めより曾て一度も之れを欺きたるにはあらぬなり、臣が老母を東周の故鄉に棄て置きて、他國に於て辛苦するは、言ふまでもなく、嚴潔なることは、昔の曾參の如く、嚴潔なることを去りて、進みて人の國を取ることを行はむとてなり、今、若し此の處に孝行なることは、昔の曾參の如く、信實なることとは、昔の尾生の如き者ありとせむに、此の三人を手に入れて、大王に奉公せしめば、大王には、如何樣に思し召さるべき」と、以上、蘇秦の言葉なり、燕王の曰はく、「それにて十分ならむ」と、

【文法】丘濬の曰はく、此れ又辯論の一大機括なりと、

蘇秦曰、孝如曾參、義不離其親一宿於外、王又安能使之步行千里而事弱燕之危王哉、廉如伯夷、義不爲孤竹君之嗣、不肯爲武王臣、不受封侯、而餓死首陽山下、有廉如此、王又安能使之步行千里、而行進取於齊哉、信如尾生、與女子期於梁下、女子不來、水至不去、抱柱而死、有信如此、王又安能使之步行千里、卻齊之彊兵哉、臣所謂以忠信得罪於上者也、

【注釋】【孝】……樣なり、

【講義】蘇秦の曰はく、「孝行も、嚴潔も、信實も、善きことなれど、時によりては、役に立たぬことあり、其の譯けは、孝行なること昔の曾參の如く、なれば、義理を守りて、其の親の手元を離れて、一夜たりとも他所に宿泊することなければ、大王には、又いかで能く此の人をして、臣が如く、千里の外に步行して、朝鮮の手元を承知せず、封侯の爵祿を受けずして、首陽山の麓に餓死せり、嚴潔なること昔の伯夷の如くなれば、義理を守りて、孤竹の國の君の跡目とならず、周の武王の臣下となることを承知せず、封侯の爵祿を受けずして、首陽山の麓に餓死せり、嚴潔なること此の如くならば、大王には、又いかで能く此の人をして、臣が如く、千里の外に步行して、進みて人の國を取ることを齊に行はしめらるべき、信實なること昔の尾生の如くなれば、女子と橋の下にて出逢ふべき約束をして、其の女子來らざりしかど、己れは堅く約束を守りて、上げ汝になりても、其の處を去らずして、橋杙を抱きて、溺死せり、信實なること此の如くならば、大王には、又いかで能く此の人をして、臣が如くに、千里の外に步行せしめて、齊の强き兵を逐ひ退けしめらるべき、しかのみならず、臣は、世間にて取り沙汰せる、實意を盡くして、虛言を吐かぬ嚴を以て、上の御方に罪を得たる者なり」と、

燕王曰、若不忠信耳、豈有以忠信而得罪者乎、蘇秦曰、不然、臣聞客有遠爲吏、而其妻私於人者、其夫將來、其私者憂之、妻曰、勿憂、吾已作藥酒待之矣、居三日、其夫果至、妻使妾擧藥酒進之、妾欲言酒之有藥、則

恐、其逐主母也、欲勿言乎、則恐其殺主父也、於是乎、詳僵而弃酒、主父大怒笞之五十、故妾一僵而覆酒、上存主父、下存主母、然而不免於笞、惡在乎忠信之無罪也、夫臣之過、不幸而類是乎、燕王曰、先生復就故官、益厚遇之、

【客】……或る人なり、【私】……密通するなり、【樂酒】……毒酒なり、【妾】……下女なり、【主母】……内儀なり、【主父】……檀那なり、【詳】……佯に同じ、詐るなり、【僵】……仆るゝなり、【笞】……棒切にて打ち懲らすなり、【故官】……元の役目なり、

【解】燕王の曰はく、「汝は、實意を盡くして虚言を吐かぬといふことをせざるまでなり、いかで世間に實意を盡くして虚言を吐かずして、罪を得る者あるべき」と、蘇秦の曰はく、「さにあらず、臣が兼ねゝ聞き及びたるには、昔し、或る人、遠方の役人となりて、出張したる留守中に、其の妻、人と密通せる者ありけり、其の夫、程なく歸り來らむとせゝかば、其の密通せし男、之れを心配せしに、妻の曰はく、『心配することなかれ、吾れ已に毒酒を拵へて、夫の歸り來るを待てり』と、其の後、三日目に、其の夫、果たして歸り來りたれば、妻は、下女に言い付けて、用意の毒酒を持ち出して、之れを夫に進めさせむとせり、然るに、下女は、深切正直の者なりければ、酒の中に毒あることを言はむと思ひたれど、之れを言はゞ、檀那の内儀を逐ひ出さむことを掛念せり、さればとて、之れを言ふまじと思ひたれど、之れを言はずば、内儀の檀那を毒殺せむことを掛念せり、是に於て、雙方の爲めを思ひて、詐りて物に躓きたる眞似をして、轉び仆れて、持ちたる酒を地上に覆し棄てたれば、檀那は、大に立腹して、下女を棒切れにて打ち懲らすこと五十度に及びきとなり、されば、此の下女は、一たび仆れて、酒を覆して、上は檀那の命を繋ぎ止め、下は内儀の身の上を無難にせり、此のやうに心を用ゐても、猶ほ疑にて打たるゝことを免れざれば、いかで己れの心の誠を盡くして虚言を吐かぬ者は罪を得ることなしと限るべき、全體、臣の過失といふは、不幸にして、此の下女に似寄りたちむかし」と、燕王蘇秦の辯解に感服して曰はく、「先生重ねて元の役目に就かるべし」と、それより益ゝ手厚くそれを待遇せり、

易王母、文侯夫人也、與蘇秦私通、燕王知之、而事之加厚、蘇秦恐誅、乃說燕王曰、臣居燕、不能使燕重、而在齊、則燕必重、燕王曰、唯先生之所爲、

【加厚】……手厚きが上にも手厚くするなり、

【解】易王の母親は、亡父の文侯の奥方なり、いつの程にか、蘇秦と密通したれども、燕王之れを承知しながら、母親に事ふること、手厚きが上にも手厚くせり、蘇秦事の露顯して、誅戮せられむことを掛念して、燕王に說きて曰はく、「臣は、燕の國に居りては、燕の實目を重からしむること能はざれども、齊の國に居らば、燕の實目は屹度〻くなるむ」と、燕王の曰はく、「既れなりとも、唯ゝ先生の都合よきやうにせよ」

於是蘇秦詳爲得罪於燕、而亡走齊、齊宣王以爲客卿、齊宣王卒、湣王即位、說湣王厚葬以明孝、高宮室、大苑囿、以明得意、欲破敝齊而爲燕、

【客卿】……客分の卿なり、

【解】是に於て、蘇秦詐りて、罪を燕に得たる眞似をして、逃亡して、齊の國へ入り込みしに、齊の宣王、蘇秦を客分の卿相として優待せり、輕なく、齊の宣王卒去して、湣王位に即きたれば、蘇秦湣王に說き勸めて、宣王を手厚く葬りて、親に孝行なることを世間に發表せしめ、宮室を高くし、苑囿を大にして、嗣君の得意滿足せることを世間に發表せしめしが、其の内實は、金錢を無益に使ひ棄てさせて、齊の財政を破壞疲弊せしめて、燕の利益の爲めにせむと思ひたり、

燕易王卒、燕噲立爲王、其後齊大夫多與蘇秦爭寵者、而使人刺蘇秦、不死殊、而走、齊王使人求賊、不得、蘇秦且死、乃謂齊王曰、臣即死、車裂臣以徇於市曰、蘇秦爲燕作亂於齊、如此、則臣之賊必得矣、於是如其言、而殺蘇秦者果自出、齊王因而誅之、燕聞之曰、甚矣、齊之爲蘇生報仇也、蘇秦既死、其事大泄、齊後聞之、乃恨怒燕、燕甚恐、

【不死殊而走】……殊は、分かるゝなり、絶ゆるなり、蘇秦のまだ死に切らぬ中に、刺したる者の走り去りたるなり、【其事】……蘇秦の

【解】程なく、燕の易王卒去して、其の子の噲、跡目に立ちて、王となりぬ、其の後、齊の家老の中に、蘇秦と君の寵愛を爭ふ者多くなりて、遂に人をして、蘇秦を刺さしめしが、蘇秦のまだ死に切らぬ中に、刺したる者は走り去りたり、齊王大に驚きて、役人をして、其の賊を搜し求めさせたれど、手に入らざりしかば、蘇秦死なむとするときに、齊王に物語りして曰はく、「臣若し死なば、臣を車裂きの刑に行はれて、市中に張り札をせられて、『蘇秦は、燕の爲めに、逆意を齊に企てたれば、重罪に處せり』と觸れ示されよ、此のやうにせば、臣を刺したる賊は、屹度御手に入るならむ」と、是に於て、齊王其の遺言の通りにせしに、蘇秦を殺したる者、果たして讃美を賞はむとて、自身に訴へ出でたれば、齊王因りて之れを誅戮せり、燕の人ゝ、此の事を聞き及びて曰はく、「さても餘りに甚しきことよ、齊の蘇秦の爲めに仇を報いたる仕方は」と、

蘇秦の既に死去せし後に、蘇秦の燕の廻し者にて、齊を疲弊せしめむとせしこと、大に露顯せしかば、齊は、跡にて、之れを聞きて、燕を恨み怒りたれば、燕は甚だ恐怖せり、蘇秦の事は、是れにて終はれり、

蘇秦之弟曰代、代弟蘇厲、見兄遂、亦皆學、及蘇秦死、代乃求見燕王、欲襲故事、曰、臣東周之鄙人也、竊聞大王義甚高、鄙人不敏、釋鉏耨而干大王、至於邯鄲、所見者絀、於所聞於東周、臣竊負其志、及至燕廷、觀王之羣臣下吏、王天下之明王也、

【字解】【遂】……志しを遂ぐるなり、【襲故事】……襲は、繼ぐなり、故事は、先例なり、蘇秦の諸侯を合從したる先例を繼ぐなり、【釋鉏耨】……鉏は、鋤なり、耨は、耘るなり、農業を棄て置くことなり、【絀】……屈と通ず、劣るなり、【負其志】……負は、違ふなり、見込みの違ふなり、

【講義】蘇秦の弟は、蘇代といひ、蘇代の弟は、蘇厲といふ、兄の蘇秦の六箇國の宰相となりて、其の志しを遂げたるを見て、兩人共に、亦游說の術を學びたり、蘇秦の變死するに及びて、蘇代は、燕の國へ往きて、燕王に謁見せむことを求めて、兄の諸侯を合從したる先例を繼がむと思ひて、申し立てゝ曰はく、「臣は、東國鄙陽の下賤なる者なり、兼ねて內〻大王の行狀の甚だ高尙なることを承りたれば、此の下賤なる者は、不才なれども、年來の農業を棄て置きて、大王に仕へを求めむとす、先頃、臣は、趙の國の盛んなる樣子を聞きて、其の都の邯鄲へ到著せしに、其の實際に見たる所は、東周の鄙里に於て聞ける所より劣りたれば、臣は、內〻見込みの違ひたることを後悔せり、然るに、燕の朝廷へ到著するに及びて、大王の羣臣、及び下〻の役人達の樣子を觀るに、孰れも才能器量あれば、大王は、實に天下の明王なり」と、

燕王曰、子所謂明王者何如也、對曰、臣聞明王務聞其過、不欲聞其善、臣請謁王之過、夫齊、趙者、燕之仇讎也、楚、魏者、燕之援國也、今王奉仇讎以伐援國、非所以利燕也、王自慮之、此則計過無以聞者、非忠臣也、

【字解】【謁】……告ぐるなり、【以聞】……言上するなり、

【講義】燕王之れを聞きて曰はく、「御身の只今申したる明王とは、如何なる王のことなるか」と、蘇代對へて曰はく、「臣が兼ねゝ聞き及びたるには、明王は、自分の過失を人より聞かむことを先務として、自分の善事を人より聞かむことを欲し望まずとなり、大王は、明王なれば、臣大王の御過失を告げ申さむことを請ふ、全體、齊の國と趙の國とは、燕の仇讎怨敵にして、楚の國と魏の國とは、燕の援助となる國なり、さるを、今、大王には、仇讎怨敵の齊と趙とを奉戴したまひて、援助の國の楚と魏とを征伐せむとしたまへり、是れ燕の利益となる譯けにあらぬなり、此の儀は、大王御自身に御分別ありたし、此の計策は、大王の御過失なり、其の御過失を正直に言上せぬは、忠義の臣にあらぬなり」と、

王曰、夫齊者、固寡人之讎、所欲伐也、直患國敝力不足也、子能以燕伐齊、則寡人舉國委子、對曰、凡天下戰國七、燕處弱焉、獨戰則不能、有所附則無不重、南附楚、楚重、西附秦、秦重、中附韓、魏、韓、魏重、且苟所附之國重、此必使王重矣、

【字解】【直】……但し、

【講義】燕王の曰はく、「全體、齊は、言ふまでもなく、拙者の仇讎怨敵にして、兼ねて伐ちたく思ひたる國なり、さりながら、但し我が國の疲弊して、之れを伐つ力の足らざらむことを心配せり、御身能く微弱なる燕を以て、強大なる齊を伐たば、拙者は、我が國を殘らず差し出して、御身に委ねて、萬事御身の計らひに任すべし」と、蘇代對へて曰はく、「今の世に在りて、凡そ天下の戰爭をする國は、韓、魏、趙、楚、燕、齊、秦の七箇國にして、其の中、燕は弱き方なれば、獨り燕の國のみにて戰はゞ、敵に勝つこと叶ふまじ、さりながら、若し燕にして、他國に附くことあらば、其の國の貴目の重くならぬことなからむ、若し南の方楚に附かば、楚の貴目重くならむ、若し西の方秦に附かば、秦の貴目重くなるべし、若し中央の韓、魏に附かば、韓、魏の貴目重くならむ、しかのみならず、假り初めにも、附きたる國の貴目重くならば、其の勢に連れて、益〻大王をして重からしむるならむ、

【文法】蘇秦の曰はく、王重からむの一語を聽ぜしは、尤も綺采ありと、

今夫齊長主而自用也、南攻楚五年、畜聚竭、西困秦三年、士卒罷敝、北與燕人戰、覆三軍、得二將、然而以其餘兵、南面舉五千乘之大宋、而包十二諸侯、此其君欲得、其民力竭、惡足取乎、且臣聞之、數戰則民勞、久師則兵敝矣、

【長主】……年の長けたる君主なり、湣王を指す、【自用】……自ら其の意を用ゐて、人に任せぬなり、【畜聚竭】……金穀の準備の盡くるなり、【十二諸侯】……淇水の近邊の諸侯にして、鄒、魯の類なり、【惡足】取乎】……齊の力は、此の上、他國を攻め取るに足らぬなり、【師】……軍役を起こすなり、

今、大王の仇讎怨敵なゝ齊の國の樣子を申さむに、全體、齊の湣王は、年の長けたる君主にして、自ら其の意を用ゐて、人に任せぬ氣象なり、南の方楚を攻むること五箇年にして、金穀の準備盡きぬ、西の方秦の攻擊に困むこと三箇年にして、士卒疲弊せり、北の方燕人ゝ職ひて、燕の三軍の大衆を轉覆し、燕の二人の將帥を生け捕りたり、而して、其の餘りたる兵力をもて、南へ向ひて、兵車五千輛を持てる楚の大なる宋の國を丸取りにして、淇水の近邊の十二箇國の諸侯を中に取り込みたり、此のやうに、八方に手を出だしたることなれば、其の國君の慾望は、遂げ得たれども、其の人民の力は盡きぬ、されば、此の上、何とて他國を攻め取るに足るべき、しかのみならず、臣が兼ね〴〵聞き及びたるには、度〻戰爭をすれば、人民疲勞し、久しく軍役を起こせば、兵卒困弊すとなり」と、以上、蘇代の言葉なり、

燕王曰、吾聞齊有清濟、濁河、可以爲固、長城、鉅防、足以爲塞、誠有之乎、對曰、天時不與、雖有清濟、濁河、惡足以爲固、民力罷敝、雖有長城、鉅防、惡足以爲塞、且異日濟西不師、所以備趙也、河北不師、所以備燕也、今濟西、河北盡已役矣、封內敝矣、夫驕君必好利、而亡國之臣必貪於財、王誠能無羞寵子母弟以爲質、寶珠玉帛以事左右、彼將有德燕而輕亡宋、則齊可亡已、

【異日】……前日なり、【母弟】……同腹の弟なり、

燕王の曰はく、「吾れの聚ねゝ聞き及びたるには、齊には、清濟、濁河ありて、固めとすべく、長城、鉅防ありて、險塞とするに足れりとのことなるが、實に左樣なる要害ありや」と、蘇代對へて曰はく、「天の時運、其の國に組み合はずして、上帝に見棄てらるれば、清濟、濁河ありといふとも、いかで固めとするに足らむ、しかのみならず、人民の力疲弊せば、長城、鉅防ありといふとも、いかで險塞とするに足らむ、人民の力を養ひて、趙の敵に備へたる譯なり、齊の河北の地方に軍役を起こさゞりしは、前日まで、齊の濟西の地方に軍役を起こさゞりしは、兵力を養ひて、燕の敵に備へたる譯なり、然るに、今は、濟西の地方にも、河北の地方にも、殘らず已に軍役を起こしたれば、齊の領分は疲弊せり、全體、驕り高ぶる君は、屹度利益を好む者にして、國を亡ぼす臣は、屹度財を貪る者なれば、大王誠に能く御氣に入りの御子、又は御同腹の弟君を齊へ人質として遣はされ、結構なる珠玉、或は絹帛を進物として、齊王の左右の近臣に事ふることを恥辱と思し召さゝ

ことなしば、彼の齊國の君臣は、燕の恩德に感じて、既に丸取りにせる宋の國を手輕く亡ぼすことあらむ、さらば齊は容易く亡ぼされむのみ」と、

燕王曰、吾終以子受命於天矣、燕乃使一子質於齊、而蘇厲因燕質子、而求見齊王、齊王怨蘇秦、欲囚蘇厲、燕質子爲謝已、遂委質爲齊臣、

【委質】……質は、贄と通ず、始めて人に面會するときの進物を差し出すなり、卽ち主取りの土產物を差し出すなり、

燕王の曰はく、「御身の說は、至極尤なれば、吾れは、終に御身の言葉に從ひて、天命の幸福を受けむ」と、是に於て、燕は、一人の公子を人質として、齊へ遣はしたれば、蘇代の弟の蘇厲、燕の人質の公子に依賴して、齊王に謁見せむことを求めしに、齊王は、兼ねて蘇秦を怨みたることなれば、蘇厲を召し捕らむと思ひしに、燕の人質の公子、蘇厲の爲めに說び入りたれば、齊王は、勸辨して、召し捕ることを見合はせたり、是に於て、蘇厲は、遂に主取りの土產物を差し出して、齊の臣下となりぬ、

燕相子之與蘇代婚、而欲得燕權、乃使蘇代侍質子於齊、齊使代報燕、燕王噲問曰、齊王其霸乎、曰不能、曰何也、曰不信其臣、於是燕王專任子之、已而讓位燕大亂、齊伐燕、殺王噲、子之、燕立昭王、而蘇代、蘇厲遂不敢入燕、皆終歸齊、齊善待之、

燕の宰相の子之といふ者、蘇代と婚姻を結びて、燕の權勢を手に入れたゝ思ひて、先づ蘇代をして、齊に人質となりたる燕の公子に侍き事へしめたり、其の後、齊は、蘇代をして、公子の惡きことを燕に報告せしめしに、燕王の噲、蘇代に尋ねて曰はく、「齊王は、天下の諸侯の旗頭となられむか」と、蘇代對へて曰はく、「さる大業は叶ふまじ」と、燕王の曰はく、「何故ぞ」と、蘇代の曰はく、「齊王は、自分の家來を疑ひて、信用せざればなり」と、是れ宰相の子之に權勢を握らせむとの下心にて言ひたるなり、是に於て、燕王は、宰相を信用せば、天下の諸侯の旗頭とならるゝならむと思ひて、專ら子之に政事を委任せしが、其の後になりて、遂に己れの位までをも讓り渡しければ、燕の人〻、之れに服せずして、大に騷動せり、齊は、其の內亂に付け込みて、燕を伐ちて、燕王の噲と宰相の子之とを殺しければ、燕の人〻、昭王を跡目に立てたり、是に於て、蘇代も、蘇厲も、燕へ歸り難くなりたれば、遂に押して燕の領分へ立ち入らずして、皆終に齊に身を寄せたるに、齊は善〻此の兄弟を待遇せり、

蘇代過魏、魏爲燕執代、齊使人謂魏王曰、齊請以宋地封涇陽君、秦必

不受、秦非不利有齊而得宋地也、不信齊王與蘇子也、今齊、魏不和、如此其甚、則齊不欺秦、秦信齊、齊、秦合、涇陽君有宋地、非魏之利也、故王不如東蘇子、秦必疑齊而不信蘇子矣、齊、秦不合、天下無變、伐齊之形成矣、於是出蘇代、

【涇陽君】……秦の昭王の弟なり、

【解】蘇代魏の國を過行せしに、魏は燕の爲めに、蘇代を召し捕りたり、齊は、蘇代を救はむとて、辯才ある廚一者を遣はして、魏王に物語らせて曰はく、「齊は、近頃手に入れたる宋の地を秦王の弟の涇陽君に與へて、諸侯にしたしと請ひたらば、秦は、屹度承知せざらむ、秦の之れを承知せざるは、齊を己れの味方もして、宋の地を手に入る、ことを利益なりとせざるにはあらざるなり、齊王と蘇子との心を疑ひて、之れを信用せざればなり、然るに、今、齊と魏と和親せざること、齊より來れる蘇代を魏にて召し捕るやうに甚しければ、齊は、魏を棄て、、秦に賀意を盡すべければ、秦に於ても、齊を信用するならむ、齊と秦と合體し、涇陽君宋の地を持たば、魏の利益にはあらざらむ、されば、大王には、蘇子を東の方齊へ遣ひ返さる、に增したることなからむ、蘇子歸國せば、秦は、屹度齊は內と魏と和親せるならむと疑ひて、蘇子も怪しき者なりとして、信用せざらむ、齊〻秦と合體せずば、他の五箇國は、秦の患害を受くることなくして、天下に變動なからむ、さらば、魏より齊を伐つべき形勢成り立たむ」と、是に於て、魏王齊の廚し者の言葉に乘りて、蘇代を出だして、歸らしめたり、

代之宋、宋善待之、齊伐宋、宋急、蘇代乃遺燕昭王書曰、夫列在萬乘、而寄質於齊、名卑而權輕、奉萬乘助齊伐宋、民勞而實費、夫破宋、殘楚淮北、肥大齊、讎彊而國害、此三者、皆國之大敗也、然且王行之者、將以取信於齊也、齊加不信於王、而忌燕愈甚、是王之計過矣、

【實】……財用なり、

【解】蘇代宋へ往きたるに、宋にては等〻之れを待遇せり、折りから、齊は宋を伐ちて、宋は危急に迫りたれは、蘇代宋を救はむとて、燕の昭王に手紙を遣りて曰はく、「全體、燕は、一萬輛の兵車を出だす大國を差し出して、齊を助けて、宋を伐たれむには、人民疲勞して、財用費せむ、全體、齊の爲めに宋を破り、楚の淮北の地を殘害して、齊を肥やして大ならしめば、燕の仇讎怨敵なる齊は強くなりて、燕の國に損害あらむ、此の三箇條は、皆燕の國の大なる失敗なるべし、さるを、猶ほ且つ大王の忍びて之れを行ひたまふは、信用を齊に取らむとせらるゝが爲めならむ、然れども、齊は反りて益〻大王を信用せずして、燕を忌み嫌ふこと愈〻甚しからむ、是れ大王の計策の間違ひなり、

夫以宋加之淮北、彊萬乘之國也、而齊幷之、是益一齊也、北夷方七百里、加之以魯、衞、彊萬乘之國也、而齊幷之、是益二齊也、夫一齊之彊、燕猶狼顧而不能支、今以三齊臨燕、其禍必大矣、

【解】全體、宋に楚の淮北の地を加へば、一萬輛の兵車を出だす一つの強き大國となりむ、而して、齊之れを併はせて持たば、一つの齊を益さむ、北方の夷狄は、七百里四方の廣さあり、之れに魯、衞の兩國を加へば、一萬輛の兵車を出だす一つの強き大國となりむ、而し、齊之れを併はせて持たば、二つの齊を益さむ、全體、今までの一つの齊の強きすら、燕は猶ほ疑ひ深き狼のやうに、度〻跡を振り向きて、恐怖して、其の兵力を支へ止むること能はざるを、今又三つの齊をもて、燕に押し寄せ來らば、其の禍屹度大ならむ、

雖然智者舉事、因禍爲福、轉敗爲功、齊紫敗素也、而賈十倍、越王勾踐棲於會稽、復殘彊吳而霸天下、此皆因禍爲福、轉敗爲功者也、

【字解】【敗素】……惡しき白絹なり、【賈】……價なり、

【解】さりながら、智慧ある者、仕事を擧げ行へば、是れは國家の禍害ならむと思はる、出來事も、其の事柄に連れて、幸福を生み出だし、是れは國家の失敗ならむと思はる、出來事も、其の事柄を轉じ移して、手柄を立つるなり、齊の國にて淺行する紫絹は、惡しき白絹を染めたるものなれど、白絹よりは十倍の代價にて賣れ行くなり、越王の勾踐は、呉に敗られて、會稽山に假り住まひせしかど、重ねて強き呉を破滅して、天下の諸侯の旗頭となれり、此の二つは、皆禍に連れて、幸福を生み出だし、失敗を轉じ移して、手柄を立てたる者なり、

【又注】鄧豆讖の曰はく、只〻齊紫の一語を著けて、便ち潔やかに色ありと、

今王若欲因禍爲福、轉敗爲功、則莫若挑霸齊而尊之、使盟於周室、焚秦符曰、其大上計破秦、其次必長賓之、秦挾賓以待破、秦王必患之、

秦五世伐諸侯、今爲齊下、秦王之志、苟得窮齊、不憚以國爲功、

【注釋】【挑】……此方より持ち掛くるなり、【符】……使者の證據の割り符なり、【天上計】……最上の計策なり、【挾】……挾は、持つなり、權斥せらるといはむが如し、【困】……困らするなり、【以國爲功】……國土を割き與へて、功勞を賞するなり、

【講義】今、大王には、若し禍を生み出だし、失敗を轉じ移して、手柄を立てむと思し召されむには、態と此方より持ち掛けて、齊王を天下の諸侯の旗頭として、之れを尊敬せらるゝに增したることなし、而して、使者を周室へ差し立てゝ、齊を帝王とすることを慫慂せしめ、是れまで列國の手元に在りたる、秦の使者の證據の割り符を殘らず燒き棄てゝ、此の後秦と交通せざる意を示して、列國と共に約束して、下の如くに宣言せられよ、其の言葉に曰はく、『列國の秦に對する最上の計策を施さむには、秦を攻め破らむ、其の次ぎの計策を施さむには、屹度永代秦を權斥して、孤立の地位に立たしめむ』と、果たして然らば、秦王は、是れまで、五世の間諸侯を伐ちて、威を振ひたるに、今日より、齊の下手になりむには、秦王の志しは、殘念至極になりて、假り初めにも、齊を困らすることを得ば、己れの國土を割き與へて、其の功勞を賞することをも厭ひ憚らざらむ、

然則王何不使辯士以此言說秦王曰、燕、趙破宋肥齊、尊之爲之下者、燕、趙非利之也、燕、趙不利、而勢爲之者、以不信秦王也、

【講義】其の時になりたらば、大王には、何とて能辯の士を秦の國へ差し向けられて、秦の爲めに齊を困らすべき言葉をもて、下の如くに秦王に說かしめたまはざる、其の言葉に曰はく、『燕、趙の宋を破りて、齊に與へて、齊を肥やして大ならしめ、之れを尊敬して、之れに對下手になることは、燕、趙の利益とすることにあらざるなり、燕、趙之れを利益とせざれども、時勢の爲めに、餘儀なく、之れをする譯けは、秦王を信仰せざればなり、

然則王何不使可信者接收燕、趙、令涇陽君、高陵君先於燕、趙、秦有變、因以爲質、則燕、趙信秦、秦爲西帝、燕爲北帝、趙爲中帝、立三帝以令於天下、韓、魏不聽、則秦伐之、齊不聽、則燕、趙伐之、天下孰敢不聽、

【注釋】【接收燕、趙】……燕、趙の心を手に入るゝなり、【高陵君】……秦の昭王の弟なり、【秦有變】……秦の燕、趙の約束に背くことあるなり、

【講義】されば、大王には、何とて諸侯の信用すべき者を遣はされて、燕、趙の心を手に入れられざる、大王の二弟の涇陽君と高陵君とは、秦に重んぜられて、諸侯に信用せられたれば、此の兩人を先づ燕、趙へ往かしめて、交際を結ばせ置きて、秦若し燕、趙の約束に背くことあらば、其の儘に、此の兩人を人質とせよと申し入れられよ、さらば、燕、趙は安心して、秦を信仰するならむ、燕、趙既に秦を信仰したらむには、秦は、西帝となり、燕は、北に在りて、北帝となり、趙は、中央に在りて、中帝となりて、新たに三帝を立てゝ、天下の諸侯に號令せむ、其の時、韓、魏不承知ならば、秦之れを伐たむ、齊不承知ならば、燕、趙之れを伐たむ、さらば、天下の諸侯は、誰れか押し切りて不承知をいふ者あらむ、

天下服聽、因驅韓、魏以伐齊曰、必反宋地、歸楚淮北、反宋地、歸楚淮北、燕、趙之所利也、竝立三帝、燕、趙之所願也、夫實得所利、尊得所願、燕、趙弃齊如脫躧矣、今不收燕、趙、齊霸必成、諸侯贊齊而王從之、是名卑也、

【注釋】【躧】……履に同じ、草履なり、

【講義】天下の諸侯殘らず服從承知せば、其の機に乘じて、韓、魏の兵を驅り立てゝ、齊を伐たしめて、下の如くに齊へ掛け合はれよ、『齊は、是非とも宋の地を返却せよ、楚の淮北の地を返却せよ』と、齊の宋の地を返却し、淮北の地を返却するは、燕、趙の利益とすることなり、西帝、北帝、中帝の三帝を竝べ立つるは、燕、趙の願ひ望むことなり、全體、實際は、利益とすることを得て、尊きことは、願ひ望むことを得ば、燕、趙の齊を見棄てむことは、草履を脫ぎ棄つるやうに容易からむ、今、燕、趙の心を手に入れられずば、齊の威勢益ゝ盛んになりて、其の霸業、屹度成就せむ、其の時、諸侯齊の霸業を贊助して、大王のみ服從せられざらむには、秦の國は、諸侯に伐たるゝならむ、若し又諸侯齊の霸業を贊助して、大王も亦服從せられむには、其の名聞卑しからむ、

今收燕、趙、國安而名尊、不收燕、趙、國危而名卑、夫去尊安而取危卑、智者不爲也、

【講義】今燕、趙の心を手に入れられむには、秦の國安くして、其の名聞尊からむ、之に反して、燕、趙の心を手に入れられざらむには、秦の國危くして、其の名聞卑しからむ、全體、名聞の尊くして、國の安き方を棄て去りて、國の危くして、名聞の卑しき方を引き受くるは、智慧ある者のせざることなり』と、以上の如く、能辯の士をして、秦王に說かしめたまへ、

秦王聞若說、必若刺心、然則王何不使辯士以此苦言說秦、秦必取、齊必伐矣、夫取秦、厚交也、伐齊、正利也、尊厚交、務正利、聖王之事也、

【字釋】【苦】……此の如きなり、【苦言】……苦心して出だす言葉なり、【取】……我れに從はしむることなり、

【講義】苦心して出だす言葉をもて、秦王に說かしめたまはざる、此の如くならば、秦は、屹度我れに從はしめらるべく、齊は、屹度伐たるべし、全體、秦を我れに從はしむるは、厚き交際なり、齊を伐つは、正しき利益なり、厚き交際を尊び重んじ、正しき利益を務め求むるは、聖明なる帝王の事業なり」と、以上、蘇代の手紙なり、

【文法】徐中行の曰はく、王何不ㇾ使ㇾ辯士以ニ此言一說ニ秦王一といひ、此の處に又、王何不ㇾ使ㇾ辯士以ニ此苦言一說ニ秦を用ゐて、只々一つの苦の字を加へたり、便ち重複を總はずと、

燕昭王善其書曰、先人嘗有ㇾ德ニ蘇氏一、子之之亂、而蘇氏去ㇾ燕、燕欲ㇾ報ニ仇於齊一、非ニ蘇氏一莫ㇾ可、乃召ニ蘇代一、復善待ㇾ之、與謀伐ㇾ齊、竟破ㇾ齊、湣王出走、

【字釋】【有ㇾ德ニ蘇氏一】……蘇氏に恩德あるなり、蘇秦に費用を給して、諸侯を合從せしめたることをいふ、

【講義】燕の昭王、其の手紙を見て、至極尤なりとして曰はく、「我が亡父の文侯は、先年、蘇秦に費用を給して、諸侯を合從せしめたることなれば、蘇氏に恩德あり、其の後、宰相の子之の位を讓り受けたる騷動によりて、蘇代、蘇厲の兄弟は、一旦燕を立ち退きたれど、今日、燕は、仇を齊に報いむと思はゞ、蘇氏にあらずば、宜しきことなからむ」と、是に於て、蘇代を宋より呼び寄せて、重ねて手厚く待遇して、共々に齊を伐たむことを相談して、終に齊を攻め破りければ、齊の湣王、莒都に居ること能はずして、出奔せり、

久之、秦召ニ燕王一、燕王欲ㇾ往、蘇代約ニ燕王一曰、楚得ㇾ枳而國亡、齊得ㇾ宋而國亡、齊、楚不ㇾ得以有ㇾ枳、宋而事秦者、何也、則有ㇾ功者、秦之深讎也、秦取ニ天下一、非ㇾ行ㇾ義也、暴也、秦之行暴、正告天下、告楚曰、蜀地之甲、乘ㇾ船浮ニ於汶一、乘ニ夏水一而下ㇾ江、五日而至ㇾ郢、漢中之甲、乘ㇾ船出ニ於巴一、乘ニ夏水一而下ㇾ漢、四日而至ニ五渚一、寡人積ニ甲宛一、東下ㇾ隨、智者不ㇾ及ㇾ謀、勇士不ㇾ及ㇾ怒、寡人如ㇾ射ㇾ隼矣、王乃欲ㇾ待ニ天下之攻一ニ函谷一、不ニ亦遠一乎、楚王爲ㇾ是故、十七年事ㇾ秦、

【字釋】【約】……止むといはむが如し、【亡】……齊も楚も、秦に攻められて、地を失ひたるをいふ、【正告】……明白に觸れ示すなり、【乘ニ夏水一】……夏の雨水多くして盛んに漲る時に乘ずるなり、【積ㇾ甲】……軍勢を寄せ集むるなり、【垠】……はやぶさなり、鷹の類なり、

【講義】其の後、暫く程立ちて、秦は、燕王を招きたれば、燕王秦へ往かむと思ひしに、蘇代燕王を押し止めて曰はく、「楚は、先年、巴郡の枳縣を手に入れたれど、秦に破られて、國亡びたり、齊は、先年、宋の地を手に入れたれど、五箇國の兵を受けて、國亡びたり、齊は、宋の地を持ち、楚は、枳縣を持ちて、其の領分を廣めながら、秦に事ふることを得ざりしは、何故ぞ、是れ外の事にてはなし、總べて功業ある者は、秦の深き讎として惡み嫌ふものなればなり、されば、大王にも、齊に勝ちたまひしことなれば、必定秦に惡み嫌はるゝならむ、原來、秦の天下を取るは、亡びたるを興こし、絕えたるを繼ぎ、大義を行ふと譯けにてはなく、唯々亂暴を行ふまでなり、秦の亂暴を行ふ仕方を見るに、少しも遠慮會釋なく、明白に天下に觸れ示せり、其の楚に觸れ示したる言葉に曰はく、『蜀の地の軍勢、船に乘りて、汶水に浮かびて、夏の雨水多くして盛んに漲る時に乘じて、江水を押し下らば、僅に五日を出でずして、楚の都の郢へ到著せむ、漢中の地の軍勢、船に乘りて、巴の地に出で、夏の雨水多くして盛んに漲る時に乘じて、漢水を押し下らば、僅に四日を出でずして、楚の五渚へ到著せむ、拙者軍勢を宛の地に寄せ集めて、東の方隨の地より押し下らば、智慧ある者も、謀計を運らす暇なく、勇氣ある者も、怒りを發する暇なからむ、拙者の楚を伐つことの手早きことは、空中に飛ぶ箭を射止むるが如くならむ、さるを、王は、反りて安閑として、天下の諸侯の西へ向ひて我が函谷關を攻むることを待たむと思へるは、亦迂遠なることならずや』と、秦の傍若無人なること、此の如くなれば、楚王は、是れが爲めに恐怖して、十七年間、秦に事へたり、

秦正ニ告韓一曰、我起ニ乎少曲一、一日而斷ニ大行一、我起ニ乎宜陽一、而觸ニ平陽一、二日而莫ㇾ不ニ盡繇一、我離ニ兩周一而觸ㇾ鄭、五日而國舉、韓氏以爲ㇾ然、故事ㇾ秦、

【字釋】【盡繇】……國內殘らず動搖するなり、【離】……歷るなり、

【講義】又秦の明白に韓に觸れ示したる言葉に曰はく、『我が軍勢、少曲の地より起こり立たば、僅に一月を出でずして、韓の上黨へ通ずる大行山を橫斷せむ、我が軍勢、宜陽の地より起こり立ちて、韓の平陽の地に觸れ當たらば、僅に二日を出でずして、韓の國內、殘らず動搖せざることなからむ、我が軍勢、東西兩周を歷て、鄭の地に觸れ當たらば、僅に五日を出でずして、韓の國、九取りにせらるゝならむ』と、秦の傍若無人なること、此の如くなれば、韓氏は、さもあるべしと思ひて、恐怖して、秦に事へたり、

秦正ニ告魏一曰、我舉ニ安邑一、塞ニ女戟一、韓氏太原卷、我下ㇾ軹、道ニ南陽一、封ニ冀一、包ニ兩周一、乘ニ夏水一、浮ニ輕舟一、彊弩在ㇾ前、鍘戈在ㇾ後、決ニ滎口一、魏無ニ大梁一、決ニ白馬之口一、魏無ニ外黃、濟陽一、決ニ宿胥之口一、魏無ニ虛、頓丘一、陸攻則擊ニ河內一、水攻則滅ニ大梁一、

魏氏以爲然、故事秦、

【考證】【卷】……斷絶せむといはむが如し、【封】……封鎖するなり、【鋒戈】……鋭利なる矛なり、【決】……水を切り落とすなり、

【講義】又秦の明白に魏に厲れ示したる言葉に曰はく、『我が軍勢、魏の安邑を丸取にし、玄戟の地を塞ぎ止めば、韓氏の大原の道筋斷絶せむ、我が軍勢、魏の郟の地を押し下り、南陽を通行し、冀の地を封鎖し、東西兩周を包圍し、夏の雨水多くして盛んに漲る時に乘じて、輕便なる舟を浮かべ、强き弩弓を控へたる者は、前の舟に在り、鋭利なる矛を持ちたる者は、後の舟に在りて、宿澤の出口の水を切り落とさば、魏の大梁、水中に沈没せむ、白馬津の出口の水を切り落とさば、魏の外黄と濟陽との兩地、水中に沈没せむ、陸地の方より攻め入らば、河内を擊たむ、水路の方より攻め込まば、大梁を滅ぼさむ』と、秦の傍若無人なること、此の如くなれば、魏氏は、さもあるべしと思ひて、恐怖して、秦に事へたり、

秦欲攻安邑、恐齊救之、則以宋委於齊曰、宋王無道、爲木人以寫寡人、射其面、寡人地絶兵遠、不能攻也、王苟能破宋有之、寡人如自得之、已得安邑、塞女戟、因以破宋爲齊罪、

【考證】【寫】……似するなり、

【講義】秦は、昨りをもて諸侯を欺きて、人の國を攻め取る計略を成せり、秦は、魏の安邑を攻めむと思ひて、齊の之れを救はむことを氣遣へば、殊更に宋を伐つことを齊に委任して曰はく、『宋王は、暴虐無道なり、木の人形を拵へて、拙者の形に似せて、其の面部を射て、拙者を辱めたり、拙者は、之れを讐怨に思ひて、其の返報をせむと思へども、土地隔絶して、兵を送るに遠ければ、之れを攻むること能はざるなり、王若し能く宋を破りて、之れを所有せば、拙者は、自身に之れを手に入れたらむやうに喜ばしく思ふべし』と、秦は、かやうに齊の心を宋の方へ振り向け置きて、其の間に、安邑を手に入れ、女戟を塞ぎ止めて、之れに乘じて、宋を破りし廉をもて、齊の罪とせり、

秦欲攻韓、恐天下救之、則以齊委於天下曰、齊王四與寡人約、四欺寡人、必率天下以攻寡人者三、有齊無秦、有秦無齊、必伐之、必亡之、已得宜陽、少曲、致蒲石、因以破齊爲天下罪、

【考證】【致蒲石】……蒲石の地を韓より差し出さしむるなり、

【講義】又秦は、韓を攻めむと思ひて、天下は、四たび拙者と約束して、四たび拙者を欺けり、又是非とも天下の諸侯を引き連れて、拙者を攻めむとすること、三たびに及びたり、齊と秦とは、仇敵にして、兩立せず、齊あらば、秦なからむ、秦あらば、齊なからむ、天下の諸侯は、是非とも齊を亡ぼせ』と、秦は、かやうに、天下の諸侯の心を齊の方へ振り向け置きて、其の間に、韓の宜陽と少曲とを手に入れ、蒲石の地を韓より差し出さしめて、之れに乘じて、齊を破りし廉をもて、天下の諸侯の罪とせり、

秦欲攻魏、重楚、則以南陽委於楚曰、寡人固與韓且絶矣、殘均陵、塞鄢阨、苟利於楚、寡人如自有之、魏弃與國、而合於秦、因以塞鄢阨爲楚罪、

【考證】【重】……長れ憚るなり、【異國】……仲間の國なり、

【講義】又秦は、魏を攻めむと思ひて、楚の其の後陣を擊たむことを長れ憚れば、殊更に韓の南陽を伐つことを楚に委任して曰はく、『拙者は、固より韓と交はりを絶たむとすれば、南陽に在る均陵の地を殘滅し、鄢縣の險阨を塞ぎ止めて、若し楚の國に利益あらば、拙者の自身に之れを所有したらむやうに喜ばしく思ふべし』と、楚と魏とは、もと仲間の國なるに、楚は、南陽に手を出して、魏を救はざりしかば、魏は仲間の國の楚を見限りて、秦と合體すれば、之れに乘じて、秦は、鄢縣の險阨を塞ぎ止めし廉をもて、楚の罪とせり、

兵困於林中、重燕、趙、以膠東委於燕、以濟西委於趙、趙得講於魏、至公子延、因犀首屬行而攻趙、

【考證】【兵】……秦の兵なり、【趙得講於魏】……戰國策には、趙を已に作れり、從ふべし、講は、媾に同じ、和睦するなり、已に魏と和睦することを得たるなり、【至公子延】……至は、實に作るべし、魏の公子の延を人質に取るなり、【屬行】……軍行に屬するなり、兵を連ねて相續くことをいふ、

【講義】又秦の兵、魏と戰ひて、魏の林中の地に困難して、燕、趙の魏に加勢せむことを長れ憚れば、殊更に齊の膠東の地を伐つことを燕に委任し、齊の濟西の地を伐つことを趙に委任せり、秦は、かやうに燕、趙の心を膠東、濟西の方へ振り向け置きて、其の間に、魏と和睦することを得て、魏の公子の延を人質に取れば、魏の犀首の公孫衍に依賴して、兵を連ねて、相續きて、趙を攻めたり、

兵傷於譙石、遇敗於陽馬、而重魏、則以葉蔡委於魏、已得講於趙、則劫

魏不爲割、

【語釋】又秦の兵、趙と戰ひて、趙の藺石の地に手痍を受け、趙の陽馬の地に敗られて、魏の趙に加勢せむことを畏れ憚れば、殊更に葉と蔡との兩國を伐つことを魏に委任せり、秦は、かやうに魏の心を葉、蔡の方へ振り向け置きて、其の間に、趙と和睦することを得れば、魏を威し付けて、一旦委任したる葉、蔡の地を魏の爲めに割き與へざりき、

困則使太后弟穰侯爲和、贏則兼欺舅與母、適燕者曰以膠東、適趙者曰以濟西、適魏者曰以葉、蔡、適楚者曰以塞鄳阨、適齊者曰以宋、此必令言如循環、用兵如刺蜚、母不能制、舅不能約、

【語釋】【爲】……戰國策には、贏に作れり、贏は、勝つなり、【舅】……母の兄弟なり、穰侯を指す、【母】……太后なり、【適】……責むるなり、【令言】……各國に罪を負はするやうに言はしむるなり、【如循環】……廻き輪の端なきやうに、抑へどころなきなり、【如刺蜚】……蜚は、蟲の名なり、蚊といふ蟲を刺すやうに、容易きなり、【約】……前の約=燕王=の約に同じ、

【語釋】秦王は、戰爭に負けて、困却すれば、己れの太后と舅なる穰侯の魏冉をして、和議を取り計らはしめ、戰爭に勝てば、他國を欺くのみならず、兼ねて己れの舅の穰侯と己れの母の太后とを欺けり、而して、前に申し述べたる如く、燕を責め咎むるには、葉、蔡を伐ちたる廉は不都合なりといひ、趙を責め咎むるには、濟西を伐ちたる廉は不都合なりといひ、魏を責め咎むるには、宋を伐ちたる廉は不都合なりといひ、齊を責め咎むるには、塞鄳の險阨を塞ぎ止めたる廉は不都合なりといへり、此の如く、屹度各國に罪を負はするやうに言はしむること、廻き輪の端なきやうに、抑へどころなく、兵を用ゐて、他國を破ること、蚊といふ蟲を刺すやうに、容易なり、母の太后も、之れを制禁すること能はず、舅の穰侯も、之れを押し止むること能はざるなり、

龍賈之戰、岸門之戰、封陵之戰、高商之戰、趙莊之戰、秦之所殺三晉之民數百萬、今其生者、皆死秦之孤也、西河之外、上雒之地、三川、晉國之禍、三晉之半、秦禍如此其大也、而燕、趙之秦者、皆以爭事秦、說其主、此臣之所大患也、

【語釋】【三川】……其の地に河水、洛水、伊水ある故に、三川といふ【燕、趙之秦者】……燕、趙二國の使ひして秦へ往く者なり、

【語釋】魏の襄王の五年に、秦の兵の魏の將の龍賈の軍を敗りたる戰爭と、韓の宣惠王の十九年に、秦の兵の六に韓の岸門の地を破りたる戰爭と、魏の哀王の十六年に、秦の兵の魏の封陵の地を敗りたる戰爭と、人名なるか地名なるか定かならざる高商の戰爭と、趙の肅侯の二十二年に、秦の兵の趙の將の趙莊を殺したる戰爭とにて、秦の殺したる韓、魏、趙の三晉の人民は、數百萬人なれば、今其の生き殘りたる者は、皆秦との戰爭に死亡せし者の親なし子なり、而して、魏の西河の外、雒の上鄙の地、韓の三川の地は、皆秦に取られたれば、晉の國の秦に受けたる禍害は、三晉の地の半分に當たれり、秦の禍害は、此の如く大なり、然るに、燕、趙南國の使ひして秦へ往く者は、皆我れ後れじと、先を爭ひて、秦に事ふることの利益なることを銘々の主君に說けり、此れ臣が大に掛念せることなり」と、以上、蘇代の言葉なり、

【文法】郭以讀の曰はく、通篇只々是れ秦の說むべからざることを明かせり、文特に環瑋奇肆なりと、

燕昭王不行、蘇代復重於燕、燕使約諸侯從親、如蘇秦時、或從或不、而天下由此宗蘇氏之從約、

【語釋】【宗】……宗敬するなり、

【語釋】燕の昭王、蘇代の說を聽き納れて、遂に秦王の招きに應じて秦へ行くことを見合はせたり、而して、蘇代は、重ねて燕にて尊重せられたり、是に於て、燕は、蘇代をして、諸侯の合從說陸を約束せしむること、蘇秦の時のやうにせしが、諸侯の中には、合從する者もあれば、合從せざる者もあり、さりながら、天下の諸侯は、此れに由りて、蘇氏の合從の約束を宗敬せり、

【文法】李東陽の曰はく、蘇秦を點出して結案と作し、且つ從說の字を露はして收殺せりと、○鍾惺の曰はく、蘇氏の兄弟、起結皆燕に在り、中間成敗離合稍々異なりといへども、終に燕をもて著脚とせりと、

代厲皆以壽死、名顯諸侯、

【語釋】蘇代も蘇厲も、皆天然の壽命をもて死にき、而して其の名當時の諸侯の間に顯はれき、

太史公曰、蘇秦兄弟三人、皆游說諸侯、以顯名、其術長於權變、而蘇秦被反閒以死、天下共笑之、諱學其術、

【語釋】【被反閒】……反閒は、惡しき者なり、燕の爲めに、廻し者となりて、齊へ入り込みたりといふ汚名を被るなり、

【語釋】太史公蘇秦の事跡を論賛して曰はく、「蘇秦の兄弟三人は、皆諸侯の間に游說して、名を顯はせり、其の手段は、權謀變詐に長じて、當意即妙の計策を施せり、而して、蘇秦は、遂に燕の爲めに廻し者となりて、齊へ入り込みたりといふ汚名を被りて、齊の刺客に殺されしかば、天下の人々、共に之れを嘲り笑ひて、其の手段を學び習ふことを忌み嫌へり、

然世言蘇秦多異、異時事有類之者、皆附之蘇秦、

【講義】さりながら、世間にて蘇秦の事を言へること、多く異なりて、種々樣々の傳說あり、而して、蘇秦と時代の違ひたる事柄にても、蘇秦に似寄りたる者あれば、皆之れを蘇秦の仕事に附け合はせたり、

夫蘇秦起閭閻、連六國從親、此其智有過人者、吾故列其行事、次其時序、毋令獨蒙惡聲焉、

【字解】【閭閻】……村里の總門なり、【惡聲】……惡名なり、

【講義】全體、蘇秦といふ人は、村里の總門內より身を起こして、韓、魏、趙、楚、燕、齊の合從親睦を連結して、此の六箇國の宰相を兼帶せり、此れ其の智慧の世の常の人に過ぎ越えたる者あらむ、吾れは、それ故に、其の行ひたる事柄を書き列ねて、其の時日の順序を次第せり、讀む者能く〳〵考へて、取るべき事は之れを取るべし、唯一概に惡名ばかり蒙らしめぬやうにせよ」と、

【文法】陳沂の曰はく、此の傳全く戰國策を用ゐて、略ゞ刪滅せりと、○陳仁錫の曰はく、蘇秦、張儀は、皆游說の士なり、今に至るまで、二傳を讀めば、人をして舌本津津たらしむと、○李贄の曰はく、蘇秦は、其の驕きに當たり、張儀は、其の易きことをせり、太史公の兩人の贊語、極めて當たれり、極めて賞すべしと、

張儀列傳第十

張儀者、魏人也、始嘗與蘇秦俱事鬼谷先生學術、蘇秦自以不及張儀、

【講義】張儀は、魏の國の人なり、最初に嘗て蘇秦と共に、鬼谷先生の弟子となりて、合從連衡の手段を學び習ひしが、蘇秦は、自ら己れの器量學問は、張儀に及び難しと思ひたり、

張儀已學、而游說諸侯、嘗從楚相飲、已而楚相亡璧、門下意張儀、曰、儀貧無行、必此盜相君之璧、共執張儀、掠笞數百、不服、醳之、其妻曰、嘻、子毋讀書游說、安得此辱乎、張儀謂其妻曰、視吾舌、尙在不、其妻笑曰、舌在也、儀曰、足矣、

【字解】【讀書游說】……張儀の仕業ならむと思ふなり、【掠笞】……棒切れにて手荒く打ち懲らすなり、【醳】……釋に同じ、放すなり、【嘻】……悲み恨みて發する聲なり、

【講義】張儀已に學業成就して、列國の諸侯に游說せり、或る時、楚の國に於て、其の宰相の酒宴の席に相伴して、酒を飲みしが、已に酒宴も果てたる頃に、楚の宰相の祕藏せる璧玉紛失せしかば、門下の人は、張儀の仕業ならむと思ひて、主人に密告して曰はく、「張儀は、貧乏にして、身の行ひも善からねば、屹度此の者宰相君の璧玉を盜みたるならむ」と、やがて人〻打ち寄りて、張儀を取り押へて、棒切れにて手荒く打ち懲らすこと、數百遍に及びたれど、張儀は固より覺えなきことなれば、決して盜みたることなしと言ひ張りて、其の罪に服せざりければ、其の儘、之れを放したり、張儀歸りて、事の始末を其の妻に語りしに、其の妻の曰はく、「あゝ、さても〻いまゝしきことよ、御身書物を讀みて、學問をして、諸國に游說することなくば、何とて此のやうなる恥辱を受くることあらむ」と、張儀忽ち大口を明きて、其の妻に物語りして曰はく、「吾が舌を視て與れよ、吾が舌はまだありやなしや」と、其の妻張儀の奇妙なる詞ねを聞きて、笑ひて曰はく、「舌はあるなり」と、張儀の曰はく、「舌あれば、仕事をするに十分なり」と、

【文法】王鏊槓の曰はく、舌在は、是れ篇中の骨子なりと、

蘇秦已說趙王、而得相約從親、然恐秦之攻諸侯敗約後負、念莫可使用於秦者、乃使人微感張儀曰、子始與蘇秦善、今秦已當路、子何不往游以求通子之願、

【字解】【當路】……要路に立つなり、【後負】……後日になりて、諸侯の互に違約するなり、

【講義】此の時、蘇秦は、已に趙王に說きて、其の說を採用せられて、韓、魏、趙、楚、燕、齊の六箇國の合從親睦を互に約束することを得たり、さりながら、秦の諸侯を攻め伐ちて、其の約束を破壞して、後日になりて、諸侯の互に違約せむことを氣遣ひて、己れの事業を維持せむ爲めに、秦の國へ入れ置きて、其の國君に用ゐさすべき人物を得たしと思ひたれど、張儀の外には、然るべき者なかりければ、內〻人を張儀の許へ遣はして、それとなく、張儀を感動せしめて曰はく、「御身は、最前、蘇秦と相弟子にて、中も善かりし由なるが、此の頃、蘇秦は、要路に立ちて、權勢を得たれば、御身の爲めに好都合ならむ、御身は、何とて蘇秦の許へ往きて游びて、御身の願ひ望めることを通達せむことを頼み求めざる」と、

張儀於是之趙、上謁求見蘇秦、蘇秦乃誡門下人、不爲通、又使不得去者數日、已而見之、坐之堂下、賜僕妾之食、因而數讓之曰、以子之材能、

乃自令困辱至此、吾寧不能言而富貴子、子不足收也、謝去之、

【字釋】【上讓】……名札を差し出すなり、【數謫】……責め咎むるなり、【寧】……何ぞなり、【收】……收め用ゐるなり、

【講義】張儀は、是て於て、此の人の勸めに從ひて、趙へ往きて、蘇秦の玄關に名札を差し出して、蘇秦に面會せむことを請ひ求めたるに、蘇秦は、門下の人に言ひ含めて、張儀の爲めに、取り次ぎをせざらしむること、數日に及びたり、已にして、始めて張儀に面會せしが、已れは堂の上に在りて、張儀を堂の下に坐せしめ、下男下女に遣る粗末なる食物を與へて、殊の外輕蔑して、まて、之れを責め咎めて曰はく、「御身縞の材器藝能を持ちながら、反りて自ら困窮して、人の物を盜みたりとて、棒切れにて打たるゝ羞の恥辱を受くるに至りたるは、呆れたることなり、吾れは、今日、此の地位に在れば、何ぞ國君に言上して、御身を富貴にすること能はざらむ、さりながら、御身は、最早陰落して、收め用ゐるに足らざれば、身分の世話をすることは、叶ひ難し」と、遂に張儀の心顏を斷りて、すげなく之れを逐ひ返したり、

【文法】茶坤の曰はく、蘇秦の張儀を激怒せしめて、西の方秦へ入らしむる處を描寫せること、極めて工みなりと、

張儀之來也、自以爲故人、求益、反見辱、怒、念諸侯莫可事、獨秦能苦趙、乃遂入秦、

【字釋】【故人】……昔馴染みなり、

【講義】張儀の來りて蘇秦の家を尋ねたるときは、自ら蘇秦の昔馴染みなりと思ひて、己れの利益にならむことを望み求めしに、反りて辱められたれば、一方ならず立腹して、他國へ往きて、身を立てゝ、此の返報をせずばならじと覺悟して、諸侯の中にて奉公すべき國柄を考へたるに、獨り秦のみ强大にして、能く趙を苦めらるゝならむと見定めたれば、それより遂に西の方秦へ入りたり、

蘇秦已而告其舍人曰、張儀天下賢士、吾殆弗如也、今吾幸先用、而能用秦柄者、獨張儀可耳、然貧、無因以進、吾恐其樂小利而不遂、故召辱之、以激其意、子爲我陰奉之、乃言趙王、發金幣車馬、使人微隨張儀、與同宿舍、稍稍近就之、奉以車馬金錢、所欲用、爲取給而弗告、

【字釋】【柄】……權柄なり、【奉】……仕送るなり、【近就】……近づきになるなり、【取給】……給與するなり、【弗告】……金錢物品の出處を話さぬなり、

【講義】蘇秦は、張儀の出で去りたる後に、其の舍人に告げて曰はく、「張儀は、天下の賢士にして、吾れは、殆と其の器量學問に及ばぬなり、今、吾れ幸に張儀より先立ちて用ゐられぬ、而して、能く秦の權柄を用ゐて、其の國政を自由にすべき者は、獨り張儀のみ、通常ならむ、さりながら、彼れは、極めて貧乏なれば、其の國人に依賴して、國君の前へ進み出でらるまじ、吾れは、張儀の眼前の小利を得ることを樂みて、後來の大望を遂げざらむことを氣遣ひたるが故に、殊更に彼れを呼び寄せて、之れを辱め辱めて、其の意を激し勵まして、大奮發をせしめたり、御身我が爲めに、內々にて、此の品々を彼れに仕送り與れよ」と、是に於て、蘇秦は、趙王に謁見して、此の度、張儀を辱めて、秦へ入らしめたるは、趙の爲め筋なる由を言上して、國庫より金銀幣帛馬車乘馬を引き出して、其の舍人をして、それとなく、張儀の跡に附き添はしめて、共々に同じ宿屋に泊らせて、追ひ〳〵に之れに近づきになりて、兼ねて用意の馬車乘馬金錢などを仕送らせて、張儀の使用したしと思ふものは、何くれとなく給與せしめて、其の金錢物品の出處を話さぬやうにせしめたり、

張儀遂得以見秦惠王、惠王以爲客卿、與謀伐諸侯、蘇秦之舍人乃辭去、張儀曰、賴子得顯、方且報德、何故去也、

【字釋】【客卿】……客分の卿なり、

【講義】張儀は、旅の道連れの御蔭にて、諸事都合よく秦の國へ入り込みて、遂に秦の惠王に謁見することを得て、己れの意見を述べたるに、惠王大に感服して、張儀を客分の卿相として、列國の諸侯を攻め伐たむことを相談せり、是に於て、張儀の道連れになりて、仕送りをしたる、蘇秦の舍人、暇を告げて、立ち去らむとせしかば、張儀の曰はく、「御身の御蔭にて、此のやうに立身出世することを得たれば、其の恩返しをせむと思ふ最中なるを、何の譯けにて、立ち去らむとはせらるゝぞ」と、

舍人曰、臣非知君、知君乃蘇君、蘇君憂秦伐趙敗從約、以爲非君莫能得秦柄、故感怒君、使臣陰奉給君資、盡蘇君之計謀、今君已用、請歸報、

【講義】蘇秦の舍人の曰はく、「臣は、貴君の如何なる人物なるかを知りたるにあらず、貴君の天下の賢士なることを知りたるは、實は己れの主人なる蘇君なり、蘇君は、秦の趙を伐ちて、折角自分の取り纏めたる六箇國の諸侯の合從したる約束を破壞せむことを心配して、貴君ならでは、能く秦の權柄を手に入れて、其の國政を自由にして、此方の味方になる者なからむと思ひたるが故に、貴君を手元へ引き寄せて、殊更に貴君を罵り辱めて、感激憤怒せしめたる上にて、臣をして、內々貴君に路銀其の他の入用を仕送らせて、首尾よく秦へ入れたるなり、是れ殘らず蘇君の謀計なり、今、貴君は、蘇君の思ひ通りになりて、已に秦に用ゐられたれば、臣は、是れより本國へ歸りて、其の趣きを蘇君に報告せむことを請ふと、

張儀曰、嗟乎、此吾在術中而不悟、吾不及蘇君明矣、吾又新用、安能謀

趙乎、爲吾謝蘇君、蘇君之時、儀何敢言、且蘇君在、儀寧渠能乎、」

【字解】【擊柝】……二字にて何ぞなり、柝は、拒と通ず、

【要義】張儀斯くと聞きて、驚きて曰はく、「あゝ、さても吾が身の進退は、蘇君の手段の中に在りて、今まで心付かざりけるよ、此の一事にても、吾れの器量學問の蘇君に及ばざることは明白なり、吾れは其の上に又、新參の身分なれば、いかで能く趙を伐つ計略などを施すべき、吾が爲めに、蘇君に宜しく申して與れよ、蘇君の事を用ゐらるゝ間は、己れは、何として押し切りて之れに反對することを發言すべき、しかのみならず、蘇君の如き賢者の存在せらるゝ上は、己れが如き愚物は、何ぞ能く之れに抵抗せらるべき」と、

張儀既相秦、爲文檄告楚相曰、始吾從若飲、我不盜而璧、若笞我、若善守汝國、我顧且盜而城、」

【字解】【文檄】……二尺ばかりの板に書きたる觸れ文なり、【若】……汝なり、【而】……汝なり、【顧】……反りてなり、

【要義】張儀既に秦の宰相となりて、二尺ばかりの板に書きたる觸れ文を作りて、楚の宰相に告げて曰はく、「最前、吾れ汝が家の酒宴の席に相伴して、酒を飲みしとき、我れは、汝が璧玉を盜みもせぬに、汝は、我れを疑ひて、棒切れにて打擲せり、汝今より善く氣を付けて、汝が國の番をせよ、我れは、汝が璧玉を盜まぬ代はりに、反りて穩なく汝が城を盜まむ」と、

【文法】楊彌吉の曰はく、此の段、五句を連ねて、我、而の字を用ゐたり、文法奇崛なり、子胥の夫差に謂へる我令而父霸等の數語と同じと、

苴、蜀相攻擊、各來告急於秦、秦惠王欲發兵以伐蜀、以爲道險狹難至、而韓又來侵秦、秦惠王欲先伐韓後伐蜀、恐不利、欲先伐蜀、恐韓襲秦之敝、猶豫未能決、

【字解】【苴】……卽ち巴の字なり、【猶豫】……猶と豫とは、二獸の名なり、性質疑ひ深きものなれば、人の事に臨みて遲疑して決せざることを、猶豫といふ、

【要義】苴と蜀との夷狄、互に攻め擊ちて、銘々に來りて、國の危急なることを秦に告げて、救ひを求めたれば、秦の惠王、兵を發して蜀を伐たむと思ひたれど、又思ふには、蜀の道路は、險阻狹隘にして、容易く至り著き難しと、而して、韓又來りて秦を侵したれば、秦の惠王、先づ韓を伐ちて、後に蜀を伐たむと思へば、勝利を得られざらむ掛念あり、之れに反して、先づ蜀を伐ちて、後に韓を伐たむと思へば、韓の方より、秦の虞隙を付け込みて、不意擊ちを仕掛けむ掛念あり、此の雙方の利害の爲めに、猶豫遲疑して、まだ孰れとも決定することを能はざりけり、

司馬錯與張儀爭論於惠王之前、司馬錯欲伐蜀、張儀曰、不如伐韓、王曰、請聞其說、儀曰、親魏善楚、下兵三川、塞斜谷之口、當屯留之道、魏絕南陽、楚臨南鄭、秦攻新城、宜陽、以臨二周之郊、誅周王之罪、侵楚、魏之地、周自知不能救、九鼎寶器必出、據九鼎、案圖籍、挾天子、以令於天下、天下莫敢不聽、此王業也、」

【字解】【誅】……責め咎むるなり、【九鼎】……夏の禹王の時、九州の地方官より納めたる金にて鑄たる鼎にして、世々の天子の寶物なり、【案圖籍】……土地の圖と、人民金穀の簿とを取り調ぶるなり、

【要義】司馬錯と、張儀と、其の事に就きて、惠王の前にて爭論せり、司馬錯は、先づ蜀を伐ちたく思ひたれど、張儀の曰はく、「先づ韓を伐たむには如かじ」と、惠王の曰はく、「蜀を後にし、韓を先にせば、如何なる利益あるか、其の說を聞きたし」と、張儀の曰はく、「魏を懲罰にし、楚と中を善くして、三國同盟の交になり、秦は、軍勢を三川へ押し下し、斜谷の口を塞ぎ止め、屯留の道筋に當たり向ひ、魏は、南陽を絕ち切り、楚は、南鄭に臨み、秦は、新城と宜陽とを攻めて、其の勢に乘じて、韓の地續きなる東西二周の城の郊外に臨みて、周王の罪過を責め咎め、それより一旦味方にしたる楚と魏との土地を侵さば、周は、自ら其の急難を救ひ止むること能はざることを知りて、世々の天子の寶物の九鼎、其の他の大切の品々を、屹度實蔵より取り出して、此方の手に引き渡すならむ、其の時、秦は、其の九鼎に據りて、天下中の土地の圖と、人民金穀の簿とを取り調べて、天子を小脇に掻い込みて、天下の諸侯に號令せば、天下の諸侯は、一人たりとも、押し切りて、其の號令に違背する者なからむ、此れ帝王の事業なり、

【文法】淺井隆の曰はく、此の段、俱に戰國策を襲ひて、文亦少し異なりと、

今夫蜀、西僻之國、而戎翟之倫也、敝兵勞衆、不足以成名、得其地、不足以爲利、臣聞爭名者於朝、爭利者於市、今三川、周室、天下之朝市也、而王不爭焉、顧爭於戎翟、去王業遠矣、

【字解】【翟】……狄に同じ、【倫】……類なり、

【要義】今、全體、蜀は、西方僻遠の國にして、其の人民は、禮儀作法も心得ぬ戎狄の類なれば、之れを征伐して、我が軍兵を疲弊せしめ、我が人數

を苦勞せしめたりとも、名譽を成すに足らざらむ、其の土地を手に入れたりとも、利益とするに足らざらむ、臣が兼ねく聞き及びたるには、名譽を競ひ爭ふ者は、名譽の最も多き朝廷に於て競ひ爭ひ、利益を競ひ爭ふ者は、利益の最も多き市場に於て競ひ爭ふとなり、今韓の三川の地と周室とは、天下第一の朝廷市場にして、名譽利益を競ひ爭ふには、此の上もなき場所柄なり、さるを大王には、此の方面へ向ひて、之れを競ひ爭ひたまはずして、反りて名譽にもならざる、戎狄に向ひて、之れを競ひ爭ひたまはむには、帝王の事業を離れ去ること遠からむ、此の譯なれば、臣は、蜀を後にし、韓を先にせむと存ずるなり」と、以上、張儀の言葉なり、

司馬錯曰、不然、臣聞之、欲富國者、務廣其地、欲彊兵者、務富其民、欲王者、務博其德、三資者備、而王隨之矣、今王地小民貧、故臣願先從事於易、

【講義】司馬錯の曰はく、「さにあらず、臣が兼ねく聞き及びたるには、國を富ましむと思ふ者は、其の土地を廣めむことを先務とし、兵を強くせむと思ふ者は、其の人民を富ましむことを先務とし、天下に王となりむと思ふ者は、其の德澤を博めむことを先務とす、此の土地を廣め、人民を富ましめ、德澤を博むる三つの資本の十分に備はりたる上は、帝王の事業は、自然に之れに附き隨ひて成り立つなりとなり、然るに、今、大王の土地は小さく、人民は貧しくして、資本の二つ缺乏せり、されば、臣は、願はくは先づ容易き事に從ひて、韓を後にし、蜀を先にせむことを、

【文法】願慢の曰はく、從事於易の易の一字破的なり、此れ張儀を屈せし所以なりと、

夫蜀、西僻之國也、而戎翟之長也、有桀紂之亂、以秦攻之、譬如使豺狼逐羣羊、得其地、足以廣國、取其財、足以富民、繕兵不傷衆、而彼已服焉、拔一國、而天下不以爲暴、利盡西海、而天下不以爲貪、是我一舉而名實附也、而又有禁暴止亂之名、

【講義】【辭兵】……兵器を納ひ治むるなり、

【講義】全體、蜀は、西方僻遠の國にして、戎狄の類方なり、其の國內に、夏の桀王、殷の紂王の如き、騷亂ありて、人民皆上に荷けり、秦の力をもて、之れを攻め伐たば、譬へば、强き豺狼をして、羸き羊どもを逐はしむるが如く、之れに勝つこと容易からむ、其の土地を手に入れば、秦の國土を廣むるに足らむ、其の貨財を取らば、秦の人民を富ますに足らむ、之れを征伐することの容易からむことは、兵器を納ひ治めて、戰爭の用意をしたるのみにて、我が手の人數を傷めずして、彼れ已に服從しつるならむ、蜀といふ一つの國を奪ひ取りても、天下の人は、秦をもて暴虐なりとはせざるなり、西海の利益を殘らず收め取りても、天下の人は、秦をもて貪慾なりとはせざるなり、是れ我れ一たび事を擧げ行ひて、名譽も、實利も、皆我れに附屬するなり、而して其の上に又、此方の威光をもて、彼の國內の亂暴を禁止する立派なる名聞あれば、此の上もなき好都合なり、

今攻韓劫天子、惡名也、而未必利也、又有不義之名、而攻天下所不欲、危矣、臣請論其故、

【講義】今、韓を攻め、天子を威し付くるは、極めて惡しき名聞なり、而して、屹度勝利を得べしとは限らぬが上に、又不義非道の名聞あり、而して、天下の人の攻めたく思はぬものを攻むるは、輿論に背きて、危險なることなり、臣其の譯けを論ぜむことを請ふ、

周天下之宗室也、齊韓之與國也、周自知失九鼎、韓自知亡三川、將二國并力合謀、以因乎齊趙、而求解乎楚魏、以鼎與楚、以地與魏、王弗能止也、此臣之所謂危也、不如伐蜀完、

【齊韓之與國也】……齊の字は、餘計ものならむ、【完】……無難なるなり、

【講義】周は、天下の諸侯の本家本元にして、韓に取りては、地面續きの仲間の國なり、然るに、秦の壓道を受けて、周は、自ら九鼎の寶物を失はむことを知り、韓は、自ら三川の土地を亡はむことを知らば、此の二國は、力を并はせ、謀を合はせて、齊と趙とに依賴して、秦の兵難を解除せむことを楚と魏とに請ひ求むるならむ、其の代はりには、周は、九鼎の寶物を楚に與へ、韓は、三川の土地を魏に與へば、楚も魏も、屹度承諾するならむ、其の時、大王之れを押し止めたまふとも、押し止めたまふこと能はざらむ、此れ臣が危險なりと申したる譯けなり、先づ蜀を伐つことの無難なるには及ばざらむ」と、以上、司馬錯の言葉なり、

惠王曰、善、寡人請聽子、卒起兵伐蜀、十月取之、遂定蜀、貶蜀王更號爲侯、而使陳莊相蜀、蜀既屬秦、秦以益彊、富厚輕諸侯、

【貶】……身分を落とすなり、

【講義】惠王司馬錯の說に同意して曰はく、「至極尤なり、卿者は、御身の說を聽き納れたし」と、遂に兵を起こして、蜀を伐ちて、十箇月にて之れ

を取りて、遂に蜀の地を平定し、蜀王の身分を落として、其の稱號を取り變へて、蜀侯とし、陳莊を蜀の附け家老として、國の政事を取らしめたり、蜀の地既に秦に附屬せしかば、秦は、益ゝ強くなりて、其の財政も、手厚くなりて、天下の諸侯を輕蔑せり、

秦惠王十年、使公子華與張儀圍蒲陽、降之、儀因言秦、復與魏、而使公子繇質於魏、儀因說魏王曰、秦王之遇魏甚厚、魏不可以無禮、魏因入上郡少梁、謝秦惠王、惠王乃以張儀爲相、更名少梁曰夏陽、

【講義】秦の惠王の十年に、公子の華をして、張儀と共に、魏の蒲陽を圍ましめて、之れを降參せしめたり、張儀は、之れに就きて、一策を構へて、己れの趣意を秦に申し立てゝ、一旦降參せしめたる蒲陽の土地を重ねて魏に與へて、秦の公子の繇をして、魏に人質とならしめたり、張儀は、それに就きて、魏王に說きて曰はく、「秦王の魏を待遇すること、甚だ手厚くして、一旦降參せしめたる蒲陽の土地を返却し、身内の公子を人質としたれば、魏の方にても、相當の答禮なくては、叶はざるべし」と、魏は、それに就きて、上郡と少梁との二箇所を求め入れて、秦の惠王に謝禮せしかば、惠王は、張儀の軍職を解きて、再び之れを宰相とし、少梁の地名を取り變へて、夏陽といへり、張儀の此の手段は、公子を人質にしたるまでにて、人の土地を人に返して、新たに土地を得たることなれば、結局秦の利益にして、魏の損失となりたるなり、

儀相秦四歲、立惠王爲王、居一歲、爲秦將、取陜、築上郡塞、

【字解】【立惠王爲王】……惠王は、此の時までは、君と稱せしが、此に至りて、始めて王と稱せしなり、

【講義】張儀秦に宰相たること、四箇年にして、惠王を押し立てゝ、王號を唱へしめたり、其の後、一箇年を經て、張儀秦の將となりて、魏の陜の地を取り、上郡の邊塞を建築せり、

其後二年、使與齊、楚之相會齧桑東、還而免相、相魏以爲秦、欲令魏先事秦、而諸侯效之、魏王不肯聽儀、秦王怒、伐取魏之曲沃、平周、復陰厚張儀益甚、張儀慙、無以歸報、

【講義】其の後、二箇年を經て、張儀秦の使者となりて、齊、楚二國の宰相と齧桑の地の東の方にて會合せり、其の會合より立ち戻りて、宰相を免ぜられ、魏の宰相となりて、秦の利益を計りたり、其の手段は、魏をして、先づ秦に事へしめて、他の諸侯をして、其の眞似をせしめむと思ひたるなり、然るに魏王、張儀の勸めを聽き納れざりしかば、秦王怒りて、魏を伐ちて、其の曲沃と平周との兩地を取りて、表向きは、張儀の處置の手ぬるきことを怒に入らぬやうに見せ掛けながら、重ねて、内ゝにて、張儀を手厚く取り扱ふこと益ゝ甚しかりければ、張儀己れの行き屆かざることを慙ぢ入りて、秦へ歸りて、事の始末を報告することなかりけり、

【文法】「歸慙」の「慙」は、此れ連衡の起手なりと、

留魏四歲、而魏襄王卒、哀王立、張儀復說哀王、哀王不聽、於是張儀陰令秦伐魏、魏與秦戰敗、明年、齊又來敗魏於觀津、秦復欲攻魏、先敗韓申差軍、斬首八萬、諸侯震恐、

【講義】張儀其の儘魏に留まりて、宰相たること、四箇年にして、魏の襄王卒去し、哀王嗣ぎて立ちければ、張儀重ねて秦に事へむことを哀王に說きたれど、哀王は、亦聽き納れざりしかば、是に於て、張儀秦（内通して、魏を伐たしめたれば、魏は秦と戰ひて、敗軍せり、其の翌年に、齊又來り攻めて、魏を觀津に敗りたれば、秦は、重ねて魏を攻めむと思ひて、其の手始めに、先づ其の鄰國なる韓の將の申差の軍勢を敗りて、首を斬ること八萬に及びて、死人の山を築きたれば、列國の諸侯、皆身振ひして、秦の威勢を恐れたり、

而張儀復說魏王曰、魏地方不至千里、卒不過三十萬、地四平、諸侯四通輻湊、無名山大川之限、從鄭至梁二百餘里、車馳人走、不待力而至、梁南與楚境、西與韓境、北與趙境、東與齊境、卒戍四方、守亭鄣者、不下十萬、梁之地勢、固戰場也、梁南與楚、而不與齊、則齊攻其東、東與齊而不與趙、則趙攻其北、不合於韓、則韓攻其西、不親於楚、則楚攻其南、此所謂四分五裂之道也、

【字解】【輻湊】……輻は、車のやなり、湊は、集まるなり、車の輪を小別けにすれば、其の外廻りの輪を輻（おほわ）といひ、心棒の通りたる輪を轂（としき）といひ、輻より轂（向ひ集まりたる數條の細き木を輻（や）といふ、輻湊は、輻の轂に集まるが如きなり、【不待力】……骨を折らぬなり、【戍】……邊境を守るなり、（亭）【亭】……街道筋の立て場なり、十里毎にあり、【障】……隔てなり、敵を防ぐ取り手なり、

【講義】さて、此のやうに、秦の威勢を示したる上にて、張儀重ねて魏王に說きて曰はく、「魏の地の廣さは、千里四方に屆かず、其の兵卒は、三十萬人に過ぎず、其の地の形は、四方平坦にして、列國の諸侯、四方より交通して、さながら車の輻の轂に聚まるが如くに集合せり、其の周圍には、名高き山、大なる川の仕切りもなく、韓の都の鄭より、魏の都の梁に至るまで、僅に二百餘里にして、車は自由に馳せ、人は自在に走り、少しも脅を折らずして、韓より魏へ至ることを得るなり、梁卽ち魏は、南の方は、楚と境界を接し、西の方は、韓と境界を接し、北の方は、趙と境界を接し、東の方は、齊と境界を接したれば、士卒の四方の邊境を守り、街道筋の立て場、敵を防ぐ取り手を守る者、十萬人に下らず、梁の地勢は、此の如く、何方よりも攻め入り易くして、四面に敵を引き受けたれば、言ふまでもなく、戰爭の絕え間なき場所柄なり、梁は、南の方楚と組み合ひて、東の方齊と組み合はざらむには、齊は、其の東を攻めむ、東の方齊と組み合ひて、北の方趙と組み合はざらむには、趙は、其の北を攻めむ、西の方韓と合體せざらむには、韓は、其の西を攻めむ、南の方楚と和親せざらむには、楚は、其の南を攻めむ、此の如く、東西南北、敵れなりとも、一方に附けば、一方に怒られて、其の攻擊を受くべければ、世間にて取り沙汰せる、四つに分かれ五つに裂くる遂にして、其の國を保ち得られむ見込みなし、

且夫諸侯之爲從、將以安社稷尊主彊兵顯名也、今從者一天下、約爲昆弟、刑白馬以盟洹水之上、以相堅也、而親昆弟、同父母、尙有爭錢財、而欲恃詐僞反覆蘇秦之餘謀、其不可成亦明矣、

【講義】【從者】……合從の說を主張する者なり、【刑白馬】……白き馬を殺して、盟ふ者の口のはたに其の血を塗るなり、昔の盟約の時の習慣なり、

【講義】しかのみならず、六國、韓、魏、趙、楚、燕、齊の六箇國の諸侯の間に周旋して、合從の說を主張せる者は、其の國土の社稷國家を安泰にし、君主の位を尊くし、己れの名譽を顯はさむとするなり、されば、今六箇國の爲めに合從の說を主張せる者は、天下の諸侯を一致して、兄弟の約束を結び、白き馬を殺して、口のはたに其の血を塗りて、洹水の近邊にて盟ひて、其の約束を互に堅く守らむとせり、然れども、親しき兄弟同じ父母の間柄にてすら、時としては、金錢貨財を爭ふことあれば、人の心は恃み難し、さるを、詐僞反覆して、少しも當てにならぬ、蘇秦の餘流の謀計を恃みて、合從を遂げむと思ふは、愚の至りなり、其の事の成るべからざることも亦明白なり、

大王不事秦、秦下兵攻河外、據卷、衍、酸棗、劫衞取陽晉、則趙不南、趙不南、而梁不北、梁不北、則從道絕、從道絕、則大王之國欲毋危、不可得也、秦折韓而攻梁、韓怯於秦、秦、韓爲一、梁之亡、可立而須也、此臣之所爲大王患也、

【講義】【折】……挫くなり、戰國策には、挾に作れり、【須】……待つなり、

【講義】大王秦に事へたまはずば、秦は、軍兵を押し下して、河外を攻めむ、又卷と衍と酸棗との地を足溜まりにして、衞の國を威し付けて、陽晉の地を取らば、趙は、南へ通ずること能はざらむ、趙南へ通ずること能はずして、合從の道斷絕せむ、合從の道斷絕せば、梁は、北へ通ずること能はざらむ、梁北へ通ずること能はずば、此の南國は、救ひ合ふこと能はずして、合從の道斷絕せば、大王の國、危きことなからむと思ふとも、得られざらむ、其の時、秦は、韓を挫折して、梁を攻めば、韓は、秦の威勢を恐怖して、秦の命ずる儘に動かむ、秦、韓一致合體せば、梁の滅亡せむこと、立ちたる儘にて待つべき程に火急ならむ、此れ臣が大王の爲めに心配することなり、

爲大王計、莫如事秦、事秦、則楚、韓必不敢動、無楚、韓之患、則大王高枕而臥、國必無憂矣、且夫秦之所欲弱者、莫如楚、而能弱楚者、莫如梁、楚雖有富大之名、而實空虛、其卒雖多、然而輕走易北、不能堅戰、悉梁之兵、南面而伐楚、勝之必矣、割楚而益梁、虧楚而適秦、嫁禍安國、此善事也、

【講義】【北】……奔るなり、【適】……歸すといはむが如し、【嫁禍】……禍を外へ振り向くるなり、

【講義】大王の爲めに計策するに、恃み甲斐なき合從を止めて、秦に事へたまふに如くはなし、秦に事へたまはゞ、楚も韓も、兼ねて秦を恐れたれば、屹度押し切りて兵を動かさゞらむ、楚と韓との我れを强ふ患害なくば、大王には、枕を高くして、安らかに臥したまふことを得て、我が國は、屹度心配なからむ、しかのみならず、全體、今の諸侯の中にて、秦の弱くしたしと思へる國は、楚に如くはなし、而して、能く楚を弱くせむ國は、梁に如くはなし、楚は、財政も富裕にして、土地も廣大なりといふ評判あれど、其の實際は、空虛にして、貧困なり、其の兵卒は、多しといへども、然れども、戰場に臨めば、浮き足になりて、踏み止まりて、手堅く戰ふこと能はざれば、梁の兵を殘らず繰り出して、南へ向ひて、楚を伐たば、之れに勝たむこと必定ならむ、さて、楚に勝ちて、其の土地を割き取りて、梁の領分を益し、且つ其の土地を割き減らして、秦に歸せしめば、我れの秦より受くべき禍害を楚へ振り向けて、我が國を安泰にせらるゝならむ、此れ魏の爲めに善き事なり、

大王不聽臣、秦下甲士而東伐、雖欲事秦、不可得矣、

講義 大王若し臣が計策を聽き納れたまはゞ、秦は、甲冑を著用したる士卒を押し下して、東へ向ひて、我が國を伐たむ、其の期に及びて、秦に事へたく思ひたまふとも、叶はざるべし、

且夫從人多奮辭、而少可信、說一諸侯而成封侯、是故天下之游談士、莫不日夜搤腕瞋目切齒、以言從之便、以說人主、人主賢其辯、而牽其說、豈得無眩哉、臣聞之、積羽沈舟、羣輕折軸、衆口鑠金、積毀銷骨、故願大王審定計議、且賜骸骨辟魏、哀王於是乃倍從約、而因儀請成於秦、

字解 【從人】……前の從者に同じ。【奮辭】……己れの說を仰山に述べ立つるなり。【搤腕】……腕を握るなり。【瞋目】……目を張るなり。【切齒】……齒ぎしりをするなり。【眩】……目の昏むなり。【軸】……車の心棒なり。【衆口鑠金】……鑠は、爍と通ず、燒くなり、衆人の口先にて、此の金は純金ならずと言へば、其の持ち主疑念を生じて、其の金を燒き潰して見るなり。【積毀銷骨】……衆人の讒言も、積もり積もれば、人の骨肉至親の間柄をも消滅するなり。【賜骸骨】……暇に同じ。【成】……和睦なり。

講義 【從人】……前の從者に同じ。【奮辭】……己れの說を仰山に述べ立つるなり。【搤腕】……腕を握るなり。【瞋目】……目を張るなり。【切齒】……齒ぎしりをするなり。【眩】……目の昏むなり。【軸】……車の心棒なり。【衆口鑠金】……鑠は、爍と通ず、燒くなり、衆人の口先にて、此の金は純金ならずと言へば、其の持ち主疑念を生じて、其の金を燒き潰して見るなり。【積毀銷骨】……衆人の讒言も、積もり積もれば、人の骨肉至親の間柄をも消滅するなり。【賜骸骨】……暇に同じ。【成】……和睦なり。

講義 しかのみならず、全體、六箇國の爲めに合從の說を主張する從人は、多くは、己れの說を仰山に述べ立つれども、孰れも不德なることにて、信用すべきこと少なし、さりながら、從人の身の都合上よりいへば、一人の諸侯に說きて、其の說採用せらるれば、忽ち富貴榮榮を得て、諸侯の身分程にもならるゝことなれば、天下の游說談論する士は、蜂となく、夜となく、腕を握り、目を張り、齒ぎしりをして、必死になりて、合從の便利なることを述べ立てゝ、人主に說かぬ者とてはなし、人主の其の辯舌を聞きて、賢者なりとして、信ずる知らず、其の說に引き込まるゝは、いかに目の昏みたるにはあらざるか、臣が兼ねく聞き及びたるには、輕き羽根も、多く積めば、舟を沈むるなり、輕き吊物も、澤山に載すれば、車の心棒を折るなり、衆人の口先にて、此の金は純金ならずと言へば、其の持ち主は疑念を生じて、其の金を燒き潰して見るなり、衆人の讒言も、積もり積もれば、人の骨肉至親の間柄をも消滅するなり、從人の仲間を組みて、助け合ひて、人主の心を惑はすことも、亦此の如くならむ、されば、願はくは、大王には、能く〳〵利害得失を考へたまひて、謀計評議を取り極めたまはむことを、しかのみならず、臣は、今まで、長く秦公したることなれば、暫く骸骨を頂戴して、自由の身となりて、魏の國を避け退きたし」と、哀王、是に於て、遂に張儀の口先に乘りて、秦に事へむとの念を起こして、合從の約束に違背して、他の五箇國の仲間外れになりて、張儀に依賴して、和睦を秦に請ひ求めたり、

張儀歸復相秦、三歲而魏復背秦爲從、秦攻魏取曲沃、明年、魏復事秦、

講義 張儀は、兼ねての見込み通り、魏をして、秦に事へしむることを得たれば、秦へ歸りて、重ねて秦の宰相となりぬ、それより三箇年立ちて、魏は、重ねて秦に背きて、列國の諸侯と合從せしかば、秦は、魏を攻めて、曲沃の地を取りたれば、其の翌年に、魏は、重ねて、秦に事へたり、

秦欲伐齊、齊、楚從親、於是張儀往相楚、楚懷王聞張儀來、虛上舍而自館之曰、此僻陋之國、子何以教之、儀說楚王曰、大王誠能聽臣、閉關絕約於齊、臣請獻商、於之地六百里、使秦女得爲大王箕帚之妾、秦、楚娶婦嫁女、長爲兄弟之國、此北弱齊而西益秦也、計無便此者、

字解 【箕帚之妾】……箕は、塵を取るものなり、帚は、塵を掃ふものなり、掃除をする下女といふことにて、謙遜の言葉なり、腰元の女中といはむが如し、實は嫁に遣ることなり。【西益秦也】……西の方秦の加勢を得て、楚を利益するなり、

講義 魏は、はや秦に事ふるやうになりたれば、秦は、是れより、齊を伐たむと思ひしが、齊、楚の二國は、合從親睦したれば、先づ楚を齊より引き離さむとの手段をせり、是に於て、張儀楚の國へ往きて、宰相となりたるに、楚の懷王、秦の廻し者なることを知らずして、張儀の秦より來れるを聞きて、上等の旅館を明け拂ひて、自身に之れを案內して、其の旅館に逗留せしめて、さて、恭ねて曰はく、「此の僻遠なる固陋の國へ遙々來れるは、恭きことなり、御身如何なる事をもて、此の田舍者に敎訓せられむか」と、張儀楚王に說きて曰はく、「大王誠に能く臣が說を聽き納れたまひて、國境の關門を緘め切りて、合從の約束を齊へ向ひて絕ち切りたまはゞ、臣は、秦の商縣、於縣の六百里の土地を獻上して、秦王の娘をして大王の御腰元の女中となることを得しめむことを請ふ、秦、楚の兩國、互に嫁を取り、娘を嫁に遣りて、末長く兄弟の國となりなば、北の方齊を屈くして、西の方秦の加勢を得て、楚を利益するならむ、大王の爲めに計るに、此れに增したる便利なることなからむ」と、

又注 郭以說の曰はく、此の段の事、楚の世家にもあり、此れに比するに、較〻詳かなり、彼れは暢び、此れは勁し、各〻おのづから佳なりと、

楚王大說而許之、羣臣皆賀、陳軫獨弔之、楚王怒曰、寡人不興師發兵、得六百里地、羣臣皆賀、子獨弔何也、陳軫對曰、不然、以臣觀之、商、於之地不可得、而齊、秦合、齊、秦合、則患必至矣、

講義 楚王、張儀の說を聞きて、大に滿足して、齊と絕交することを許諾せしかば、羣臣は、芽出度ことなりとて、之れを慶賀せしに、陳軫のみは、獨り不吉のことなりとて、之れを悔みたれば、楚王怒りて曰はく、「拙者は、軍勢を繰り出して、戰爭をすることもなく、六百里の土地

を手に入れむとすれば、臣は、壇墨買せしに、御身のみ、獨り悔みをいふは、何故ぞ」と、陳軫對へて曰はく、「此の事は、決して慶賀すべきことにあらず、臣が眼をもて之れを觀るに、商縣、於縣の土地は、我が手に入るべからずして、齊と秦とは合體せむ、齊と秦と合體せば、禍害は屹度此の國に到來せむ」と、

楚王曰、有説乎、陳軫對曰、夫秦之所以重楚者、以其有齊也、今閉關絶約於齊、則楚孤、秦奚貪夫孤國、而與之商、於之地六百里、張儀至秦、必負王、是北絶齊交、西生患於秦也、而兩國之兵必俱至、善爲王計者、不若陰合而陽絶於齊、使人隨張儀、苟與吾地、絶齊未晚也、不與吾地、陰合謀計也、

【訓】【貪】……交はる念慮の深きなり、【陽】……表向きなり、

【語】楚王の曰はく、「さらば、御身に説ありや」と、陳軫對へて曰はく、「全體、秦の楚を重んじて侮らざる譯けは、其の同盟に齊國あればなり、今國境の關門を締め切りて、合從の約束を齊へ向ひて絶ち切らば、楚は、加勢なき孤立の國とならむ、秦は、何とて、彼の孤立の國と交はる念慮を深くして、之れに商縣、於縣の六百里の土地を與ふることあるべき、張儀秦の國へ到著せば、屹度大王との約束に背きて、此の六百里の土地を與へざらむ、是れ我が國は、北の方齊の交はりを絶ちて、西の方禍患を秦に生ずるならむ、而して、齊、秦兩國の兵、屹度倶ゝに此の國へ攻め寄せ來らむ、今日の場合ひに於て、善く大王の爲めに計らむには、内ゝ齊と合體して、表向き齊と絶交し、人を張儀に隨行せしめて、秦の國へ遣はして、彼れ若し吾れに約束の土地を與へば、其の時に、始めて齊と本式に絶交すとも、まだ手後れにはならざらむ、之れに反して、彼れ若し吾れに約束の土地を與へずば、内ゝ齊と合體して置かば、都合の惡しきことなからむ、是れ謀計といふものなり」と、

【注】郢以讓の曰く、數語をもて、利害明らかに盡くせり、交極めて婉轉なりと、

楚王曰、願陳子閉口毋復言、以待寡人得地、乃以相印授張儀、厚賂之、於是遂閉關絶約於齊、使一將軍隨張儀、張儀至秦、詳失綏墮車、不朝三月、楚王聞之曰、儀以寡人絶齊未甚邪、乃使勇士至宋、借宋之符、北罵齊王、齊王大怒、折節而下秦、秦、齊之交合、

【訓】【綏】……馬車に乘るときに取りすがる紐なり、【借宋之符】……宋の使者の證據の割り符を借用するなり、【折節】……身體の關節を折するなり、腰を屈むることなり、

【語】楚王の曰はく、「最早張儀に許諾せしことなれば、願はくは陳子口を塞ぎて、重ねて發言せずして、拘者の土地を手に入れむ時を待たむことを」と、それに就きて、宰相の印章を張儀に授けて、手厚く之れに賄賂を與へたり、是に於て、遂に國境の關門を締め切りて、合從の約束を齊へ向ひて絶ち切りて、一人の將軍を張儀に隨行せしめたり、張儀秦へ到著して、馬車に乘るときに取りすがる紐を取り外して、馬車より墜ちたる眞似をして、痛み處ありとして、引き籠もりて、秦の朝廷へ出仕せざること、三箇月に及びたれば、楚王之れを聞き及びて曰はく、「張儀のかやうに遲滯せるは、拘者の齊に絶交することの、まだ手弱からぬに因るならむ」と、是に於て、勇猛の士を齊の國へ差し向けむと思ひたれど、既に齊とは絶交したることなれば、楚の使者の證據の割り符にては、齊へ入ること叶はざれば、其の者をして、宋の國へ往きて、宋の使者の證據の割り符を借用せしめて、北の方齊へ往きて、齊王を罵り辱めさせたるに、齊王大に怒りて、腰を折りて、秦に下りたれば、秦と齊との交際合體せり、

張儀乃朝、謂楚使者曰、臣有奉邑六里、願以獻大王左右、楚使者曰、臣受令於王、以商、於之地六百里、不聞六里、還報楚王、楚王大怒、發兵而攻秦、陳軫曰、軫可發口言乎、攻之不如割地、反以賂秦、與之并兵而攻齊、是我出地於秦、取償於齊也、王國尚可存、

【注】【奉邑】……知行なり

【語】張儀は、懶ねて計りし如く、楚と齊と絶交して、秦と齊と合體したれば、始めて秦の朝廷へ出仕して、楚の使者に物語りして曰はく、「臣には、六里の知行あれば、願はくは之れを大王の左右の近臣に獻上せむことを」と、楚の使者の曰はく、「臣は、命令を國王より受けしとき、商縣、於縣の六百里の土地を受け取りて參るべしとのことにして、僅に六里なりとは承らぬなり」と、されど、張儀は、一向に取り合はざりしかば、使者は、是非なく立ち戻りて、楚王に斯くと言上せしに、楚王大に立腹して、兵を發して、秦を攻めむとせしに、陳軫の曰はく、「已れは、最早發言しても宜しからむや、此の期に及びて、秦を攻めむは、反對に我が土地を割きて、秦に賂ひて、秦と一所に兵を合はせて、齊を攻めむに如かざらむ、是れ我れは土地を秦へ差し出しく、其の埋め草を齊より取るに當たることなれば、差し引き、損得なしとなりて、大王の國は尚ほ永續すべし」と、

楚王不聽、卒發兵、而使將軍屈匄擊秦、秦、齊共攻楚、斬首八萬、殺屈匄、遂取丹陽、漢中之地、楚又復益發兵而襲秦、至藍田、大戰、楚大敗、於是楚割兩城、以與秦平、

【講義】楚王は、やはり陳軫の意見を聽き納れずして、遂に兵を發して、將軍の屈匄といふ者をして、秦を擊たしめたれば、秦、齊二國合體して、楚を攻めて首を斬ること八萬人の多きに及び、屈匄を殺し、遂に丹陽と漢中との地を取れり、されども、楚は、又重ねて益ゝ兵を發して、秦に不意擊ちを仕掛けて、藍田の地まで押し寄せて、大に戰ひしが、此の時も、楚は、大に敗軍せり、是に於て、楚は、二箇所の城を割きて、秦に與へて和睦せり、

秦要楚欲得黔中地、欲以武關外易之、楚王曰、不願易地、願得張儀、而獻黔中地、秦王欲遣之、口弗忍言、張儀乃請行、

【要】……無理押し付けに承諾を求むるなり、

【講義】秦は、楚に無理押し付けに承諾を求めて、黔中の地を手に入れたしと思ひて、武關の外の地をもて、之れに取り易へたしと思ひしに、楚王の曰はく、「土地を取り易へむことは願はぬなり、願はくは張儀を手に入れて、黔中の地を獻上せむことを」と、是れ張儀に欺かれたることを殘念に思ひて、其の返報をせむとの下心なり、秦王は、張儀を遣れば、望みの土地を得らるゝことなれば、心の中には、之れを遣りたくも、其の事を張儀に發言し兼ねしに、張儀は、其の意を推察して、自ら進みて、楚へ行きたしと申し出でたり、

惠王曰、彼楚王怒子之負以商、於之地、是且甘心於子、張儀曰、秦彊楚弱、臣善靳尙、尙得事楚夫人鄭袖、袖所言皆從、且臣奉王之節使楚、楚何敢加誅、假令誅臣、而爲秦得黔中之地、臣之上願、遂使楚、

【甘心】……讎ゐせをするなり、【節】……使者の證據の割り符の旗なり、

【講義】惠王の曰はく、「彼の楚王は、御身の商縣、於縣の土地の事にて約束に背きしことを怒りたれば、御身に腹ゐせをせむ爲めならむ」と、張儀の曰はく、「其の儀は、更に心配なし、秦は强くして、楚は弱し、臣は、楚の靳尙といふ者と親密なり、靳尙は、楚王の夫人の鄭袖に奉公することを得たり、鄭袖は、楚王の氣に入りなれば、其の言ふことは、楚王皆從へば、靳尙より鄭袖に言はせ方もあるべし、しかのみならず、臣大王より賜はりたる使者の證據の割り符を持參して、楚の國へ使ひせむには、楚は大王を畏るゝが故に、何とて押し切りて臣に誅戮を加ふることあらむ、萬一臣を誅戮することありとも、秦の爲めに黔中の地を手に入れなば、臣に於ては、大願成就せるものならむ」と、斯く所望して、遂に楚の國へ使ひせり、

楚懷王至則囚張儀、將殺之、靳尙謂鄭袖曰、子亦知子之賤於王乎、鄭袖曰、何也、靳尙曰、秦王甚愛張儀、而不欲出之、今將以上庸之地六縣賂楚、以美人聘楚、以宮中善歌謳者爲媵、楚王重地尊秦、秦女必貴、而夫人斥矣、不若爲言而出之、

【不欲出之】……不の字は、必に作るべし、秦王の是非とも張儀を牢屋より救ひ出さむと思ふなり、戰國策には、不の字なし、【聘】……聘問の義にして、與ふることなり、【謳】……嫁に行く女に附き添ひて行者を、男女共に謳といふ、【斥】……擯斥せらるゝなり、

【講義】楚ゝ懷王は、張儀の到著するを待ちて、直ちに之れを召し捕りて、牢屋の中に押し込めて、程なく之れを殺さむとせしに、張儀の兼ねて懇意なる靳尙は、果たして夫人の鄭袖に物語りして曰はく、「御身も、己れの心付きたる如く、御身の今より楚王の寵愛を失ひて、楚王に賤まれむとすることを心付かれたりや」と、鄭袖の曰はく、「そは何故ぞ」と、靳尙の曰はく、「御承知なくば、告げ申さむ、秦王甚だ張儀を愛したれば、此の國にて召し捕られたることも聞き及びて、是非とも之れを救ひ出さむと思へり、それに就きては、今、上庸の地の六縣をもて楚に賂ひ、美人をもて楚に與へて、奥方とし、秦王の宮中の歌御音曲の上手なる者を其の嫁に來る女の附き添ひとして送らむとせり、楚王は、陳賂の土地を大切に思はれて、秦王を尊敬せらるゝことなれば、秦王の娘は、屹度貴くなりて、夫人は、擯斥せらるゝならむ、此の譯けなれば、まだそこまでにならぬ中に、張儀の爲めに、其の無罪なることを楚王に言上せられて、之れを牢屋より救ひ出されむには如かじ」と、

於是鄭袖日夜言懷王曰、人臣各爲其主、用今地未入秦、秦使張儀來、至重王、王未有禮、而殺張儀、秦必大怒攻楚、妾請子母俱遷江南、毋爲秦所魚肉也、懷王後悔赦張儀、厚禮之如故、

【所魚肉】……魚の肉のやうに切らるゝなり、

【講義】是に於て、鄭袖は、我が身の上を心配して、寧となく、夜となく、懷王に言上して曰はく、「人の臣下となる者は、飾々に其の主君の爲めに用ゐられて、其の主君の便利を計る者なれば、張儀の所爲も、咎むるに足らぬなり、今、大王には、進上せむと仰せられたる美中の婦も、まだ秦の手に入らざるに、秦は、大王の御望み通り、張儀をして來らしめたるは、此の上もなく大王を重んじたればなり、さるを、大王には、まだ答禮をもしたまはずして、張儀を殺したまはむには、秦は、必定大に怒りて、楚を攻むるならむ、さらば、楚は、一戰に打ち負けて、主從共に殺さるべければ、妾は、何卒、親子共、江南の地へ引き移りて、其の災難を免れて、秦人の手に、魚の肉のやうに切らるゝことなからむことを請ふ」と、懷王は、朝夕かやうに鄭袖に泣き付かれて、張儀を召し捕りたることを後悔して、之れを赦免して、手厚く之れを禮遇すること、以前此の國に宰相たりし時のやうにせり、

張儀既出未去、聞蘇秦死、乃說楚王曰、秦地半天下、兵敵四國、被險帶河、四塞以爲固、虎賁之士百餘萬、車千乘、騎萬匹、積粟如丘山、法令既明、士卒安難樂死、主明以嚴、將智以武、雖無出甲席卷常山之險、必折天下之脊、天下有後服者先亡、

【講義】【四國】……四方の國なり、【虎賁之士】……虎の奔るが如き勇士なり、【席卷】……一枚の筵を片端より捲き取るやうに容易く取るなり、【張儀既に牢屋より出でゝ、まだ楚の國を立ち去らぬ中に、「蘇君の事を用ゐらるゝ間は、己れは、何とて押し切りて之れに反對することを發言すべき」と言ひ遣りける蘇秦の齊にて橫死せし由を聞き及びたれば、是れより、遠慮なく、我が說を行はむと思ひて、楚王に說きて曰はく、「秦の地は、天下中の半分程の廣さあり、兵卒の數は、四方の國の總體に匹敵し、險阻なる山々を著物のやうに打ち纏ひ、河水の流れを帶のやうに引き廻し、四方の要害をもて國の固めとし、虎の奔るが如き勇士は、百餘萬人あり、兵車は千輛、騎馬は一萬匹あり、兵糧の籾米を積み蓄へたること丘山の如し、法律號令既に明らかにして、士卒は、戰爭の艱難に安んじ、一命を捨つることを而白く思ひ、君主は、賢明にして、嚴重なり、將帥は、智慧ありて、武勇なれば、たとひ甲兵を繰り出すことなしといふとも、常山の險阻を一枚の筵を片端より捲き取るやうに容易く取りて、屹度天下の北に在りて、人身の背中の如き、此の常山を挫折するならむ、此のやうなる勢ひなれば、天下の諸侯は、先を爭ひて歸服すべし、跡より歸服する者あらば、其の國は、秦の兵を受けて、他の國よりも先づ早く滅亡せむ、

且夫爲從者、無以異於驅羣羊而攻猛虎、虎之與羊不格明矣、今王不與猛虎而與羣羊、臣竊以爲大王之計過也、

【講義】【格】……鬪ふなり、

【講義】しかのみならず、全體、諸侯の合從して秦に抵抗せむとするは、多くの弱き羊を驅り立てゝ、猛虎を攻むるに異なることなし、虎と羊とは鬪ひて、羊の勝たれぬは、分かり切りたることなり、今、大王は、猛虎の如き秦と組み合ひたまはずして、多くの弱き羊の如き諸侯と組み合ひたまへり、臣は、内々大王の計策は間違ひなりと存ずるなり、

凡天下彊國、非秦而楚、非楚而秦、兩國交爭、其勢不兩立、大王不與秦、秦下甲據宜陽、韓之上地不通、下河東、取成皐、韓必入臣、梁則從風而動、秦攻楚之西、韓、梁攻其北、社稷安得毋危、

【講義】凡そ天下の强き國は、秦にあらざれば、楚なり、楚にあらざれば、秦なり、秦、楚の兩國互に爭はゞ、其の勢、兩つながら立たずして、一方は屹度倒るゝならむ、大王秦に組み合ひたまはずば、秦は、甲兵を押し下して、宜陽を足溜まりとせば、韓の上地の通路絶えむ、又河東より押し下りて、成皐を取らば、韓は、屹度秦へ入りて、臣下となるならむ、韓秦へ入りて臣下とならば、梁卽ち魏は、風向きに連れて動搖して、同じく秦に降參するならむ、是に至りて、秦、韓、梁の三箇國合體して、秦は、楚の西を攻め、韓と梁とは、其の北を攻めば、大王の社稷國家は、いかで危きことなきことを得べき、屹度危くなるならむ、

且夫從者聚羣弱而攻至彊、不料敵而輕戰、國貧而數舉兵、危亡之術也、臣聞之、兵不如者、勿與挑戰、粟不如者、勿與持久、夫從人飾辯虛辭、高主之節、言其利、不言其害、卒有秦禍、無及爲已、是故願大王之熟計之、

【講義】【挑戰】……戰爭を仕掛くるなり、【持久】……長く對陣するなり、【節】……氣節なり、

【講義】しかのみならず、全體、六箇國の爲めに合從の說を主張せる者は、多くの弱き諸侯を寄せ聚めて、至りて强き秦を攻め、敵の力を料り考へずして、輕々しく戰ひ、已れの國は貧乏なるに、度々兵を擧ぐるなり、是れ危殆滅亡を取る仕方なり、臣が兼ねく聞き及びたるには、我れと彼れとを見比べて、我が兵卒の數の彼れに及ばぬ者は、其の敵に戰爭を仕掛くることなかれ、我れと彼れとを見比べて、我が兵糧の籾米の高の彼れに及ばぬ者は、其の敵と長く對陣することなかれとなり、全體、六箇國の爲めに合從の說を主張せる者は、雄弁を飾り、虛實を吐きて、其の國の君主の秦に事へざる氣節を高しと譽め立てゝ、合從の利益を言ひて、合從の損害を言はざれば、俄に秦より攻め伐たるゝ禍あらば、如何ともすべからざらむのみ、此の譯けなれば、願はくは大王の能く〳〵利害得失を計りたまひて、從人の手に乘りたまはざらむことを、

秦西有巴、蜀、大船積粟、起於汶山、浮江以下、至楚三千餘里、舫船載卒、一舫載五十人與三月之食、下水而浮、一日行三百餘里、里數雖多、然而不費牛馬之力、不至十日、而拒扞關、扞關驚、則從境以東、盡城守矣、黔中、巫郡、非王之有、

【舫】……二艘の船を竝ぶるなり、【拒】……至るなり、【從境以東】……扞關は、楚の西の國境に在れば、境より東とは、扞關より東の內地を指す、

【講】秦は、西の方に巴、蜀の兩地あり、此の處にて、大なる船に兵糧の粉米を積み込みて、汶山より出船して、江水に浮かびて、押し下らば、楚に至るまでは、三千餘里の舟路ならむ、其の船を二艘づゝ竝べて、兵卒を載せて、二艘一組み每に五十人と三箇月分の食料とを載せて、江水を下りて浮かばゝ、一日に行くこと三百餘里ならむ、さらば里數は多しといへども、然れども、陸地の如く、牛馬の力を費やさずして、十日以內に楚の國の西の境の扞關に至らむ、扞關の番人、秦の大軍に押し寄せられて、驚き懼がば、其の國境より東の內地は、殘らず籠城するならむ、さらば、黔中と巫郡とは、王の所有にあらずして、秦に取らるゝならむ、

【文法】光緒の曰はく、盡く城守せむとは、盡く其の城に據りて、之れを守るべきことを言へるなり、驚の字妙なること甚し、限りなき光景の在るありと、

秦舉甲出武關、南面而伐、則北地絕、秦兵之攻楚也、危難在三月之內、而楚待諸侯之救、在半歲之外、此其勢不相及也、夫待弱國之救、忘彊秦之禍、此臣所以爲大王患也、

【講】秦又甲兵を擧げて、武關より出でゝ、南へ向ひて伐たば、楚の北寄りの地は、連路絕えむ、秦の楚を攻めむことは、其の危難なること、三箇月の內に在らむ、而して、楚の諸侯の救ひを待たむことは、半箇年の外に在らむ、此れ其の勢ひ、諸侯の加勢は、秦の進擊の間に合はぬなり、全體、弱き諸侯の國の救ひを待ちて、安心して、强き秦の兵の禍を忘却するは、此れ臣が大王の爲めに掛念する譯けなり、

大王嘗與吳人戰、五戰而三勝、陣卒盡矣、偏守新城、存民苦矣、臣聞功大者易危、而民敝者怨、上、夫守易危之功、而逆彊秦之心、臣竊爲大王危之、

【偏守】……片寄りて守るなり、

【講】大王には、前方に、吳の人と戰ひたまひて、五たびなから勝ちたまひたれど、數度の合戰にて、陣卒盡き果てたれば、新たに吳より手に入れる城を片寄りて手堅く守りて、人民の苦痛を存恤したまへり、臣が兼ねく聞き及びたるには、手柄の大なる者は、心を勞り、人に倦まるゝが故に、危くして、人民の疲弊せる者は、上を怨みて、離れ叛くとなり、大王の吳に勝ちたまひて、人民の難儀せるは、此の言葉に當たれり、夫れ危くし易き手柄を持ち守りて、飽くまで强き秦の心に逆らひたまふは、臣が內々大王の爲めに危險なりと存ずることなり、

且夫秦之所以不出兵函谷、十五年以攻齊、趙者、陰謀有合天下之心、楚嘗與秦構難、戰於漢中、楚人不勝、列侯執珪、死者七十餘人、遂亡漢中、楚王大怒、興兵襲秦、戰於藍田、此所謂兩虎相搏者也、夫秦、楚相敝、而韓、魏以全制其後、計無危於此者矣、願大王孰計之、

【所以不出兵函谷十五年以攻齊趙者】……兵を函谷關より繰り出して、齊、趙を攻めざることの、十五箇年に及びたる譯けはといふことなり、【構難】……萬端を結ぶなり、【列侯執珪】……身柄の高き人々をいふ、執珪は、楚の爵の名、珪を執りて參朝する者なり、珪は、古文の圭の字なり、上の尖りて下の方なる玉なり、

【講】しかのみならず、全體、秦の兵を函谷關より繰り出して、齊、趙を攻めざることの十五箇年に及びたる譯けは、內々謀り考ふるに、齊、趙諸國に油斷せしめて、一度に天下を合併せむとの下心あればなり、楚は、前方に、秦と萬端を結びて、漢中に戰ひしが、楚の人之れに勝たずして、列侯、執珪の身柄の高き人々の戰死せし者、七十餘人の多きに及びて、遂に漢中の地を失ひしかば、大王大に怒りたまひて、重ねて兵を繰り出して、秦に不意撃ちを仕掛けて、藍田の地に戰ひたまへり、此れ世間にて取り沙汰せる、二匹の虎の互に搏ち合ふ如き者にして、雙方共に强しといへども、疲れ敝れ我を免れぬなり、夫れ秦、楚兩國の此の戰爭にて互に疲弊せる處へ付け込みて、韓、魏二國の安全無難なる兵力をもて、其の跡を制御せば、此れより危き謀計はなからむ、願はくは大王には能くくこれを考へ計りたまはむことを、

秦下甲攻衞、陽晉、必大關天下之匈、大王悉起兵以攻宋、不至數月、而

宋可舉、舉宋而東指、則泗上十二諸侯、盡王之有也、

【字釋】【關=天下之匈】……關は、閉つるなり、匈は、胸と通ず、常山をもて天下の背中とすれば、衝及び陽晉は、天下の胸に當たりて、秦、晉、齊、楚の通路なり、秦の兵此の地を足溜まりとすれば、天下の胸を閉ぢ塞ぎて、他國の運動を妨ぐるなり、【十二諸侯】……鄒、魯の類なり、

【講義】若し秦と楚と合體して、秦は、甲兵を押し下して、衛及び陽晉を攻めば、數箇月以内に、宋を丸取りにせらるゝならむ、其の時、大王には、全國の兵を殘らず繰り出して、宋を攻めたまはゞ、數箇月以内に、宋を丸取りにしたる上にて、東を指して、進擊したまはゞ、泗水の近邊の十二箇國の諸侯は、殘らず大王の所有となるべし、

凡天下而以信約從親相堅者蘇秦、封武安君、相燕、卽陰與燕王謀伐破齊而分其地、乃詳有罪、出走入齊、齊王因受而相之、居二年而覺、齊王大怒、車裂蘇秦於市、夫以一詐僞之蘇秦、而欲經營天下、混一諸侯、其不可成亦明矣、

【詳】……倖に同じ、詐るなり、

【講義】凡そ天下の中に於て、信義約束合從親睦といふ名目をもて、列國の交際を互に堅固にせしめたる者は、蘇秦なり、其の蘇秦は、燕に於ては、武安君に封ぜられ、燕に於ては、宰相となりぬ、卽ち内々にて、燕王・齊を伐ち破りて、其の地を取りて、燕王と共に、之れを分配せむとを相談して、詐りて罪を燕に得たる眞似をして、其の國を掛け落ちして、齊の國へ入り込みしに、齊王其の儘受け入れて、之れを宰相とせり、其の後、二箇年經立ちて、燕の廻し者なること露顯せしかば、齊王大に怒りて、蘇秦を市中に車裂きにせり、全體、一人の詐僞反覆の蘇秦の力をもて、天下を混一せむと思へるは、其の事の成るべからざることも亦明白なり、

今秦與楚接境壤界、固形親之國也、大王誠能聽臣、臣請使秦太子入質於楚、楚太子入質於秦、請以秦女爲大王箕箒之妾、效萬室之都、以爲湯沐之邑、長爲昆弟之國、終身無相攻伐、臣以爲計無便於此者、

【形勢】……地形鄰り合ひて、其の勢ひ親むべきなり、【箕箒之妾】……解は、前に見えたり、【湯沐之邑】……其の租稅をもて湯殿の入用に供する邑なり、

臣は、秦と楚とは、地續きなれば、言ふまでもなく、地形鄰り合ひて、其の勢ひ親むべき國柄なり、大王誠に能く臣が說を聽き納れたまはゞ、大王の御聽元の女中とし、家數の萬軒もある秦の一都府を進上して、大王の御湯殿の入用に供する邑とし、永代兄弟の國となりて、生涯互に攻め伐つことなからむことを請ふ、臣は、大王の爲めに計るに、此れより便利なることなからむと存ずるなり」と、以上、張儀の言葉なり、

於是楚王已得張儀、而重出黔中地、與秦、欲許之、屈原曰、前大王見欺於張儀、張儀至、臣以爲大王烹之、今縱弗忍殺之、又聽其邪說、不可、懷王曰、許儀而得黔中、美利也、後而倍之、不可、故卒許張儀、與秦親、

【倍而倍之】……一旦許諾したる後に、其の約束に背くなり、

【講義】是に於て、楚王は、已に欺み過りに張儀を手に入れたれど、其の代はりに、黔中の地を差し出して、秦に與へむことを長れ惜りたれば、彼れ此れの都合上より、張儀の勸めを許諾せむと思ひしに、屈原の曰はく「先頃、大王には、張儀に欺かれたまひしことなれば、張儀此の國に到著せば、臣は、大王には、之れを烹殺したまふならむと思ひたり、只今、たとひ之れを殺し兼ねたまふとも、一旦欺かれたる上に、又其の邪曲なる說を聽き納れたまはゞ、宜しからざらむ」と、懷王の曰はく、「張儀の勸めを許諾したる後に、其の約束に背かば、宜しからざらむ」と、懷王は、此の譯けを以て、遂に張儀の勸めを許諾して、秦と和親を結びたり、

張儀去、楚、因遂之韓、說韓王曰、韓地險惡山居、五穀所生、非菽而麥、民之食、大抵飯菽藿羹、一歲不收、民不饜糟糠、地不過九百里、無二歲之食、料大王之卒、悉之不過三十萬、而所徒負養在其中矣、除守徼亭鄣塞、見卒不過二十萬而已矣、

【菽】……豆なり、【飯菽】……菽飯の倒字にて、豆の飯なり、【藿羹】……藿の汁物なり、【饜】……飽き、塞なり、【徼】……徼も、塞なり、【徒】……雜役に供する小者なり、【負養】……品物を負擔し、煮燒きをする者なり、【徼】……徼も、塞なり、徼は、もと見廻ることなり、國境には、士卒の巡邏する者ふるが故に、其の見張り

所を徵といふ、【亭】……解は、前に見えたり、【鄆】……解は、前に見えたり、【見卒】……現在の士卒なり、

【大意】張儀は、是れにて、地を立ち去りて、其の序いでをもて、遂に韓へ往きて、韓王に說きて曰はく、「韓の地は、險隘にして、平坦の處少なく、人民は、山中に住居し、土地に生ずる五穀の品は、豆にあらねば、麥ばかりなり、人民の食料は、大抵豆の飯、藜の汁物にして、殊の外粗食なるが上に、一年之れを取り入れざれば、人民は、酒の粕、米の糠にだにも飽き足ることを得ざるなり、土地の廣さは、九百里四方に過ぎずして、二箇年分の食料の用意なし、其の國柄の善からぬことは、此の通りなるが上に、又軍備に就きて、大王の士卒の數を料り見るに、全國の兵を殘らず寄せても、三十萬人に過ぎずして、雜役に供する者、物を負擔し、煮燒きをする者まで、其の中に在り、徵、亭、鄆、塞の要處ところを守れる者を差し引かば、見在の士卒は、二十萬人に過ぎざらむ、

【文法】郢以說の曰はく、語間接をもて勝されりと、

秦帶甲百餘萬、車千乘、騎萬匹、虎賁之士、跿跔科頭、貫頤奮戟者、至不可勝計、秦馬之良、戎兵之衆、探前趹後、蹄閒三尋、騰者、不可勝數、

【註解】【跿跔】……素足なり、【科頭】……兜を著けぬなり、【貫頤奮戟】……敵に射られて、頤を貫かれても、少しもひるまず、戟を奮ひて、敵陣に亂入するなり、【探前趹後】……馬の前足は、前へ向ひて、地を探るが如く、跡足は、跡へ返りて、地を掘り返すが如きなり、馬の走る勢ひの疾きままをいふ、【蹄閒三尋騰者】……尋は、八尺なれば、三尋は、二丈四尺なり、騰は、躍り越ゆるなり、前足と跡足との間の一足に躍り越ゆる距離の二丈四尺ばかりなる者なり、是れも、馬の走る勢ひの疾きままをいふ、

【講義】韓の兵制なるに引き換へて、秦の軍備の盛んなることは、甲冑を著用したる者は、百餘萬人あり、兵車は千輛、騎馬は一萬匹あり、虎の奔るが如き勇士と、素足にて、兜を著けず、敵に射られて、頤を貫かれても、少しもひるまず、戟を奮ひて、敵陣に亂入する猛武者とは、勘定の仕切れぬ程に多し、且つ秦の馬は、甚だ良く、戎兵は、甚だ衆くして、其の馬の走る勢ひの疾きこと、前足は、前へ向ひて、地を探るが如く、跡足は、跡へ返りて、地を掘り返すが如く、前足と跡足との蹄の一足に躍り越ゆる距離の二丈四尺ばかりなる者も、勘定の仕切れぬ程に多し、

山東之士、被甲蒙冑以會戰、秦人捐甲徒裼以趨敵、左挈人頭、右挾生虜、夫秦卒與山東之卒、猶孟賁之與怯夫、以重力相壓、猶烏獲之與嬰兒、夫戰孟賁、烏獲之士、以攻不服之弱國、無異垂千鈞之重於鳥卵之上、必無幸矣、

【註解】【被甲蒙冑】……合戰するなり、【徒裼】……素足肌ぬぎなるなり、【挈】……提げるなり、【孟賁】……昔の勇士なり、【怯夫】……臆病者なり、【烏獲】……昔の勇士なり、【嬰兒】……小兒なり、【鈞】……三十斤を鈞といふ、

【講義】華山より東の方の列國の士は、勇氣乏しきが故に、身の用心をして、甲冑を著用して合戰すれど、秦の國の人は、勇氣盛んなるが故に、甲冑を棄てゝ、素足肌ぬぎになりて、敵軍へ駈け向ひ、左の手には、人の生首を提げ、右の小脇には、生け捕り人を掻い込みて、鬼神の如く働けり、全體、秦の兵卒と、華山より東の方の列國の兵卒との强弱を比ぶるときは、昔の勇士の孟賁と臆病者とを掛け合はせたらむが如し、又其の重き力をもて、互に壓し合ふことを比ぶるときは、昔の勇士の烏獲と小兒とを掛け合はせたらむが如し、全體、孟賁、烏獲の如き秦の勇士を暇はしめて、服從せざる弱國を攻むるは、千鈞の目方の物を持ち來りて、鳥の卵の上に垂れ下すに異なることなければ、屹度列國の幸福なることなかるべし、

【文法】郢以說の曰はく、語其れ壯にして氣あり、亦色彩あり、亦風度ありと、

夫羣臣諸侯、不料地之寡、而聽從人之甘言好辭、比周以相飾也、皆奮曰、聽吾計、可以彊霸天下、夫不顧社稷之長利、而聽須臾之說、註誤人主、無過此者、

【註解】【比周】……馴れ合ふなり、【須臾之說】……暫時眼前の浮說なり、【註誤】……註も、誤まるなり、

【講義】全體、列國の羣臣、及び其の主君なる諸侯達は、己れの土地の小さく少なきことをも考へ料らずして、宰りに合從の說を主張する役人の甘き言葉、都合好き言葉を聽き納るゝが故に、從人共は羣臣と馴れ合ひて、互に虛飾を事として、皆勇み奮ひて曰はく、『吾が計策を聽き納れて、合從親睦するときは、其の國强くなりて、天下の諸侯の旗頭とならむ』と、全體、社稷國家の長久永遠の利益を顧み思はずして、暫時眼前の浮說を聽き納るゝは、愚なることなり、人主の觀聽を誤まりて、國家を害するは、此れに過ぎたる者なし、

大王不事秦、秦下甲據宜陽、斷韓之上地、東取成皐滎陽、則鴻臺之宮、桑林之苑、非王之有也、夫塞成皐、絕上地、則王之國分矣、先事秦則安、不事秦則危、夫造禍而求其福報、計淺而怨深、逆秦而順楚、雖欲毋亡、不可得也、

【講義】大王秦に事へたまはずば、秦は、甲兵を押し下して、宜陽を足溜まりとして、韓の上地の通路を絶ち切り、東の方成皋と宜陽とを取らむ、さらば、鴻臺の宮殿も、桑林の苑囿も、大王の所有にあらずして、秦の手に落ちむ、夫れ成皋を塞ぎ止め、上地を絶ち切らば、大王の國は、二つに分かれむ、大王諸國に先立ちて、秦に事へたまはゞ、安泰にして、秦より受くる禍害を遁れ免さながら、其の幸福なる報いあらむことを望み求むるは、其の計策は、淺近にして、秦の怨みは、益〻深くなる譯けなり、大王秦の心に逆らひて、楚の意に順ひたまはゞ、滅亡することなからんと思ひたまふとも、得られざらむ、

故爲大王計、莫如爲秦、秦之所欲、莫如弱楚、而能弱楚者、莫如韓、非以韓能彊於楚也、其地勢然也、今王西面而事秦以攻楚、秦王必喜、夫攻楚以利其地、轉禍而說秦、計無便於此者、韓王聽儀計、

【講義】されば、大王の爲めに計るに、楚の爲めにしたまはずして、秦の爲めにしたまふに增したることなし、秦の常に望み欲して居ることは、楚を弱めむとするに增したることなし、而して、列國の諸侯の中にて、能く楚を弱めむ者は、韓に增したるものなし、是れ韓の能く楚よりも强き所故に之れを弱めらるべき譯けにてはなく、其の土地の形勢の、楚を弱むるに最も都合よきをもて、然るなり、只今、大王には、西へ向ひて、秦に事へて、楚を攻めたまはゞ、秦王必ず喜ばむ、全體、楚を攻めて、其の地を取りて、韓の利益とし、秦より受くる禍害を轉じて、楚へ押し付けて、秦王を滿足せしむといふことは、大王の爲めに計るに、此れより便利なることなからむ」と、以上、張儀の言葉なり、韓王遂に張儀の計策を聽き納れて、楚と絶交して、秦に事へむと決心せり、

張儀歸報、秦惠王封儀五邑、號曰武信君、

【講義】張儀秦へ立ち歸りて、楚王をも首尾よく說き伏せたることを言上せしかば、秦の惠王其の手柄を譽めて、張儀を五箇所の邑に封じて、武信君といふ號を與へたり、

使張儀東說齊湣王、曰、天下彊國、無過齊者、大臣父兄、殷衆富樂、然而爲大王計者、皆爲一時之說、不顧百世之利、從人說大王者、必曰、齊西有彊趙、南有韓與梁、齊負海之國也、地廣民衆、兵彊士勇、雖有百秦、將無奈齊何、大王賢其說、而不計其實、夫從人朋黨比周、莫不以從爲可、

【講義】さて、秦王は、張儀をして、東の方齊の湣王に說かしめて曰はく、「天下中にて强き國は、齊に越え過ぎたる者なし、朝廷の大臣、一門の父兄、殷盛衆多にして、富貴安樂なり、さりながら、大王の爲めに、國家の利害を計る者は、皆一時眼前の浮說を述べ立てゝ、百世永久の利益を顧み思はざるなり、彼の合從を主張する從人の大王に說く者は、必ず曰、齊は、西の方には、强き趙あり、南の方には、韓と梁即ち魏とありて、西南の固めとなり、其の背後には、東海を負へる、要害無雙の國柄なり、土地は廣く、人民は衆く、兵卒は强く、將士は勇めば、たとひ百の秦ありといふとも、齊を如何樣にもせらるゝことなからむ、況して一つの秦の如きは、毛頭掛念したまふに及ぶまじ』と申すならむ、大王は、其の說を賢明なりと思ひたまひて、其の實際を考へ計りたまはざらむ、全體、合從の說を主張する從人は、仲間を組みて、馴れ合ひて、合從をもて宜しきことゝせぬ者はなけれども、是れ皆貴國の寄物なり、

臣聞之、齊與魯三戰、而魯三勝、國以危亾隨其後、雖有戰勝之名、而有亡國之實、是何也、齊大而魯小也、今秦之與齊也、猶齊之與魯也、秦、趙戰於河、漳之上、再戰而趙再勝、秦、戰於番吾之下、再戰又勝、秦、四戰之後、趙之亡卒數十萬、邯鄲僅存、雖有戰勝之名、而國已破矣、是何也、秦彊而趙弱、

【講義】臣が兼ねゝ聞き及びたるには、先年、齊と魯と三たび戰ひて、魯は三たび勝ちたれど、其の國は、此の戰爭にて疲弊して、危くなりて、亡びむとすること、其の跡に附き纏ひたれば、戰爭には勝てりといへる名聞ありといへども、然れども、亡國の事實ありとなり、是れは如何なる譯けなるか、齊は、大國なれば、戰爭には負けても、猶ほ十分の餘力あり、魯は、小國なれば、戰爭には勝ちても、跡を支ふること能はざればなり、今秦と齊とを比ぶれば、齊と魯との如き釣り合ひになるなり、先年、秦と趙と河水、漳水の近邊にて戰ひて、再び戰ひて、趙は再び秦に勝ち、趙の邑なる番吾の城下に戰ひて、再び戰ひて、又秦に勝ちたれど、此の四度の戰爭の後に、趙の兵卒の死亡せる者、數十萬人に及びて、邯鄲の都のみ、僅に存在したれば、戰爭には勝てりといへる名聞ありといへども、國は已に破壞せり、是れは如何なる譯けなるか、秦は、强國なれば、戰爭には負けても、猶ほ十分の餘力あり、趙は、弱國なれば、戰爭には勝ちても、跡を支ふること能はざればなり、此の譯けなれば、齊は、國より秦に敵すること能はざるのみならず、趙といへども、恃むには足らざるなり、

今秦、楚嫁女娶婦、爲昆弟之國、韓獻宜陽、梁效河外、趙入朝澠池、割河間以事秦、大王不事秦、秦驅韓、梁、攻齊之南地、悉趙兵、渡清河、指博

關、臨菑、卽墨、非王之有也、國一日見攻、雖欲事秦、不可得也、是故願大王孰計之也、

【語釋】今、秦王は、娘を楚王に縁付け、楚王は、秦王の娘を貰ひ受けて、兄弟の親みを結べる國となり、韓は、宜陽の地を秦に獻上し、梁卽ち魏は、河外の地を秦に差し出し、趙王は、自ら秦の國へ入りて、澠池の御殿へ參朝し、且つは、河間の邑を割き與へて、秦に事へたれば、大王秦に事へたまはずば、秦は、韓と梁との軍勢を驅り立てゝ、齊の南の土地を攻めしめ、趙の兵隊を殘らず繰り出さしめて、清河を渡りて、博關を目指して、押し寄せしめば、齊の都の臨菑、及び卽墨の地は、忽ち攻め取られて、大王の所有にあらざらむ、若し齊の國、一日たりとも、秦に攻められたらむには、其の後になりて、秦に事へたゝ思ひたまふとも、最早手後れになりて、事ふることを得られざらむ、此の譯けなれば、願はくは大王の能くこれを考へ計りたまはむことを」と、以上、張儀の言葉なり、

齊王曰、齊僻陋、隱居東海之上、未嘗聞社稷之長利也、乃許張儀、

【語釋】齊王これを聞きて曰はく、「我が齊は、僻遠固陋の國にして、東海の最寄りに隱れ居て、世間の事情に疎ければ、未だ一度も社稷國家の長久なる利益を聞かざるなり、今日始めて高論を聞きて、孫の外感心せり」と、是れにて、張儀の勸めを許諾して、秦に事へむと決心せり、

張儀去、西說趙王曰、敝邑秦王使臣效愚計於大王、大王收率天下以賓秦、秦兵不敢出函谷關十五年、大王之威行於山東、敝邑恐懼懾伏、繕甲厲兵、飾車騎、習馳射、力田積粟、守四封之內、愁居懾處、不敢動搖、唯大王有意督過之也、

【語釋】【敝邑】……僻邑に同じ、秦の國を謙遜したる言葉なり、【賓】……擯に同じ、【懾伏】……氣を落として、屈伏するなり、【厲兵】……刃物を礪ぐなり、【四封】……四方の封境なり、【督過】……正し咎むるなり、

【語釋】張儀は、是れにて、齊を立ち去りて、西の方趙へ往きて、趙王に說きて曰はく、「敝邑の秦王、臣をして、愚昧なる計策を大王に獻上せしむ、何卒聽き納れたまはむことを請ふ、大王には、合從の盟主となりて、天下の諸侯を手に附けて、其の軍勢を引き連れて、秦を攻撃したまへば、秦の兵は、押し切りて、函谷關を出でざること、十五箇年に及びたり、大王の權威は、華山より東の方に行はれて、皆其の號令指揮に從へば、敝邑にては、恐れ入りて、氣を落として、屈伏して、己れの國の用心こそ肝要なれとて、甲冑を纏ひ、刃物を礪ぎ、兵車騎馬を飾り、馬を馳せ、弓を射ることを習はし、田地の耕作を骨折りて、兵糧の籾米を積み蓄へ、四方の封境の內を守りて、日夜心緊して居り、氣を落として處りて、押し切りて事を起こして、動搖せざるは、唯だ大王の秦の過失を正し咎めたまはむとする御意あらむことを氣遣ひてなり、

今以大王之力、舉巴、蜀、幷漢中、包兩周、遷九鼎、守白馬之津、秦雖僻遠、而心忿含怒之日久矣、今秦有敝甲凋兵、軍於澠池、願渡河踰漳、據番吾、會邯鄲之下、願以甲子合戰、以正殷紂之事、敬使使臣先聞左右、

【語釋】【大王之力】……大王の御陰なり、

【語釋】今、秦は、貴國を長れて、軍備を勵みたる故に、大王の御陰にて、兵力も十分に整ひて、巴、蜀を先取りにし、漢中を併呑し、東西兩周を中に取り込みて、世々の天子の寶物なる九鼎を遷して、秦へ持ち込み、白馬の津を守りたり、秦は、僻遠の田舍者なりといへども、然れども、大王の盟主となりて我れを擯斥したまふことを心の中に不滿に思ひて、怒りを含み蓄ふること、一朝一夕のことにあらず、今、秦は、破損せの邯鄲の下に會合せむことを、且つ願はくば、甲子の日をもて合戰せむことを、それに就きて、敬みて使節の臣をして、先づ大王の左右の近臣まで、其の趣きを言上せしむ、正さむことを、

凡大王之所信爲從者、恃蘇秦、蘇秦熒惑諸侯、以是爲非、以非爲是、欲反齊國、而自令車裂於市、夫天下之不可一亦明矣、

【語釋】【熒惑】……眩惑するなり、

【語釋】凡そ大王の合從することを信用して斷行したまへるは、蘇秦の說を恃みたまへばなり、蘇秦は、實に詐僞反覆の者にして、天下の諸侯を眩惑して、道理の是なることを非なりとし、道理の非なることを是なりとし、燕の廻し者となりて、齊の國へ入り込みて、齊王を瞞著して、其の國にて、謀反せむと思ひて、露顯して、遂に自ら其の身を市街に於て車裂きにせしめたり、蘇秦の如き所爲を見れば、全體、天下の諸侯の一致合體せられぬことも亦明白なり、

今楚與秦爲昆弟之國、而韓、梁稱爲東藩之臣、齊獻魚鹽之地、此斷趙之右臂也、夫斷右臂而與人鬬、失其黨而孤居、求欲毋危、豈可得乎、

【魚鹽之地】……齊は、東海の濱邊に在りて、魚と鹽との利益を專有せるが故に、魚鹽の地といふ、

【大意】今、楚と秦とは、緣組みをして、兄弟の親みある國となり、韓と梁卽ち魏とは、自ら稱して、秦の東方の藩屏の臣下となり、齊は、魚と鹽との利益ある土地を秦に獻上せり、此の國々は、皆趙の片腕と恃まれたる者なるに、今、此のやうに、殘らず秦に從ひたる上は、此れ趙の右の臂を絕ち切りたるなり、全體、己れの恃みとする右の臂を絕ち切られて、人と鬪爭し、己れの仲間を失ひて、孤立獨處の加勢なき身となりむには、危險なることなからまゝ思ふとも、いかでか危險なることなきことを得られむ、

今秦發三將軍、其一軍塞午道、告齊、使興師渡清河、軍於邯鄲之東、一軍軍成皐、驅韓、梁、軍於河外、一軍軍於澠池、約四國爲一以攻趙、趙服必四分其地、是故不敢匿意隱情、先以聞於左右、

【四國】……齊、韓、梁、秦の四箇國なり、

【大意】今、秦は、三人の將軍を差し向けて、其の一軍は、趙の東、齊の西なる午道を塞ぎ止めて、兩國の交通を絕ち切り、齊に告げて、其の軍勢を繰り出して、清河を渡りて、大王の都の邯鄲の東の方に陣取らしめ、他の一軍は、成皐に陣取りて、韓と梁との軍勢を驅り立てゝ、河外に陣取らしめ、又他の一軍は、澠池に陣取りて、此の齊、韓、梁、秦の四箇國、約束して一團となりて、趙を攻めむとす、趙降參せば、屹度其の地を四つ分けにして、銘々の所領とせむと決定せり、此の謀けなれば、强ひて意を匿し情を隱さず、實際の計畫を打ち明けて、先づ大王の左右の近臣まで言上す、

臣竊爲大王計、莫如與秦王遇於澠池、面相見而口相結、請案兵無攻、願大王之定計、

【案兵】……兵隊を押へ置くなり、

【大意】秦の手管は、此のやうに整ひたれば、貴國は、所詮秦に敵すること叶ふまじ、臣は、內々大王の爲めに計るに、此の大難を免れたしと思ひたまはゝ、大王には、早く秦王と澠池に出逢ひて、直接に面會して、親しく話し合ひて、後來の約束を互に結びたまふに如くことなからむ、然らば、臣は、兵隊を押へ置きて、貴國を攻むることなからむことを請ふ、願はくは、大王には、秦に敵して攻められむか、秦に事へて攻められざらむか、疑れなりとも、御都合次第に、計策を取り極めたまはむことを」と、以上、張儀の言葉なり、

【大意】趙王の曰はく、大國の中にて、趙の最も强きは、蓋し武靈王の時に在り、故に、後之れに敬きて、秦に事へしめむとするに、頗る心を變やし、辭を費やし、抑揚頓挫して、甚だ機鋒あり、蘇秦の所謂る猶疑虛喝恰の六字、俱に此に於て之れを見るべし、

趙王曰、先王之時、奉陽君專權擅勢、蔽欺先王、獨擅綰事、寡人居屬師傅、不與國謀計、先王弃群臣、寡人年幼、奉祀之日新、心固竊疑焉、以爲一從不事秦、非國之長利也、乃且願變心易慮、割地謝前過、以事秦、方將約車趨行、適聞使者之明詔、趙王許張儀、

【綰事】【綰事】……物事を締め括るなり、【屬師傅】……師範役、守り役の手に附くなり、【奉祀】……先王の祭祀を執り行ふなり、【弃群臣】……寵臣を見棄つるなり、死ぬることを遠廻しにいふ言葉なり、【一從】……諸侯の一致合從するなり、【約車】……馬を車に繫ぐなり、【趨】……趨に同じ、速になり、【適】……丁度なり、【明詔】……明瞭なる教訓なり、

【大意】趙王張儀に感し付けられて、肝玉を拔かれて、忽ち下手に出でゝ曰はく、「我が先王の在世の時には、身內の奉陽君權威を專らにし、勢力を自侯にして、先王の聰明を蔽ひ、先王の視聽を欺きて、獨り自儘に物事を締め括りたれば、善きも惡しきも、奉陽君次第なりき、其の頃、拙者は、朝夕、師範役、守り役の手に附きて、學問修業をするばかりにて、國家の謀議計策に關係せざりき、其の後、先王羣臣を見棄てゝ、世を去りたれば、拙者は、幼年にて、跡目に立ちて、先王の祭祀を執り行ふ時日も淺く、新たなれば、世間の事を知らぬなり、さりながら、心の中には、言ふまでもなく、內々にて疑ひて思へらく、諸侯の一致合從して秦に事へざるは、國家の長久なる利益にあらざらむと、それに就きては、先づ秦に抵抗せる思慮分別を取り變へて、土地を割き與へて、前日までの心得違ひを打ち詫びて、秦に事へたしと決心して、用意の馬を手車に繫がせて、速に秦へ行かむと思ひたる最中に、丁度、折りよく、秦の御使者の其許の明瞭なる教訓を承りたるは、幸のことなれば、眞誠なる貴命に從はむ」と、趙王は、斯く挨拶して、張儀の勸めを許諾せり、

張儀乃去、北之燕、說燕昭王曰、大王之所親、莫如趙、昔趙襄子嘗以其姊爲代王妻、欲并代、約與代王遇於句注之塞、乃令工人作爲金斗、長其尾、令可以擊人、與代王飲、陰告廚人曰、卽酒酣樂進熱啜、反斗以擊之、於是酒酣樂進、熱啜、廚人進斟、因反斗以擊代王、殺之、王腦塗地、其姊聞之、因摩笄以自刺、故至今有摩笄之山、代王之亡、天下莫不聞、

【斗】……酒又は吸ひ物を酌み取る器なり、【尾】……柄なり、【酒酣】……酒の糟よく廻りたるなり、【熱喝】……熱さ吸ひ物なり、【酒】……酌むなり、【塗地】……地上にこぼれ出づるなり、【靡】……磨に同じ、【斧】……鑕の類なり、

【講】張儀は、是れにて、趙を立ち去りて、北の方燕の國へ往きて、燕の昭王に說きて曰はく、「大王の日頃懇意にしたまふ國は、趙に如くものなけれども、趙は、決して燕の爲めにはならぬなり、其の譯けは、昔し、趙の先代の趙襄子といふ人、前方に其の姉をもて代王の妻として、代の國を併呑せむと思ひて、代王と其の國の句注山の要害にて出逢ほむことを約束せり、其の時、兼ねて廚人に言ひ付けて、金の酒又は吸ひ物を酌み取る器を拵へさせて、其の柄の長さを人を擊ち殺さるゝ程にせしめたり、斯くて、約束の日になりて、趙襄子は、代王と出逢ひて、酒盛りをせしが、其の時、內と料理人に言ひ付けて曰はく、『若し酒の糟よく廻りて、興に入りたる時來らば、代王に熱き吸ひ物を差し出して、之れを酌み取る器の柄を振り返して、代王を擊ち殺せ』と、是に於て、酒の糟よく廻りて、興に入りたる時、手管の通り、代王に熱き吸ひ物を差し出して、料理人は、進み出でゝ、其の吸ひ物を酌み取りながら、其の器の柄を振り返して、代王を擊ちて、之れを殺したれば、代王の頭は、微塵に碎けて、其の腦味噌は、地上にこぼれ出でたり、代王の妻なる趙襄子の姉、此の顚動を聞き及びて、夫に對して申し譯けなしとや思ひけむ、頭に差したる笄を拔きすまして、自ら刺して絕命せり、されば、今に至るまで、其の地に摩笄といへる山の名までも殘りたり、代王の趙襄子の爲めに滅亡せしは、世に隱れなきことにして、天下中に聞き傳へざる者なし、

夫趙王之狼戾無親、大王之所明見、且以趙王爲可親乎、趙興兵攻燕、再圍燕都、而劫大王、大王割十城以謝、

【趙王】……武靈王なり、【狼戾】……狠の如く暴戾なるなり、按ずるに、狠は、狠の說りならむか、狠戾は、ねぢけもとるなり、

【講】趙襄子の言の事は、さておきて、今の趙王の、狠の如く暴戾にして、愛の情なきことは、大王の分明に目擊したまふことならむ、さるを、猶は且つ趙王をもて親愛にすべき人物なりとしたまふか、趙王の狠の如く暴戾にして、愛の情なしといふ譯けは、先年、趙は、軍兵を繰り出して、燕を攻めて、再び燕の都を圍みて、大王を威し付けしかば、大王は、十箇所の城を割き與へて、趙に詫び入りたまひしにあらずや、

今趙王已入朝澠池、効河間、以事秦、今大王不事秦、秦下甲雲中、九原、驅趙而攻燕、則易水、長城、非大王之有也、且今時趙之於秦、猶郡縣也、不敢妄舉師以攻伐、今王事秦、秦王必喜、趙不敢妄動、是西有彊秦之援、而南無齊、趙之患、是故願大王孰計之、

【澠池】……河南の地名、【効】……倣に同じ、【河間】……河間の地を差し出して、秦に事へたり、大王を威し付けたる趙王すら、秦には頭を下げたることなれば、今、大王秦に事へざまはずば、秦は、甲兵を雲中、九原より押し下して、趙の人數を驅り立てゝ、燕郡縣の如き姿なれば、易水、長城は、大王の所有にあらずして、秦に取らるゝならむ、しかのみならず、今の時の趙の秦に於けるは、秦の配下の如く、秦王は、乾度喜ばれむ、而して、秦は、押し切りて安りに兵を動かさゝらむ、是れ、燕は、西の方には、强大なる秦の加勢ありて、南の方には、齊と趙との心配なしといふものなり、此の譯けなれば、願はくは、大王の能く〳〵之れを考へ計りたまひて、秦に事ふることを決定したまはむことを」と、以上、張儀の言葉なり、

燕王曰、寡人蠻夷僻處、雖大男子、裁如嬰兒、言不足以采正計、今上客幸教之、請西面而事秦、獻恆山之尾五城、燕王聽儀、

【裁】……僅になり、【言不足以采正計】……戰國策には、言不足以求正、謀不足以決事に作れり、宜しきやうなり、【恆山之尾】……恆山の末なり、燕の西南に在り、

【講】燕王之れを聞きて曰はく、「拙者は、蠻夷の片田舍に居て、世間の事情に疎ければ、身は大なる男子なりといへども、心は僅に小兒の如く無知蒙昧にして、言論は正しきことを求むるに足らず、謀計は事を決するに足らざるなり、然るに、此の度、上等の客人の先生には、幸に之れを教へられたれば、始めて天下の形勢を知ることを得たり、今より、西へ向ひて、秦に事へて、我が西南の恆山の末の五箇所の城を獻上せむことを請ふ」と、燕王は、新く挨拶して、張儀の說を聽き納れたり、

儀歸報、未至咸陽、而秦惠王卒、武王立、武王自爲太子時、不說張儀、及卽位、羣臣多讒張儀曰、無信、左右賣國以取容、秦必復用之、恐爲天下笑、諸侯聞張儀有郤武王、皆畔衡復合從、

【取容】……己れの人に容れられむことを務むるなり、【有郤】……郤は、隙と通ず、中惡しきなり、

【講】張儀は、是れにて、遂に燕まで說き伏せて、六箇國の合從を破壞したれば、秦へ歸りて、其の趣きを言上せむとして、まだ咸陽の都まで到著せざる中に、秦の惠王卒去して、武王跡目に立ちたるが、武王は、太子たりし時より、張儀の所爲を滿足せざりければ、位に卽くに及びて、日頃張儀の權勢を嫉める羣臣、國君の之れを嫌へるに付け込みて、多く張儀を讒言して曰はく、「張儀は、信實なき者にて、左の國へ對しては、左の國の都合よき事を言ひ、右の國へ對しては、右の國の都合よき事を言ひて、我が秦の國を踏み臺として、他の國〻へ賣り付けて、己れの

人に容れられむことを務めたれば、秦に於て、是非とも重ねて之れを用ゐられむには、愈〻他國と内通して、秦の不利益を計りて、天下の諸侯の物笑ひとならむことを恐るゝなり」と、列國の諸侯、張儀の武王と中惡しき樣子ありと聞き及びて、皆其の强迫せられたる連衡の約束に背きて、重ねて合從して、秦に抵抗することゝなりぬ、

秦武王元年、羣臣日夜惡張儀未已、而齊讓又至、張儀懼誅、乃因謂秦武王曰、儀有愚計、願効之、王曰、奈何、對曰、爲秦社稷計者、東方有大變、然後王可以多割得地也、今聞齊王甚憎儀、儀之所在、必興師伐之、故儀願乞其不肖之身之梁、齊必興師而伐梁、梁、齊之兵、連於城下、而不能相去、王以其閒伐韓、入三川、出兵函谷、而毋伐以臨周、祭器必出、挾天子、按圖籍、此王業也、

【評論】【惡】……惡しさまに言ふなり、

【評論】秦の武王の元年に、羣臣の晝となく夜となく、張儀の事を惡しさまに言ふこと、まだ止まず、而して、齊の苦情、其の上に又到來せり、其の苦情とは、張儀嘗て曰はく、「己れの甚だ憎める者は、齊王より大なることなければ、己れも齊より惡まれたり」と、果たして其の言葉の如く、齊は、張儀の秦の武王と中惡しくなりたる由を聞き及びて、之れを任用せることを責め咎めたるなり、張儀は、武王の氣に入らぬ上に、此の如く、内外よりの攻擊を受けて、誅戮せられむことを懼れたるに因りて、一策を構へて、武王に物語りして曰はく、「己れは、大王の爲めに、愚昧なる計策を考へたることあれば、願はくは之れを進上せむことを」と、武王の曰はく、「其の計策とは何事ぞ」と、張儀對へて曰はく、「秦に取りては、華山より東の方の列國の諸侯の無事なることは宜しからず、秦の社稷國家の爲めに計らむに、東の方に大なる事變ありたる後に、其の騷動に付け込みて、仕事をせば、大王には、多く諸侯の土地を割き取りて、我が領分を廣めたまふことを得べし、今、聞き及びたるには、齊王は、甚だ己れを憎み嫌ひて、己れの居る國へは、屹度軍勢を繰り出して、之れを伐ちて、其の鬱憤を晴らさむとする由なり、されば、己れは、願はくは此の不肖なる身の暇を乞ひて、梁即ち魏の國へ往かむことを、己れ梁へ往きたらば、齊は、屹度軍勢を繰り出して、梁を伐たむ、梁と齊との兩國の兵、其の域下に連なりて、戰爭して、互に引き去ること叶はざらむには、大王には、其の透き間をもて、韓を伐ちて、三川へ押し入り、又兵を函谷關より繰り出して、伐つことなくして、穩かに周の都へ向ひ臨みたまふべし、さらば、周室歷代の天子を祭る宗廟の道具は、屹度其の手より出でゝ、大王のものとなりむ、天子を小脇に掻い込みて、天下中の土地の圖と人民金穀の籍とを取り調べて、諸侯に號令したまふは、此れ帝王の事業なり、臣が愚計は、此の如し」と、是れ張儀の經よ〻秦を切り上げて、他國へ往かむ計略を持ち掛けたるなり、

秦王以爲然、乃具革車三十乘、入儀之梁、齊果興師伐之、梁哀王恐、張儀曰、王勿患也、請令罷齊兵、乃使其舍人馮喜之楚、借使之齊、謂齊王曰、王甚憎張儀、雖然亦厚矣、王之託儀於秦也、

【評論】【革車】……兵車なり、革にて作るが故に、革車といふ、「入儀之梁」……一本には、「令儀之梁」に作れり、從ふべし、「借使」……楚の使ひの用事を借用するなり、

【評論】秦王張儀に誘著せられたることを知らずして、其の說を尤なりと思ひて、警固の爲めに、三十輛の兵車を連れさせて、張儀を梁へ往かしめしに、齊は、張儀の說の如く、果たして軍勢を繰り出さて、梁を伐たしめたれば、梁の哀王恐怖せしに、張儀の曰はく、「大王には、心配したまふことなかれ、何卒臣が計らひて、齊の兵の梁を伐つことを留めさせむことを請ふ」と、是に於て、張儀は、己れの舍人の馮喜といふ者を楚の國へ往かしめて、楚の使ひの用事を借用せしめて、楚の使者の振りをして、齊の國へ往かしめて、齊王に物語らせて曰はく、「大王には、甚だ張儀を憎み嫌ひたまへり、さりながら、大王の張儀を秦に委託して、彼れを安心せしめられたることも、亦御手厚しと思はるゝなり」と、

齊王曰、寡人憎儀、儀之所在、必興師伐之、何以託儀、對曰、是乃王之託儀也、夫儀之出也、固與秦王約曰、爲王計者、東方有大變、然後王可以多割得地、今齊王甚憎儀、儀之所在、必興師伐之、故儀願乞其不肖之身之梁、齊必興師伐之、齊、梁之兵、連於城下、而不能相去、王以其閒伐韓、入三川、出兵函谷、而無伐以臨周、祭器必出、挾天子、案圖籍、此王業也、秦王以爲然、故具革車三十乘而入之梁也、今儀入梁、王果伐之、是王內罷國、而外伐與國、廣鄰敵、以內自臨、而信儀於秦王也、此臣之所謂託

たるなり、

儀也、齊王曰、善乃使解兵、

【文脈】【組】……疲らするなり、【內自臨】……己れの方より自ら仕向くるなり、

【語釋】齊王之れを聞きて曰はく、「拙者は、張儀を憎み嫌ひたれば、張儀の居る國へは、屹度軍勢を繰り出して、之れを伐ちて、其の鬱憤を晴らさむとせり、何をもて、張儀を秦に委託して、彼れを安心せしめたることあらむ」と、馮喜對へて曰はく、「張儀の居る國へは、屹度軍勢を繰り出して、之れを伐ちたまへるは、大王の張儀を秦に委託して、彼れを安心せしめたまへる仕方なり、其の暇は、全體、張儀の秦の國を立ち出づるとき、固より秦王と約束せることあるなり、其の約束せる言葉に曰はく、『大王の爲めに計らむに、東の方に大なる害患ありたる後に、其の騷動に付け込みて、仕事をせば、大王には、多く隣侯の土地を割き取りて、之れを伐ちて、其の鬱憤を晴らさむとする由なり、されば、已れ齊王は、甚だ已れを憎み嫌ひて、已れの居る國へは、屹度軍勢を繰り出して、其の鬱憤を晴らさむとする由なり、されば、已れは、韓とは、此の不肖なる身の暇を乞ひて、梁の國へ往きたらば、齊は、屹度軍勢を繰り出して、梁を伐たむ、齊と韓との兩國の兵、其の城下に連なりて、戰爭して、互に引き去ることを、已れ入り、又兵を函谷關より繰り出して、伐つことなくして、靡かに周の都へ向ひ臨みたまふべし、さらば、周室歷代の天子を祭る宗廟の道具は、屹度其の手より出でゝ、大王のものとならむ、天子を小脇に掻い込みて、天下中の土地の圖と人民金穀の簿とを取り調べて、諸侯に號令したまふは、此れ帝王の事業なり』と、秦王之れを尤なりと思ひて、警固の爲めに、三十輛の兵車を連れさせて、張儀を梁へ入らしめたり、張儀は、かやうに秦王と約束して、今、梁へ入りたるに、大王には、其の暇の如く、果たして梁を伐ちたまへるは、是れ大王には、內は國力を疲らし、外は仲間の國を伐ちて、鄰國の敵を廣め勝し、已れの方より自ら仕向けて、張儀の秦王ゝ約束したる通りになりて、張儀を秦王に信用せしめらるゝなり、此れ臣が只今申したる張儀を秦王に委託して、彼れを安心せしめたまへる仕方なり」と、齊王之れを聞きて、感心して曰はく、「至極尤なり」と、是に於て、梁へ差し向けたる人數を引き揚げて、其の戰爭を止めさせたり、

【文脈】許應元の曰はく、術の術は、固より從の術に勝さらず、而れども、文は佳なり、此の一段尤も佳なりと、○王鏊槙の曰はく、文意軍說するは、最も醜し、惟ゝ莊子を然りとす、文ぎは圓潤なりと、

張儀相魏一歲、卒於魏也、

【語釋】其の後、張儀は、魏の宰相たること一箇年にして、魏の國にて卒去しき、

【文脈】王鏊槙の曰はく、張儀の六國に說けるを論るに、其の說辭さらず、卒に相をもて終はりぬ、初めに所謂る舌尙は存ずる者、頗むことありきと、

陳軫者、游說之士、與張儀俱事秦惠王、皆貴重爭寵、張儀惡陳軫於秦王、曰、軫重幣輕使秦、楚之閒、將爲國交也、今楚不加善於秦、而善軫者、軫自爲厚而爲王薄也、且軫欲去秦而之楚、王胡不聽乎、

【語釋】【重幣輕使】……手重き進物を持ちて、手輕に出でゝ使ひするなり、

【語釋】陳軫は、蘇秦、張儀の類と同じく、言論をもて時の人主に取り入りたる游說の士なり、張儀と俱に秦の惠王に事へたり、張儀、陳軫の事を秦王に愬しまさに言ひて曰はく、「陳軫が、秦の國と楚の國との間に、重んぜられて、我れ劣らじと惠王の寵愛を爭ひたり、張儀、陳軫の事を秦王に愬しまさに言ひて曰はく、「陳軫が、秦の國と楚の國との間に、手重き進物を持ちて、人馬を多く連れずして、手輕に出でゝ使ひせしは、秦の國の爲めに、楚の國と交はらむか爲めなり、然るに、今、楚は秦と中等きことを增し加へずして、楚王の陳軫と中善くなりたるは、陳軫が、自分の爲めにすること手厚く、行き屆きて、大王の爲めにすること手薄く、行き屆かざればなり、しかのみならず、陳軫は、秦を立ち退きて、楚へ往きたしと思へり、大王には、何とて彼れが望みを聽き屆けたまはぬか」と、

【文脈】淺稚陸の曰はく、起首に邑里を敍せずして、直ちに游說の士といへるは、戾癩、唐顧、李牧の諸傳を敍せる首句と同じ、此れ又一例なりと、○陳仁錫の曰はく、軫、衍の二傳にも、仍は張儀の事をもて合敍せりと、

王謂陳軫曰、吾聞子欲去秦之楚、有之乎、軫曰、然、王曰、儀之言果信矣、軫曰、非獨儀知之也、行道之士、盡知之矣、

【語釋】秦王張儀の讒言を聞きて、陳軫に物語りして曰はく、「吾れは、御身が、秦を立ち去りて、楚へ往きたしと思へる由を聞き及びたるが、左樣の所存ありや」と、陳軫の曰はく、「さなり」と、秦王の曰はく、「其の事は、實は張儀より聞き及びたることなるが、御身の對へに據るときは、張儀の言葉は、果たして信實なり」と、陳軫の曰はく、「此の事は、張儀のみ獨り之れを承知せるにはあらざるなり、臣とは何の交際もなき、道路を通行する士までも、殘らず之れを承知せり、

昔子胥忠於其君、而天下爭以爲臣、曾參孝於其親、而天下願以爲子、故賣僕妾、不出閭巷而售者、良僕妾也、出婦嫁於鄉曲者、良婦也、今軫不忠於其君、楚亦何以軫爲忠乎、忠且見棄、軫不之楚、何歸乎、王以其言爲然、遂善待之、

【語釋】【售】……賣り付くるなり、

【語釋】昔し、伍子胥は、其の君に忠義なりければ、天下中の君達は、皆我れ後れじと、先を爭ひて、伍子胥を己れの臣としたく思ひき、又曾參は、

其の親に孝行なりければ、天下中の親達は、皆我れ後れじと、先を爭ひて、曾參を我が子としたく思ひきとぞ、されば、下男下女を人に賣りて、奉公せしめむとするに、其の村里を出でずして、近所近邊にて、早速に賣り付けらるゝ者は、日頃誠實に働きたる真き下男下女なればなり、又一旦人より離縁せられたる婦人の、再縁を求めて、直ちに其の土地にて貰ひ手のある者は、其の離縁せられたるは、先方の無理なることにて、當人には、少しも過失なきのみならず、夫の爲めにも、家の爲めにもなる、真き婦人なればなり、今、己れも、其の君に忠義ならざらむには、楚も亦何とて己れをもて忠義なりとして、召し抱へられむとするは、大王に忠義を盡くしたればなり、斯く大王に忠義を盡くしながら、遠からず、見棄てられむとすることなれば、己れは、楚の國へ往かずして、何方へ身を寄すべき」と、以上、陳軫の言葉なり、秦王其の言葉を尤なりと思ひて、遂に之れを手厚く待遇せしかば、張儀の讒言は、一時立ち消えとなりぬ、

文注 孫曠の曰はく、牧語最も醒且つ健にして勢ひありと、

居秦期年、秦惠王終相張儀、而陳軫奔楚、楚未之重也、而使陳軫使於秦、過梁欲見犀首、犀首謝弗見、軫曰、吾爲事來、公不見軫、軫將行、不得待異日、

字釋 【爲事】……犀首に仕事を敎へむが爲めなり、

講義 陳軫の秦の優待を受けて、其の國に留まり居ること、滿一箇年經立ちたるに、秦の惠王、終に張儀を宰相とせしかば、陳軫遂に楚の國へ出奔せり、楚の國にては、陳軫を召し抱へたれど、まだ之れを貴重せずして、森の國へ使ひに遣りたれば、陳軫は、梁即ち魏の國を過り過ぎて、犀首の公孫衍に面會せむと思ひしに、犀首は、今日は逢ひ難しとて、取り次ぎの者をして、面會を斷らせたれば、陳軫の曰はく、「吾れは、貴公に仕事を敎へむが爲めに來れり、然るに、貴公己れに面會せられずば、己れ今より立ち去らむ、後日を待ちて、告ぐることを得ず」と、

犀首見之、陳軫曰、公何好飲也、犀首曰、無事也、曰、吾請令公饜事、可乎、曰、奈何、曰、田需約諸侯從親、楚王疑之、未信也、公謂於王曰、臣與燕、趙之王有故、數使人來曰、無事何不相見、願謁行於王、王雖許公、公請毋多車、以車三十乘、可陳之於庭、明言之燕、趙、

字釋 【謁】……告ぐるなり、暇を請ふなり、

講義 犀首取り次ぎの口上を聞きて、陳軫に面會せしが、其の時、酒肴を設びたれば、陳軫の曰はく、「貴公は、何とて酒を飲むことを好まるゝか」と、犀首の曰はく、「仕事なくして、退屈なればなり」と、犀首の曰はく、「如何樣にせば、多忙になるべき」と、陳軫の曰はく、「貴國の宰相の田需、列國の諸侯と約束して、合從親陸したれども、楚王之れを疑ひて、まだ信用せざるなり、されば、貴公は、國王に物語りして、下の如くに曰はるべし、『臣は、燕、趙兩國の王と喜き馴染みあり、此の兩國の王は、度々人を臣が許へ來らしめて曰はく、「卿身魏に在りて、仕事なくして、退屈ならば、何故に當地へ來りて、互に面會せざるぞ」と、かやうに再三言ひ來りたれば、臣願はくは燕、趙へ行くことを大王に申し上げて、御暇を賜はらむことを』と、其の時、國王貴公の願ひを許可せられたりとも、貴公は、供連れの車を多くせらるゝなかれ、僅に三十輛の車を玄關前に並べ立てゝ、明白に燕、趙へ往かむと、吹聽せられむことを請ふ、さらば、貴公は、多忙にならむ」と、

燕、趙客聞之、馳車告其王、使人迎犀首、楚王聞之、大怒曰、田需與寡人約、而犀首之燕、趙、是欺我也、怒而不聽其事、齊聞犀首之北、使人以事委焉、犀首遂行三國相事、皆斷於犀首、

講義 犀首之れを聞きて、陳軫の敎へたる通りにせしに、燕、趙より來りて居たる賓客、犀首の燕、趙へ往くべき由を聞き及びて、車を馳せて、取り急ぎて、其の國々の王に告げ知らせて、出迎への人をして犀首を迎へしめたれば、楚王之れを聞きて、大に怒りて曰はく、「田需は、拙者と合從親陸の事を約束せしに、今、魏は、犀首を燕、趙へ遣り、燕、趙も亦人をして迎へしめたるを見れば、魏は、燕、趙と親密にして、楚を除け物にせるなり、田需の言葉は、信じ難しと思ひしが、果たして田需は我れを欺けり」と、斯く立腹して、前に田需と約束せし合從親陸の事を承知せぬやうになりぬ、又齊は、犀首の北の方燕、趙へ往きたる由を聞き及びて、人をして合從親陸の事を委任せしめたれば、犀首は、遂に齊、燕、趙の三箇國の宰相の仕事を兼ね行ひて、何事も皆犀首の手にて決斷せり、是れにて、犀首は、殊の外多忙の身となりぬ、

軫遂至秦、韓、魏相攻、期年不解、秦惠王欲救之、問於左右、左右或曰、救之便、或曰、勿救便、惠王未能爲之決、

講義 陳軫魏にて犀首に仕事を敎へたる後に、遂に秦の國へ到著せしに、折りから韓と魏と攻め合ひて、滿一箇年まで解け合はざりければ、秦の惠王之れを救ひ止めたく思ひて、左右の近臣に事の利害を尋ねしに、左右の近習の中に「之れを救ひ止めば、秦の爲めに便利ならむ」といふ者もあれば、「之れを救ひ止むることなく、其の成り行きの儘にせば、秦の爲めに便利ならむ」といふ者もありたれば、惠王之れが爲めに、まだ執れとも決定すること能はざりけり、

陳軫適至、秦惠王曰、子去寡人之楚、亦思寡人不、陳軫對曰、王聞夫越人莊舄乎、王曰、不聞、曰、越人莊舄仕楚執珪、有頃而病、楚王曰、舄故越之鄙細人也、今仕楚執珪貴富矣、亦思越不、中謝對曰、凡人之思故在其病也、彼思越則越聲、不思越則楚聲、使人往聽之、猶尚越聲也、今臣雖棄逐之楚、豈能無秦聲哉、

【字解】【執珪】……解は、前に見えたり、【鄙細人】……片田舎の下賤の者なり、【中謝】……御役なり、【越聲】……越の國言葉なり、

【講義】秦の惠王の勘考中に、陳軫丁度秦の國へ到著して、惠王に謁見したれば、惠王の曰はく、「御身は、拙者を振り棄てゝ、楚の國へ往きしかと、楚の國に在りても、亦拙者の事を思はむや否や」と、陳軫對へて曰はく、「大王には、彼の越の國の人の莊舄といふ者の事を聞きたまへりや」と、惠王の曰はく、「其の事は聞き及ばぬなり」と、陳軫の曰はく、「さらば、御話し申すべし、昔し、越の國の人の莊舄といふ者、楚の國に奉公して、執珪の爵を賜はりけるが、暫く立ちて、病氣になりぬ、其の時、楚王御側役の者に物語りして曰はく、『彼の莊舄は、以前は、越の片田舎の下賤の者なりしが、此の節は、我が楚の國に奉公して、執珪の爵となりて、身分も貴く、身代も富めり、それにても亦故郷の越を思はむや否や』と、御側役の者對へて曰はく、『總じて、人の故郷を思ふは、其の病氣の時に在るものなり、彼の莊舄にして、故郷の越を思はむには、越の國言葉を發するならむ、之れに反して、故郷の越を思はざらむには、楚の國言葉を發するならむ』と、楚王斯くと聞きて、人をして、莊舄の許へ往きて、其の言葉を聽き取らせしに、楚に在りて、富貴になりても、故郷を忘れ棄ねたりと見えて、やはり越の國言葉を發したりとぞ、只今、臣は、大王に棄て逐はれて、楚へ往けりとはいへど、いかで能く秦の國言葉を發することなかるべき、楚に在りとても、決して秦を忘れざるなり」と、

惠王曰、善、今韓、魏相攻、期年不解、或謂寡人、救之便、或曰、勿救便、寡人不能決、願子爲子主計之餘、爲寡人計之、

【字解】【餘】……智慧の餘りなり、

【講義】惠王の曰はく、「至極尤なり、それに就きては、相談したきことあり、今韓と魏と攻め合ひて、滿一箇年まで解け合はざれば、拙者は、之れを救ひ止めたく思ひて、家來共の見込みを尋ねしに、或る者は、『之れを救ひ止むることなく、其の成り行きの後にせば、秦の爲めに便利ならむ』といへり、之れが爲めに、拙者は、決定し兼ねたり、願はくは、御身は、御身の主君の楚王の爲めに、利害を計る智慧の餘りをもて、拙者の爲めに、之れを計らむことを」と、

陳軫對曰、亦嘗有以夫卞莊子刺虎聞於王者乎、莊子欲刺虎、館豎子止之曰、兩虎方且食牛、食甘必爭、爭則必鬬、鬬則大者傷、小者死、從傷而刺之、一擧必有雙虎之名、卞莊子以爲然、立須之有頃、兩虎果鬬、大者傷、小者死、莊子從傷者而刺之、一擧果有雙虎之功、

【字解】【館豎子】……宿屋の小僧なり、【雙虎之名】……二匹の虎を刺し殺したる名譽なり、【須】……待つなり、

【講義】陳軫對へて曰はく、「其の事も、亦一つの御話しをもて御對へ申さむ、前方に、彼の卞莊子といふ者の虎を刺し殺したることをもて、大王に言上したる者ありや、昔し、卞莊子といふ者、己れの勇氣を恃みて、虎を刺し殺さむと思ひしに、其の逗留せる宿屋の小僧、之れを押し止めて曰はく、『今、二匹の虎、一匹の牛を食はむとする最中なり、之れを食ひて、美味ならば、屹度互に負けじとて鬬はむ、互に負けじとて鬬はゞ、其の大なる方は、痛手を負ひて、半死半生になり、其の小さき方は、力盡きて、死なむ、其の痛手を負ひて、半死半生になりたるに附け込みて、之れを刺し殺さば、一働きにて、屹度二匹の虎を刺し殺したる名譽あらむ』と、卞莊子其の言葉を尤なりと思ひて、二匹の虎の一匹の牛を食へるを、立ちて見ながら待ちたるに、暫く立ちて、小僧の言ひたる如く、果たして其の虎を爭ひて鬬ひて、其の大なる方は、痛手を負ひて、半死半生になり、其の小さき方は、力盡きて、死にたれば、卞莊子は、其の痛手を負ひて、半死半生になりたるに付け込みて、之れを刺し殺して、一働きにて、小僧の言ひたる如く、果たして二匹の虎を刺し殺したる手柄ありきとぞ、

今韓、魏相攻、朞年不解、是必大國傷、小國亡、從傷而伐之、一擧必有兩實、此猶莊子刺虎之類也、臣主與王何異也、

【講義】今、韓と魏と攻め合ひて、滿一箇年まで解け合はざれば、屹度大國の方は、戰爭の爲めに、痛手を負ひて、疲弊し、小國の方は、力盡きて、滅亡せむ、其の痛手を負ひて、疲弊したるに付け込みて、之れを伐たば、一働きにて、屹度大國と小國との兩方の實益を收め得るならむ、此の仕方は、只今御話し申したる卞莊子の虎を刺し殺したる類の如きものなり、臣が主君の楚王と大王とは、何ぞ異ならむ、大王も臣が主君も同じことなれば、臣は、決して臣が主君の爲めに計ることを先立てゝ、大王の爲めに計ることを跡廻しにはせざるなり」と、以上、陳軫の言葉なり、

【文法】鄭以讓の曰はく、兩つの喩へ供に妙なりと、

惠王曰、善、卒弗救、大國果傷、小國亡、秦興兵而伐、大尅之、此陳軫之計也、

【字解】【尅】……勝つなり、

【補説】惠王の曰はく、「至極尤なり」と、遂に韓、魏の戰爭を其の成り行きの儘にして、救ひ止めざりしに、大國の方は、陳軫の言ひたる如く、果たして痛手を負ひて、疲弊し、小國の方は、力盡きて、滅亡せしかば、秦は、此の時、軍兵を繰り出して、其の疲弊せる大國を伐ちて、大に之れに勝てり、此れ陳軫の計策なりき、

【文法】田汝成の曰はく、人は軫の計は張儀の右に出でたりと謂へり、予れは謂ふ、文も亦張儀の右に出でたりと、

犀首者、魏之陰晉人也、名衍、姓公孫氏、與張儀不善、張儀爲秦之魏、魏王相張儀、犀首弗利、故令人謂韓公叔曰、張儀已合秦魏矣、其言曰、魏攻南陽、秦攻三川、魏王所以貴張子者、欲得韓地也、且韓之南陽已舉矣、子何不少委焉以爲衍功、則秦、魏之交可錯矣、然則魏必圖秦而弄儀、收韓而相衍、公叔以爲便、因委之犀首、以爲功、果相魏、張儀去、

【字解】【犀首】……魏の官名なり、後世の虎牙將軍の如し、官を以て號とせるなり、犀首は、魏の犀首といふ役を勤めたるに因りてなり、犀首は、張儀と中惡しかりけり、張儀秦の爲めに魏へ往きたるに、魏王張儀を宰相とせしかば、犀首は、之れを身の爲めに便利ならずとせり、されば、張儀の魏に留まらぬやうにせむとて、人をして、韓の家老の公叔に物語らせて曰はく、「張儀は、已に秦と魏とを結び合はせて、互に懇意にせしめたり、其の秦と魏とを結び合はする言葉に曰はく、『魏は、韓の南陽を攻め、秦は、韓の三川を攻めむ』と、魏王の張子を貴びて宰相とせし譯は、韓の地を手に入れたしと思ひてのことなり、しかのみならず、韓の南陽は、已に魏の爲めに丸取りにせられたり、御身何とて少し謂事を己れに委任せられて、己れの手柄を立てさせざる、己れに手柄あらば、魏は己れを用ゐるべし、己れ魏に用ゐられば、秦、魏の交際沛止すべし、さらば、魏は屹度秦を滅ぼすべき手段を考へて、張儀を見棄て、韓を手に附けて、己れを宰相とするならむ、己れ魏の宰相とならば、韓の利益にならぬことをせざるべし」と、公叔其の殷をもて韓の爲めに便利なりと思ひたるに因りて、國事を犀首に委任して、犀首の手柄を立てさせしに、犀首の見込みたる如く、果たして魏にて之れを宰相とせしかば、張儀は、魏を去りて、秦へ歸りて、重ねて秦の宰相となりぬ、

義渠君朝於魏、犀首聞張儀復相秦害之、犀首乃謂義渠君曰、道遠不得復過、請謁事情、曰、中國無事、秦得燒掇焚杅君之國、有事、秦將輕使重幣事君之國、

【字解】【義渠】……西戎の國の名なり、【中國】……華山より東の方の諸侯を指す、【無事】……共に秦を攻めざることをいふ、【燒掇焚杅】……燒き擊ちを仕掛けて、侵掠秦制するなり、【有事】……共に秦を伐つことをいふ、【輕使重幣】……前の重幣輕使と同じ、

【補説】折りから、西戎の義渠といふ國の君、魏の國へ來朝せしが、犀首は、張儀の重ねて秦の宰相となりたる由を聞き及びて、之れを邪魔物なりと思ひて、義渠の君をして、秦に加勢することなからしめむとて、重ねて當地へ立ち寄らるゝこと叶はざらむ、それに就きては、只今、秦の事情を告げむことを請ふ、其の事情といふは、此の中國なる華山より東の方の諸侯、力を合はせて、共に秦を攻むることなくば、秦は、中國に氣兼ねせずして、貴君の國に燒き擊ちを仕掛けて、侵掠秦制することを得む、之れに反して、中國の諸侯、力を合はせて、共に秦を伐つことあらば、秦は、多く人馬を運れざる手輕の使者を差し立て、手重き進物を持參せしめて、貴君の國の機嫌を取りて、助力を願ふやうにならむ、秦の事情は、此の通りにて、中國の諸侯の秦を伐つは、貴君の國の利益なれば、其の後もりにて思案せられたし」と、

其後五國伐秦、會陳軫謂秦王曰、義渠君者、蠻夷之賢君也、不如賂之、以撫其志、秦王曰、善、乃以文繡千純、婦女百人、遺義渠君、義渠君致羣臣而謀曰、此公孫衍所謂邪、乃起兵襲秦、大敗秦人李伯之下、

【字解】【五國】……楚、燕、齊、韓、趙なり、【撫】……手懷くるなり、【文繡千純】……結構なる織り物千段なり、蘇秦の傳の錦繡千純と同じ、【羣臣】……贈るなり、【致羣臣】……羣臣を呼び集むるなり、【李伯】……地の名なり、

【補説】其の後、楚、燕、齊、韓、趙の五箇國、力を合はせて、共に秦を伐ちたる折りから、陳軫秦王に物語りして曰はく、「義渠の國の君は、蠻夷の賢君なれば、之れに賄賂を差し遣りて、其の志しを手懷けて、味方とするに增したることなからむ」と、秦王の曰はく、「至極尤なり」と、是に於て、秦王は、結構なる織り物千段と、美しき婦女百人とをもて、義渠の君に贈りしに、義渠の君は、羣臣を呼び集めて、相談して曰はく、「此の事は、先頃、魏にて、公孫衍の手紙に物語りし、秦の事情といふものならむか」と、是に於て、義渠の君は、秦に加勢をせざるのみならず、反りて軍兵を繰り出して、秦に不意擊ちを仕掛けて、大に秦人を李伯といふ地の城下に敗りたり、

張儀已卒之後、犀首入相秦、嘗佩五國之相印、爲約長、

【字解】【爲約長】……合從の約束の主長となるなり、
【事解】張儀の已に卒去せし後、犀首は、秦の國へ入りて、其の宰相となり、又或る時は、楚、魏、齊、韓、趙の五諸國の宰相の印章を帶に佩びて、合從の約束の主長となりぬ、

太史公曰、三晉多權變之士、夫言從衡彊秦者、大抵皆三晉之人也、

【事解】太史公張儀の事跡を論贊して曰はく、「韓、魏、趙の三晉には、權謀變詐の士多し、合從連衡の是非利害を言論して、於局山東の諸侯を屈め、秦を強めたる者は、大抵皆三晉の生まれの人なり、

夫張儀之行事、甚於蘇秦、然世惡蘇秦者、以其先死、而儀振暴其短、以扶其說、成其衡道、

【字解】【振暴】……人の目に立つやうに披露するなり、【衡道】……連衡の仕方なり、
【事解】全體、張儀の行ひたる事は、列國の合從を破壞して、秦に臣とし事へしめたることなれば、其の惡しきこと、蘇秦より甚し、さりながら、世間の人の蘇秦を惡み嫌へるは、蘇秦の張儀に先立ちて横死して、其の跡より、張儀の蘇秦の短所を人の目に立つやうに披露して、己れの說を主張する扶けとして、其の連衡の仕方を成就せしが故なり、

要之、此兩人、眞傾危之士哉、

【字解】【傾危】……人の國を傾覆して、危險ならしむるなり、
【事解】さりながら、此の兩人の仕事を論じ詰むるときは、孰れも正人君子にはあらずして、眞に人の國を傾覆して、危險ならしむる、油斷のならぬ士なりけるよ」と、
【文法】陳仁錫の曰はく、蘇、張の二傳は、說辭をもて勝さりたり、亦傳の最なる者なりと、○蓋份の曰はく、太史公の贊語の中を遡るに、頗る亦蘇に與みして、儀を抑へたる者あり、蓋し、蘇は、閭閻の匹夫より起こりて、秦の方に盛んなる時に當たりて、遂に能く六國の心を勵ね、其の師を并はせ用ゐて、方に强き敵を退めたり、此れ其の勢ひ甚だ難き者あり、今其の說詞を觀るに、亦天下を跨壓し、列國を驅役し、强秦を控禦する氣あり、奇絶なりと謂ふべし、天下秦を畏れて、從の勢ひ解けむとするに方たりて、儀は、秦の力に倚り、解けむとする勢ひに乘じたれば、蘇に比するに、固より獨り易き者なり、而して、其の辭も亦蘇の精緻なるに如かず、微かに力の緩きを覺ゆと、○茅坤の曰はく、蘇秦張儀の二傳は、并びに戰國縱橫游說の詞にして、遍く人の國を傾け亂せり、本より褒貶するに足らず、特に其の說は、利なる處を言へば、其の害を隱み、得たる處を言へば、其の失を蔽ひたれば、亦おのづから人を變惑せしむる處あり、之れを褒するに、同じく險符の中より出でたるなりと○趙慎の曰はく、代と厲とは、兄の故事を藉さで、從をせしが故に、之れを秦の傳に附せり、彰と衍とは、秦の相となりて、衡を主とせしが故に、之れを儀の傳に列せりと、

樗里子甘茂列傳第十一

樗里子者、名疾、秦惠王之弟也、與惠王異母、母韓女也、樗里子滑稽多智、秦人號曰智囊、

【字解】【樗里子】……樗は、木の名なり、和名をぢんずゐといふ、其の里に此の木のあるが故に、樗里といひ、其の里に住めるが故に、樗里子といふ、【滑稽】……今の漏斗（じやうご）の類なり、人の談論なる言葉を出だして盡きざること、漏斗の口より酒の漏れて絶えざるが如きなり、
【事解】樗里子は、名は疾といふ、秦の惠王の弟にして、惠王とは腹變はりなり、其の母親は、韓王の娘なり、樗里子は、滑稽にして、眞面目なることを言ひたることなく、何事に就きても、談論なる言葉を吐きて、自由自在に面白く談論し、頓才ありて、智慧多かりければ、秦の人、之れを智慧の囊と號しけり、
【文法】茅坤の曰はく、直ちに敍して閒探なりと、○授約言の曰はく、樗里子は、惠王の異母弟をもて、其の信任して、疑はざることを致し、武王、昭王を歷て、任ぜられて相となりて、又益ゝ尊んぜられき、夫れ秦は、素より猜忌にして、殘忍の國なり、智囊なるにあらずば、何をもて其の間に周旋して、敵主の心を結ばむ、此れ太史公の意なりと、○余有丁の曰はく、母は韓の女とあるは、後の甘茂の傳に、韓を挾みて讓する爲めの張本なりと、

秦惠王八年、爵樗里子右更、使將而伐曲沃、盡出其人、取其城地入秦、

【字解】【右更】……秦の爵の名なり、
【事解】秦の惠王の八年に、樗里子を右更の爵に取り立てゝ、兵に將として、魏の曲沃を伐たしめしに、其の人民を捕へず、殘らず之れを城内より逐ひ出して、其の城地のみを取りて、秦の手に入れたり、

秦惠王二十五年、使樗里子爲將伐趙、虜趙將軍莊豹、拔藺、明年、助魏章攻楚、敗楚將屈丐、取漢中地、秦封樗里子、號爲嚴君、

【字解】【嚴君】……威嚴あること君父の如きなり、

【題解】秦の惠王の二十五年に、樗里子をして、將となりて、趙を伐たしめしに、趙章の加勢をして、楚を攻めて、楚の將の屈丐を敗りて、漢中の土地を取りたり、秦は、樗里子の度々の手柄を愛めて、之れに知行を與へて、威嚴あること君父の如しとの意にて、之れを嚴君と號したり、

秦惠王卒、太子武王立、逐張儀、魏章、而以樗里子、甘茂爲左右丞相、秦使甘茂攻韓、拔宜陽、使樗里子以車百乘入周、周以卒迎之、意甚敬、楚王怒、讓周以其重秦、

【題解】秦の惠王卒去しければ、太子の武王、跡目に立ちて、張儀と魏章とを放逐して、樗里子と甘茂とを左右の丞相とせり、秦は、甘茂をして、韓を攻めしめしに、宜陽に乘り取りたり、同時に、樗里子をして、兵車百輛を從へて、周の都へ入らしめしに、周の天子、其の威勢を恐れて、兵卒をもて、之れを迎へしめて、之れを接待する存意甚だ恭敬なりしかば、楚王怒りて、其の秦を重んじたる廉をもて、罪を責め咎めたり、

【文法】王鑿の曰はく、先づ意甚敬の三字を下して、後に以其重秦と云ひたるは、おのづから節奏ありと、

客游騰爲周說楚王曰、智伯之伐仇猶、遺之廣車、因隨之以兵、仇猶遂亡、何則無備故也、齊桓公伐蔡、號曰誅楚、其實襲蔡、今秦虎狼之國、使樗里子以車百乘入周、周以仇猶、蔡觀焉、故使長戟居前、彊弩在後、名曰衛疾、而實囚之、且夫周豈能無憂其社稷哉、恐一旦亡國、以憂大王、楚王乃悅、秦武王卒、昭王立、樗里子又益尊重、

【訓讀】【仇猶】……夷狄の國なり、【遺之廣車】……戰國策には、遺之大鐘、載以廣車、とあり、廣車は、大なる車なり、【誅】……責め咎むるなり、【以仇猶與蔡觀焉】……仇猶と蔡との失敗を觀て戒めとするなり、

【解】此の時、周に游說の客たりし游騰といふ者、周の爲めに、楚王に說きて曰はく、「昔し、晉の家老の智襄子の孫の智伯の、仇猶といふ夷狄の國を伐ちしとき、之れに大なる鐘を大なる車に載せて贈りしに、仇猶其の大なる鐘の賄賂を貪りて、道を問きて、晉まで往きて、之れを受け取りたれば、智伯之れに付け込みて、其の進物の跡に兵隊を附き添はしめて、仇猶へ攻め入らしめたれば、仇猶遂に滅亡せり、其の滅亡せしは、智伯を防ぎ備へなければなり、齊の桓公の蔡の國を伐ちしとき、其の名目は、楚の罪を責め咎むるなりといひたれど、其の實際は、蔡の油斷に付け入りて、不意擊ちを仕掛けたるなり、今、秦は、虎狼の如き貪慾無慈悲の國にして、樗里子をして、兵車百輛をもて、周の都へ入らしめたれば、周は、仇猶と蔡との失敗を觀て、戒めとせり、されば、兵卒をもて、之れを迎へしめて、長き戟を持ちたる者をして、其の前に居らしめ、强き弩を持ちたる者をして、其の後に在らしめて、前後より之れを取り捲かしめたれば、其の名目は、疾を看衛するなりといひたれど、其の實際は、之れを生け捕りて、手も足も出ぬやうにせしめたるなり、しかのみならず、周は、いかで能く其の近隣國家を傾覆することを心配するとなかるべき、其の兵卒をもて、樗里子を迎へしめたるは、彼れの不意擊ちを受けて、一旦國家を滅亡せば、大王にまで心配を掛くることあらむことを氣遣ひてなり、決して秦を重んじたる譯けにあらず」と、楚王之れを聞きて、大に滿足せり、其の後、秦の武王卒去して、昭王跡目に立ちけるが、樗里子は、又益ゝ尊び重んぜられたり、

【文法】流維隆の曰はく、曰衛疾の二句は、號曰誅楚の二句と、おのづから相對應せりと、

昭王元年、樗里子將伐蒲、蒲守恐、請胡衍、胡衍爲蒲謂樗里子曰、公之攻蒲、爲秦乎、爲魏乎、爲魏則善矣、爲秦則不爲賴矣、夫衛之所以爲衛者、以蒲也、今伐蒲入於魏、衛必折而從之、魏亡西河之外、而無以取者、兵弱也、今幷衛於魏、魏必彊、魏彊之日、西河之外必危矣、且秦王將觀公之事、害秦而利魏、王必罪公、

【訓讀】【賴】……利益なり、【今伐蒲入於魏衛必折而從之】……今、秦にて蒲を伐たば、蒲は、力足らずして、魏の方へ入らむ、さらば、衛も、屹度折れ込みて、魏に附屬せむといふことなり、【無以取】……西河の外を取り返すことなきなり、

【解】昭王の元年に、樗里子兵に將として、衛の國の蒲といふ邑を伐ちたれば、蒲の城守、之れを恐れて、胡衍といふ者に其の兵を退けむことを依賴せり、胡衍之れを引き受けて、蒲の爲めに、樗里子に逢ひて、物語りして曰はく、「貴公の蒲を攻めらるゝは、秦の爲めにせらるゝ譯けか、魏の爲めにせらるゝ譯けか、魏の爲めにせらるゝ譯けならば、善けれども、秦の爲めにせらるゝ譯けならば、利益なりとは思はれぬなり、何となれば、全體、衛の衛として立てるは、蒲の邑あるをもてなり、然るに、今、秦にて蒲を伐たば、蒲は力足らずして、魏の方へ入らむ、さらば、衛も、屹度折れ込みて、魏に附屬せむ、今日まで、魏の秦の爲めに西河の外を失ひて、之れを取り返すことなきは、其の兵力弱ければなり、然るに、今、衛の魏に合併せば、魏は、屹度强くならむ、魏の强くなる曉には、一旦秦のものとなりたる西河の外は、屹度魏の攻擊を受けて危からむ、しかのみならず、秦王は、此の度の出兵にて、貴公の仕事の得失を觀むとするなり、貴公若し衛を魏に附屬せしめて、秦に損害ありて、魏に利益あることをせられなば、秦王は、屹度貴公を罪し咎むることならむ」と、

樗里子曰、奈何、胡衍曰、公釋蒲勿攻、臣試爲公入言之、以德衞君、樗里子曰、善、

【字解】【德衞君】……衞の君に恩德を貸はするなり、

【講義】樗里子の曰はく、「さらば、如何樣にせば宜しからむ」と、胡衍の曰はく、「貴公は、蒲を棄て置きて、攻めぬやうにせられよ、臣は、成否の程は、受け合はれねど、先づ試みに貴公の爲めに、蒲に入りて、城守に話して、衞の君に恩德を貸はすべし」と、樗里子の曰はく、「至極尤なれば、萬事宜しく賴みたり」と、

胡衍入蒲、謂其守曰、樗里子知蒲之病矣、其言曰、必拔蒲、衍能令釋蒲勿攻、蒲守恐、因再拜曰、願以請、因効金三百斤、曰、秦兵苟退、請必言子於衞君、使子爲南面、故胡衍受金於蒲、以自貴於衞、

【字解】【病】……疲弊するなり、【苟】……若しなり、【南面】……一方の領主となるなり、南面は、人主の座位なり、解は、伍子胥の傳の北面の下に見えたり、

【講義】胡衍は、戻りて蒲へ入りて、其の城守に物語りして曰はく、「樗里子は、蒲の疲弊せることを知れり、其の言葉に曰はく、『今度は、屹度蒲を奪り取らむ』と、さりながら、己れは、能く之れを諫して、蒲を棄て置きて、攻むることなからしめむと思ふなり」と、蒲の城守、之れを聞きて、益ゝ恐れて、再拜して曰はく、「願はくは御身の力にて、樗里子をして、蒲を棄て置きて、攻むることなからしめむことを」と、それに就き、城守は、金子三百斤を差し出して、胡衍に與へて曰はく、「御身の力にて、秦の兵若し退かば、屹度御身の骨折りを衞の君に申し立てゝ、御身をして一方の領主たらしめむ」と、胡衍は、かやうに雙方の間に立ち入りて、上手に話しを持ち掛けて、金子を蒲より貰ひ受けて、自ら衞に貴び重んぜられたり、

【文法】郎以讀の曰はく、詐りて金を雲めしは甚だ鄙し、然れども、文字に入れば、奇なるを見ると、

於是遂解蒲而去、還擊皮氏、皮氏未降、又去、

【字解】【皮氏】……魏の邑なり、

【講義】是に於て、樗里子は、遂に蒲の圍みを解きて、引き揚げて、一旦秦へ立ち戻りて、魏の國の皮氏といふ邑を擊ちたるが、皮氏のまだ降參せざる中に、又此の邑をも引き揚げたり、

昭王七年、樗里子卒、葬于渭南章臺之東、曰、後百歲、是當有天子之宮夾我墓、樗里子疾室在於昭王廟西渭南陰鄉樗里、故俗謂之樗里子、至漢興、長樂宮在其東、未央宮在其西、武庫正直其墓、秦人諺曰、力則任鄙、智則樗里、

【字解】【直】……當たるなり、【任鄙】……秦の力士なり、

【講義】昭王の七年に、樗里子卒去せしかば、渭南の章臺の東の方に葬りたり、其の臨終の言葉に曰はく、「今より百年の後に、天子の宮殿ありて、我が墓地を挾むべし」と、樗里子疾の居宅は、昭王の廟の西なる渭南の陰鄉の樗里に在り、されば、世俗の人、其の地名に因みて、之れを樗里子といへり、漢の興こりて、秦に代はりて、天下を一統するに至りて、長樂宮は、樗里子の居宅の東の方に在り、未央宮は、其の西の方に在り、武庫は、まさしく其の墓地に當たりて、其の遺言の通りになりぬ、樗里子は、最初に述べたる如く、智慧多き人なりければ、秦人の言ひ習はしに曰はく、「我が秦の國にて、最も力量ある者は、任鄙なり、最も智慧ある者は、樗里なり」と、

【文法】淩稚隆の曰はく、滑稽多智は、是れ一篇の骨子なり、中ごろ其の曲沃を伐ち、趙を伐ち、楚を伐ち、蒲を釋てたることを敍して、百歲の後の事を知りたることに至るまで、皆其の智なることを言へるなり、故に智則樗里の句をもて之れを結びて、正に前の秦人號曰智慧の句と相應じたりと、

甘茂者、下蔡人也、事下蔡史舉先生、學百家之說、因張儀、樗里子、而求見秦惠王、王見而說之、使將而佐魏章、略定漢中地、惠王卒、武王立、張儀、魏章去、東之魏、蜀侯輝相壯反、秦使甘茂定蜀、還、而以甘茂爲左丞相、以樗里子爲右丞相、

【字解】【百家之說】……諸子百家の說なり、【略定】……略取して、平定するなり、之れを取るに力を用ゐることの少なきを略といふ、

【講義】甘茂は、下蔡の人なり、下蔡の史舉先生といふ學者の弟子となりて、諸子百家の說を學びけり、さて、學業の成就せし後に、張儀と樗里子とに依賴して、秦の惠王に謁見せむことを望み求めしに、惠王之れに面會して、其の言論に滿足して、兵に將として、漢中の地を略取して、平定せしめたり、惠王卒去して、武王跡目に立ちたれば、張儀と魏章とは、秦を立ち去りて、魏へ往きたり、折りから、秦の

公子にて、蜀侯に封ぜられたる、輝といふ人の宰相の陳壯といふ者、謀反せしかば、秦は、甘茂をして、蜀を平定せしめたり、其の事濟みて、蜀より秦へ立ち戻りたれば、甘茂をもて左丞相とし、樗里子をもて右丞相とせり、

秦武王三年、謂甘茂曰、寡人欲容車通三川、以窺周室、而寡人死不朽矣、甘茂曰、請之魏、約以伐韓、而令向壽輔行、

【容車】……秦の武王の三年に、武王甘茂に物語りして曰はく、「拙者は、險阻にして狹隘なる道路に兵車を入れ、韓の三川を通り拔けて、周室の樣子を窺ひて、天下を取るべき心構へをしたく思ふなり、此の事叶はゞ、拙者は、死すとも、功名永く朽ちずして、滿足せむ」と、甘茂の曰はく、「左樣に思し召されむには、臣魏へ往きて、其の國王と約束して、共ゝに韓を伐たむことを請ふ」と、秦王之れを許可して、氣に入りの向壽といふ者を副使として、甘茂を魏へ往かしめたり、

【容車】【容車】……險阻にして狹隘なる道路に兵車を入れ、【而令向壽輔行】……戰國策には、而を王に作れり、輔行は、副使なり、

甘茂至、謂向壽曰、子歸言之於王曰、魏聽臣矣、然願王勿伐、事成、盡以爲子功、向壽歸以告王、

【至】……魏へ到著して、向壽に物語りして曰はく、「御身は、秦へ立ち歸りて、己れの傳言を大王に言上せよ、其の口上に、『魏は、臣の相談を聽き納れて、共ゝに韓を伐たむことを承諾せり、さりながら、願はくは大王には韓を伐ちたまふことなからむことを』と、御身かやうに言上せば、大王は、吃度不思議に思はれて、己れを呼び戻されて、其の譯を尋ねらるべし、其の時、己れは、大王に言上すべきことあり、されば、此の事成就して、大王の疑問を受くるまでにならば、此の度の一儀は、殘らず御身の手柄とせむ」と、向壽委細心得て、秦へ立ち歸りて、甘茂に言ひ付けられたる如く、武王に言上せり、

【至】【謂】【盡】【盡】……武王の甘茂を呼び戻して疑問を發する事の成就するなり、

王迎甘茂於息壤、甘茂至、王問其故、對曰、宜陽大縣也、上黨、南陽積之久矣、名曰縣、其實郡也、今王倍數險、行千里、攻之難、

【積之】……金穀を積み蓄ふるなり、【名曰縣、其實郡也】……春秋の時には、縣は大にして、郡は小さかりしが、戰國になりて、郡は大にして、縣は小さくなりたるをもて、斯く言へるなり、春秋の時に、郡の縣より小さかりし證は、仲尼の弟子の傳の子貢の條の發二九郡兵一の下に注したる方氣溪の說を併はせ看るべし、【倍】……背くなり、うしろにするなり、

昔曾參之處費、魯人有與曾參同姓名者、殺人、人告其母曰、曾參殺人、其母織自若也、頃之、一人又告之曰、曾參殺人、其母投杼下機、踰牆而走、夫以曾參之賢、與其母信之也、三人疑之、其母懼焉、今臣之賢、不若曾參、王之信臣、又不如曾參之母信曾參也、疑臣者非特三人、臣恐大王之投杼也、

【杼】……ひなり、機の横絲を差し引きする道具なり、【機】……機臺なり、【信之】……一本には、之信に作れり、【疑之】……其の母をして、曾參を疑はしむるなり、

【昔】……昔し、孔子の弟子の曾參、魯の國の費といふ邑に居りしとき、魯の人に曾參と姓名を同じくせる者ありて、或る時、人を殺したれば、或る人、曾參の母に告げ知らせて曰はく、『御身の息子の曾參は、只今人を殺したり』と、其の母之れを聞きたれど、我が子は人を殺す者にあらずと信用したれば、少しも驚く氣色なく、機を織ること自若として、落ち著きたり、暫く立ちて、又一人、其の母に告げ知らせて曰はく、『御身の息子の曾參は、只今人を殺したり』と、其の母之れを聞きたれど、我が子は人を殺す者にあらずと信用したれば、やはり少しも驚かずして、機を織ること自若として、落ち著きたり、暫く立ちて、又一人、其の母に告げ知らせて曰はく、『御身の息子の曾參は、只今人を殺したり』と、是に至りて、其の母、さては、我が子は、人を殺したるか、此の儘にては濟まざらむとて、手に持ちたる杼を投げ棄てゝ、機臺を飛び下りて、垣根を越えて、逃げ走りきとぞ、夫れ此の如く、曾參の賢明にして、人殺しなどをすることなきと、其の母の之れを信用したることをもてすら、三人までも、其の母をして、曾參を疑はしむれば、其の母、我が子の人を殺したることを懼れたり、今、臣が賢明なることは、曾參に及ばず、大王の臣を信用したまふことは、曾參の母の曾參を信用せしに及ばず、大王をして臣を疑はしむる者は、特に三人のみにあらずして、多人數なれば、臣は、大王の曾參の母の杼を投げ棄てたるやうに、臣を見放したまはむことを氣遣ふなり、

始張儀西并巴、蜀之地、北開西河之外、南取上庸、天下不以多張子、而以

【始張儀西并巴、蜀之地、北開西河之外、南取上庸、天下不以多張子、而以】……武王向壽の言葉を聞きて、果たして不思議に思ひて、甘茂を呼び戻して、息壤といふ邑まで出で迎へたれば、甘茂其の地へ到著せしに、武王向壽の言葉の譯けを尋ねたれば、甘茂對へて曰はく、「韓は、宜陽は、原來大縣なるが上に、上黨と南陽とに金穀を積み蓄ふること年久しければ、其の名目は、縣なりといへど、其の實際は、郡に同じ、今、大王の函谷及び三晉、五谷の數箇所の險阻をうしろにして、千里の遠路を行きて、之れを攻めたまはむことは、甚だ困難なることなり、

賢先王、

【字解】【多】……重んずるなり、

【講義】最前、張儀は、秦の爲めに骨折りて、西の方は、巴、蜀の地を併呑し、北の方は、西河の外を開通し、南の方は、上庸を攻め取りしかど、天下中の人々は、張子の手柄を重んぜずして、御先代の惠王の張儀を信用したまひしことを賢明なりとせり、

魏文侯令樂羊將而攻中山、三年而拔之、樂羊返而論功、文侯示之謗書一篋、樂羊再拜稽首曰、此非臣之功也、主君之力也、

【字解】【一篋】……一箱なり、【稽首】……頭を地に付けて、暫く止むるなり、

【講義】又魏の文侯は、樂羊をして、兵に將として、中山を攻めしめしに、三箇年掛かりて、始めて之れを乘り取りたり、樂羊國へ立ち戻りて、其の軍功を論議せしに、文侯之れに樂羊の出陣中に種々なる事を誹謗せし書面を入れたる一箱を示したれば、樂羊再拜して、頭を地に付けて、感謝して曰はく、『此の度の勝利は、臣が手柄にあらざるなり、全く主君の讒者の說を取り上げたまはずして、臣を信用したまひし力なり』と、

今臣羈旅之臣也、樗里子、公孫奭二人者、挾韓而議之、王必聽之、是王欺魏王、而臣受公仲侈之怨也、

【字解】【羈旅之臣】……他國の渡り者なり、【挾韓】……韓を小脇に拵い込むなり、即ち韓の肩を持つなり、樗里子の母は、韓王の娘なり、【公仲侈】……韓の宰相なり、

【講義】今、臣は、他國の渡り者なれば、大王の信用とても深からざるに、大王の御氣に入りの韓に緣ある樗里子、及び公孫奭の二人、韓の肩を持ちて、臣が仕事の得失を評議せば、大王には、屹度其の言葉を聽き納れたまひて、韓との約束を反故にして、韓を伐つことを差し止めたまふなりむ、是れ大王は、魏王を欺きて、臣は、韓の宰相の公仲侈の怨みを受くることゝならむ、臣は、かやうに後々の事を掛念するが故に、韓を伐つことを見合はせたまへと申し上げたるなり」と、以上、甘茂の言葉なり、

【文法】後約言の曰はく、此の下、二段と作して看よ、先づ曾參の事を引きて、今臣羈旅之臣の數句をもて、之れを結べり、反覆錯綜して、おのづから起承に合へりと、○胡曙化の曰はく、譬喩は、是れ古人の文章の一大機緣なり、元后殷勤の歌に始まり、將相隨梅の命に證れ、詩の比體に波瀾す、下孟、荀、莊、列に至るまで、文章の奇特なる處も、亦多く是れ譬喻なり、而して、戰國の此の策は、尤も其の善く用ゐたる者なり、

王曰、寡人不聽也、請與子盟、卒使丞相甘茂將兵伐宜陽、五月而不拔、樗里子、公孫奭果爭之、武王召甘茂、欲罷兵、甘茂曰、息壤在彼、王曰、有之、因大悉起兵、使甘茂擊之、斬首六萬、遂拔宜陽、韓襄王使公仲侈入謝、與秦平、武王竟至周、而卒於周、

【講義】武王の曰はく、「其の事こちらば、掛念するには及ばざらむ、拙者は、樗里子、公孫奭などより如何樣の申し出でありとも、決して之れを聽き納れざるべし、御身と之れを盟はむことを請ふ」と、是に於て、其の盟約を取り結びて、遂に丞相の甘茂をして、兵に將として、宜陽を伐たしめしに、五箇月立ちても、乘り取ることを得ざりしかば、樗里子、公孫奭の二人、果たして甘茂の先見の通り、之れを爭論非難せしかば、武王の心、之れに動きて、甘茂を呼び返して、其の戰爭を差し止めむと思ひしに、甘茂の曰はく、「先頃、大王と盟約したる息壤の地は、彼の處に在り、定めて忘れたまふことなからむ」と、武王忽ち合點して曰はく、「如何にも、息壤の地は、彼の處に在り」と、因りて、大に軍兵を殘らず繰り出して、甘茂をして之れを擊たしめたり、是に於て、甘茂大に合戰して、敵の首を討ち取ること六萬人に及びて、遂に宜陽を乘り取りたれば、韓の襄王大に長れて、宰相の公仲侈をして、秦の國へ入りて、詫びさせて、秦と和睦せり、武王甘茂の手柄にて、宿志を遂げて、遂に周の都へ到著して、周室の樣子を窺ひしが、其の儘周にて卒去せり、

【文法】後約言の曰はく、只々息壤在彼の一句にて、秦王の疑ひ頓に釋けたることを著はして、前の周室を窺はゞ、死すとも恨みじの語を終へたりと、

其弟立爲昭王、王母宣太后、楚女也、楚懷王怨前秦敗楚於丹陽、而韓不救、乃以兵圍韓雍氏、韓使公仲侈告急於秦、秦昭王新立、太后楚人不肯救、公仲因甘茂、

【字解】【雍氏】……韓の縣なり、

【講義】武王の弟跡目に立ちて、昭王となりぬ、昭王の母の宣太后は、楚王の娘なり、楚の懷王、以前、秦の楚を丹陽に敗りしとき、韓の之れを救はざりしを怨みて、其の意趣返しに軍兵を差し向けて、韓の雍氏といふ縣を圍みたれば、韓は、宰相の公仲侈をして、危急の由を秦に告げて、加勢を請はしめしに、秦の昭王は、跡目に立ちたるばかりにて、未だ國事に慣れず、宣太后は、楚の國の人なれば、楚と中惡しき韓を救はむことを承知せざりしかば、公仲侈大に閑却して、其の取り成しを甘茂に依賴せり、

茂爲韓言於秦昭王曰、公仲方有得秦救、故敢扞楚也、今雍氏圍、秦師不下、殺公仲且仰首而不朝、公叔且以國南合於楚、楚、韓爲一、魏氏不敢不聽、然則伐秦之形成矣、不識坐而待伐、孰與伐人之利、秦王曰、善、乃下師於殺、以救韓、楚兵去、秦使向壽平宜陽、而使樗里子、甘茂伐魏皮氏、

【評】【扞】……防ぐなり、【仰首】……頭を擡げて、秦を見下すなり、【平】……其の疆界を正し、其の人民を和らぐなり、

【講】甘茂之れを引き受けて、韓の爲めに、秦の昭王に言上して曰はく、「公仲侈は、方に秦の救ひを得ることあらむと思ひたればこそ、押し切りて、楚を防ぎたれ、然るに、今雍氏の土地、楚に圍まれて、危急なるに、秦の軍勢、殽山より押し下らざらむには、公仲侈は、頭を擡げて、秦を見下して、秦へ參朝することなく、韓の家老の公叔は、其の國をもて、南の方楚の國と合體するならむ、楚と韓と一致せば、魏は、押し切りて其の同盟を承諾せざる譯にはゆかざらむ、此の三箇條合體せば、秦を伐つべき形勢成就せむ、退き坐して、人に伐たるゝことを待つと、進み向ひて、人を伐つことの利益なるとは、孰れか增しならむ、臣には分かり兼ねれども、大王には御分かりなるべし」と、秦王の曰はく、「至極尤なり、早速韓を救ふべし」と、是に於て、秦王軍勢を殽山より押し下して、韓を救ひたれば、楚の兵、退き去れり、秦は、それより、向壽をして、宜陽の土地の疆界を正し、其の人民を和らげしめ、樗里子と甘茂とをして、魏の邑の皮氏を伐たしめたり、

向壽者、宣太后外族也、而與昭王少相長、故任用、向壽如楚、楚聞秦之貴向壽、而厚事向壽、向壽爲秦守宜陽、將以伐韓、韓公仲使蘇代謂向壽曰、禽困覆車、公破韓辱公仲、公仲收國復事秦、自以爲必可以封、今公與楚解口地、封小令尹、以杜陽、秦、楚合、復攻韓、韓必亡、韓亡、公仲且躬率其私徒、以鬬於秦、願公孰慮之也、向壽曰、吾合秦、楚、非以當韓也、子爲壽謁之公仲、曰、秦、韓之交可合也、

【評】【外族】……外戚の一族なり、即ち里方の親類なり、【相長】……一所に育ちたるなり、【禽困覆車】……禽獸も、餘りに困苦するときは、猛は能く突き當たりて、人の車を傾覆するなり、【解口】……秦の地名なり、【小令尹】……楚の令尹なり、之れを小といへるは、賤みたるなり、【鬬】……喰ひ止むるなり、戰鬬策には、鬬に作れり、【謁】……告ぐるなり、

【講】向壽は、宣太后の里方の親類なり、昭王と幼少の頃より一所に育ちて、手厚く向壽に事へたり、向壽秦の爲めに、宜陽の土地を守りて、韓を伐たむとせしかば、韓の宰相の公仲侈、蘇代をして、向壽に物語らせて曰はく、「一寸の蟲にも、五分の魂あり、禽獸も、逐ひ詰められて、餘りに困苦するときは、猛は能く突き當たりて、人の車を傾覆するなり、今、貴公には、韓を破りて、公仲侈に恥辱を與へられたれど、公仲侈は、國內の人心を取り纏めて、重ねて秦に事へたるは、自ら屹度秦の封爵を得らるゝならむと思ひたればなり、然るに、今、貴公には、楚に秦の解口の地を割き與へられ、楚の小令尹を秦の杜陽の地に封ぜられたるは、實外の事なり、楚と合體して、重ねて韓を攻めば、韓は屹度滅亡するならむ、韓滅亡せば、公仲侈は、自身に其の手勢を引き連れて、秦の軍勢を喰ひ止めて、必死になりて戰はむ、願はくは貴公の之れを熟考せられむことを」と、向壽の曰はく、「吾が秦と楚とを合體せしめたるは、韓に抵抗せむとにはあらぬなり、御身己れが爲めに、之れを公仲侈に告げて、『秦と韓との交際は和合すべし』といはれよ」と、

【評】【禽獸】……猛獸も、餘りに困苦するときは、猛は能く突き當たりて、人の車を傾覆するなり、【相長】……一所に育ちたるなり、【禽困覆車】……禽獸も、餘りに困苦するときは、猛は能く突き當たりて、人の車を傾覆するなり、【解口】……秦の地名なり、【小令尹】……楚の令尹なり、之れを小といへるは、賤みたるなり、

蘇代對曰、願有謁於公、人曰、貴其所以貴者貴、王之愛習公也、不如公孫奭、其智能公也、不如甘茂、今二人者、皆不得親於秦事、而公獨與王主斷於國者何、彼有以失之也、公孫奭黨於楚、是與公孫奭、甘茂同道也、公何以異之、人皆言楚之善變也、而公必亡之、是自爲責也、

【評】【所以貴者】……殊更に肩を持たずして、自然に貴かるべき者なり、【愛習】……習は、狎るゝなり、親愛して、狎れ近づくなり、【主斷於國】……主として國事を決斷するなり、【失之】……各ゝ肩を持つことあるをいふ、【亡】……失敗するなり、【爲責】……責め咎めらるゝことを招くなり、

【講】蘇代對へて曰はく、「願はくは、貴公に告げたきことあり、世間の人の言葉に曰はく、『殊更に肩を持たずして、自然に貴かるべき者を貴

べば、其の身も人に貴ばるゝなり」と、今、國王の貴公を愛して、卿れ近づかるゝことは、公孫奭に及ばざるなり、又國王の貴公を才智驍能ありとせらるゝことは、甘茂に及ばざるなり、さりながら、今、此の二人は、皆秦の國事に親しく與かることを得ずして、貴公のみ獨り國王も主として國事を決斷せらるゝは、何故ぞ、彼の二人は、各〻他國の肩を持つといふ過失あればなり、公孫奭は、韓の肩を持ちて、甘茂は、魏の肩を持てるが故に、國王之れを信用せられぬなり、今、秦と楚と互に强きことを爭ひて、勝負の決せざる中に、貴公楚の肩を持たれむには、是れ公孫奭、甘茂と仕方を同じくするなり、貴公何をもて此の二人の仕方と異ならむ、世間の人は、皆楚は上手に約束を變改する國なりといへり、されば、貴公は、楚の肩を持たれむには、屹度之れに失敗するならむ、是れ自ら求めて國王に責め咎めらるゝことを招かるゝなり、

公不如與王謀其變也、善韓以備楚、如此則無患矣、韓氏必先以國從公孫奭、而後委國於甘茂、韓公之讎也、今公言善韓以備楚、是外舉不辟讎也、

【韓公之讎也】……韓は屹度先づ公孫奭と甘茂と國事を相談すべきが故に、向壽に取りては、仇讎となるなり、【外舉不辟讎】……外人を擧げ用ゐるには、私の仇讎を避けざるなり、

【語釋】されば、貴公は、國王と共に、楚の約束を變改せむことを謀り寫はれむには如かじ、それには、韓を善く扱ひて、楚の約束を變改せむ時の用心をせられよ、此の如くせば、貴公の身には、心配なからむ、たとひ貴公は、韓を善く扱はれたらむにも、韓は、貴公を當てにせずして、屹度先づ其の國をもて、公孫奭に從ひて、其の指揮を受けたる後に、其の國を甘茂に委ねべければ、韓は、貴公の仇讎の國なり、さるを、今、貴公は、韓を善く扱ひて、楚の約束を變改せむ時の用心をせむと、國王に言上せられむには、是れ外人を擧げ用ゐるに、私の仇讎を避けずといへるが如き、立派なる仕方なり」と、以上、蘇代の言葉なり、

向壽曰、然、吾甚欲韓合、對曰、甘茂許公仲、以武遂、反宜陽之民、今公徒收之甚難、

【徒收之】……地を與ふることなくして、素手にて韓を手に附くるなり、

【語釋】向壽の曰はく、「さなり、吾れも、甚だ韓の秦と合體せむことを欲し望めり」と、蘇代對へて曰はく、「甘茂は、公仲侈に秦の取りたる韓武遂を與へむことを許諾し、又秦の取りたる韓の宜陽を返却して、其の人民をして、歸りて之れに居ることを得しめむとせり、さるを、今、貴公は、地を與ふることなくして、素手にて韓を手に附けむとせらるゝは、甚だむづかしき事なり」と、

向壽曰、然則奈何、武遂終不可得也、對曰、公奚不以秦爲韓求潁川於楚、此韓之寄地也、公求而得之、是令行於楚、而以其地德韓也、公求而不得、是韓、楚之怨不解、而交走秦也、秦、楚爭彊、而公徐過楚以收韓、此利於秦、

【以秦】……秦の威光をもてなり、【寄地】……預け地なり、潁川は、もと韓の地なるが故に、斯くいへり、【走】……向ふなり、【徐】……緩やかになり、【過楚】……楚の過失を咎むるなり、

【語釋】向壽の曰はく、「さらば、如何樣にせば宜しからむ」と、蘇代對へて曰はく、「貴公は、何故に秦の威光をもて、韓の爲めに、潁川を引き渡さむことを楚に求められざる、潁川は、もと韓の領分なるを、楚の侵し取りたるものなれば、韓の預け地なり、されば、貴公楚に求めて、之れを手に入れられたらば、是れ貴公の命令、楚に行はれて、其の地をもて、韓に恩德を施さるゝならむ、之れに反して、貴公楚に求めて、之れを手に入れられざらむには、是れ韓も楚との怨み解けずして、互に秦へ走り向ひて、助力を求むるならむ、秦と楚と强きことを爭ひて、勝負の決せざる中に、貴公は、緩やかに楚の過失を咎めて、韓を手に附けられむには、此れ秦に利益あらむ」と、

【文法】郢以歟の曰はく、二論を轉じ生じて、倉遽やかなることを增せり、亦結構の法を見ると、

向壽曰、奈何、對曰、此善事也、甘茂欲以魏取齊、公孫奭欲以韓取齊、今公取宜陽以爲功、收楚、韓以安之、而誅齊、魏之罪、是以公孫奭、甘茂無事也、

【是以】……以の字は、除計ものなり、眼前慣には、なし、【無事】……仕事なきなり、

【語釋】向壽の曰はく、「此の仕方は、至極善き事なり、其の譬けは、甘茂には、魏を道具に使ひて、齊を取らむと思ひ、公孫奭は、韓を道具に使ひて、齊を取らむと思へり、さるを、今、貴公は、宜陽を取りて、手柄を立て、楚と韓とを手に附けて、之れを安んじて、秦に事へしめて、齊と魏との罪過を責め咎められむには、是れ公孫奭と甘茂とは、仕事なくして、手持ち無沙汰になりて、其の權勢を失はむ」と、是れにて、向壽と蘇代との問答は終はりたり、

甘茂竟言秦昭王、以武遂復歸之韓、向壽、公孫奭爭之、不能得、向壽、公

孫奭曲、此怨讒甘茂、茂懼、輟伐魏蒲阪、亡去、樗里子與魏講、罷兵、

【解】……止むるなり、【講】……讒に同じ、和睦するなり、

【講】然るに、甘茂は、秦ねて公仲侈に許諾せし如く、終に秦の昭王に言上して、武遂の地を重ねて韓へ返却せしかば、向壽と丞孫奭とは、之れを爭ひ止めたれども、勝ちを得ること能はざりけり、向壽も、公孫奭も、此の事に由りて、甘茂を怨みて讒言せしかば、甘茂は、誅せられむことを懼れて、魏の蒲阪を伐つことを止めて、逃亡せり、其の跡にて、樗里子は、魏と和睦して、戰爭を止めたり、

甘茂之亡、秦奔齊、逢蘇代、代爲齊使於秦、甘茂曰、臣得罪於秦、懼而遯逃、無所容跡、臣聞貧人女與富人女會績、貧人女曰、我無以買燭、而子之燭光幸有餘、子可分我餘光、無損子明、而得一斯便焉、今臣困、而君方使秦而當路矣、茂之妻子在焉、願君以餘光振之、

【解】【無所容跡】……身の置き處なきなり、【會績】……寄り合ひて、麻をうむなり、【振】……救ひ恤むなり、

【講】甘茂の秦を逃亡して、齊の國へ駈け込みしとき、途中にて、蘇代に逢へり、蘇代は、此の時、齊の爲めに、秦の國へ使者に往かむとする所なりければ、甘茂の曰はく、「臣は、此の度、罪を秦に得て、誅せられむことを懼れて、逃亡して、身の置き處なきやうになりぬ、臣が貧ねく聞き及びたるには、昔し、貧しき人の娘と、富みたる人の娘と、一つの家に寄り合ひて、麻をうみたるに、貧しき人の娘の曰はく、『我れは、物足らずして、蠟燭を買ふ力なければ、夜の仕事をすること叶はざるに、御身の蠟燭の光り、幸に餘りあれば、御身は、我れに其の餘りたる光りを分かち惠まれよ、一本の蠟燭を二人にて使はむには、御身の明かりを減らし損ずることなくして、我れは一つの便利を得るならむ』と、今臣は、日蔭の身となりて、困苦せるに、貴君は、秦への使者となりて、要路に當たられたれば、臣は、貧しき娘の如く、不自由にして、貴君は、富める娘の如く、自在なり、己れの妻子秦に在りて、呼び寄すること叶はねば、願はくは貴君の餘れる光りをもて、之れを救ひ恤まれむことを」と、

蘇代許諾、遂致使於秦、已因說秦王曰、甘茂非常士也、其居於秦、累世重矣、自殽塞及至鬼谷、其地形險易、皆明知之、彼以齊約韓、魏、反以圖秦、非秦利也、

【解】【累世】……塞王、武王、昭王の累世なり、

【講】蘇代甘茂の依頼を許諾して、遂に使ひの用向きを秦に達したれば、其の序いでをもて、秦王に敢さて曰はく、「甘茂は、尋常の士にあらずして、際立ちたる人物なり、其の秦に居りしときは、塞王以來、世々の主君に貴び重んぜられぬ、而して、殽塞より鬼谷に至るまで、其の地形の險阻なると平易なるとは、皆分明に之れを知れり、彼れ若し齊の國力をもて、韓と魏とに約束して、高遠りて秦を攻めむことを圖らば、秦の利益にあらざらむ」と、

秦王曰、然則柰何、蘇代曰、王不若重其贄、厚其祿、以迎之、使彼來、則置之鬼谷、終身勿出、秦王曰、善、卽賜之上卿、以相印迎之於齊、甘茂不往、

【解】【贄】……玉帛の進物なり、

【講】秦王之れを聞きて曰はく、「さらば、之れを如何樣にせば宜しからむ」と、蘇代の曰はく、「大王には、其の進物を手厚くし、其の俸祿を手厚くして、之れを呼び迎へたまはむには如かじ、さて、かやうにして、彼れをして、歸り來らしめたる上は、之れを鬼谷に押し込め置きて、生涯他國へ出ださぬやうにしたまへ」と、秦王の曰はく、「至極尤なり」と、やがて使ひを差し向けて、甘茂に上卿の位を賜ひ、宰相の印章を與へて、之れを齊より呼び迎へしめしに、甘茂は、危險なりと思ひて、秦へ往かざりけり、

蘇代謂齊湣王曰、夫甘茂、賢人也、今秦賜之上卿、以相印迎之、甘茂德王之賜、好爲王臣、故辭而不往、今王何以禮之、齊王曰、善、卽位之上卿、而處之、秦因復甘茂之家、以市於齊、

【解】【處】……引き留むるなり、【復】……再興するなり、【市】……恩德を賣るなり、

【講】蘇代秦より立ち戻りて、齊の湣王に物語りして曰はく、「全體、甘茂は、賢才ある人なり、今、秦之れに上卿の位を賜ひ、宰相の印章を與へて、之れを呼び迎へたれど、甘茂は、大王の下され物を有り難く思ひて、大王の臣下となりむことを好めるが故に、秦の招きを辭退して、往かざるなり、今、大王には、如何なる御仕向けをもて、之れを敬禮して、彼れの怨みを慰ぜしめたまふべき」と、齊王の曰はく、「至極尤なり」と、やがて、甘茂に上卿の位を授けて、之れを引き留めたり、秦に於ては、此の事を聞き及びて、一旦沒收せし甘茂の家を再興して、其の恩德を齊に賣りて、甘茂の心を繫きたり、

【文法】後維隆の曰はく、秦因復甘茂之家の句、前の餘光振之の意を足せりと、

齊使甘茂於楚、楚懷王新與秦合婚而驩、而秦聞甘茂在楚、使人謂楚王、

曰、願送甘茂於秦、楚王問於范蜎曰、寡人欲置相於秦、孰可、對曰、臣不足以識之、楚王曰、寡人欲相甘茂、可乎、對曰、不可、

【考證】【驩】……睦み合ふなり、

【講義】其の後、齊は、甘茂を楚の國へ使ひに遣りしに、楚の懷王は、新たに秦と緣組みをして、睦み合ひたる折りなりければ、秦は、甘茂の楚に在る由を聞き及びて、人をして、楚王に物語らせて曰はく、「願はくは甘茂を秦へ差し送られむことを」と、楚王范蜎に尋ねて曰はく、「拙者は、一人の宰相を秦へ入れ置きたく思ふなり、誰れを遣りたらば宜しからむ」と、范蜎對へて曰はく、「臣は、愚昧にして、其の人物を見分くるに足らず」と、楚王の曰はく、「幸に秦の所望もあることなれば、拙者は、甘茂を宰相としだく思ふなり、それにて宜しからむか」と、范蜎對へて曰はく、「それは宜しからず、

夫史舉下蔡之監門也、大不爲事君、小不爲家室、以苟賤不廉聞於世、甘茂事之順焉、故惠王之明、武王之察、張儀之辯、而甘茂事之、取十官而無罪、茂誠賢者也、然不可相於秦、夫秦之有賢相、非楚國之利也、

【考證】【監門】……門番なり、【不爲家室】……一家を治めぬなり、【苟賤不廉】……自先の卑劣なることばかりして、廉潔ならぬなり、戰國策には、不廉を苛廉に作れり、苛廉は、せゝこましきなり、【取十官】……十度轉役するなり、

【講義】其の宜しからざる譯けは、全體、甘茂の師匠の史舉といふ男は、下賤の門番にして、之れを大にしては、君に奉公することをせず、之れを小にしては、一家を治めず、目先の卑劣なることばかりして、廉潔ならぬ者なりと、世間に評判せられたり、然るに、甘茂は、之れに事へて、順從して、少しも師の意に背きたることなし、されば、惠王の聰明なるも、武王の能く物事を觀察せらるゝも、張儀の辯口の達者なるも、甘茂は、上手に之れに事へて、十度轉役したれども、少しも罪を得たることなし、甘茂は、誠に賢才ある者なり、さりながら、秦に宰相たらしむることは宜しからず、其の譯けは、全體、秦に賢才ある宰相あるは、楚の國の利益にあらざればなり、

且王前嘗用召滑於越、而內行章義之難、越國亂、故楚南塞厲門、而郡江東、計王之功所以能如此者、越國亂而楚治也、今王知用諸越、而忘用諸秦、臣以王爲鉅過矣、

【考證】【內行章義之難】……內行章義の四字、未だ詳かならず、召滑の內心猜み詐りて表面に恩義を飾ることなりともいへり、【鉅過】……大なる過失なり、

【講義】しかのみならず、大王には、先年、嘗て召滑といふ者を越の國へ入れ置きて、用ゐたまひしに、內行章義の難ありて、越の國亂れたるが故に、越は、南の方厲門を塞ぎて、越の通路を絕ちて、江東の地を郡にして、呉・越の城を皆楚の都邑とせられたり、大王の功業の能く此のやうに成り立ちたる譯けを考へ計るに、其の頃、越の國は亂れて、楚は治まりたればなり、今、大王には、召滑を越に用ゐることを忘れたまへり、臣は、大王の此事をもて大なる御過失なりと存ずるなり、之れを秦に用ゐることを忘れたまへり、臣は、大王の此事をもて大なる御過失なりと存ずるなり、

然則王若欲置相於秦、則莫若向壽者可、夫向壽之於秦王親也、少與之同衣、長與之同車以聽事、王必相向壽於秦、則楚國之利也、

【講義】されば、大王には、若し宰相を秦へ入れ置きたく思ひたまはゞ、向壽といふ者の宜しきに增したることなからむ、全體、向壽の秦王に於けるは、至りて親しき間柄にして、幼少の頃には、秦王と一つの著物を取り換へて著用し、成長しては、秦王と一つの車に乘り合ひて、兄弟の如く交はりなぶり、內外の事を取り扱ひたれば、大王には、屹度向壽を秦に宰相たらしめたまはゞ、楚の國の利益ならむ」と、以上、范蜎の言葉なり、

【考證】淺井虎隆の曰はく、可の字、前の欲可の字に應じたりと、

於是使使請秦相向壽於秦、秦卒相向壽、而甘茂竟不得復入秦、卒於魏、甘茂有孫、曰甘羅、

【講義】是に於て、楚王は、使者を秦へ差し立てゝ、向壽を秦に宰相たらしめむことを請ひたれば、秦は、遂に向壽を宰相とせり、而して、甘茂は、終に竟ねて秦へ入ることを得ずして、魏に卒去せり、甘茂に孫あり、名を甘羅といふ、

【考證】淺井虎隆の曰はく、此の段、向壽、樗里子、公仲、蘇代の諸人の事を牽引して、甘茂の秦を亡げて、齊へ奔りし所以の故を見せりと、

甘羅者、甘茂孫也、茂既死後、甘羅年十二、事秦相文信侯呂不韋、秦始皇帝使剛成君蔡澤於燕、三年、而燕王喜使太子丹入質於秦、秦使張唐往相燕、欲與燕共伐趙、以廣河閒之地、張唐謂文信侯曰、臣嘗爲秦昭王伐

趙、趙怨、臣曰、得唐者與百里之地、今之燕、必經趙、臣不可以行、文信侯不快、未有以彊也、甘羅曰、君侯何不快之甚也、文信侯曰、吾令剛成君蔡澤事燕三年、燕太子丹已入質矣、吾自請張卿相燕、而不肯行、

【張卿】……張公といはむが如し、

甘羅は、甘茂の孫なり、甘茂の既に死去せし後、甘羅は、僅に十二歲にて、秦の宰相なる文信侯の呂不韋の家に奉公せり、折りから、秦の始皇帝、剛成君の蔡澤を燕へ使ひに遣はして、其の國に滯在せしめらるゝこと、三箇年にして、燕王の喜、太子の丹を秦へ入れて、人質とせしかば、秦は、張唐をして、燕へ往きて、其の國の宰相たらしめて、燕と共に力を合はせて、趙を伐ちて、河間の領地を廣めむと思ひしに、張唐、文信侯に物語りして曰はく、「臣は、前方に、秦の昭王の爲めに、趙を伐ちたれば、趙は、臣を怨みて曰はく、『張唐を手に入れたらむ者には、恩賞として、百里の土地を與へむ』と、今燕へ往かば、是非とも趙を通行するならむ、然らば、臣は、趙の手に捕はるべければ、臣は、燕へは行かれぬなり」と、文信侯之れを聞きて、面白からず思ひたれど、まだ是非とも強ふるまでにはゆかざりしに、甘羅主人の顏色を見て、暮ねて曰はく、「君侯には、何故に甚だ面白からぬ御樣子なるか」と、文信侯の曰はく、「吾れ剛成君の蔡澤をして、燕の機嫌を取らしめたること三箇年にして、燕の太子の丹、已に我が國へ入りて、人質となりぬ、されば、此の度、吾れは、自ら張卿に賴みて、燕に宰相たらしめむとせしに、張卿は、故障を述べて、行くことを承知せぬなり、是れ面白からぬ譯けなり」と、

甘羅曰、臣請行之、文信侯叱曰、去、我身自請之而不肯、汝焉能行之、甘羅曰、夫項橐生七歲、爲孔子師、今臣生十二歲於茲矣、君其試臣、何遽叱乎、

甘羅之れを聞きて曰はく、「さらば、臣張卿に說きて、燕へ行かしめむことを請ふ」と、文信侯大聲を揚げて、叱り付けて曰はく、「汝は、次ぎへ下がるべし、我が身自ら之れを賴みてすら、承知せざるを、汝が如き子供の口先にて、何とて能く之れを行かしめらるべき」と、甘羅の曰はく、「夫れ、昔しの項橐といふ人は、生まれて七歲にして、聖人孔子の師匠となりきとぞ、今、臣は、生まれて茲に十二歲なれば、恩寵分別のなきにしもあらず、鬼にも角にも、君侯には、臣が智量を試みたまへ、何とて火急に叱りたまへるぞ」と、

於是甘羅見張卿曰、卿之功孰與武安君、卿曰、武安君南挫彊楚、北威燕、趙、戰勝攻取、破城墮邑、不知其數、臣之功不如也、

【武安君】……白起なり、【墮】……毀つなり、

文信侯此の一言に舌を捲きて、甘羅の望みに任せたれば、甘羅張卿に面會して曰はく、「貴殿の手柄と、武安君の白起の手柄とは、孰れか勝される」と、張卿の曰はく、「強き楚を挫折し、北の方は、燕と趙とを威し付け、戰へば勝ち、攻むれば取り、城を破り、邑を毀ちしこと、其の數を知らず、臣が手柄は及ばざるなり」と、

甘羅曰、應侯之用於秦也、孰與文信侯專、張卿曰、應侯不如文信侯專、

【應侯】……范雎なり、

甘羅の曰はく、「さらば、應侯の范雎の秦に用ゐられしと、文信侯の權を專にせるとは、孰れか勝される」と、張卿の曰はく、「應侯は文信の權を專にせるは及ばざるなり」と、

甘羅曰、卿明知其不如文信侯專、與、曰、知之、

甘羅の曰はく、「貴殿は、明白に應侯の文信侯の權を專にせるには及ばざることを知られたるか」と、張卿の曰はく、「之れを知れり」と、

甘羅曰、應侯欲攻趙、武安君難之、去咸陽七里、而立死於杜郵、今文信侯自請卿相燕、而不肯行、臣不知卿所死處矣、張唐曰、請因孺子行、令裝治行、行有日、

【杜郵】……地の名なり、其の地に聯傳ある故に、此の名あり、【孺子】……小僧なり、甘羅を指す、【令裝治行】……旅支度をせしむるなり、【行有日】……愚なく行かむとするなり、

甘羅の曰はく、「文信侯よりも權威の輕き應侯の趙を攻めむと思ひしとき、貴殿よりも手柄の多き武安君、之れを攻め難しとて、行くことを辭退せしかば、咸陽の都を退去せよと命ぜられて、咸陽を去ること十里にして、立ちどころに自殺を命ぜられて、杜郵に死にき、今、應侯よりも權威の重き文信侯、自ら武安君よりも手柄の少なき貴殿に賴みて、燕に宰相たらしめむとせるを、貴殿故障を述べられて、行くことを承知せられずば、臣は、貴殿は何時に如何なる場所にて一命を奪はるべきか、其の死に場所を心得ぬなり」と、張唐大に閉口して曰はく、「如何にも小僧の勸めに因りて、燕へ行かむことを請ふ」と、是に於て、家內の者に旅支度をせしめて、愚なく行かむとせり、

甘羅謂文信侯曰、借臣車五乘、請爲張唐先報趙、文信侯乃入言之於始皇曰、昔甘茂之孫甘羅年少耳、然名家之子孫、諸侯皆聞之、今者張唐欲稱

疾不肯行、甘羅說而行之、今願先報趙、請許遣之、始皇召見、使甘羅於趙、

【講】甘羅張唐の決心を聞きて、立ち歸りて、文信侯に物語りして曰はく、「張卿行くことを承知したれば、臣に五輛の車を借したまへ、張唐の爲めに、先づ趙へ往きて、此の事を報知せむことを請ふ」と、文信侯其の働きに感心して、御殿へ入りて、之れを始皇帝に言上して曰はく、「昔の甘茂の孫の甘羅は、幼少なるのみ、さりながら、流石に名家の子孫なれば、諸侯之れを聞き及びたり、此の度、張唐病氣なりとて、燕へ行くことを承知すまじと思ひしに、甘羅之れを說論して、行かしむることゝせり、それに就きて、今、先づ趙へ往きて、此の事を報知いたしと願ひ出でたれば、之れを許可して、趙へ遣はされむことを請ふ」と、始皇帝甘羅に御目見えを許されて、趙へ使ひに往くことを命せられたり

趙襄王郊迎甘羅、甘羅說趙王曰、王聞燕太子丹入質秦歟、曰、聞之、曰、聞張唐相燕歟、曰、聞之、

【講】趙の襄王、甘羅を城の郊外まで出迎へたるに、甘羅趙王に說きて曰はく、「大王には、燕の太子の丹の秦へ入りて人質となりたることを聞き及びたまへりや」と、襄王の曰はく、「其の事は、聞き及びたり」と、甘羅の曰はく、「さらば、張唐の燕に宰相となりて、其の國へ赴くことを聞き及びたまへりや」と、襄王の曰はく、「其の事も聞き及びたり」と、

燕太子丹入秦者、燕不欺秦也、張唐相燕者、秦不欺燕也、燕、秦不相欺者、伐趙危矣、燕、秦不相欺、無異故、欲攻趙而廣河間、王不如齎臣五城、以廣河間、請歸燕太子、與彊趙攻弱燕、趙王立自割五城以廣河間、秦歸燕太子、趙攻燕、得上谷三十城、令秦有十一、

【講】甘羅の曰はく、「それに就きては、大王に告げべき事あり、燕の太子の丹の秦へ入りて人質となりたるは、燕の秦を欺かざる證據なり、張唐の燕に宰相となりたるは、秦の燕を欺かざる證據なり、此の如く、燕、秦互に欺かざれば、兩國の力を合はせて趙を伐たむこと近からむ、燕、秦互に欺かざるは、餘の儀にあらず、趙を攻めて、河間の領地を廣めたく思ひてなり、されば、大王には、まだ燕、秦の兵の來らぬ中に、臣に五箇所の城を手渡しせられて、河間の領地を廣めしめられ、又秦に請ひて、燕の太子を歸國せしめて、秦の兵と强き趙の兵と共に扇き燕を攻められむには如かじ」と、趙王卽座に同意して、自ら五箇所の城を割きて、秦に與へて、河間の領地を廣めしめたれば、秦は、燕の太子を歸國せしめたり、是に於て、趙は、燕を攻めて、上谷の三十箇所の城を手に入れて、秦をして、其の十一箇所を所有せしめたり、

【講】甘羅は、是れにて立ち戻りて、其の報告を報告したれば、秦は、甘羅を封じて、上卿として、重ねて最初の甘茂の田地居宅を賜ひき、

【文法】郊以國の曰はく、郊中但し事を指し意を說きて、更に襲語なし、却りて明快喜ぶべしと、

太史公曰、樗里子以骨肉重、固其理、而秦人稱其智、故頗采焉、

【字解】【頗】……偏頗の義より轉じて、多き方にも少なき方にも傾くべき言葉なり、此の處は、多き方なり、【采】……其の事柄を採りて、傳記に載するなり、

【講】太史公樗里子、甘茂の事跡を論賛して曰はく、「樗里子は、秦王の骨肉至親の間柄なるもて、秦に貴び重んぜられたるは、昔ふまでもなく、當然の道理なり、而して、秦人其の智慧多きことを喜めたるが故に、頗る多く其の事柄を採りて、傳記に載せたり、

甘茂起下蔡閭閻、顯名諸侯、重彊齊、楚、甘羅年少、然出一奇計、聲稱後世、雖非篤行之君子、然亦戰國之策士也、

【字解】【閭】……名聲なり、

【講】甘茂は、下蔡の村里の賤民より起こりて、名を諸侯に顯はして、强き齊、楚に貴び重んぜられ、孫の甘羅は、幼少なれど、一つの奇計妙策を案出して、其の名聲、後の世にまで喜められたり、甘茂も、甘羅も、篤實の行ひある君子にはあらずといへども、然れども、亦戰國の世の策略ある士なり、

方秦之彊時、天下尤趨謀詐哉、

【講】此の三人は、猪智慧者にして、一人は、秦王の骨肉至親なるもて、貴び重んぜられ、一人は、下蔡の村里の賤民より起こりて、功名を成し、一人は、僅に十二歲の子供にて、大人を驚かしたり、此の三人を見るに就きても、秦の强き時に方たりて、天下の人の尤も權謀詐術に赴き向ひたることを知らるゝなり」と、

穰侯列傳第十二

穰侯魏冉者、秦昭王母宣太后弟也、其先楚人、姓芈氏、秦武王卒、無子、立其弟爲昭王、昭王母故號爲芈八子、及昭王即位、芈八子號爲宣太后、宣太后非武王母、武王母號曰惠文后、先武王死、宣太后二弟、其異父長弟曰穰侯、姓魏氏、名冉、同父弟曰芈戎、爲華陽君、而昭王同母弟曰高陵君、涇陽君、而魏冉最賢、自惠王、武王時、任職用事、

【注釋】【八子】……秦の女官の爵の名なり、秦の制、天子の妾に美人、貴人、八子、長使、少使、健仔、娙娥等の稱あり、【異父長弟】……胤違ひの目上の弟なり、【同父弟】……同腹の弟なり、【同母弟】……同腹の弟なり、

【講義】穰侯の魏冉は、秦の昭王の母の宣太后の弟なり、其の先祖は、楚の人にして、姓は芈氏といふ、秦の武王卒去して、子なかりければ、其の弟を跡目に立て、、昭王とす、昭王の母は、芈氏の出なれば、以前は、號して芈八子とせり、八子は、女官の爵の名なり、昭王の位に即くに及びて、芈八子尊號を受けて、宣太后となりぬ、宣太后は、武王の母にあらず、武王の母は、號して惠文后といふ、武王に先立ちて死去せり、宣太后に二人の弟あり、其の胤違ひの目上の弟を穰侯といふ、こは、穰縣に封ぜられたればなり、姓は魏氏、名は冉といふ、こは、其の父魏氏の人なればなり、其の腹違ひの弟を芈戎といふ、華陽君となりぬ、華陽は、皺の地なれども、後に秦に屬せり、而して、昭王の同腹の弟を高陵君、涇陽君といふ、而して、魏冉最も賢明なり、惠王、武王の時より、重き職務に任じて、國の政事を扱ひたり、

【文法】王稽損の日は〜、同異父母を殺せるは、又新たなりと、○芈坤の曰は〜、華陽君の三人の者を殺して、算末の范雎の說きて昭王を悟らしめたる案を發せりと、

武王卒、諸弟爭立、唯魏冉力爲能立昭王、昭王即位、以冉爲將軍、衛咸陽、誅季君之亂、而逐武王后、出之魏、昭王諸兄弟不善者、皆滅之、威振秦國、昭王少、宣太后自治、任魏冉爲政、

【注釋】【力】……骨折るなり、【季君】……公子の壯といふ者、己れの身分を乘り越えて、季君と號しゐるなり、

【講義】武王卒去せしに、其の弟逃、跡目に立たむことを爭ひしが、唯〻魏冉のみ、さる〻間を起こさずして、骨折りて能く昭王を立つることをせしかば、昭王位に即きて、魏冉を以て將軍として、咸陽の都を警衛せしめたり、是に於て、魏冉、公子の壯といふ者の季君と號して叛逆を企てたるを誅戮して、之れに徒黨せし武王の母の惠文后を逐ひ出して、之れを魏の國に居らしめ、昭王の兄弟逃の善からぬ者は、皆之れを誅滅せしかば、其の威勢、秦の國に振ひ渡りて、一人として敵對する者なかりけり、此の時、昭王幼少なりければ、母の宣太后、女性の身にて、自ら國を治めて、魏冉に政事を委任せり、

昭王七年、樗里子死、而使涇陽君質於齊、

【講義】昭王の七年に、樗里子死去せり、而して、秦は、涇陽君をして、齊の國に人質たらしめたり、

趙人樓緩來相秦、趙不利、乃使仇液之秦、請以魏冉爲秦相、仇液將行、其客宋公謂液曰、秦不聽公、樓緩必怨公、公不若謂樓緩曰、請爲公毋急秦、秦王見趙請相魏冉之不急、且不聽公、公言而事不成、以德樓子、事成、魏冉故德公矣、於是仇液從之、而秦果免樓緩、而魏冉相秦、欲誅呂禮、禮出奔齊、

【注釋】【秦不聽公】……戰國策にも、秦不聽とあれど、不の字は、餘計もものならむ、【毋急秦】……魏冉を宰相とせむことを急ぎて秦に請ふもとなきなり、【故】……固と通ず、戰國策には、固に作れり、

【講義】趙の人樓緩、趙より來りて、秦の宰相となりしに、趙は、之れを己れの國の利益ならずとして、仇液といふ者を秦へ往かしめて、樓緩の代はりに、魏冉を以て、秦の宰相とせむことを請はしめたり、仇液秦へ行かむとせしに、其の家の客人の宋公といふ者、仇液に物語りして曰はく、「秦に於ては、多分貴公の請ひを聽き納れて、樓緩を免じて、魏冉を宰相とするならむ、秦に於て貴公の請ひを聽き納れむには、樓緩屹度貴公を怨まむ、されば、貴公は、秦へ往かれたらば、樓緩に物語りして、『何卒貴公の爲めに、魏冉を宰相とせむことを急ぎて秦に請ふことなきやうにしたし』といはれむには如かじ、かやうに樓緩に話し置かれて、程よく之れを秦に請はれよ、秦王趙の魏冉を宰相とせむことを請ふことの急がぬことを見ば、貴公の請ひを聽き納れずして、其の儘に棄て置くならむ、貴公之れを請はれて、其の事成就せざらむには、樓子は、勸め賺かるべければ、貴公は、樓子に恩德を負はせらるゝことゝなるべけれども、樓子の跡役となるべけ

れば、言ふまでもなく、貴公を恩德ある人なりとせむ、さらば、事の成否に拘はらず、御身の爲めに宜しからむ」と、是に於て、仇液宋公の教へに從ひて、秦へ往きて、先づ樓緩に魏冉を宰相とせむことを急ぎて秦に請はざるべき由を話し置きて、樓よく之れを請ひたるに、秦は、果たして、其の請ひを聽き納れて、樓緩を免じたれば、魏冉は、秦の宰相となりぬ、魏冉既に生殺の權を得て、呂禮といふ者を誅戮せむと思ひしに、呂禮齊へ出奔せり、

昭王十四年、魏冉擧白起、使代向壽將、而攻韓、魏、敗之伊闕、斬首二十四萬、虜魏將公孫喜、

【講】昭王の十四年に、魏冉白起を推擧して、向壽に代はりて、將たらしめて、韓、魏の兩國を攻めしめしに、白起之れを伊闕に敗りて、敵の首を討ち取ること二十四萬人に及び、魏の將の公孫喜を生け捕りたり、

明年、又取楚之宛、葉、魏冉謝病免相、以客卿壽燭爲相、

【謝病】……病氣なりとの斷りをするなり、【客卿】……客分の卿なり、

【講】其の翌年に、白起又楚の宛と葉との兩地を攻め取れり、此の時、魏冉病氣なりとの斷りをして、宰相を免ぜられたれば、客分の卿の壽燭をもて、其の跡役の宰相とせり、

其明年、燭免、復相冉、乃封魏冉於穰、復益封陶、號曰穰侯、

【講】其の翌年に、壽燭免ぜられたれば、重ねて魏冉を宰相とせり、是に於て、魏冉を穰縣に封じ、重ねて定陶の知行を加增し、號して穰侯といふ、

穰侯封四歲、爲秦將攻魏、魏獻河東方四百里、拔魏之河內、取城大小六十餘、

【講】穰侯封ぜられてより、四年目に、秦の將となりて、魏を攻めたれば、魏は、河東の四百里四方の土地を獻上せり、又魏の河內を奪ひ取りしが、其の奪ひ取りたる城の數は、大小六十餘箇所なり、

昭王十九年、秦稱西帝、齊稱東帝、月餘、呂禮來、而齊、秦各復歸帝爲王、

【歸帝】……稱號を返却するなり、

魏冉復相秦、六歲而免、免二歲、復相秦、四歲而使白起拔楚之郢、秦置南郡、乃封白起爲武安君、白起者、穰侯之所任擧也、相善、於是穰侯之富、富於王室、

【任擧】……身元を保證して推擧するなり、

【講】此の時、魏冉重ねて秦に宰相たり、それより六年目に免ぜられぬ、其の免ぜられしより二年目に、重ねて秦に宰相たり、それより四年目に、白起をして、楚の都の郢を奪ひ取らしめ、秦は、其の地に南郡を置きて、我が領分とせり、是に於て、白起を封じて武安君とせり、白起は、穰侯の身元を保證して推擧せし者にして、互に仲善く交はれり、是に於て、穰侯の身代の裕福なることは、秦の王室よりも裕福になりぬ、

【文法】後難隆の日はく、前に既に魏冉の白起を擧げ、韓、魏を攻め、楚の宛、葉を取りたることを言ひ、此に又冉の白起をして楚の郢を拔かしめたることを言ひて、之れを結びて曰はく、白起者、穰侯之所任擧也と、總べて白起の功は皆穰侯に本づけることを得たりと、

昭王三十二年、穰侯爲相國、將兵攻魏、走芒卯、入北宅、遂圍大梁、梁大夫須賈說穰侯曰、臣聞魏之長吏謂魏王曰、昔梁惠王伐趙、戰勝三梁、拔邯鄲、趙氏不割、而邯鄲復歸、齊人攻衞、拔故國、殺子良、衞人不割、而故地復反、衞、趙之所以國全兵勁、而地不并於諸侯者、以其能忍難而重出地也、宋、中山數伐割地、而國隨以亡、臣以爲衞、趙可法、而宋、中山可爲戒也、

【北宅】……地の名なり、【長吏】……吏の長たる者にして、大臣のことなり、戰國策には、大臣父兄とあり、【三梁】……地の名にして、即ち

南蠻なり、田完の世家に、韓・趙を伐つ、趙利あらず、南蠻に敗ふとあり、【故國】……衛の以前の都なり、楚丘をいふ、下文の故地も亦同じ、【臣以爲】……此の臣は、長吏の自ら言へるなり、

【本紀】昭王の三十二年に、穰侯相國となりて、兵に將として、魏を攻めて、其の將の芒卯を逃げ走らしめ、北宅の地へ押し入り、遂に大梁の郭を圍みしに、梁の家老の須賈、其の國みを解かせむと思ひて、穰侯の陣屋へ往きて、穰侯に說きて曰はく、『臣が愚はく聞き及びたるには、魏の長吏大臣、魏王に物語りして曰はく、『昔し、梁の惠王、趙を伐ちて、三梁の合戰に勝利を得て、其の都なる邯鄲を乘り取られたれど、趙は、魏土地を梁に割き與へずして、一旦乘り取られたる邯鄲、重ねて其の手に戻りき、衛と趙との、國は全く子眞を殺したれど、衛の人は、土地を齊に割き與へずして、一旦乘り取られたる以前の土地、重ねて其の手に戻りき、衛と趙との、國は全くして、人に取られず、兵は勁くして、敵に阻せずして、其の地の諸侯に併呑せられざる譯けは、其の能く困難を耐へ忍びて、土地を他國へ出だし與ふ痛を免れたれば、其の國、土地を割き與ふるに連れて滅亡せり、されば、臣は、衛と趙との能く困難を耐へ忍びて、土地を割き與へて、一時の苦ることを長れ悍りたるは、我が魏の今日の手本とすべくして、宋と中山との他國に伐たるゝ度毎に、土地を割き與へて、一時の苦痛を免れたるは、我が魏の今日の戒めとすべしと存ずるなり、

秦貪戾之國也、而毋親、蠶食魏氏、又盡晉國、戰勝暴子、割八縣、地未畢入、兵復出矣、夫秦何猒之有哉、今又走芒卯、入北宅、此非敢攻梁也、且劫王以求多割地、王必勿聽也、

【管國】……韓・趙などをいふ、【暴子】……韓の將の暴鳶なり、【猒】……卽ち厭の字にて、飽くなり、

【本紀】全體、秦は、貪慾戾の國にして、人に親み交はることなし、我が魏の國を蠶の桑の葉を食ふやうに、少しづゝ追ひくに侵し取り、又韓・趙などの晉の國をも、殘らず己れの領分にせむとせり、先年、韓と戰ひて、其の將の暴子に勝ちて、韓の八縣を割き取れり、其の八縣の土地も、まだ殘らず受け取り濟みにならぬ中に、其の軍兵は、重ねて出でゝ、我が國へ攻め寄せたり、全體、秦は、義理人情を知らぬ者なれば、何程土地を得たらばとて、飽き足ることあるべき、今、又我が將の芒卯を逃げ走らしめて、北宅の地へ押し入りたるは、此れ押し切りて梁を攻め落とさむとの意にはあらぬなり、斯くして大王を威し付けて、多く土地を割き與へられむことを求めむとする手段なり、されば、大王には、是非とも秦の要求を聽き納れたまふことなかれ、

今王背楚、趙而講秦、楚、趙怒而去王、與王爭事秦、秦必受之、秦挾楚之兵、以復攻梁、則國求無亡、不可得也、願王之必無講也、王若欲講、

少割而有質、不然、必見欺、此臣之所聞於魏也、願君王之以是慮事也、

【本紀】【去王】……魏王を見棄つるなり、【少割而有質】……少しばかり土地を割き與へて、秦の人質を取ることあるなり、【臣】……此の臣は、須賈の自ら言へるなり、【君王】……穰侯を指す、戰國策には、君に作れり、

【本紀】しかのみならず、今、大王には、楚と趙との約束に背きて、秦と和睦したまはゞ、楚も趙も怒りて、大王を見棄てゝ、大王と共に先を爭ひて、秦に事へむことを請ふならむ、さらば、秦は、屹度異議なく、楚と趙との請ひを受くるならむ、然る上にて、秦は、楚と趙との兵を小脇に掻い込みて、重ねて我が梁を攻めば、我が國は、滅亡することを得られぬならむ、此の譯けなれば、願はくは、大王には、是非とも秦と和睦したまふことなからむことを、まりながら、大王には、若し秦と和睦せむと思し召されむには、それも餘儀なきことなれど、さる場合ひには、少しばかり土地を割き與へて、秦の人質を取りたまふことあるべし、さもなくして、迂闊に土地を割き與へたまはゞ、屹度秦に欺かれて、和睦の甲斐はなきことゝならむ』と、此れ臣が魏にて聞きたる長吏大臣の意見なり、願はくは君王足下には、是れをもて前途の事を思慮せられむことを、

【本紀】郭以曰の曰はく、穰侯に說きながら、故さらに魏に說く割を用ゐて、之れを劫したるは、亦是れ一體なりと、

周書曰、惟命不于常、此言幸之不可數也、夫戰勝暴子、割八縣、此非兵力之精也、又非計之工也、天幸爲多矣、今又走芒卯、入北宅、以攻大梁、是以天幸自爲常也、智者不然、

【周書】……康誥の篇なり、【惟命不于常】……天命は常に於てせずして、得失定まりなきなり、【工】……巧妙なるなり、

【本紀】書經の周書の部の康誥の篇に曰はく、『天命は常に於てせずして、得失定まりなし』と、此の語の意味は、幸福の度と、其の身に受けられぬことを言へるなり、全體、秦の韓と戰ひて、其の將の暴子に勝ちて、韓の八縣を割き取られたるは、此れ兵力の精銳なるが爲めにもあらず、計略の巧妙なるが爲めにもあらず、天より授かりたる幸福の多きに因りて、かやうに利運を得られたるなり、今、又我が將の芒卯を逃げ走らしめ、北宅の地へ押し入りて、大梁の郭を攻めらるゝは、是れ天より授かる幸福をもて、自ら常に秦にのみ存在せりと思はれたるなり、智慧ある者は、左樣に己れの天命を恃み、身の幸福を恃まぬなり、

臣聞魏氏悉其百縣勝甲以上、戍大梁、臣以爲不下三十萬、以三十萬之衆、守梁七仞之城、臣以爲湯、武復生、不易攻也、夫輕背楚、趙之兵、陵七

仞之城、戰三十萬之衆、而志必擧之、臣以爲自天地始分、以至于今、未嘗有者也、攻而不拔、秦兵必罷、陶邑必亡、則前功必棄矣、

【字解】【魏氏】……魏、趙、魏を氏といへるは、晉の家老にてありし時の稱を用ゐたるなり、【勝甲】……甲冑を著用するに堪へたる者なり、【仞】……八尺なり、【背二楚、趙之兵一】……楚と趙との兵を背後に引き受くるなり、【陵】……眼下に見下すなり、

【講義】臣が兼ねて聞き及びたるには、魏氏は、其の國の百縣の男子にて、甲冑を著用するに堪へたる者より以上の者を殘らず集めて、大梁の都に詰めさせて、必死に防禦せりとなり、臣が見込みには、此の總勢は、三十萬人に下らざらむ、三十萬人の大衆をもて、梁の都の高さ七仞もある、要害無雙の城を守らむには、臣が見込みにては、昔の殷の湯王、周の武王の如き大人物の、重ねて此の世に生まれ出づることありとも、之れを攻め落すこと、容易からざらむ、全體、秦の輕率に楚と趙との兵を背後に引き受けながら、七仞もある城を眼下に見下して、三十萬人の大衆と戰ひて、是非とも之れを丸取りにせむとする志しあるは、臣が見込みにては、天と地との始めて分かれし開闢の時代より、今日に至るまで、未だ一度も例しあらざる者ならむ、若し此の大衆の守れる、堅固なる城を攻めて、乘り取ることを得ざらむには、秦の兵は、屹度疲弊せむ、さらば、貴君の知行所なる定陶の邑は、我が大梁に近ければ、屹度魏の爲めに伐たれて滅亡せむ、さらば、今ここで立てられたる功名手柄は、屹度駄目になれて、水の泡となるべし、

【文法】流難隆の曰はく、臣以爲の字を連用して、文法無限、曲折頓挫せりと、

今魏氏方疑、可以少割收也、願君速楚、趙之兵未至於梁、亟以少割收魏、魏方疑而得以少割爲利、必欲之、則君得所欲矣、楚、趙怒於魏之先己也、必爭事秦、從以此散、而君後擇焉、

【字解】【疑】……長吏の言葉を疑ひて、まだ決せざるなり、【擇】……組み合ふべき國柄を擇ばなり、【速】……及ばなり、【亟】……速になり、【從】……韓、魏、趙、楚、燕、齊の六箇國の合從なり、合從の解は、蘇秦の傳に見えたり、

【講義】今、魏は、長吏大臣の決して秦と和睦すべからずと申し立てたる言葉を疑ひて、まだ決せざる最中なれば、秦に於ては、少しばかりの土地を割き取りて、魏の人心を手に入れらるべし、願はくは、貴君には、楚と趙との加勢の兵のまだ梁へ到著せぬ中に、速に少しばかりの土地を割き取りて和睦すべしといふことをもて、魏の人心を手に入れられむことを、魏は、長吏大臣の言葉を疑へる最中なれば、少しばかりの土地を割き與へて、和睦することをもて、己れの利益とすることを得ば、屹度之れを欲し望むならむ、さらば、貴君にも、心に欲し望まるゝ厳を得らるゝならむ、其の時、楚、趙の兩國、魏の己れに先立ちて秦と和睦せしことを怒らば、屹度各〻先を爭ひて秦に寄ふるならむ、さらば、是れにて、秦に敵する、韓、魏、趙、楚、燕、齊の六箇國の合從解散せむ、然る上にて、貴君には、嶄れなりとも組み合はるべき國柄を擇ばれよ、

且君之得地、豈必以兵哉、割晉國、秦兵不攻、而魏必效絳安邑、又爲陶開兩道、幾盡故宋、衛必効單父、秦兵可全、而君制之、何索而不得、何爲而不成、願君熟慮之、而無行危、穰侯曰、善、乃罷梁圍、

【字解】【晉國】……卽ち魏なり、【兩道】……故宋及び單父は、定陶の南道にして、安邑及び絳は、其の北道なり、【索】……求むるなり、

【講義】しかのみならず、貴君の暗て爲國の土地を手に入れられしは、いかで屹度兵力をもてせられたることゝ限るべき、兵力をもてせられずして、安〻と手に入れられし場合ひもあらむ、今、晉の國、卽ち我が魏の國を割き取られむとならば、秦の兵は、之れを攻めずとも、唯〻一言の命令の下に、魏は、屹度絳と安邑との兩地を差し出さむ、其の上に又、貴君の知行所なる定陶の便利の爲めに、南北の兩道を開通して、以前の宋の國を殘らず手に入れられたらむには、衛は、屹度單父の地を差し出さむ、さらば、秦の兵は、損ずることなく、全かるべし、而して、貴君には、其の強兵を制御指揮して、他國に威勢を示されむには、何を求められてか、得られぬことあらむ、何を行はれてか、成らざることあらむ、何事も貴君の思ひ通りになるべし、此の譯けなれば、願はくは貴君の之れを熟慮せられて、大梁を丸取りにせむとて、兵力を疲弊せしめて、定陶の知行所までをも失ふべき危きことを行はるゝことなからむことを」と、以上、須賈の言葉なり、穰侯之れを聞きて曰はく、「至極尤なり」と、是に於て、梁の圍みを解きて、其の軍勢を引き揚げたり、

明年、魏背秦、與齊從親、秦使穰侯伐魏、斬首四萬、走魏將暴鳶、得魏三縣、穰侯益封、明年、穰侯與白起、客卿胡陽、復攻趙、韓、魏、破芒卯於華陽下、斬首十萬、取魏之卷、蔡陽、長社、趙氏觀津、且與趙觀津、益趙以兵、伐齊、

【字解】【從親】……合從親睦するなり、

【講義】其の翌年に、一旦和睦したる魏は、秦に背きて、齊と合從親睦せしかば、秦は、穰侯をして、魏を伐たしめしに、此の一戰にも、勝利を得て、敵の首を討ち取ること四萬人に及び、魏の將の暴鳶を逃げ走らしめて、魏の三縣を手に入れたれば、穰侯は、其の手柄に依りて、封邑を加增せられたり、其の翌年に、穰侯將軍の白起、客分の卿の胡陽と共に、重ねて趙、韓、魏の三箇國を攻めて、魏の將の芒卯を華陽の城下に破りて、敵の首を討ち取ること十萬人に及び、魏の卷と蔡陽と長社と趙の觀津との地を取りしが、暫く趙に觀津を返し與へて、其の機嫌を取りて、秦の兵を趙の人數に益し加へて、趙をして齊を伐たしめたり、

齊襄王懼、使蘇代爲齊陰遺穰侯書曰、臣聞往來者言曰、秦將益趙甲四

萬、以伐齊、臣竊必之弊邑之王、曰、秦王明、而熟於計、穰侯智、而習於事、必不益趙甲四萬、以伐齊、是何也、

【必之弊邑之王】……齊王に懸に受け合ふなり、弊邑は、齊の國を謙遜したる言葉なり、

【解說】齊の襄王、之れを懼れて、其の兵を止めしめむとて、蘇代をして、齊の爲めに、內と手紙を穰侯に差し送らしめて曰はく、「臣道路の往來の者の風說を聞き及びたるに、曰はく、『秦は、輕なく、趙の人數に甲兵四萬人を益し加へて、齊を伐たむとする由なり』と、臣は、之れを無根の流言なりと思ひたれば、內と之れを弊邑の齊王に懸に受け合ひて曰はく、『秦王は、賢明にして、計策に熟慮せられ、穰侯は、智慧ありて、事務に練習せられたれば、屹度趙の人數に甲兵四萬人を益し加へて、齊を伐たるゝことなからむ』と、斯く受け合ひたるは何故ぞ、

夫三晉之相與也、秦之深讎也、百相背也、百相欺也、不爲不信、不爲無行、今破齊以肥趙、趙秦之深讎、不利於秦、此一也、

【解說】全體、韓、魏、趙の三晉の互に組み合へるは、秦の爲めに不利益なれば、秦は、之れを視て、強からぬ仇讎怨敵とせり、此の三箇國は、一度ならず、二度ならず、百度までも、秦に背き合ひ、百度までも、秦を欺き合ひても、信實ならぬことなりと思はず、當然の行ひなりと思はぬなり、此の三箇國の秦に對する感情の冷淡なること、此の如くなるを、今、趙に加勢をして、齊を破りて、趙の國力を肥やさむには、趙は、秦の淺からぬ仇讎怨敵なれば、秦に取りては、不利益ならむ、此れ風說の取るに足らざる第一の箇條なり、

秦之謀者、必曰、破齊弊晉、楚、而後制晉、楚之勝、夫齊罷國也、以天下攻齊、如以千鈞之弩、決潰癰也、必死、安能弊晉、楚、此二也、

【決潰癰】……慣れかゝりたる癰の膿物の口を射切るなり、

【解說】秦の爲めに謀議する者は、屹度、『趙に加勢をしたる上に、韓、魏、楚の人數を繰り出さしめて、齊を破りて、三晉及び楚の兵力を疲弊せしめたる上に、三晉と楚とに對する勝算を占めよ』といふならむ、さりながら、全體、齊は、疲弊せる國なれば、天下中の大兵をもて、齊を攻めむことは、さながら千鈞の强さ張りある弩弓をもて、潰れかゝりたる癰の膿物の口を射切るが如く、人ならば、屹度死ぬべく、國ならば、屹度亡ぶべし、何とて斯かる弱國と戰ひて、三晉及び楚の兵力を疲弊せしむることあるべき、此れ風說の取るに足らざる第二の箇條なり、

秦少出兵、則晉、楚不信也、多出兵、則晉、楚爲制於秦、齊恐不走秦、必走晉、楚、此三也、

【解說】今、齊を伐たむとするに當たりて、秦は、少しばかり兵を出だして、專ら他國の兵をもて、之れを伐たむとせば、三晉も、楚も、秦の擧動を信用せずして、力を盡くさゞらむ、之れに反して、秦は、多く兵を出だして、他國に先立ちて、之れを伐たむとせば、三晉も、楚も、秦に制御せられむことを氣遣ひて、やはり力を盡くさゞらむ、齊に於ては、三晉も、楚も、秦の爲めに力を盡くさゞることを見て取らば、多分秦へは走り附かずして、屹度三晉及び楚へ走り附くならむ、此れ風說の取るに足らざる第三の箇條なり、

秦割齊以啖晉、楚、晉、楚案之以兵、秦反受敵、此四也、

【啖】……喰に同じ、利益をもて、人を釣り込むなり、【案】……留め置くなり、

【解說】秦は、齊に勝ちたる後に、其の地を割きて、三晉と楚とに與へて、利益をもて、之れを我が手に釣り込まむとするに、三晉も、楚も、其の貪ひたる地に兵隊を留め置かば、秦は、反りて敵を引き受くることゝならむ、此れ風說の取るに足らざる第四の箇條なり、

是晉、楚以秦謀齊、以齊謀秦也、何晉、楚之智、而秦、齊之愚、此五也、

【解說】以上の四箇條を勘考するに、是れ三晉と楚とは、秦を道具に使ひて、齊を取らむことを謀り、又齊を道具に使ひて、秦を取らむことを謀るなり、何故に三晉と楚とは、かやうに智慧ありて、秦と齊とは、かやうに愚昧なるぞ、此れ風說の取るに足らざる第五の箇條なり、

故得安邑、以善事之、亦必無患矣、秦有安邑、韓氏必無上黨矣、取天下之腸胃、與出兵而懼其不反也、孰利、臣故曰、秦王明、而熟於計、穰侯智而習於事、必不益趙甲四萬、以伐齊矣、於是穰侯不行、引兵而歸、

【善事之】……善く其の地の人民を待遇するなり、【腸胃】……安邑の地勢をいふ、【不反】……敗亡して、秦へ戻らぬなり、

【解說】されば、秦は、趙に加勢をして、齊を伐たしむることを見合はせて、善く其の地の人民を待遇せむには、亦屹度後ゝの心配なからむ、秦安邑を所有せば、韓は、屹度上黨の地を支ふることなからむ、天下を人の身體に喩へむには、魏の安邑の地勢は、さながら腸の如く胃の如き大切なる場所なり、此の大切なる場所を取ると、趙の爲めに加勢の兵を出だして、敗亡して、秦へ戻らざらむことを懼るゝとは、孰れか秦の利益なるべき、言ふまでもなし、此の大切なる場所を取るは、利益にして、趙の爲めに加勢の兵を出だして、敗亡して、秦へ戻らざらむことを懼るゝは、不利益ならむ、臣は、此の譯けなれば、『秦王は、賢明にして、計策に熟慮せられ、穰侯は、智慧ありて、事務に練習せられたれば、屹度趙の人數に甲兵四萬人を益し加へて、齊を伐たるゝことなからむ』と齊王に受け合ひたり」と、以上、蘇代の手紙の文言なり、是に於て、穰侯其の文言に釣り込まれて、齊へ行かずして、其の兵隊を引き連れて歸りたり、

昭王三十六年、相國穰侯言客卿竈、欲伐齊取剛、壽、以廣其陶邑、於是魏人范睢自謂張祿先生、譏穰侯之伐齊、乃越三晉、以攻齊也、以此時汙說秦昭王、昭王於是用范睢、范睢言宣太后專制、穰侯擅權於諸侯、涇陽君、高陵君之屬太侈、富於王室、於是秦王悟、乃免相國、令涇陽之屬、皆出關就封邑、穰侯出關、輜車千乘有餘、穰侯卒於陶、而因葬焉、秦復收陶爲郡、

【汙】……干と通ず、仕へを求むるなり、【輜車】……衣類諸道具を載する荷車なり、

【昭王】昭王の三十六年に、相國の穰侯、宋分の卿の竈といふ者に相談して、齊を伐ちて、剛と壽との二縣を取りて、其の知行所の定陶の邑を廣めむと思ひたり、是に於て、魏の人范睢、自ら張祿先生と名乘りて、穰侯の齊を伐つは、三晉の地を通り越して、齊を攻むることなれば、秦の不利益なる由を非難して、此の時をもて、仕へを求めて、秦の昭王に己れの意見を敍されば、昭王は、猶は其の地盤を固めむと思ひて、宣太后の專ら政事を切り盛りし、穰侯の威權を諸侯の間に自慢にし、涇陽君、高陵君の輩の甚だ奢侈にして、秦の王室よりも裕福に暮らせることを言上せり、是に於て、秦王大に心付きて、斯くては國家の爲めにならじとて、相國の穰侯を免じ、涇陽君の輩をして、皆都外れの園所を出でゝ、銘々の封邑に土著せしめしが、穰侯の關所を出づるとき、其の衣類諸道具を載せたる荷車の多きこと、千輛餘りに及びたり、斯くて、穰侯は、定陶の邑に卒去せしかば、其の儘、此の地に葬れり、是に於て、秦は、重ねて定陶を取り上げて、其の直轄の郡としき、

【又云】按雅陵の曰はく、前に益封陶一と云ひ、此に復た欲レ廣二其陶邑一と云ひて、范睢の間に乘じて諫すべきことを見せり、故に太史公特に於レ是の字を下し、又以二此時一汙說の數字を下せり、穰侯は、幾を知る士たることを得むやと、

太史公曰、穰侯昭王親舅也、而秦所以東益地弱諸侯、嘗稱帝於天下、天下皆西鄉稽首者、穰侯之功也、

【親舅】……親しき母の兄弟なり、穰侯は、宣太后の弟なるが故に、斯く言へるなり、【鄉】……嚮に同じ、向ふなり、【稽首】……頭を地に付けて、暫く止むるなり、

【諸侯】太史公穰公の事跡を論贊して曰はく、「穰侯の身柄を尋ぬれば、昭王の親しき母の弟なり、而して、秦の東の方に土地を廣め益し、列國の諸侯の力を弱め、一時西帝といふ稱號を天下に唱へ、天下の人よ、皆西へ向ひて頭を地に付けて、秦に臣とし事へたるは、穰侯の在職中の手柄なり、

及其貴極富溢、一夫開說、身折勢奪、而以憂死、況於羈旅之臣乎、

【一夫】……一人の匹夫なり、范睢を指す、

【身折】然るに、其の貴きこと至り極まり、富めること盈ち溢るゝばかりになりたるに及びて、一人の匹夫の范睢の昭王に申し立てたる廉に因りて、其の一身は挫折せられ、其の權勢は剝奪せられて、憂愁をもて世を去りき、身柄も高く、手柄も多き、穰侯にてすら、此の通りなれば、況して身柄も賤しく、手柄も少なき、渡り者の、富貴を保つべからざることは、言ふまでもなきことなり」と、

【又云】孫曠の曰はく、佳なる處は、多く國策に本づけりと、○陳仁錫の曰はく、太史公穰侯の傳を作りて、相となり、相を免ぜられ、復た相たることを歷叙して、再び秦に功ありたることを見せりと、

白起王翦列傳第十三

白起者、郿人也、善用兵、事秦昭王、昭王十三年、而白起爲左庶長、將而擊韓之新城、是歲、穰侯相秦、舉任鄙以爲漢中守、

【左庶長】……秦の爵の名なり、

【郿】白起は、郿の人なり、軍學の達人にして、上手に兵を運用せり、秦の昭王に奉公して、數度の戰功を立てき、昭王の十三年に、白起始めて左庶長となりて、兵に將として、韓の新城を擊てり、是の歲、穰侯の魏冉、秦の宰相となりて、任鄙といふ者を擧げ用ゐて、漢中の太守とせり、

其明年、白起爲左更、攻韓、魏於伊闕、斬首二十四萬、又虜其將公孫喜、拔五城、起遷爲國尉、涉河、取韓安邑以東到乾河、

【左更】……秦の爵の名なり、【國尉】……武官にして、太尉のことなり、

【其明年】其の翌年に、白起秦の左更となりて、韓、魏の兩國の軍勢を伊闕に攻めて、敵の首を討ち取ること、二十四萬人に及びたるが上に、又其の將の公孫喜を生け捕り、五箇所の城を乘り取れり、其の手柄に依りて、白起左更より遷りて、國尉となりぬ、それより、河水を涉りて、韓の安

邑の東の方より乾河に到るまでを取れり、安邑に、以前は、魏の地にして、秦へ差し入れたる者なれど、其の地より東の方は、皆韓の元地なれば、韓の安邑といへるなり、

明年、白起爲大良造、攻魏拔之、取城小大六十一、明年、起與客卿錯、攻垣城、拔之、後五年、白起攻趙、拔光狼城、

【平釋】【大良造】……秦の爵の名なり、

【講義】其の翌年に、白起大良造となりて、魏を攻めて、之れを乘り取りしが、其の乘り取りたる城の數は、大小六十一箇所なり、其の翌年に、白起客分の卿の司馬錯と共に、河東の垣城を攻めて、之れを乘り取れり、其の後五年目に、白起趙を攻めて、光狼城を乘り取れり、

後七年、白起攻楚、拔鄢、鄧五城、其明年、攻楚、拔郢、燒夷陵、遂東至竟陵、楚王亡去、郢、東走徙陳、秦以郢爲南郡、白起遷爲武安君、武安君因取楚、定巫、黔中郡、

【平釋】【遷爲武安君】……武安君に封ぜられたるなり、遷は、封の誤まりなるか、又は餘計なのならむ、

【講義】其の後、七年目に、白起楚を攻めて、鄢と郢との二邑の五箇所の城を乘り取れり、其の翌年に、白起楚を攻めて、郢の都を乘り取り、夷陵を燒き拂ひて、遂に東の方竟陵まで押し寄せしに、楚王郢を亡げ去りて、東へ走りて、陳に都を徙したれば、秦は、其の乘り取りたる郢をもて、南郡とせり、其の手柄に依りて、白起武安君に封ぜられぬ、武安君因りて楚の國を取りて、巫の地と黔中郡とを平定せり、

昭王三十四年、白起攻魏、拔華陽、走芒卯、而虜三晉將、斬首十三萬、與趙將賈偃戰、沈其卒二萬人於河中、昭王四十三年、白起攻韓陘城、拔五城、斬首五萬、四十四年、白起攻南陽太行道、絕之、

【平釋】【三晉將】……通鑑には、三將に作れり、

【講義】昭王の三十四年に、白起魏を攻めて、華陽を乘り取り、魏の將の芒卯を逃げ走らしめて、三人の將を生け捕り、敵の首を討ち取ること、十三萬人に及べり、それより、趙の將の賈偃と戰ひて、其の兵卒二萬人を河水の中に沈め殺せり、四十三年に、白起韓の陘城を攻めて、五箇所の城を乘り取り、敵の首を討ち取ること、五萬人に及べり、四十四年に、白起韓の南陽の太行の道筋を攻めて、韓と太行との通路を絶ち切れり、

四十五年、伐韓之野王、野王降秦、上黨道絕、其守馮亭與民謀曰、鄭道已絕、韓必不可得爲民、秦兵日進、韓不能應、不如以上黨歸趙、趙若受我、秦怒必攻趙、趙被兵、必親韓、韓、趙爲一、則可以當秦、因使人報趙、

【平釋】【野王】……韓の縣なり、【鄭】……韓の都なり、【爲民】……己れの人民として支配するなり、

【講義】四十五年に、白起韓の野王縣を伐ちたるに、野王縣秦に降參せしかば、韓は、屹度此の上黨の人民を己れの人民として支配することを得られざる民と相談して曰はく、「韓の都の鄭への通路は、最早斷絕したれば、韓は、屹度此の上黨の人民を己れの人民として支配するこ

らむ、秦の兵は、一日增しに進み來れども、韓は、應援すること能はざれば、此の儘にては、自滅すべし、此の儘自滅せむよりは、今の内に、上黨をもて、趙へ歸服せむには如かじ、趙若し我が地を受け入れむには、秦は、怒りて、屹度趙を攻むるならむ、趙は、秦の兵を被らば、屹度加勢を頼まむとて、韓と中睦くならむ、韓と趙と一致せば、其の力にて、秦に敵對せらるべし」と、上黨の人民、此の相談に同意せしに因りて、馮亭人を趙へ差し立てゝ、上黨は趙の配下に屬したき由を報告せしめたり、

趙孝成王與平陽君、平原君計之、平陽君曰、不如勿受、受之禍大於所得、平原君曰、無故得一郡、受之便、趙受之、因封馮亭爲華陽君、

【平釋】【平陽君】……平原君の弟の趙豹なり、

【講義】趙の孝成王、馮亭の申し込みを聞きて、平陽君、平原君の二人と上黨を受け入るべしや否やを評議せしに、平陽君の曰はく、「己れの考へにては、之れを受け入るゝことなからむには如かじ、其の譯は、若し之を受け入れたらむには、屹度秦に怒らるべければ、其の禍は、上黨を手に入れたる利益よりも大ならむと思はるればなり」と、平原君の曰はく、「己れの考へにては、何等の事故もなく、容易く一郡を手に入れらるゝことなれば、之れを受け入れむかた、我が國に取りては便利ならむ」と、趙の孝成王、平原君の議に從ひて、遂に之れを受け入れて、己れの領分とし、それに就きて、馮亭を封じて、華陽君とせり、

【又注】淺稚隆の曰はく、太史公中原君の傳に於て、其の利は智をして昏からしむと論じたるは、此れを以てなりと、

四十六年、秦攻韓緱氏、藺、拔之、四十七年、秦使左庶長王齕攻韓、取上黨、

上黨民走趙、趙軍長平、以按據上黨民、

【字解】【緱氏】……韓の邑なり、【按據上黨民】……軍勢を留め置きて、其の地を足溜まりとして、上黨の人民を保護するなり、

【輯考】四十六年に、秦は、韓の緱氏と陘との二邑を攻めて、之れを乘り取れり、四十七年に、秦は、左庶長の王齕をして、韓を攻めしめて、上黨を取りしに、上黨の人民、趙を指して、逃げ込みたれば、趙は、塞て置き離しとて、長平に陣取りて、軍勢を留め置きて、其の地を足溜まりとして、上黨の人民を保護せり、

【文法】茅坤の曰はく、王齕以下は、白起の本傳にあらず、而して、本末を附載せるは、秦の陰かに白起をして兵に將たらしめて、遂に長平の勝ちありしを以ての故なりと、

四月、齕因攻趙、趙使廉頗將、趙軍士卒犯秦斥兵、秦斥兵斬趙裨將茄、六月、陷趙軍取二障四尉、

【字解】【斥兵】……物見の兵なり、【裨將】……裨は、輔くるなり、輔助の將にて、即ち副將なり、【二鄣】……二箇所の出丸なり、【四尉】……四人の尉官なり、

【輯考】四月に、王齕趙の人數の押し出したるに付け入りて、趙を攻めたれば、趙は、廉頗を將たらしめて、之れを防禦せしめたり、然るに、趙の軍隊の士卒、秦の物見の兵に突き掛かりたれば、秦の物見の兵、之れと合戰して、趙の副將の茄といふ者を討ち取れり、此の合戰を手始めとして、秦の兵は、六月に、趙の軍勢を陷れて、二箇所の出丸を乘り取り、四人の尉官を生け捕れり、

七月、趙軍築壘壁而守之、秦又攻其壘、取二尉、敗其陣、奪西壘壁、廉頗堅壁以待秦、秦數挑戰、趙兵不出、趙王數以爲讓、而秦相應侯、又使人行千金於趙、爲反間曰、秦之所惡、獨畏馬服子趙括將耳、廉頗易與、且降矣、趙王既怒廉頗軍多失亡、軍數敗、又反堅壁不敢戰、而又聞秦反間之言、因使趙括代廉頗將以擊秦、

【字解】【壘壁】……取り手なり、【反間】……廻し者なり、【馬服】……趙括の父の馬服君に封ぜられたる趙奢なり、

【輯考】七月に、趙の軍勢は、取り手を築きて、之れを守りしに、秦は、又其の取り手を攻めて、二人の尉官を生け捕り、其の陣營を敗りて、西の方の取り手を奪ひ取れり、廉頗は、跡の取り手を堅固に守りて、秦の兵を持ち受けたれば、秦の兵は、度々之れに近寄りて、戰爭を仕掛けたれと、趙の兵は、決して出でざりしに、趙王廉頗の堅固に守れるは、迂闊に敵の手に乘ちぬ軍略なるを知らずして、臆病未練の仕方なりと思ひて度々使者を遣はして、何故に早く敵を擊ち拂はぬかと責め咎めたり、而して、秦の宰相なる應侯の范雎、又人をして、千金を趙に蒔き散らさしめ、廻し者を使ひて、言ひ觸らさせて曰はく、「秦の惡み嫌へるは、獨り馬服君の趙奢の子の趙括の趙の將となりて、此の戰場に臨まむことを長れ憚るばかりにて、其の餘の者は、掛念せざるなり、今の廉頗の如き者は、此方の仲間に引き入れ易き人物にて、惡なく降參するならむ」と、趙王既に廉頗の軍勢の散失死亡せし者多くして、度々敗軍を取り、又國王の催促を受けながら、反りて取り手を堅固に守れるのみにして、押し切りて合戰せざるを怒れるが上に、又秦の廻し者の言葉を聞き込みたれば、愈々廉頗は役に立たぬ者なりと思ひ、且つ秦にては眞に趙括を長れ憚ることゝ思ひて、趙括をして、廉頗に代はりて、將たらしめて、秦の兵を擊たしめたり、

秦聞馬服子將、乃陰使武安君白起爲上將軍、而王齕爲尉裨將、令軍中有敢泄武安君將者斬、趙括至、則出兵擊秦軍、秦軍詳敗而走、張二奇兵以劫之、趙軍逐勝、追造秦壁、壁堅拒、不得入、而秦奇兵二萬五千人、絕趙軍後、又一軍五千騎、絕趙壁間、趙軍分而爲二、糧道絕、而秦出輕兵擊之、趙戰不利、因築壁堅守、以待救至、

【字解】【奇兵】……敵の正面より向ふを正兵といひ、横合ひより擊つを奇兵といふ、【劫】……威し付けて、唆ひ止むるなり、【逐勝】……勝ちに乘じて、逐ひ掛くるなり、【造】……至るなり、

【輯考】秦にては、計略通り廉頗の代はりに馬服君の趙奢の子の趙括の趙の將となりたる由を聞きて、内々にて、武安君の白起をして、上將軍たらしめ、今までの將軍の王齕をして、尉官の副將たらしめて、軍中に嚴令して曰はく、「今度新たに武安君の將となりたることを憚りもなく敵方へ泄らす者あらば、容赦なく切り棄てむ」と、是れ戰爭の名人なる白起の名前を包み匿して、趙括に油斷せしめむ手段なり、趙括は、斯くとも知らず、長平の取り手へ到着して、即座に兵を繰り出して、秦の軍勢を擊ちて、一擧に勝ちを取らむとせしに、秦の軍勢は、詐りて敗軍したる眞似をして逃げ走り、敵の横合ひより擊つべき二手の奇兵を張り設けて、之れを威し付けて、唆ひ止めむとて待ち構へたり、趙の軍勢は、秦の軍勢の扇れ立ちたるを見て、勝ちに乘じて、逐ひ掛けて、秦の取り手まで追ひ至りしに、取り手の拒ぎ堅固にして、其の中へ打ち入ることを得ず、而して、秦の奇兵二萬五千人は、趙の取り手の間を絶ち切りたれば、趙の軍勢は、秦の取り手に押し寄せたる者と、己れの取り手に殘りたる者との二つに分かれて、外に在る者は、引き揚ぐること叶はず、内に在る

者は、後詰めに出づること叶はず、兵糧を運送すべき道筋さへ斷絶せり、而して、秦は、手輕に身支度したる兵卒を繰り出して、取り手の外まで來りたる趙の軍勢を擊ちたれば、趙の軍勢は、之れと戰ひて、勝利を得ず、因りて、其の儘、其の處に取り手を築きて、堅固に守りて、救ひの兵の至るを待てり、

秦王聞趙食道絶、王自之河内、賜民爵各一級、發年十五以上、悉詣長平、遮絶趙救及糧食、至九月、趙卒不得食四十六日、皆内陰相殺食、來攻秦壘、欲出、爲四隊、四五復之、不能出、其將軍趙括出銳卒自搏戰、秦軍射殺趙括、括軍敗、卒四十萬人降武安君、

【語釋】【詣】……至るなり、【四五復之】……四五度之れを繰り返すなり、【搏戰】……手づから擊ち合ふなり、

【解說】秦王は、白起を遣はしたる後に、戰爭の模樣如何と待ち構へたるに、趙括白起の計略に嵌まりて、其の軍勢二つに分かれて、兵糧を運送すべき道筋さへ斷絶せりとの注進を聞きたれば、秦王は、此の機を外すべからずとて、自身に河内まで出張りて、人民に爵各〻一級づゝを賜ひて、其の志氣を勵ましし、十五歲以上の者を徵發して、殘らず長平へ至らしめて、趙の救ひの軍勢、及び兵糧を遮り絶たしめたれば、九月に至りて、趙の士卒は、食物を手に入れざること四十六日間に及び、增味方どち内〻にて殺し合ひて、其の肉を食ひし程、それも長くは續かずして、苦し紛れに、來りて秦の取り手を攻めて、外へ出でむと思ひて、四手に分かれて、四五度之れを繰り返したれど、秦の手配り嚴重にして、出づること叶はざりしかば、其の將軍の趙括は、餘儀なく最後の決心をして、精銳なる士卒を押し出して、自ら陣頭に立ちて、烈し〻手づから擊ち合ひしに、秦の軍勢、趙括を射殺したり、趙括の軍勢遂に敗れて、其の士卒四十萬人、武安君の手に降參せり、

武安君計曰、前秦已拔上黨、上黨民不樂爲秦、而歸趙、趙卒反覆、非盡殺之、恐爲亂、乃挾詐而盡坑殺之、遺其小者二百四十人歸趙、前後斬首虜四十五萬人、趙人大震、

【語釋】【不樂爲秦】……秦の人民となることを面白く思はぬなり、【挾詐】……詐僞の手段を構ふるなり、【坑殺】……谷底に落とし入れて殺すなり、【震】……身振ひをして懼るゝなり、

【解說】武安君其の降人の處置を勘考して曰はく、「前方に、秦は、已に韓の上黨を乘り取りしかど、上黨の人民は、秦の人民となることを面白く思はずして、趙（歸服せり、此の先例もあるが上に、趙の士卒は、反覆して、心の變はり易き者なれば、殘らず之れを殺さゞらむには、後日に亂を起こさむことを氣遣はるゝなり」と、是に於て、詐僞の手段を構へて、殘らず之れを谷底に落とし入れて殺し、其の中の弱小なる者僅に二百四十人を殘して、趙へ放ち歸して、秦の兵威を知らしめたり、此の合戰の前後始終の間に於て、敵の討ち首生け捕りを通計すれば、四十五萬人の多きに達したれば、趙の人〻大に身振ひをして懼れたり、

【文法】郎以戲の曰はく、長平の一戰、戰事を詳かにし、曲折を備へたり、而して、文特に嚴峻なりと、

四十八年十月、秦復定上黨郡、秦分軍爲二、王齕攻皮牢拔之、司馬梗定太原、韓、趙恐、使蘇代厚幣說秦相應侯曰、卽圍邯鄲乎、曰、然、

【語釋】四十八年の十月に、秦は、長平の戰ひに大勝利を得たることなれば、前に取りたる上黨郡を鎭ねて平定して、遂に已れのものとせり、秦は、又軍勢を二手に分けて、王齕と司馬梗とに屬したれば、王齕は、其の一軍を引き連れて、皮牢の地を攻めて、之れを乘り取り、司馬梗は、其の一軍を引き連れて、太原を平定せり、韓、趙の二國、其の勢に恐怖して、蘇代をして、手厚き進物を持參せしめて、秦の宰相なる應侯の范雎に說かしめて曰はく、「貴國の武安君の白起は、趙の馬服君の趙奢の子の趙括を生け捕りにせしか」と、應侯の曰はく、「さなり」と、蘇代又曰はく、「さらば、是れより直ちに趙の都の邯鄲を圍まむ積もりなるか」と、應侯の曰はく、「さなり」と、

趙亡、則秦王王矣、武安君爲三公、武安君所爲秦戰勝攻取者七十餘城、南定鄂、郢、漢中、北擒趙括之軍、雖周、邵、呂望之功、不益於此矣、今趙亡、秦王王、則武安君必爲三公、君能爲之下乎、雖無欲爲之下、固不得已矣、

【語釋】【秦王王】……秦王は天下に王とならむといふことなり、【三公】……太尉と丞相と御史大夫とならむ、【周、邵、呂望】……周公旦と召公奭と太公望呂尙となり、

【解說】蘇代又曰はく、「秦の兵力をもて邯鄲を圍まむには、趙は滅亡するならむ、趙滅亡せば、秦王は天下に王となるゝならむ、秦王天下に王となられむには、武安君は太尉、丞相、御史大夫の三公の中に昇進するならむ、武安君の、秦の爲めに、敵軍と戰へば、屹度勝ち、敵地を攻むれば、

吃度取りて、其の乘り取りたる城の數は、七十餘箇所に及びたり、而して、南の方は、楚の郢と鄢と漢中とを平定し、北の方は、趙の趙括の軍勢を生け捕りにしたる手際を見れば、昔の周公旦、召公奭、太公望呂尙の、周の武王を輔佐して、天下を取りし手柄は、慶大なりといふとも、此の武安君の手柄には益さゞらむ、されば、今、若し趙滅亡して、秦王天下に王となられむには、武安君は、其の手柄に依りて、吃度三公の中に昇進するならむ、然るときは、貴君は、能く武安君の下役となりて、其の地位に安んぜらるべきか、たとひ貴君は、武安君の下役となることを嫌はるとも、其の時の勢ならば、餘儀なく、尻に附かるゝならむ、かやうに觀察するときは、趙を攻め亡ぼして、武安君の手柄を成すは、貴君の爲めに面白からぬ結果なるべし、

秦嘗攻韓、圍邢丘、困上黨、上黨之民、皆反爲趙、天下不樂爲秦民之日久矣、今亡趙、北地入燕、東地入齊、南地入韓、魏、則君之所得民、亡幾何人、故不如因而割之、無以爲武安君功也、

【亡幾何人】……何程の人數もなきなり、

【語釋】秦は、前方に韓を攻めて、邢丘を圍みて、上黨を困ましめしに、上黨の人民は、秦を嫌ひて、反りて趙へ歸服して、趙の爲めに働けり、天下中の人民の、秦の人民となりて、其の支配を受くることを、面白からぬことに思へるは、久しき以前よりのことにて、今日に始まりたるにあらず、今、趙を攻め亡ぼさば、其の北の方の土地人民は、燕の手に入り、南の方の土地人民は、韓、魏の手に入らむ、さらば、貴君の手に入れられむ人民は、何程の人數ゝなからむ、此の譬ひなれば、貴君は、武安君の攻むるに因りて、韓、趙の恐怖せるを機會として、此の兩國の土地を割き取りて、和睦を聽き納れて、武安君の趙を攻め亡ぼさむ手柄を打ち消されむには如かじ」と、以上、蘇代の言葉なり、

於是應侯言於秦王曰、秦兵勞、請許韓、趙之割地以和、且休士卒、王聽之、割韓垣雍、趙六城以和、正月、皆罷兵、武安君聞之、由是與應侯有隙、

【正月】……卽ち四十八年の十月なり、秦は、夏の世の曆を用ゐて、十月を歲首とせり、

【語釋】是に於て、應侯己れの利益の爲めに、秦王に言上して曰はく、「秦の兵は、長き の戰爭にて、疲勞したれば、韓、魏の土地を割き分けて和睦せむとの望みを許容して、一先づ士卒を休息せしめむことを請ふ」と、秦王應侯の底意を知らずして、之れを聽き納れて、韓の垣雍の地と、趙の六箇所の城とを割き取りて、此の兩國と和睦して、正月に、皆軍兵を引き揚げしめて、戰爭を止めさせたり、武安君は、應侯の蘇代に戰かれて、己れの邪魔をせしことを聞き込みたれば、是れに由りて、應侯と中惡しくなりぬ、

【文法】王齕の曰はく、武安君の應侯と隙あることを次いでたること、置けるが如しと、

其九月、秦復發兵、使五大夫王陵攻趙邯鄲、是時武安君病、不任行、四十九年正月、陵攻邯鄲、少利、秦益發兵佐陵、陵兵亡五校、武安君病愈、秦王欲使武安君代陵將、

【五大夫】……秦の爵の名なり、【五校】……五人の將校なり、八百人を校とす、校毎に一人の尉官あり、

【語釋】其の年の九月に、秦は重ねて兵を發して、五大夫の王陵を將として、趙の都の邯鄲を攻めしめしが、是の時、武安君は、病氣の爲めに、出陣することを叶はざりけり、四十九年の正月に、王陵邯鄲を攻めて、勝利を得ること少なかりしかば、秦は、益ゝ後詰めの兵を發して、王陵に加勢せしめたれど、其の甲斐なくして、王陵の兵は、五人の將校を失ひたり、折りから、武安君の病氣平愈せしかば、秦王武安君をして、王陵に代はりて、將たらしめて、邯鄲を攻め落とさむと思ひたり、

武安君言曰、邯鄲實未易攻也、且諸侯救日至、彼諸侯怨秦之日久矣、今秦雖破長平軍、而秦卒死者過半、國內空、遠絕河山、而爭人國都、趙應其內、諸侯攻其外、破秦兵必矣、不可、秦王自命不行、乃使應侯請之、武安君終辭不肯行、遂稱病、

【語釋】【絕】……橫切るなり、

【語釋】然るに、武安君其の征伐の不利益なることを言上して曰はく、「趙の都の邯鄲は、實にまだ容易くは攻められぬなり、列國の諸侯の趙を救はむとする加勢の人數、日ゝに到著せむとせり、彼の列國の諸侯の秦を怨めるは、久しき以前よりのことにて、今日に始まりたるにあらず、今、秦は、長平の戰ひに、趙の軍勢を打ち破れりとはいへど、秦の士卒の死亡せし者も、半分以上に達して、國內の兵數空虛になりぬ、さるを、此の際、遙ゝ河水高山を橫切りて、人の國都を取らむことを爭ふは、極めて危險なることなり、若し邯鄲を攻むるとき、敵は、內外打ち合はせて、趙は、其の內より諸侯の兵に應援し、諸侯は、其の外より秦の兵を攻め擊たば、秦の兵を破らむこと必定ならむ、今、彼れ此れの形勢を料り見るに、邯鄲を攻むることは宜しからず」と、秦王之れを聽き納れ〻して、自ら是非とも行くべしと命じたれど、武安君行かざりしかば、應侯をして之を賴み請はしめたれど、武安君終に辭退して、行くことを承知せずして、遂に病氣なりと申し立て、、己れの家に引き

說もりたり、

秦王使王齕代陵將、八九月、圍邯鄲、不能拔、楚使春申君及魏公子將兵數十萬攻秦軍、秦軍多失亡、武安君言曰、秦不聽臣計、今如何矣、

【秦王使】秦王儉儀なく、王齕をして、王陵に代はりて、將たらしめしに、八月九月の二箇月の間、邯鄲を圍みたれど、之れを乘り取ること叶はざりけり、折りから、楚は、春申君及び魏の公子をして、兵數十萬人に將たらしめて、秦の軍勢を攻めさせたれば、秦の軍勢、多く散失死亡せり、武安君此の敗軍を聞き及びて、人に語りて曰はく、「秦は、臣が計策を聽き納れずして、分別もなく、邯鄲を攻め落とさむとせしが故に、此の如く失敗せり、今に及びて、臣が諫言は、是れ如何」と、

秦王聞之怒、彊起武安君、武安君遂稱病篤、應侯請之、不起、於是免武安君爲士伍、遷之陰密、武安君病未能行、居三月、諸侯攻秦軍急、秦軍數卻、使者日至、秦王乃使人遣白起、不得留咸陽中、

【爲士伍】……官爵を削りて、士卒の仲間に組み入るゝなり、

【秦王武安君】秦王武安君の言葉を聞き及びて、立腹して、無理に武安君を引き起こして、戰地へ遣らむと思ひしに、武安君遂に病氣危篤なりと申し立てゝ、動かざりしかば、應侯之れを賴み請ひたれど、やはり自宅に引き籠りて、動かざりけり、是に於て、秦王武安君の役目を免じ、其の官爵を削りて、士卒の仲間に組み入れて、之れを陰密といふ地へ遷さむとせしに、武安君全く病みて、まだ其の土地へ引き移ること叶はざりけり、斯くて、其の後、咸陽の都に居ること、三箇月程になりしに、俄に加勢せる諸侯の人數の秦の軍勢を攻むること火急になりて、秦の軍勢頗る退却せしかば、其の勢きを注進する使者、毎日戰地より到來せり、是に於て、秦王白起を憎むこと愈〻深くなりて、人に言ひ付けて、白起を逐ひ拂はせて、咸陽の中に身を置くことを得ざらしめたり、

武安君既行、出咸陽西門十里、至杜郵、秦昭王與應侯羣臣議曰、白起之遷、其意尙快快不服、有餘言、秦王乃使使者賜之劍、自裁、

【杜郵】……地の名なり、其の地に驛傳あるが故に、此の名あり、【快快】……不平なるさまなり、【餘言】……秦て言葉なり、【自裁】……自殺なり、

【武安君】武安君既に秦王に逐ひ立てられて、陰密へ行かむとて、咸陽の西の門を出づること十里にして、杜郵まで到著せしに、秦の昭王應侯及び羣臣と評議して曰はく、「白起の彼の地へ遷らむとするときに、其の意快快として、不平なる樣子ありて、上の處分に心服せず、我れを怨める樣て言葉ありとのことなり、斯かる不埒の者なれば、此の儘に差し置き難し」と、是に於て、秦王跡より使者を遣はして、白起に劍を賜ひて、自殺を申し渡したり、

武安君引劍將自刎、曰、我何罪于天、而至此哉、良久曰、我固當死、長平之戰、趙卒降者數十萬人、我詐而盡阬之、是足以死、遂自殺、

【自刎】……自ら首を掻き落とすなり、【阬】……坑に同じ、

【武安君】武安君使者より劍を受け取りて、身に引き寄せて、自ら首を掻き落とさむとして曰はく、「我れは、何等の罪を天より受けて、此のやうに死なねばならぬことになりたるぞ、合點のゆかぬことなり」と、良〻久しく考へ込みて、又曰はく、「我れは、固より死なねばならぬ理由あり、其の譯けは、長平の戰ひに、趙の士卒の降參せし者數十萬人あり、一旦降參せし者は、其の一命を助くべき筈なるを、我れは、後日の爲めを思ひて、詐り欺きて、殘らず之を谷底に落とし入れて殺したり、此の罪障は、我が身の死ぬるに餘りあり」と、斯く言ひ終はりて、遂に自殺せり、

【良久】後維隆の曰はく、太史公武安の自言を述べて、武安の罪案を結べり、蒙恬の傳の末語と意同じと、

武安君之死也、以秦昭王五十年十一月、死而非其罪、秦人憐之、鄉邑皆祭祀焉、

【秦人】武安君の自殺して死に至るは、秦の昭王の五十年の十一月の事なりき、其の死に至るは、其の罪ありて死に至るにはあらず、全く秦の昭王と應侯とに憎まれて、無理に命を取られたる譯けなれば、秦の人〻、之れを氣の毒に思ひて、いづくの鄉村邑里にても、皆祭祀して、其の冥魂を慰めけり、

王翦者、頻陽東鄉人也、少而好兵、事秦始皇、始皇十一年、翦將攻趙閼與、破之、拔九城、十八年、翦將攻趙、歲餘、遂拔趙、趙王降、盡定趙地爲郡、

【王翦】王翦は、頻陽縣の東鄉の人なり、年少き頃より、兵法を好みしが、成人の後に、其の道をもて、秦の始皇に奉公せり、始皇の十一年に、王翦兵に將として、趙の閼與を攻めて、之れを破りて、九箇所の城を乘り取れり、十八年に、王翦兵に將として、趙を攻むること一年餘りにして、

遂に趙を乘り取りしに、趙王降參したれば、殘らず趙の地を平定して、鄴とせり、

明年、燕使荊軻爲賊於秦、秦王使王翦攻燕、燕王喜走遼東、翦遂定燕薊、而還、秦使翦子王賁擊荊、荊兵敗、還擊魏、魏王降、遂定魏地、

【荊】……楚の國の一名なり、

【其の翌年】其の翌年に、燕は、荊軻をして、賊害の所業を秦に行はしめて、秦王を刺し殺さしめむとせしかば、秦王怒りて、王翦をして、燕を攻せしめしに、燕王の喜遼東へ逃げ走りたれば、王翦遂に燕の都の薊を平定して、立ち戻れり、秦は、又王翦の子の王賁をして、荊即ち楚を擊たしめしに、荊の兵敗北せり、王賁それより戻り掛けに魏を擊ちしに、魏王降參したれば、遂に魏の地を平定せり、

秦始皇既滅三晉、走燕王、而數破荊師、秦將李信者、年少壯勇、嘗以兵數千逐燕太子丹、至於衍水中、卒破得丹、始皇以爲賢勇、於是始皇問李信、吾欲攻取荊、於將軍度用幾何人而足、李信曰、不過用二十萬人、始皇問王翦、王翦曰、非六十萬人不可、始皇曰、王將軍老矣、何怯也、李將軍果勢壯勇、其言是也、遂使李信及蒙恬將二十萬、南伐荊、王翦言不用、因謝病、歸老於頻陽、

【老】……隱居するなり、

【秦の始皇】秦の始皇、既に韓、魏、趙の三晉を滅ぼし、燕王を逃げ走らしめて、度々荊の軍勢を破られたり、折りから、秦の將に李信といふ、血氣盛んの少年ありて、頗る壯健剛勇なり、前方に、數千の兵をもて、燕の太子の船を遠ひ擊ちて、衍水の中まで至りて、遂に丹を破り得たりければ、始皇之れを賢才ある剛の者と思はれける、是に於て、始皇李信に尋ねられて曰はく、「吾れ、荊を攻め取らむと思へり、將軍の見込みには、何程の人數を用ゐたらば、十分ならむ」と、李信の曰はく、「臣が見込みには、二十萬人を用ゐるに過ぎずして、十分ならむ」と、始皇又王翦の見込みを尋ねられしに、王翦の曰はく、「臣が見込みには、六十萬人を用ゐるにあらずば、宜しからざらむ」と、始皇二人の見込みを聞かれて曰はく、「王將軍は、近頃老耄せりと見ゆ、何故に、さばかり臆怯なるぞ、李將軍は、案に違はず、果たして勢力壯健にして、剛勇なり、其の二十萬人にて十分なりといへる言葉で尤なること、遂に李信及び蒙恬をして、二十萬人に將として、南の方荊を伐ちしめられたり、王翦言葉の用ゐられざるに因りて、病氣なりと申し立てゝ、頻陽の故鄉へ歸りて、隱居せり、

李信攻平與、蒙恬攻寢、大破荊軍、信又攻鄢、郢破之、於是引兵而西、與蒙恬會城父、荊人因隨之、三日三夜不頓舍、大破李信軍、入兩壁、殺七都尉、秦軍走、

【頓舍】……頓は、止まるなり、止宿するなり、

【李信と蒙恬とは、二十萬人の總勢を二手に分けて、各々其の一隊を引き連れて、李信は、平與の地を攻め、蒙恬は、寢の地を攻めて、大に荊の軍勢を破りたり、李信は、平與を破りたる後に、又鄢と郢との兩地を攻めて、之れを破りたり、是に於て、其の軍兵を引き連れて、西へ向ひて、蒙恬と城父の地に會合せしに、荊の人々盛り返して、李信の跡を追ひ掛けて、三日三夜止宿をもせで、短兵急に後陣より切り込みて、大に李信の軍勢を破り、二箇所の取り手へ押し入りて、七人の都尉を殺したれば、秦の軍勢、總崩れになりて、敗走せり、

始皇聞之大怒、自馳如頻陽、見謝王翦曰、寡人以不用將軍計、李信果辱秦軍、今聞荊兵日進而西、將軍雖病、獨忍弃寡人乎、王翦謝曰、老臣罷病悖亂、唯大王更擇賢將、

【罷病悖亂】……病氣の爲めに、疲勞して、心の轉倒するなり、

【始皇李信の敗軍せし由を聞き及ばれて、大に怒られて、自身に馬車を馳せられて、王翦の退隱したる頻陽へ往かれて、王翦に面會せられて、詫び言を述べられて曰はく、「拙者は、將軍の六十萬人の大兵を要すべしとの計策を用ゐざりしをもて、李信は、將軍の見込みに違はず、果たして、敵に打ち負けて、秦の軍勢に恥辱を受けしめたり、今、聞き及びたるには、荊の兵は、勝ちに乘じて、日毎に進みて、西の方秦の國へ向へりとのことなれば、將軍は、病氣なればとて、危急なる場合ひに、獨り拙者の心配を見棄つることを堪へ忍びて、此の頻陽に隱居せらるべきか」と、王翦始皇に斷りて曰はく、「老衰したる臣が身は、病氣の爲めに、疲勞して、心轉倒したれば、最早御役に立ち難し、唯々大王には、更に賢才ある將帥を撰びて、宜しく處分したまふべし」と、

始皇謝曰、已矣、將軍勿復言、王翦曰、大王必不得已用臣、非六十萬人不

可、始皇曰、爲聽將軍計耳、

【講義】始皇之れを聞かれて、又詫び言を述べられて曰はく、「さる口上は、止めにせよ、將軍重ねてさる水臭きことをいふことなかれ」と、王翦の曰はく、「大王には、是非とも、餘儀なく、臣を用ゐたまはむとならば、最前申し上げたる通り、六十萬人の大兵を授けられずば、宜しかるまじ」と、始皇の曰はく、「今となりては、將軍の計策を聽き納るゝことをせむばかりなり、外に少しも異存なし」と、

於是王翦將兵六十萬人、始皇自送至灞上、王翦行、請美田宅園池甚衆、始皇曰、將軍行矣、何憂貧乎、王翦曰、爲大王將、有功終不得封侯、故及大王之嚮臣、臣亦及時以請園池爲子孫業耳、始皇大笑、

【字解】【嚮臣】……臣を用ゐむとする心の向ひ來るなり、

【講義】是に於て、王翦再び頻陽の邸宅より出仕して、六十萬人の大兵の將軍となりて、荊の地方へ押し出さむとせしかば、始皇自身に其の出陣を見送られて、灞上まで至られしに、王翦始皇に別かれを告げて、出發せむとするときに、結構なる田地居宅園林池沼などを申し請ふこと、甚だ來かりしかば、始皇の曰はく、「將軍早く出發せよ、手柄あらば、十分に賞すべければ、何とて左樣に貧乏なることを心配するに及ばむ」と、王翦の曰はく、「さにあらず、是れまで、大王の將軍となりて、手柄ありても、終に諸侯に封ぜられたる者なければ、大王の臣を用ゐたまはむとする御心の向ひ來れる矢先に及びて、臣も亦其の好機會を外さぬやうに、園林池沼などを申し請ひて、己れが子孫の產業を拵へ置かむと思ふまでなり」と、始皇之れを聞かれて、大に笑はれて、其の請ひを承諾せられたり、

王翦既至關、使使還請善田者五輩、或曰、將軍之乞貸、亦已甚矣、王翦曰、不然、夫秦王怛而不信人、今空秦國甲士而專委於我、我不多請田宅爲子孫業、以自堅、顧令秦王坐而疑我邪、

【字解】【關】……武關なり、【五輩】……五組みなり、五度每に、數人組み合ひて往きたるなり、【乞貸】……物を貰はむことを乞ふなり、【怛】……一本には、靼に作れり、粗雜なるなり、

【講義】王翦既に灞上を打ち立ちて、陸路より楚の領分へ入る近道の武關まで到著せしが、此に暫く滯在して、咸陽の都へ使者を立ち戻らせて、善き田地を申し請はしむること、一度ならず、二度ならず、五度までになりて、其の度每に、數人組み合ひて往きたれば、或る人の曰はく、「將軍の物を貰はむことを乞はるゝことも、亦餘りに念の入りたることなり、それ程までにせられずとも、宜しからむ」と、王翦の曰はく、「さにあらず、全體、秦王の性質は、物事粗雜にして、綿密ならずして、人を信用せられぬなり、今、秦の國の甲兵士卒を空虛にして、專ら我れに委任せられたることなれば、我れ若し多く田地居宅を申し請ひて、己れが子孫の產業を拵へ置きて、自ら手堅くせざらむには、反りて秦王をして、居なおらに、我が身の後日大望を起こさむことを疑はしむることもあらむかと氣遣はるればなり」と、

王翦果代李信擊荊、荊聞王翦益軍而來、乃悉國中兵以拒秦、王翦至、堅壁而守之、不肯戰、荊兵數出挑戰、終不出、王翦日休士、洗沐而善飲食、撫循之、親與士卒同食、久之、王翦使人問軍中戲乎、對曰、方投石超距、於是王翦曰、士卒可用矣、

【字解】【洗沐】……洗は、足を洗ふなり、沐は、髮を洗ふなり、【撫循】……手懷くるなり、【超距】……跳ね廻るなり、

【講義】王翦果たして李信に代はりて、荊を擊ちたるに、荊は、王翦の軍勢を益して來れる由を聞き込みて、國中の兵卒を殘らず出だして、秦を担ぎたり、然るに、王翦荊へ到著して、取り手を堅固にして、之れを守りて、戰ふことを承知せざりしかば、荊の兵は、王翦を臆病なりと思ひて、度々出でゝ、戰爭を仕掛けたれど、王翦終に出でざりけり、而して王翦每日士卒を休息せしめて、或は足を洗はしめ、或は髮を洗はしめ、善き飲食を與へて、之れを手懷けて、自分も士卒と同樣の物を食ひて、我が身獨りの贅澤をせざりけり、斯くて日數を歷たる後、王翦人をして軍隊中に「此の頃は、如何なる遊戲をして居るか」と尋ねさせたるに、一同に對へて曰はく、「石を投げて、人を打ち、又は廣場を跳ね廻りて遊戲せり」と、是に於て、王翦の曰はく、「士卒の氣合ひ十分に張り詰めたれば、今戰に用ゐるべし」と、

荊數挑戰、而秦不出、乃引而東、翦因舉兵追之、令壯士擊、大破荊軍、至靳南、殺其將軍項燕、荊兵遂敗走、秦因乘勝略定荊地城邑、歲餘、虜荊王負芻、竟平荊地、爲郡縣、因南征百越之君、而王翦子王賁、與李信破定燕、齊地、

【字解】【略定】……略取して、平定するなり、之れを取るに力を用ゐることの少なきを略といふ、

【講義】荊の兵は、其後も度々戰爭を仕掛けたれど、秦の兵は、やはり取り手を出でざりしかば、荊の兵は、最早安心なりと思ひて、東の方へ引き

揭げしに、王翦之れに付け入りて、急に人數を繰り出して、之れを追ひ掛けて、勇壯なる戰士をして擊たしめて、大に荊の軍勢を破りて、新の地の南まで追ひ詰めて、其の將軍の項燕を殺したれば、荊の兵遂に敗走せり、秦又之れに付け入りて、勝ちに乘じて、荊の地の城邑を略取して、平定せり、それより一年餘りにて、荊王の負芻を生け捕り、終に荊の地全體を平定して、郡縣とし、猶ほ引き續きて、南の方百越の君を征伐せり、而して、王翦の子の王賁は、一旦荊にて敗軍せし李信と共に、燕と齊との地を破りて、之れを平定せり、

秦始皇二十六年、盡幷天下、王氏、蒙氏功爲多、名施於後世、

【講義】秦の始皇の二十六年に、秦は、殘らず天下を併呑して、四海を統一せしが、其の戰爭には、王氏、蒙氏の手柄を多しとせり、されば、此の二氏の名は、後の世までも傳はりぬ、

秦二世之時、王翦及其子賁皆已死、而又滅蒙氏、陳勝之反秦、秦使王翦之孫王離擊趙、圍趙王及張耳鉅鹿城、或曰、王離秦之名將也、今將彊秦之兵、攻新造之趙、舉之必矣、客曰、不然、夫爲將三世者必敗、必敗者何也、以其所殺伐多矣、其後受其不祥、今王離已三世將矣、居無何、項羽救趙、擊秦軍、果虜王離、王離軍遂降諸侯、

【字解】【新造】……新規に成り立つなり、

【講義】秦の二世の時に、王翦及び其の子の王賁、皆已に死去せり、而して、二世又蒙氏の家を滅ぼせり、其の後、陳勝の秦に背きて、謀反せしとき、秦は、王翦の孫の王離をして、趙を擊たしめたれば、王離進みて、趙王の武臣及び張耳を鉅鹿の城に圍みたり、其の時、或る人曰はく、「王離は、秦の名將なり、今、强き秦の兵に將として、新規に成り立ちたる趙を攻むることなれば、之れを九取りにせむこと、必定ならむ」と、他の客人の曰はく、「さにあらず、全體、父より子、子より孫まで、三世の間、打ち續きて、將軍となりたる者は、屹度失敗するものなり、其の屹度失敗する譯は、何故なるかといはむに、其の戰場にて人を殺し伐つことの多きをもて、其の後世子孫は、其の不吉不祥なる果報を受くるに因りてなり、今、王離は、王翦、王賁の跡を繼ぎて、已に三世の將軍なれば、屹度失敗するならむ」と、其の後、間もなく、項羽趙を救はむとて、加勢の人數を引き連れ來りて、秦の軍勢を擊ちて、彼の客人の讖言の如く、果たして王離を生け捕りたれば、王離の配下の軍勢は、遂に諸侯に降參せり、

【文法】茅坤の曰はく、此れ傳末に於て、其の後世の報いを敍して、或曰、客曰の問答をもて、之れを發明せり、敍事に議論を兼ねたるも、亦一例なりと、○陳仁錫の曰はく、王氏、蒙氏は、力戰をもて、功名を著はして、終に死滅降虜となりて、秦と俱に亡びたり、此れ斷案なりと、

太史公曰、鄙語云、尺有所短、寸有所長、

【講義】太史公白起、王翦の事跡を論贊して曰はく、「世間の鄙俚なる語に云はく、『一尺の長さの物も、短くして足らざることあり、一寸の長さの物も、長くして餘りあることあり』と、

白起料敵合變、出奇無窮、聲震天下、然不能救患於應侯、

【講義】實に此の語の如く、白起は、敵の形勢を料りて、臨機應變の機竹引きをして、人の思ひ付かざる奇計を出だすこと、際涯なかりければ、兵法の達人、當世の名將たる評判は、天下中に聲き渡りて、一人として武安君を知らざる者なかりけり、是れ其の長くして餘りある所なり、さりながら、其の身の心配を應侯の口先より救ひ取ること能はずして、應侯の爲めに、墓なき最後を遂げたるは、是れ其の短くして足らざる所なり、

【字解】【爽】……殘らず誅滅するなり、【宿將】……老將なり、【偷合】……假り初めにも先方の氣に合はむやうにするなり、【取容】……己れの人に容れられむことを務むるなり、【坊】……卽ち丞の字なり、

王翦爲秦將、夷六國、當是時、翦爲宿將、始皇師之、然不能輔秦建德、固其根本、偷合取容、以至坊身、及孫王離、爲項羽所虜、不亦宜乎、

【講義】王翦は、秦の將となりて、韓、趙、燕、楚、齊の六國を殘らず誅滅せり、是の時に當たりて、王翦は、秦の老將にして、始皇は、之れを師匠とせられたり、是れ其の長くして餘りある所なり、さりながら、秦を輔佐して、德義の政事を建立して、其の國家を治むる根本を固むること能はず、唯と假り初めにも始皇の氣に合はむやうに仕向けて、己れの始皇に容れられむことを務めて、身を沒するに至りたるは、是れ其の短くして足らざる所なり、王翦は、此のやうに己れの都合を謀りたれば、孫の王離の世になりて、遂に項羽に生け捕られたるも、亦尤なることならざらむや、尤なることなるべし、

彼各有所短也、

【講義】彼の白起も、王翦も、銘々に長くして餘りある所ありとはいへど、亦銘々に短くして足らざる所あるなり」と、

【文法】陳仁錫の曰はく、起、翦の傳は、善用兵と少而好兵との二句をもて綱領とせりと、

孟子荀卿列傳第十四

太史公曰、余讀孟子書、至梁惠王問何以利吾國、未嘗不廢書而歎也、曰、嗟乎、利誠亂之始也、夫子罕言利者、常防其原也、故曰、放於利而行、多怨、自天子至於庶人、好利之弊、何以異哉、

【孟子】……孔子を指す、【罕】……稀なり、【原】……源なり、【放】……依るなり、【庶人】……平民なり、

【太史公】太史公の曰は〳〵、「余れ孟子の著はしたる書物を讀みて、其の開巻第一の梁の惠王の孟子に逢ひて、『先生は、如何なる仕方をもて、吾が梁の國に利益を與へらるべきか』と尋ねたる處に至りて、今日まで、一度も書物を下に差〳〵置きて、歎息せざることはあらざるなり、余れ惠王の尋ねを見るに就けて曰はく、『あゝ、さても利益といふことは、誠に國家爭亂の始めなるよ、世に利益ほど恐ろしき者はなし』と、論語の子罕の篇に、孔夫子は、利益の話しをせらるゝこと稀なりとあるは、常に其の爭亂の源を防ぎ止められたるなり、されば、又論語の里仁の篇に曰はく、『事毎に利益に依りて行へば、己れを利せむと思ひて、屹度人を害するが故に、人の怨みを受くること多し』と、上は天子より、下は平民に至るまで、利益を好む弊害は、何をもて異ならむ、大なれば國を亡ぼし、小なれば身を亡ぼすは、皆此の利益の念慮より起こるなり」と、

【又按】陳仁錫の曰は〳〵、此の如く起手せるは、是れ絶頂の議論なり、宜しく弱り傳すべし、宜しく諸子と合傳すべからずと、

孟軻、鄒人也、受業子思之門人、道既通、游事齊宣王、宣王不能用、適梁、梁惠王不果所言、則見以爲迂遠而闊於事情、當是之時、秦用商君、富國彊兵、楚、魏用吳起、戰勝弱敵、齊威王、宣王用孫子、田忌之徒、而諸侯東面朝齊、天下方務於合從連衡、以攻伐爲賢、而孟軻乃述唐、虞、三代之德、是以所如者不合、退而與萬章之徒、序詩、書、述仲尼之意、作孟子七篇、

【子思】……孔子の孫なり、【游事】……客分として奉公するなり、【適】……往くなり、【迂遠】……廻り遠きなり、【闊】……懸け離るゝなり、【合從連衡】……解は、蘇秦の傳に見えたり、【唐、虞】……唐堯、虞舜なり、【三代】……夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王なり、【如】……往くなり、【萬章】……孟子の弟子なり、【仲尼】……孔子の字なり、

【孟軻】孟軻は、魯の國の鄒の人なり、學業を孔子の孫の子思の弟子より受け習ひて、其の道既に通達して、天下國家を治むる仕方を明らめたれば、齊の宣王に客分として奉公せしに、宣王之れを用ゐること能はざりしかば、齊を立ち退きて、梁卽ち魏へ往きしに、梁の惠王も、やはり孟子の殿き出でたる仁義の政事を行ひ果たすこと能はずして、其の言論を見て、廻り遠くして、今日の事情に懸け離れたりと思ひたり、是の時に當たりて、秦は、商君を用ゐて、國を富ましし、兵を强くし、楚と魏とは、吳起を用ゐて、戰爭に勝ちて、敵を弱くし、齊の威王と宣王とは、孫子、田忌の徒輩を用ゐたれば、諸侯其の威勢を長れて、東へ向ひて、齊に參朝せり、世は戰國の時代にて、韓、魏、趙、楚、燕、齊の六箇國組み合ひて、秦に抵抗する合從の策を務むるにあらざれば、此の六箇國の合從を破壞して、秦に臣とし事へしむる連衡の策を務むる最中にして、執れの國も、皆敵國を攻め伐つことを主張する者を賢才ありとて賞美せり、然るに、孟軻は、此の俗論に反對して、昔の唐堯、虞舜、夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王の聖德を述べて、仁義の政事を行ひて、世の中の衰へたるを立て直さむと思ひたり、是をもて、往く先々の國君と意見の合ふことなかりしかば、遂に世間を見限りて、身を退きて、隱居して、弟子の萬章の徒輩と共に、詩經、書經の順序を立て、孔聖仲尼の趣意を述べて、孟子と題せる七篇の書物を作りて、己れの持論を後世に傳へたり、

【又按】後稚隆の曰は〳〵、此れより以上は、孟子の本傳なり、以下は、附見なりと、○郭以讀の曰は〳〵、道既通の三字は、子輿にあらざれば、當たること能はずと、

其後有騶子之屬、齊有三騶子、其前騶忌、以鼓琴干威王、因及國政、封爲成侯、而受相印、先孟子、

【騶】……類なり、【干】……仕へを求むるなり、

【騶】孟子の後に、騶子の類あり、中にも、齊には、三人の騶子ありて、其の前に出でたる第一の騶忌といふ人は、琴を上手に引きて、其の藝能をもて、齊の威王に仕へを求めて、其の緣に因りて、國の政事を執るまでになりて、封ぜられて成侯となりて、宰相の印章を貰ひ受けき、此の人の時代は、孟子よりも先立てり、

【又按】鍾惺の曰は〳〵、章法變化、妙、傳ふべからずと、

其次騶衍、後孟子、騶衍睹有國者益淫侈、不能尙德、若大雅整之於身、施及黎庶矣、乃深觀陰陽消息、而作怪迂之變、終始大聖之篇、十餘萬言、

【字解】【睹】……見るなり、【尙】……尊ぶなり、【大雅】……大に正しきなり、德ある人主を指す、【黎庶】……衆民なり、【陰陽消息】……陰氣の消滅し、陽氣の生息する道理なり、【十餘萬言】……十餘萬字なり、一字をもて一言とすることは、老子の傳の五千餘言の下に解せり、

【講義】其の次ぎに出でたる騶衍といふ人は、孟子よりも後れたり、騶衍は、當今の週を持てる諸侯の益ゝ淫亂奢侈にして、道德を尊ぶこと能はざるを見て、其の人ゝをして、大に正しき德ある人主の、先づ一身を整へ修めて、其の管行を衆民に施し及ぼす如くならしめむとて、深く陰氣の消滅し、陽氣の生息する道理を觀察して、怪迂之變、終始大聖之道などいへる十餘萬言、卽ち十餘萬字もある書物を作りて、當今の諸侯の心を開發せむとせり、

其語閎大不經、必先驗小物、推而大之、至於無垠、先序今以上至黃帝、學者所共術、大竝世盛衰、因載其禨祥度制、推而遠之、至天地未生、窈冥不可考而原也、先列中國名山大川通谷禽獸、水土所殖、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹、稱引天地剖判以來五德轉移、治各有宜、而符應若茲、以爲儒者所謂中國者、於天下、乃八十一分居其一分耳、

【字解】【閎大不經】……廣大にして、常經に合はぬなり、【無垠】……際限なきなり、【術】……述ぶるなり、【竝】……引き比ぶるなり、【禨祥度制】……禨は、凶兆なり、祥は、吉瑞なり、度制は、歷代の帝王の制度なり、【窈冥】……深遠暗黑なるなり、【原】……尋ぬるなり、【遠谷】……世に知れ渡りたる谷ゝなり、【稱引】……稱述引證するなり、【剖判】……開闢なり、【五德】……水、火、木、金、土の五行の德なり、【符應】……符瑞の相應するなり、

【講義】其の語は、廣大にして、常經に合はず、屹度先づ小さき物に實驗して、證據を擧げて、其の理を推して、之れを大にして、際限もなき程に至れり、先づ當今の時代より溯りて、上は黃帝軒轅氏の時代に至るまで、古今の學者の共ゝに述べたる廉に就きて、大に世ゝの盛衰を引き比べ、それに因みて、其の時ゝの凶兆と吉瑞と歷代の帝王の制度とを書き載せて、之れを遠き昔にまで推し及ぼして、天地の未だ成り立たずして、深遠暗黑にして、考へても尋ねられざる場合ひまで推し詰めて論じたり、先づ我が中國の名高き山ゝ、大なる川ゝ、世に知れ渡りたる谷ゝの禽獸、及び海陸に繁殖せる草木蟲魚の類、其の外、珍奇の品物を竝べ立てゝ、之れを類推して、海外異國の人の目に見ること能はざる者にまで及ぼして、天地開闢より以來の水、火、木、金、土の五行の德の轉じ移りて、歷代の帝王の、木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生ずる原則に連れて、水の德の王の次ぎには、火の德の王あり、火の德の王の次ぎには、土の德の王あるが如く、其の時ゝの治め方にも、各ゝ然るべき仕方ありて、符瑞も之れに相應すること、此の如しといふことを、稱述引證せり、而して、自ら愿ひけるやう、孔子の道を旨とせる儒者の沙汰せる我が中國は、殊の外小さき者にて、廣き天下に對すれば、八十一分にして、其の一分に居れるのみ、

【又注】鄒衍の曰はく、三つの先の字、小よりして大なり、今よりして古なり、近きよりして遠きなりと、

中國名曰赤縣神州、赤縣神州內、自有九州、禹之序九州是也、不得爲州數、中國外如赤縣神州者九、乃所謂九州也、於是有裨海環之、人民禽獸、莫能相通者、如一區中者、乃爲一州、如此者九、乃有大瀛海環其外、天地之際焉、其術皆此類也、然要其歸、必止乎仁義節儉、君臣上下六親之施、始也濫耳、

【字解】【裨海】……小海なり、【環】……取り捲くなり、【大瀛海】……大海なり、瀛も、海なり、【際】……行き止まりなり、【六親】……父、母、妻、子、兄、弟なり、【濫】……大水の汎濫して、見通しの付かぬが如きなり、

【講義】此の中國は、一名を赤縣神州といふ、赤縣神州の內には、自然に九つの州あり、夏の禹王の洪水を治めて、新たに順序を立てられたる九州是れなり、さりながら、此の九州は、州の數には入ることを得ず、中國の外に、赤縣神州の如くなる者九つあり、是れ我が謂へる眞の九州なり、是に於て、其の一州毎に小海ありて、之れを取り捲きたれば、其の中に住める人民も禽獸も、能く他の州と互に交通する者なし、一區域の中の如き者は一州たり、此の如き者九つあり、此の九つの外に大海ありて、之れを取り捲けり、是れ天地の行き止まりなり」と、以上、騶衍の考へなり、騶衍の學術は、皆此の類なり、さりながら、其の歸著する所を煎じ詰むれば、決して空言にてはなく、屹度仁義、節儉、君臣、上下、及び父、母、妻、子、兄、弟の六つの親族の間に施し行ふべき、人生日常缺くべからざる事柄に止まりたれど、其の說奇怪なるをもて、始めて之れを聞くときは、大水の汎濫して、見通しの付かぬが如く思はるゝのみ、

【又注】鄒愚の曰はく、騶衍の全書と作すべしと、○又曰はく、奧幻の文、賦に似たりと、

王公大人、初見其術、懼然顧化、其後不能行之、是以騶子重於齊、適梁、惠王郊迎、執賓主之禮、適趙、平原君側行襒席、如燕、昭王擁彗先驅、請列弟子之座、而受業、築碣石宮、身親往師之、作主運、其游諸侯、見尊禮

如此、豈與仲尼榮色陳、蔡、孟軻困於齊、梁同乎哉、

【字釋】【愼然】……粗然に同じ、驚き視るさまなり、【側行】……横さまに歩むなり、【側席】……座席の塵を拂ふなり、【拂彗】……箒を小脇に搔い込むなり、【先驅】……馬車の先乘りをするなり、【主運】……篇の名なり、【榮色】……食物に飢ゑて、青菜の如き顏色になるなり、

【講義】騶衍の說は、此の如く奇怪なれば、國々の王公大人、初めは其の學術を見て、愼然として驚き視て、顧みて之れに感化すれど、其の後になりて、之れを實行すること能はざりけり、さりながら、此の學術をもて、騶子は、齊に貴び重んぜられぬ、梁へ往けば、惠王は城の郊外まで出迎へて、客と主人と相對する禮式を執り行ひて、尊敬せり、又趙へ往けば、平原君は、身を縮めて、横さまに歩みて、其の邸宅へ案内して、手づから騶子の座席の塵を拂ひたり、又燕へ往けば、昭王は、箒を小脇に搔い込みて、其の道筋の塵を除はむ姿勢を取りて、馬車の先乘りをして、其の宮中に請待して、弟子の座席に列なりて、學業を受け習はむことを請ひ、碣石宮を新築して、其の旅館に充て、自身に往きて、之れを師として事へたり、其の時、騶子主運といへる一篇を作れり、其の列國の諸侯の間に游歷して、尊重敬禮せられたること此の如し、いかで孔聖仲尼の陳と蔡との間に於て、七日の間食物に飢ゑて、青菜の如き顏色になられ、孟軻の齊と梁との間に於て困窮したる境遇と、日を同じくして語るべき、

【文法】李廷機の曰はく、之れを術と謂へば、孟軻の德と同じからず、是をもて、如く所皆合ふなりと、

故武王以仁義伐紂而王、伯夷餓不食周粟、衛靈公問陳、而孔子不答、梁惠王謀欲攻趙、孟軻稱太王去邠、此豈有意阿世俗苟合而已哉、持方枘欲內圜鑿、其能入乎、

【字釋】【而已】……此の二字は、餘計ものなりむ、【持方枘欲內圜鑿】……枘は、柱なり、內は、納るゝなり、鑿は、穴なり、四角なる柱を手に持ちて、圓き穴に押し込まむと思ふなり、

【講義】されば、昔し、周の武王は、仁義をもて萬民の疾苦を救ひたまはむとて、殷の紂王を伐ちたまひて、天下に王となりたまひしに、伯夷は、臣として君を伐つは正道にあらずと言ひて、之れを陳めて、用ゐられざりしかば、周の天下となりたる後に、其の粟米を食ふことを恥ぢて、首陽山に隱れて、餓ゑて死にき、又衛の靈公は、孔子を物知りなりと思ひて、戰陣の仕方を尋ねしに、孔子は、之れを知られざるにはあらねども、仁政をもて君を輔佐せむ所存なれば、左樣の事は心得ずとて、答へられざりき、又梁の惠王は、孟軻と相談して、趙を攻めむと思ひしに、孟軻は、周の祖先の太王の狄人に邠の都を明け渡して、其の地を去りしことを譽め立てゝ、惠王の功利の心を抑へき、此の伯夷、孔子、孟軻の三人は、いかで世俗の人情に阿り諛ひて、假り初めにも、先方の氣に合はむとする存意あるべき、さりながら、己れの見識を立て、己れの說を主張して、先方の心に逆らふは、たとへば、四角なる柱を手に持ちて、圓き穴に押し込まむと思ふが如く、纔さらぬ相談なれば、此の人々の諦命なりしは、是非もなきことなり、

或曰、伊尹負鼎而勉湯以王、百里奚飤牛車下而繆公用霸、作先合、然後引之大道、騶衍其言雖不軌、儻亦有牛鼎之意乎、

【字釋】【惠】……食物を煮る器なり、【勉】……勸め勵ますなり、【飤】……飯に同じ、餌を飼ふなり、【不軌】……常道に外るゝなり、【儻】……未定の言葉にして、若の字よりは重し、故一の意なり、

【講義】或る人の曰はく、「昔し、伊尹は、殷の湯王に取り入らむとて、料理人となりて、食物を煮る鼎を背負ひて、湯王の臺所に住み込みて、道ひ追ひに親み近づきて、遂に湯王を勸め勵まして、王業を成しき、又百里奚は、秦の繆公に取り入らむとて、牛車の下にて牛に餌を飼ひて、其の時機を待ちたるに、遂に繆公に舉げ用ゐられて、霸業を成しき、此の伊尹と百里奚との兩人は、先づ先方の氣に合はむことを行ひて、而して後に、之れを仁義の大道に引き入れたり、されば、騶衍の如きも、其の言論は、常道に外れて、頗る奇怪なりとはいへど、萬が一にも、或は此の人も亦百里奚の牛を飼ひて、繆公に取り入り、伊尹の鼎を背負ひて、湯王に取り入りて、王業霸業を成しゝ仕方を眞似むとの存意ありしにや」と、

【文法】董份の曰はく、此れ前に衍の尊禮せられしことを敍して、其の術能く列國の諸侯を動かしゝこと、孔、孟の困阨と同じからず、然れども、孔、孟は、實は此れをせざることを言へり、故に又伯夷、衛靈、梁惠の事を引きて、孔、孟は、困阨せりといへども、世に阿り、苟も容れられて、尊禮を取らざることを見したり、其の論甚だ正し、然れども、又奚、尹の事を引きて、衍の爲めに解釋して、其の迂怪の術、一時觀聽を驚せりといへども、實は其の仁義節儉の道を行はむと欲せしことなるべしとを言ひて、之れを尹の鼎を負ひ、奚の牛に飯せしは、皆先づ合ふことを作して、之れを大道に引きたることに譬へたり、前には以て衍を抑へ、後には復た之れを解す、此れ太史公の極めて妙なる處なりと、

自騶衍與齊之稷下先生、如淳于髡、愼到、環淵、接子、田駢、騶奭之徒、各著書、言治亂之事、以干世主、豈可勝道哉、

【字釋】【稷下先生】……稷は、門の名なり、稷門の下に集まりたる諸先生なり、【豈可勝道哉】……一々言ひ盡くされぬなり、

【講義】騶衍と齊の稷門の下に集まりたる諸先生とを始めとして、淳于髡、愼到、環淵、接子、田駢、騶奭の徒輩の如き人々に至るまで、銘々に書物を著述して、天下の治亂興廢の事を言論して、當世の人主に仕へを求めしが、其の書甚だ多ければ、いかで一々言ひ盡くさるべき、唯々人々の芒增しを次ぎ〳〵に擧げむ、

【文法】李廷機の曰はく、末に至りて、益々孟子を重んじ、諸子を陋なりとして、騶衍が聖、書を著はし、言を立てたりといへども、勝げて道ふべからずと言へり、其の正しき者を求むれば、鄒の孟一人なるのみと、

淳于髡、齊人也、博聞彊記、學無所主、其諫說慕晏嬰之爲人也、然而承意

觀色爲務、

【語釋】【强記】……記憶の强きなり、

【解說】淳于髡は、齊の國の人なり、博く物事を見聞して、一度覺えたることは忘るゝことなき性分にして、學問は、何を主とすることもなく、能く未識に通じけり、其の人主を陳め、人主に說く仕方は、齊の宰相の晏嬰の人柄を慕ひて、其の眞似をせり、さりながら、又人主の意を承け、顏色を觀察することを先務とせり、

客有見髡於梁惠王、惠王屏左右、獨坐而再見之、終無言也、惠王怪之、以讓客曰、子之稱淳于先生、管、嬰不及、及見寡人、寡人未有得也、豈寡人不足爲言邪、何故哉、

【語釋】【屏】……退くるなり、【讓】……責むるなり、小言をいふなり、

【解說】或る人、淳于髡を梁の惠王に紹介して、謁見せしめたることあり、其の時、惠王左右の近臣を退けて、獨り坐して、二度まで面會したれども、淳于髡終に發言せざりしかば、惠王之れを不思議に思ひて、其の紹介人に小言をいひて曰はく、「御身の淳于先生を譽め立つることを聞けば、昔の齊の宰相の管仲、晏嬰も及ばぬ程の人物なりといふことなれど、淳于先生は、拙者に面會するに及びて、少しも物を言はざれば、拙者は、未だ益を得たることなし、いかに拙者は共に語るに足らずと思へるか、何の譯けにて、此のやうに無言なるぞ」と、

客以謂髡、髡曰、固也、吾前見王、王志在驅逐、後復見王、王志在音聲、吾是以默然、

【解說】紹介人惠王に責め咎められて、面目なく思ひて、淳于髡に逢ひて、惠王の言葉を物語りしに、淳于髡の曰はく、「そは、勿論のことなり、吾れ最前大王に謁見せしに、大王の御志しは、馬に乘りて、驅け廻り、逐ひ廻すことに在りて、外の事は、御耳に入らぬやうなりき、其の後、重ねて大王に謁見せしに、大王の御志しは、音樂聲曲に在りて、外の事は、御耳に入らぬやうなりき、吾れ是をもて、餘談を申し上げぬ方宜しからむと思ひたれば、默然として、口を開かざりき」と、

客具以報王、王大駭曰、嗟乎、淳于先生誠聖人也、前淳于先生之來、人有獻善馬者、寡人未及視、會先生至、後先生之來、人有獻謳者、未及試、亦會先生來、寡人雖屏人、然私心在彼、有之、

【語釋】紹介人淳于髡の答へを聞きて、事細かに惠王に言上せしに、惠王大に驚きて曰はく、「あゝ、さても淳于先生は、誠に聖人なるよ、最前、淳于先生の來りしとき、善き馬を獻上したる者ありて、拙者は、まだ其の馬を視る暇なき中に、先生の來りしとき、上手に歌を謠ふ者を獻上したる者ありて、まだ其の藝人を試驗する暇なき中に、亦先生の來るに會ひたれば、如何にも藝人の事ばかり思ひて居たるに相違なし、されば、拙者は、先生の說を聞かむとて、人拂ひをして、待ち受けたりとはいへど、其の內心は、彼の馬と藝人との上にのみ在りき、我れ實に此の事ありき、先生の眼力には、今更恐れ入りたり」と、

【參考】鍾惺の曰はく、此れ他の神術なし、只〻承、意觀、色の四句微に入れるのみと、

後淳于髡見、壹語連三日三夜無倦、惠王欲以卿相位待之、髡因謝去、於是送以安車駕駟、束帛加璧、黃金百鎰、終身不仕、

【語釋】【安車駕駟】……安坐して乘る車に四頭立ちの馬を駕さなり、【束帛加璧】……十段一束の絹物に璧玉を添ふるなり、【鎰】……二十兩を鎰といふ、

【解說】其の後になりて、淳于髡又惠王に謁見して、一たび物を語り出でたるに、三日三夜打ち續きたれど、惠王は其の辯舌の面白さに、時の移るを覺えずして、退屈することなかりけり、惠王大に感心して、卿相の位をもて、之れを待遇せむと思ひしに、淳于髡其の德之れを辭退して、魏の國を立ち去りたれば、是に於て、惠王は、安坐して乘る車に四頭立ちの馬を駕さ、十段一束の絹物に璧玉を添へ、且つは黃金百鎰を進物として、其の出立を見送りけり、淳于髡は、其の後、生涯隱遁して、世に仕へざりき、

愼到、趙人、田駢、接子、齊人、環淵、楚人、皆學黃、老道德之術、因發明序其指意、故愼到著十二論、環淵著上下篇、而田駢、接子皆有所論焉、

【語釋】【黃、老】……黃帝、老子なり、【指意】……指は、旨と通ず、趣意なり、

【解說】愼到は、趙の國の人なり、田駢と接子とは、齊の國の人なり、環淵は、楚の國の人なり、此の四人は、皆黃帝、老子の道德の術を學べり、それに就きて、各〻自得發明して、其の趣意を次第して、一部の書物とせり、されば、愼到は、十二論を著はし、環淵は、上下篇を著はせり、而して、田駢も、接子も、皆議論せる者あり、

騶奭者、齊諸騶子、亦頗采騶衍之術、以紀文、於是齊王嘉之、自如淳于髡、以下、皆命曰列大夫、爲開第康莊之衢、高門大屋尊寵之、覽天下諸侯賓客、言齊能致天下賢士也、

【第】……邸宅なり、【康莊之衢】……康は、五辻なり、莊は、六辻なり、衢は、道なり、往來の便利なる場所をいふ、

【騶奭】騶奭は、齊の諸騶子の一人なり、此の人も、亦頗る騶衍の學術を摂び取りて、文章を記述せり、是に於て、齊王之れを嘉みし賞せり、而して、淳于髡の如き者より以下の者を皆家老の列に加へて、列大夫と名づけて、此の諸人の爲めに、邸宅を五辻六辻の往來の便利なる場所に開き設けて、其の門を高くし、其の家を大にして、之れを尊敬寵愛せり、されば、天下の諸侯の賓客を賓ひたるを見渡して、何人も、皆齊の能く天下の賢士を寄せ集めたることを評判せり、

【又曰】淺稚隆の曰はく、齊王の高門大屋をもて、賓客を覽しは、特に以て世に奇りしのみ、眞に賢を好む志ありしにはあらざるなり、然らずば、何ぞ孟子の身を終ふるまで不遇なりしか、太史公の末句に一つの言の字を下せるは、味ひあるかなと、

荀卿、趙人、年五十、始來游學於齊、騶衍之術、迂大而閎辯、奭也文具難施、淳于髡久與處、時有得善言、故齊人頌曰、談天衍、雕龍奭、炙轂過髡、

【荀卿】……名は、況といふ、卿は、尊稱なり、【頌】……譽め稱ふるなり、【談天】……五德の終始、天地の廣大なることを談論するなり、【雕龍】……其の文章の立派にして、實用に立たざること、龍の模樣を彫刻せるが如きなり、【炙轂過】……過は、誤なり、轂は、車の油差しなり、其の辯才の盡きざること、車の油差しを火に炙れば、其の油氣の盡きざるが如きなり、

【解】荀卿は、名は況といふ、卿は、尊稱なり、趙の國の人なり、孟子の後に出でゝ、其の性善の說に反對して、性惡の說を唱へたる人なり、此の人、五十歲になりて、始めて齊に漫游して、學問せり、騶衍の學術は、迂遠廣大にして、其の辯舌も、雄大なり、騶奭は、文才具足したれども、空論にして、實地に施し難し、淳于髡は、此の人と長く一所に居るときは、折り〳〵身の爲めに善き言葉を得ることあり、されば、齊の人の此の三人を譽め稱へたる言葉に曰はく、「五德の終始、天地の廣大なることを談論する者は、騶衍なり、其の文章の立派にして、實用に立たざること、龍の模樣を彫刻せるが如き者は、騶奭なり、其の辯才の盡きざること、車の油差しを火に炙れば、其の油氣の盡きざるが如き者は、淳于髡なり」と、

田駢之屬皆已死、齊襄王時、而荀卿最爲老師、齊尙脩列大夫之缺、而荀卿三爲祭酒、齊人或讒荀卿、荀卿乃適楚、而春申君以爲蘭陵令、春申君死、而荀卿廢、因家蘭陵、李斯嘗爲弟子、已而相秦、

【祭酒】……禮に、食するときは、一座の中の長者、祖先を祭る、酒を飲むときも、亦然り、それより、列大夫の中の長者を祭酒といふ、

【解】以上の數子、及び田駢の類、皆已に死去しければ、齊に於ては、此の時までも、尙ほ列大夫の缺員を補充したれば、荀卿は、三たび祭酒となりて、列大夫の首座を占めたり、然るに、齊の人の中にて、荀卿の事を國君に讒言する者ありしかば、荀卿去りて、楚に、因へ往きたるに、楚の春申君、荀卿をもて蘭陵縣の令とせり、其の後、春申君死去して、官を廢せられたれば、其の儘、蘭陵に住居せり、彼の書物を焚き棄て、儒者を生き埋めにせし李斯は、一時荀卿の弟子となりけるが、其の後、秦の宰相となりぬ、

荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道、而營於巫祝、信機祥、鄙儒小拘、如莊周等、又猾稽亂俗、於是推儒、墨道德之行事興壞、序列著數萬言、而卒、因葬蘭陵、

【嫉】……惡み憎ふなり、【巫祝】……祈禱者なり、女を巫といひ、男を祝といふ、【猾稽】……滑稽に作るべし、滑稽は、今の漫才(じやうさい)の類なり、人の詼諧なる言葉を出だして盡きざること、漫才の口より酒の漏れて絕えざるが如きなり、

【解】荀卿は、濁りたる世の政事、滅亡する國、亂暴なる君の打ち續きて、仁義の大道を仕遂げずして、男女の祈禱者の力に依りて、幸福を得むことを營みて、凶兆吉瑞を信仰し、鄙劣なる儒者の小事に拘泥して、天下國家を治むることを知らず、莊周等の如き滑稽詼諧にして、取り止めもなきことを述べて、世俗を惑亂せることを惡み憎ひけり、是に於て、儒者、墨者の道德の行事の、或は興隆し、或は廢壞せることを推し究めて、順序を立てゝ列次して、荀子と題せる數萬言即ち數萬字の書物を著はして、卒去せり、其の蘭陵に終はりしに因りて、之れを其の地に葬りき、

而趙亦有公孫龍、爲堅白同異之辯、劇子之言、魏有李悝、盡地力之敎、楚有尸子長盧、阿之吁子、爲自如孟子、至于吁子、世多有其書、故不論其傳云、

【字解】【堅白同異】……堅白は、白を守るなり、己れの說を堅〜執るなり、同異は、人の異說を己れの說に引き付けて、同じからしむるなり、

【講義】而して、趙の國にも、亦公孫龍の堅白同異の辯とて、己れの說を堅〜執りて、人の異說を己れの說に引き付けて、同じからしむる論辯の仕方と、劇子の一家言とあり、魏の國には、李悝の土地の力を用ゐ盡〜して、國を富ませ、兵を强くする數〜あり、楚の國には、尸子と長盧とあり、齊の國には、阿の地の吁子あり、孟子の如きより、吁子に至るまでの諸子は、世間に多〜其の著書ありて、其の人の樣子は、其の書を見れば、分かることなれば、今其の傳を論述せずと云ふ、

蓋墨翟宋之大夫、善守禦、爲節用、或曰、並孔子時、或曰、在其後、

【講義】上の數子の外に、文學翟あり、此の人は、多分宋の國の家老ならむ、其の學術は、善く國を守り、敵を禦ぎて、國家の費用を節儉にすることをせり、或るの人の說には、孔子と同時の人なりといひ、或る人の說には、孔子の後の人なりといへり、其の時代分明ならず、

【文法】具德秀の曰はく、孟、荀の傳の旁、諸子に及びて、議論を兼ねたり、傳の變體なりと、○茅坤の曰はく、太史公の諸子を傳せること、多く草草なるは、諸子の自ら爲る所の說を得ざるを以ての故なりと、○孫礦の曰はく、是の諸子の總傳にして、特に二大儒をもて篇に名づけたるのみ、但し大略を撮擧して說を爲し、一〻詳述せず、顏る傳說の體に似たり、然れども、縱橫自ら肆にして、風度の最も跌宕なること觀るべしと、○楊愼の曰はく、孟子の傳は、伯夷の傳と書法略〻相似たり、先づ孟子を敍して、騶衍をもて之れを形はしたれば、孔、孟の時に合はざる者、其の道從ひて知らるべし、又孔、孟、伯夷、世に阿り、苟も合ふに意ある者ならむやと舉げたれば、騶子の諸侯に尊禮せられたる者、其の道又從ひて知らるべし、其の騶子倘し牛鼎の意あるかとゆへるは、開露はまずして、意猶永なり、最も文字の妙なる者なり、此の法惟〻韓子のみ之れを得たりと、○陳仁錫の曰はく、太史公孟子の傳を作りて、議論一開一闔せり、最も抑揚搖縱の妙を得たりと、○浚約言の曰はく、太史公略〻孟子の遊說して遇はず、退きて書を著はしゝことを敍して、餘子は與からず、然して後に、結ぶに荀卿の孔子を尊び、王道を明らかにせしことを以てし、其の傳に名づくるに及びて、獨り孟、荀を以てして、餘子は與からず、其の布置の高き、旨意の深き、文詞の潔き、卓乎として尙ふべからずと、○柯維騏の曰はく、荀卿書を著はして、孟子、子思を詆訾し、又堯、舜を以て僞りとし、人の性を惡なりとせり、此れ其の學術醇ならずして、孟子と竝ぶことを得ざるなり、太史公の序傳には、擧げ竝べて論じたりといへども、然れども、其の傳中に敍せる所は、孟子を推尊し、孔子と同じくして、其の談說の世に阿り榮を取る者に異なることを斷じたり、荀卿を敍せるに至りては、談說の士の後に繼ぎ、且つ之れを抑へて曰はく、齊襄王時、荀卿最爲老師といひたれば、孟、荀の優劣較然たり、唐の韓愈氏、進學の解を作りて、竝びに二儒は優に聖域に入れりと稱せるは、定論にあらざるなり、故に太史公之れを進めて、孟子と等しくせりと、○浚雅隆の曰はく、荀も亦能く道を守りて、變ぜざる者なり、○陳鱣典の曰はく、荀も亦能く道を守りて、變ぜざる者なり、故に太史公之れを進めて、孟子と等しくせりと、○浚雅隆の曰はく、騶衍を抽き出でゝ、更に文法を換へて、一つの蓋の字をもて、句を起こし、二つの或曰の字を用ゐて、之れを敍せり、何等の瀟洒ぞと、

孟嘗君列傳第十五

孟嘗君、名文、姓田氏、文之父曰靖郭君田嬰、

【講義】孟嘗君は、名は文、姓は田氏といふ、文の父は、靖郭君田嬰といふ、靖郭君は、田嬰の謚なり、

田嬰者、齊威王少子、而齊宣王庶弟也、田嬰自威王時、任職用事、與成侯鄒忌及田忌將而救韓伐魏、成侯與田忌、田忌懼、襲齊之邊邑、不勝亡走、會威王卒、宣王立、知成侯賣田忌、乃復召田忌以爲將、宣王二年、田忌與孫臏、田嬰俱伐魏、敗之馬陵、虜魏太子申、而殺魏將龐涓、

【字解】【嘗】……欺〜といはむが如し、

【講義】田嬰は、齊の威王の末子にして、齊の宣王とは、膠違ひの妾腹の弟なり、田嬰威王の時より、官職に任ぜられて、政事を取り扱ひて、成侯の鄒忌、及び田忌と共に、兵に將として、韓を救ひ、魏を伐ちけり、其の後、成侯と田忌と君の寵愛を得むことを爭ひて、成侯田忌を欺きたることありしかば、田忌それが爲めに罪を得むことを懼れて、齊の邊鄙の邑に不意擊ちを仕掛けしが、勝利なくして、他國へ亡げ走れり、折りから、威王卒去して、宣王跡目に立ちて、成侯の田忌を欺きたることを知りて、重ねて田忌を召し還して、將とせり、宣王の二年に、田忌孫臏、田嬰の二人と俱に魏を伐ちて、魏の兵を馬陵に敗りて、魏の太子の申を生け捕りて、魏の將の龐涓を殺しけり、

【文法】浚雅隆の曰はく、此れ嬰と忌と同じく將たることを記するに因りて、故に并はせて忌の事を記せりと、

宣王七年、田嬰使於韓、魏、韓、魏服於齊、嬰與韓昭侯、魏惠王會齊宣王東阿南、盟而去、明年、復與梁惠王會甄、是歲、梁惠王卒、

【講義】宣王の七年に、田嬰韓、魏の兩國へ使ひに往きて、服けることありしに、韓も、魏も、齊に服從せしかば、田嬰韓の昭侯、魏の惠王と共に、齊の宣王を東阿の南に迎へて、三箇國の會合を遂げて、互に和親すべきことを盟約して、其の地を去りて、立ち戻りけり、其の翌年に、重ねて梁の惠王と甄の地に會合せしが、是の歲、梁の惠王卒去せり、

宣王九年、田嬰相齊、齊宣王與魏襄王、會徐州、而相王也、楚威王聞之、怒、

田嬰、明年、楚伐敗齊師於徐州、而使人逐田嬰、田嬰使張丑說楚威王、威王乃止、田嬰相齊十一年、宣王卒、湣王卽位、卽位三年、而封田嬰於薛、

【相王】……互に王號を唱ふなり、魏の世家に、襄王の元年に、薛侯と徐州に會合して、相王たり、父の惠王を追尊して王とすとあり、

【講義】宣王の九年に、田嬰齊の宰相となりぬ、此の時、齊の宣王魏の襄王と徐州に會合して、互に王號を唱ふる約束をせしに、楚の威王之れを聞きて、田嬰の計らひを怒れり、其の翌年に、楚は、齊を伐ちて、其の軍勢を徐州に敗りて、使者を齊へ遣はして、田嬰を國外に放逐せよと言はしめしに、田嬰僞りて、張丑といふ者をして、楚の威王に說かしめて曰はく、「大王の徐州の戰爭に勝たれしは、田嬰の一族の田盼の齊に用ゐられざればなり、田盼は、國に功勞ありて、百姓之れが爲めに慟けり、されど、田嬰は、田盼と中惡しければ、之れを用ゐずして、申紀を用ゐたり、申紀は、齊の大臣逃にも信用なく、百姓も之れが爲めに慟かざるが故に、大王之れに勝たれたるなり、されを、今、大王には、田嬰を放逐せられむとす、田嬰放逐せられむには、田盼吃度用ゐられむ、さらば、田盼は、重ねて其の士卒を手に附けて、大王と會戰すべければ、吃度大王の便利とならざらむ」と、楚王之れを聞きて、田嬰を放逐せしむることを見合はせけり、田嬰の齊に宰相たること、十一箇年間にして、宣王卒去し、湣王位に卽きてより、三年目に、田嬰の多年の勤功を賞して、薛の地に封じけり、

初田嬰有子四十餘人、其賤妾有子、名文、文以五月五日生、嬰告其母曰、勿擧也、其母竊擧生之、及長、其母因兄弟而見其子文於田嬰、田嬰怒其母曰、吾令若去此子、而敢生之、何也、

【擧】……取り上ぐるなり、【生】……育つるなり、【去】……棄つるなり、

【講義】さて、田嬰の子の田文の事を述べむに、最初に、田嬰には、四十餘人の子供ありけるが、其の下賤なる妾の腹に男子ありて、文と名づけたり、此の田文は、五月の五日に出生せり、其の時、田嬰其の母に告げて曰はく、「汝が腹に出來たる子は、取り上げぬやうにせよ」と、其の母之れを慕しきことに思ひて、田嬰に包み匿して、内々にて取り上げて、之れを育てたり、さて、田文の成長するに及びて、其の母四十餘人の兄弟の中を賴みて、其の子の田文を田嬰に引き合はせて貰ひたるに、田嬰其の母の處置を怒りて曰はく、「吾れ汝に此の子を棄て殺して仕舞へと言ひ付けたり、然るに、强ひて之れを育てたるは、何事ぞ」と

【文注】屠隆の曰はく、此れ田文の始めを殺して、下文の綜議の端を起こせるなりと、

文頓首因曰、君所以不擧五月子者何故、嬰曰、五月子者、長與戶齊、將不利其父母、

【頓首】【長與戶齊】……其の身の長の家の出入り口の鴨柄に屆く程になるなり、

【講義】田文父の言葉を聞きて、頭を地に付けて、其の言葉に取り縋りて曰はく、「父君の五月生まれの子を取り上げたまはぬ譯は、如何ぞ」と、田嬰の曰はく、「五月生まれの子は、成長すれば、其の身の長、家の出入り口の鴨柄に屆く程になりて、男子なれば、父を害し、女子なれば、母を害して、其の禍亂の爲めにならずと、言ひ傳へたればなり」と、

文曰、人生受命於天乎、將受命於戶邪、嬰默然、

【講義】田文の曰はく、「さらば、人間といふ者は、天帝の命令を受けて生まれ出づるものなりや、又は、家の出入り口の命令を受けて生まれ出づるものなりや」と、田嬰斯くと聞きて、言葉詰まりて、默然たり、

文曰、必受命於天、君何憂焉、必受命於戶、則高其戶耳、誰能至者、嬰曰、子休矣、

【講義】【至】……出入り口の鴨柄の高さに屆くなり、

【講義】田文の曰はく、「人間といふ者は、吃度天帝の命令を受けて生まれ出づるものならむには、家の出入り口には關係なければ、父君には、何とて心配したまふに及ばむ、若し又、吃度家の出入り口の命令を受けて生まれ出づるものならむには、其の出入り口の鴨柄を高く拵へむまでなり、さらば、何人か能く其の鴨柄の高さに屆く者あらむ」と、田嬰斯くと聞きて、愈々閉口して曰はく、「汝は、其の話を止めにせよ」と、此の問答にて、何事もなく、事濟みけり、

久之、文承閒、問其父嬰曰、子之子爲何、曰、爲孫、

【承閒】……手透きの折りを伺ふなり、

【講義】其の後、暫く經立ちて、田文其の父田嬰の手透きの折りを伺ひて、尋ねて曰はく、「子の子は何と申すぞ」と、田嬰の曰はく、「孫といふなり」と、

孫之孫爲何、曰、爲玄孫、

【講義】田文の曰はく、「さらば、孫の孫は何と申すぞ」と、田嬰の曰はく、「玄孫といふなり」と、

玄孫之孫爲何、曰、不能知也、

【考證】田文の曰は〜、「さらば、玄孫の孫は何と申すぞ」と、田嬰の曰は〜、「それまでは分からぬなり」と、

文曰、君用事相齊、至今三王矣、齊不加廣、而君私家、富累萬金、門下不見一賢者、文聞將門必有將、相門必有相、今君後宮蹈綺縠、而士不得短褐、僕妾餘粱肉、而士不厭糟糠、今君又尙厚積餘藏、欲以遺所不知之、何人而忘公家之事日損、文竊怪之、

【考證】【蹈綺縠】……紗綾縮緬の如き美服を足の下まで引き摺るなり、【短褐】……寸尺の短き、毛織の布子なり、賤しき者の著物なり、【粱肉】……粱は、粱の誤まりならむ、米と肉となり、

【講義】先づ此の如く問ひ詰めたる後に、田文の曰は〜、「父君は、政事を取り扱ひたまひて、此の齊國に宰相たること、今日までにて、威王、宣王及び現在の主君の三代に及びたり、此のやうに長き間の宰相なれど、齊の領地は、以前より廣くもならずして、父君の私家の富みは、萬金を積み累ねながら、其の門下には、唯だ一人の賢才ある者を見受けざるなり、已れが兼ねがね、聞き及びたるには、將軍の門下には、屹度將軍たるべき人物の出づることあり、宰相の門下には、屹度宰相たるべき人物の出づることありとなり、然るに、只今、父君の奥向きの婦人達は、紗綾縮緬の如き美服を足の下まで引き摺りたれど、門下の諸士は、寸尺の短き毛織の布子をだに身に纏ふことを得ず、又父君の召し使はるゝ下男下女は、米と肉とに十分に腹を肥やせども、門下の諸士は、酒の粕、米の糠にだにも飽き足らぬなり、此のやうに門下の諸士を疎略にしたまひながら、今、父君には、又尙ほ金銀財寶を掃山に貯蓄して、孫子の末の名目も分からぬ者に殘し遺らむと思ひたまひて、齊の公家の事の日々に損じて、國勢の衰へ行くを忘れたまへり、已れは、内々之れを不思議に思ふなり」と、

【文法】唐順之の曰は〜、文の滂佚兆せりと、○王愼中の曰は〜、文の此の論を觀れば、其の少き時、已に財を散じて、賓客に結ばむとする志ありりと、○鍾惺の曰は〜、主意は、客を好むに在り、却りて此れより、端を發せり、奇なること甚しと、

於是嬰乃禮文、使主家、待賓客、賓客日進、名聲聞於諸侯、諸侯皆使人請薛公田嬰、以文爲太子、嬰許之、嬰卒、謚爲靖郭君、而文果代立於薛、是爲孟嘗君、

【考證】【禮】……禮遇するなり、

【講義】是に於て、田嬰始めて田文の賢きことを知りて、之れ禮遇して、家事向きを主らしめしに、田文門下の賓客を接待することを上手なりければ、賓客日々に進み來りて、田文の善き評判、諸侯の間に聞こえたり、諸侯皆人をして、薛公の田嬰に田文をもて相續人の太子とせむことを請はしめたれば、田嬰之れを許諾せり、其の後、田嬰卒去して、靖郭君と謚せり、而して、田文果たして父の遺言によりて、四十餘人の兄弟の中より、父に代はりて、薛の領地に跡目を相續せり、是れを孟嘗君とす、

【文法】後藤隆の曰は〜、以上、特に田文の太子となりて薛に封ぜられたる始めを次いでたりと、○黃洪憲の曰は〜、此の傳、賓客を待つをもて綱領とせり、故に篇中に客の字凡そ四十見ゆと、

孟嘗君在薛、招致諸侯賓客、及亡人有罪者、皆歸孟嘗君、孟嘗君舍業厚遇之、以故傾天下之士、食客數千人、無貴賤一與文等、

【考證】【亡人】……逃亡人なり、【舍】業】……身代を投げ棄つるなり、【等】……一樣にするなり、

【講義】孟嘗君薛に在りて、諸侯の國に漫遊せる賓客、及び逃亡人の罪ある者を招き寄せたれば、此の人々皆孟嘗君に身を寄せたるに、孟嘗君其の身代を投げ棄てゝ、入費を構はず、手厚くこれを待遇せり、此の譯けをもて、天下中の諸士を傾け盡くして、已れの門下に集むるやうになりて、食客として其の義ひを受くる者數千人の多きに逃せしが、貴き者と賤しき者との差別なく、皆主人公の田文と衣食を一樣にせり、

【文法】後藤隆の曰は〜、太史公の贊の中に、孟嘗君招致天下任俠姦人、入薛中と謂へるは、蓋し此れを指せるならむと、

孟嘗君待客坐語、而屏風後常有侍史、主記君所與客語、問親戚居處、客去、孟嘗君已使使存問、獻遺其親戚、

【考證】【侍史】……側右筆なり、【存問】……見舞ふなり、

【講義】孟嘗君此の賓客を接待して、對坐して物語りせり、而して、屏風の蔭に、常に側右筆ありて、孟嘗君の賓客と物語りする事柄を筆記することを主り、孟嘗君賓客の親戚の居處を聞ねれば、一々之れを書き留めたり、さて、賓客の立ち去りたる後に、孟嘗君使ひをして、其の親戚を見舞はせて、色々の進物を差し遣りけり、

孟嘗君曾待客夜食、有一人蔽火光、客怒、以飯不等、輟食辭去、孟嘗君起自持其飯比之、客慙自剄、士以此多歸孟嘗君、孟嘗君客無所擇、皆善

遇之、人人各自以爲孟嘗君親己」

【訓讀】【蔽火光】……燈火の蔭になるなり、【輟】……止むるなり、

【語釋】孟嘗君、或る時、賓客を接待して、夜の食事を共にせしに、一人の賓客、燈火の蔭になりて、飯を食ひて、其の飯の他の人々と一樣ならぬことを怒りて、食ふことを止めて、暇を告げて、立ち去らむとせしかば、孟嘗君座を起ちて、自ら己れの飯を持ちて、其の飯と見比べて、一樣なることを示したれば、其の賓客慙ぢ入りて、自ら首を搖き落として死にけり、天下の諸士、此のやうに賓客を大切にせるを見て、多く孟嘗君に身を寄せけり、孟嘗君は、賓客の善惡高下の差別なく、皆善く之れを待遇せしを、人々は、銘々に自ら孟嘗君は己れ一人を愛せりと思ひて、殊の外滿足せり、

【文法】陳仁錫の曰はく、孟嘗君客無所擇……此の句、孟嘗千古の斷案なり、傳の中、只々客を好める一事をもて、始めより終はりに至るまで、餘かに之れを序せり、此れ史家の祕法なりと、

秦昭王聞其賢、乃先使涇陽君爲質於齊、以求見孟嘗君、孟嘗君將入秦、賓客莫欲其行、諫不聽、蘇代謂曰、今旦代從外來、見木偶人與土偶人相與語、木偶人曰、天雨、子將敗矣、土偶人曰、我生於土、敗則歸土、今天雨、流子而行、未知所止息也、今秦虎狼之國也、而君欲往、如有不得還、君得無爲土偶人所笑乎、孟嘗君乃止」

【訓讀】【今旦】……今朝なり、【木偶人】……木の人形なり、【土偶人】……土の人形なり、

【語釋】秦の昭王、孟嘗君の賢才あることを聞き及びて、先づ同腹の弟の涇陽君を齊の國へ人質として、差し遣りて、孟嘗君に安心せしめて、之れを招き寄せて、面會せむことを請ひ求めたれば、孟嘗君其の意に應じて、秦へ入らむとせしに、門下の賓客、之れを危みて、其の行かむことを願ふ者なく、皆宜しからずと諫めたれど、孟嘗君聽き納れざりけり、其の時、蘇代孟嘗君に物語りして曰はく、「今朝、己れ外より參り來りたるに、其の途中にて、木の人形と土の人形と話し合へるを見受けたり、其の時、木の人形の曰はく、『天より雨降り來れり、御身は土のことなれば、雨に濡れて、敗れ崩るゝならむ』と、土の人形の曰はく、『我れは、土より生まれ出でたる者なれば、敗れ崩れたらば、元の土に歸らむまでなり、今、天より雨降り來れり、御身は、水のことなれば、之れを水にて押し流し遣らむには、如何なる處に止まるべきか、其の行く末は、分かり難からむ』と、今、秦は、虎狼の如き貪慾無慈悲の國なり、さるを、貴君は、往かむと思ひたまへり、若し彼の國にて恐ろしき目に逢ひて、立ち戻りたまふことを得ざることありむには、貴君は、土の人形に其の無分別なることを笑はるゝことなきことを得むや」と、孟嘗君此の諫言に感服して、秦へ入ることを見合はせけり、

齊湣王二十五年、復卒使孟嘗君入秦、昭王即以孟嘗君爲秦相、人或說秦昭王曰、孟嘗君賢、而又齊族也、今相秦、必先齊而後秦、秦其危矣、於是秦昭王乃止囚孟嘗君、謀欲殺之、孟嘗君使人抵昭王幸姬求解、幸姬曰、妾願得君狐白裘、

【訓讀】【抵】……至るなり、【狐白裘】……狐の腋の下の白き毛の處を取りて仕立てたる皮の著物なり、美しくして、得難き者なり、

【語釋】齊の湣王の二十五年に、齊は、重ねて遂に孟嘗君をして秦へ入らしめたれば、昭王即座に孟嘗君を秦の宰相たらしめむとせしに、或る人秦の昭王に戒きて曰はく、「孟嘗君は、賢才ありて、又齊王の一族なれば、今、秦に宰相たらば、屹度齊の爲めになることを先立てゝ、秦の爲めになることを跡廻しにするならむ、然らば、秦は、危からむ」と、是に於て、秦の昭王、孟嘗君を宰相にすることを見合はせて、之れを生け捕りて、手段を設けて、之れを殺さむと思ひたり、孟嘗君大に驚きて、人を昭王の氣に入りの美姬の許へ至らせて、之れを救ひ解かむことを請ひ求めしめしに、氣に入りの美姬の曰はく、「妾願はくは孟嘗君の愛藏せらるゝ狐の腋の下の白き毛の處を取りて仕立てたる皮の著物を貰ひ受けむことを、妾が望みを叶へられたらば、妾も力を盡くすべし」と、

此時孟嘗君有一狐白裘、直千金、天下無雙、入秦、獻之昭王、更無他裘、孟嘗君患之、徧問客、莫能對、最下坐有能爲狗盜者、曰、臣能得狐白裘、乃夜爲狗、以入秦宮藏中、取所獻狐白裘至、以獻秦王幸姬、幸姬爲言昭王、昭王釋孟嘗君、

【語釋】此の時、孟嘗君の手元に一つの狐の腋の下の白き毛の處を取りて仕立てたる皮の著物ありて、其の直段千金にして、世の中に二つとなき品なりしが、秦へ入りて、之れを昭王に獻上したれば、別に同樣の皮の著物なかりけり、孟嘗君之れを心配して、如何にせば、昭王の氣に入りの美姬の望みに應ぜらるべきかと、隨行の賓客一同に尋ねたれど、誰れも能く其の手段を樹ふる者なかりけり、折りから、最も下坐に控へたる賓客に、狗の眞似をして物を盜むことの上手なる者ありて曰はく、「臣能く昭王に獻上せられし狐の腋の下の白き毛の處を取りて

仕立てたる皮の著物を手に入れむ」と、孟嘗君之れを聞きて、其の者に賴みしに、夜に入りて、狗の真似をして、秦の宮中の寶藏へ忍び入りて、其の獻上せし狐の腋の下の毛の處を取りて仕立てたる皮の著物を盜み取りて、立ち戻りたれば、孟嘗君之れを秦王の氣に入りの美姬に獻上せしに、美姬大に喜びて、孟嘗君の爲めに、昭王に程よく取り成したれば、昭王女子の口先に戲せられて、孟嘗君を牢屋より出だしたり、

孟嘗君得出、即馳去、更封傳、變名姓、以出關、夜半至函谷關、秦昭王後悔出孟嘗君、求之、已去、即使人馳傳逐之、孟嘗君至關、關法雞鳴而出客、孟嘗君恐追至、客之居下坐者、有能爲雞鳴、而雞盡鳴、遂發傳出、出如食頃、秦追果至關、已後孟嘗君出、乃還、

【孟嘗君列傳】……秦へ入りたる時の旅行券を書き直すなり、【發傳出】……宿驛の旅人を出だすなり、【如食頃】……朝飯を食ふ時分なり、

【講義】孟嘗君牢屋を出づることを得て、即座に馬車にて咸陽の都を離せ去りて、秦へ入りたる時の旅行券を書き直し、姓名を取り變へて、函谷關を出でむとて、夜半の頃に、函谷關まで到著せり、秦の昭王、氣に入りの美姬の言葉を聽き納れて、孟嘗君を牢屋より出だしたることを後悔して、之れを尋ね求めしに、孟嘗君已に立ち去りたれば、即座に人をして、傳馬に乘りて、之れを逐ひ掛けさせたり、さて、孟嘗君函谷關まで到著せしに、此の關所にては、曉に鷄の鳴くを相圖に旅人を出だす定めなりければ、孟嘗君其の刻限にならぬ中に、追ふ者の到著せむことを恐れたり、折りから、隨行の賓客の下座に居る者に、鷄の鳴き聲をすることの上手なる者ありて、「其の真似をせしに、近邊の雞、之れに欺かれて、殘らず鳴き出でたれば、關所の番人、最早曉なりと思ひて、遂に門を開きて、宿驛の旅人を出だしたり、孟嘗君の主從、函谷關を出で去りて、朝飯を食ふ時分になりて、秦の追ふ者、果たして關所まで到著せしが、已に孟嘗君の出で去りたる跡なりければ、之れを引き留むること能はずして、空しく都へ引き返しけり、

始孟嘗君列此二人於賓客、賓客盡羞之、及孟嘗君有秦難、卒此二人拔之、自是之後、客皆服、

【孟嘗君列傳】【拔】……救ひ取るなり、

【講義】最初に、孟嘗君は、此の狗の真似をして物を盜むことの上手なる者と、鷄の鳴き聲をすることの上手なる者との二人を、賓客の中に列ねて置きたるに、賓客は、殘らず之れを恥辱なりと思ひて、同席することを嫌ひしが、孟嘗君の秦の困難あるに及びて、遂に此の二人の働きにて、之れを救ひ取りたれば、是れより後、賓客は、皆孟嘗君の目の利きたるに服しけり、

孟嘗君過趙、趙平原君客之、趙人聞孟嘗君賢、出觀之、皆笑曰、始以薛公爲魁然也、今視之、乃眇小丈夫耳、孟嘗君聞之、怒、客與俱者、下斫擊殺數百人、遂滅一縣以去、

【孟嘗君列傳】【魁然】……壯大なるさまなり、【眇】……微なるさまなり、【下】……車を下るなり、【斫】……切るなり、

【講義】孟嘗君、或る時、趙の國を通行せしに、趙の平原君、之れを客分として、大切に扱ひたり、然るに、趙の人々、孟嘗君の賢才あることを聞き及びて、家々より出でゝ、之れを見物して、皆嘲り笑ひて曰はく、「最前、薛公をもて、魁然として壯大なる大男ならむと思ひしに、今之れを觀れば、反りて眇として微小なる小男なるのみ」と、孟嘗君其の惡口を聞きて怒りたれば、隨行したる賓客、車を下りて、其の笑ひたる者を片端より切り擊ちて、數百人を殺して、遂に一縣を滅ぼして、立ち去りけり、

齊湣王不自得、以其遣孟嘗君、孟嘗君至、則以爲齊相、任政、孟嘗君怨秦、將以齊爲韓、魏攻楚、因與韓、魏攻秦、而借兵食於西周、

【齊湣王不自得】……己れの失策なりとするなり、【兵食】……軍兵と兵糧となり、

【講義】齊の湣王、孟嘗君を秦へ遣りたることをもて、己れの失策なりとして、後悔したれば、孟嘗君の離間を待ち受けて、齊の宰相として、政事を委任せり、孟嘗君、秦の己れを侮辱せしことを怨みて、齊の威光をもて、韓、魏と共に秦を攻めむとして、之れに要する軍兵と兵糧とを西周へ借用したしと申し入れたり、

蘇代爲西周謂曰、君以齊爲韓、魏攻楚、九年、取宛、葉以北、以彊韓、魏、今復攻秦以益之、韓、魏南無楚憂、西無秦患、則齊危矣、韓、魏必輕齊畏秦、臣爲君危之、君不如令弊邑深合於秦、而君無攻、又無借兵食、君臨函谷而無攻、令弊邑以君之情謂秦昭王曰、薛公必不破秦以彊韓、魏、

其攻秦也、欲王之令楚王割東國以與齊、而秦出楚懷王以爲和、君令弊邑以此惠秦、秦得無破、而以東國自免也、秦必欲之、楚王得出、必德齊、齊得東國益彊、而薛世世無患矣、秦不大弱、而處三晉之西、三晉必重齊、

【蘇代】……戰國策には、蘇秦に作れり、【弊邑】……西周の謙遜したる言葉なり、【情】……情願なり、【昭王】……昭の字は、餘計もものならむ、【東國】……楚の國の東寄りの土地なり、【懷王】……懷の字は、餘計もものならむ、

蘇代孟嘗君の西周へ軍兵と兵糧とを借用せむと申し込みたるを取り消さしめむとて、西周の爲めに、孟嘗君に物語りして曰はく、「貴君は、先年、齊の威光をもて、韓、魏兩國の爲めに、楚を攻めて、九箇年掛かりて、諸國の土地を魏を強くせられたり、然るに、此の度、重ねて秦を攻めて、韓、魏の領地を益さむとせらるゝ由なるが、韓、魏は、齊の御蔭にて、諸國の土地を手に入れて、南の方には、楚の心配なく、西の方には秦の心配なからむやうになりたらば、齊は、屹度危からむ、韓、魏は、屹度齊を悔り輕んじて、秦を畏れ憚らむ、臣は、貴君の爲めに、之れを危めり、されば、貴君は、弊邑の西周をして、深く秦に合體せしめて、貴君は、秦を攻めらるゝことなく、又軍兵と兵糧とを弊邑に借用せられて、自國の軍兵兵糧の足らざることを示さるゝことなからむに如かじ、貴君は、秦の函谷關へ臨み向はれたるばかりにて、秦を攻めらるゝことなくして、弊邑をして、貴君の情願なりといふ趣意をもて、秦王に下の如くに物語らしめられよ、『薛公の孟嘗君は、屹度秦を破りて、韓、魏を強くすることをさざらむ、其の秦を攻むるは、大王の楚王に遇られて、楚の國の東寄りの土地を割きて、齊に與へしめられて、秦に於ては、其の引き留め置かれる楚王を出だして、歸國せしめられて、齊と和睦をせられむことを望めるなり』と、貴君、弊邑をして此の穩便なる談判をもて、秦に恩惠を與へられむには、秦は、齊の爲めに破らるゝことなくして、楚の國の東寄りの土地を齊に割き與へしめたる廉をもて、自ら其の禍を免るゝことを得べければ、秦は、屹度弊邑の忠告通りになりたしと思ふならむ、又此の機會に、楚王は、秦を逃れ出でゝ、歸國することを得ば、屹度齊を恩德ある國なりと思ふならむ、さらば、齊は、楚の東寄りの土地を手に入れて、益ゝ強くなりて、貴君の所領の薛の地は、子々孫々まで安泰ならむ、秦は、齊の兵難を免れて、大に弱くならずして、韓、魏、趙の三晉の西の方に控へ居らば、三晉は、屹度秦に攻撃せられむことを恐れて、齊を賴みて、之れを貴び重んずるならむ」と、

薛公曰、善、因令韓、魏賀秦、使三國無攻、而不借兵食於西周矣、是時楚懷王入秦、秦留之、故欲必出之、秦不果出楚懷王、

【賀】……進物をもて慶賀するなり、諸侯の互に慶賀する平和の禮なり、【三國】……齊、韓、魏なり、

薛公蘇代の說を聽き納れて曰はく、「至極尤なり」と、それに就きて、韓、魏をして、秦へ向ひて、進物をもて慶賀せしめて、親親の意を表せしめ、齊、韓、魏の三齊國をして、秦を攻むることなからしめて、軍兵と兵糧とを西周に借用することを見合はせたり、是の時、楚の懷王は、秦へ入りて、秦に引き留められたるが故に、孟嘗君は、是非とも之れを出だして、歸國せしめたく思ひたれど、秦は、楚の懷王を出だすことを果たさゞりけり、

孟嘗君相齊、其舍人魏子爲孟嘗君收邑入、三反而不致一入、孟嘗君問之、對曰、有貧者、竊假與之、以故不致入、孟嘗君怒、而退魏子、

【收邑入】……知行の年貢を取り立つるなり、【三反】……三度まで往復するなり、

孟嘗君の齊に宰相たりし時、其の家來の魏子といふ者、孟嘗君の爲めに、知行の年貢を取り立てむとて、三度まで往復しなぶり、一度も年貢の勘定を立てざりしかば、孟嘗君其の譯けを尋ねしに、魏子對へて曰はく、「薛の邑に賢者ありて、甚だ貧乏なれば、氣の毒に思ひて、內內にて、之れを貸し與へたり、其の譯けをもて、まだ勘定を立てぬなり」と、孟嘗君之れを聞きて、立腹して、魏子に暇を遣はしけり、

居數年、人或毀孟嘗君於齊湣王曰、孟嘗君將爲亂、及田甲劫湣王、湣王意疑孟嘗君、孟嘗君乃奔、魏子所與粟賢者聞之、乃上書言、孟嘗君不作亂、請以身爲盟、遂自剄宮門、以明孟嘗君、

【毀】……讒言するなり、

其の後、數箇年立ちて、或る人、孟嘗君の事を齊の湣王に讒言して曰はく、「孟嘗君は、內亂を起こさむ樣子あり」と、折りから、齊に田甲といふ者ありて、湣王を殺さむとて、威し付くるに及びて、湣王の了簡にては、孟嘗君の入れ智慧ならむと疑ひたれば、孟嘗君他國へ出奔せり、然るに、先年、孟嘗君の家來の魏子の年貢の勘米を貸し與へたる賢者、之れを聞き及びて、其の恩返しに、湣王に書面を差し上げて曰はく、「孟嘗君は、決して內亂を企てたることなし、臣が身をもて、其の相違なきことを證明せり、自ら首を掻き落として、孟嘗君の罪なきことを證明せり、

湣王乃驚、而蹤跡驗問、孟嘗君果無反謀、乃復召孟嘗君、孟嘗君因謝病、歸老於薛、湣王許之、

【剄】……頸を切るなり、

【考證】【縱跡驗問】……平素の縱跡に就きて取調ふるなり、【老】……隱居するなり、
【補說】湣王驕きて、平素の縱跡に就きて取り調べしに、孟嘗君は、彼の自殺せし者の證言の通り、果たして謀反の事實なかりしかば、湣王重ねて孟嘗君を召し返したるに、孟嘗君其の儘に病氣なりと申し立てゝ、薛の領地へ立ち歸りて、隱居せむことを請ひたれば、湣王之れを許容せり、

其後秦亡將呂禮相齊、欲困蘇代、代乃謂孟嘗君曰、周最於齊至厚也、而齊王逐之、而聽親弗、相呂禮者、欲取秦也、齊、秦合、則親弗與呂禮重矣、有用齊、秦必擯君、君不如急北兵趨趙、以和秦、魏、收周最以厚行、且反齊王之信、又禁天下之變、齊無秦、則天下集齊、親弗必走、則齊王孰與爲其國也、

【考證】【周最】……周の公子なり、【取秦】……秦の氣を取るなり、【收周最】……周最を取り戻すなり、【厚行】……旅支度を手厚くするなり、【反】……把復するなり、【禁天下之變】……天下の諸侯の合從の約束の異變することを防ぎ止むるなり、【天下集齊】……天下の兵の皆齊に集まるなり、
【補說】其の後、秦より亟け落ちして來りたる將軍の呂禮といふ者、齊の宰相となりて、蘇代を敵として、之れを困却せしめむと思ひたれば、蘇代之れを免れむとて、孟嘗君に物語りして曰はく、「周の公子の周最の齊に於けるは、至極手厚く深切なりけるを、齊王之れを逐ひ出して、小人の親弗といふ者の言葉を聽き納れて、呂禮を宰相とせられたるは、秦の氣を取りて、中睦くせむと思はれてなり、其の注文通りに、齊と秦と合體せば、親弗と呂禮とは、齊に重んぜらるゝならむ、此の兩人にして、齊に用ゐらるゝことあらば、秦は、屹度貴君を輕んずるならむ、貴君は、左樣に風向きの惡しくなられぬ中に、急ぎて兵を北へ向けて、趙の國へ赴きて、秦と魏とを和睦せしめて、齊王に逐ひ出されたる周最を取り戻して、其の旅支度を手厚くし、且つ齊王の一旦周最に對して失ひたる信義を、其の旅支度を手厚くせるによりて回復し、又齊と秦との合體せるに因りて、天下の諸侯の合從の約束の異變することを防ぎ止められむには如かじ、齊に秦の加勢なくば、天下の兵は齊に集まりて、四面より攻め立つべければ、親弗は、屹度他國へ脱走するならむ、さらば、齊王は、何人と共に其の國を治めらるべき、其の相談は、是非とも貴君の手に落つるならむ」と、

於是孟嘗君從其計、而呂禮嫉害於孟嘗君、孟嘗君懼、乃遣秦相穰侯魏冉書曰、吾聞秦欲以呂禮收齊、齊天下之彊國也、子必輕矣、齊、秦相取以臨三晉、呂禮必并相矣、是子通齊以重呂禮也、若齊免於天下之兵、其讎子必深矣、子不如勸秦王伐齊、齊破、吾請以所得封子、齊破、秦畏晉之彊、秦必重子、子以取晉、晉國弊於齊而畏秦、晉必重子以取秦、是子破齊以爲功、挾晉以爲重、是子破齊定封、秦、晉交重子、若齊不破、呂禮復用、子必大窮、於是穰侯言於秦昭王伐齊、而呂禮亡、

【考證】【嫉害】……憎み嫌ひて、邪魔物なりとするなり、【所得】……秦の手に入れたる土地なり、
【補說】是に於て、孟嘗君蘇代の計策に從ひて、親弗、呂禮を取り除けむとせしに、呂禮孟嘗君を憎み嫌ひて、已れの邪魔物なりとしたれば、孟嘗君之れを懼れて、秦の宰相なる穰侯の魏冉に手紙を送りて曰はく、「吾れの兼ねゝ聞き及びたるには、秦は、呂禮を道具に使ひて、齊を引き付けむとせり、齊は、天下第一の强國なれば、呂禮此の國に用ゐられたらば、御身は、屹度秦の國にて輕んぜられむ、齊と秦と互に氣を取り合ひて、中睦くして、韓、魏、趙の三晉に戰爭を仕掛けたらば、三晉は、齊と秦との命令に從ふべければ、呂禮は、屹度三晉の宰相を兼帶するならむ、是れ御身は、呂禮をして、交はりを齊に通ぜしめて、呂禮の貴目を重くする譯なり、若し齊秦の加勢を得て、天下の諸侯の兵を免れむには、呂禮の手柄多くならむ、さらば、御身と中惡しき呂禮は、齊に志しを得て、屹度御身を齊王に讒言すべければ、齊の御身を仇讎の如く思ふこと、屹度深からむ、御身は、かやうになる中に、秦王に勸めて、齊を伐たれむには如かじ、齊敗北せば、吾れは秦王に勸めて、秦の手に入れたる土地をもて、御身を領主に封ぜむことを請はむ、齊敗北せば、晉は、屹度强くなるべければ、秦は、其の强きことを長れ憚るならむ、さらば、秦は、屹度御身を重く扱ひて、晉の氣を取るならひ、又晉の國は、齊と戰ひて、疲弊して、秦を長れ憚りたれば、晉は、屹度御身を重く扱ひて、秦の氣を取るならむ、是れ御身は、齊を破りて、手柄を立てられ、晉を小脇に掻い込みて、自分の貴目を重くせらるる譯なり、是れ御身は、齊を破りて、封土を取り極められたるが上に、秦の方よりも、晉の方よりも、互に御身を貴び重んずる譯なり、若し齊にして敗北せざらむには、呂禮は、重ねて用ゐらるべければ、御身は、屹度大に窮迫せらるゝならむ、其の積もりにて、御身は、手强く齊を伐ちて、必ず勝たむやうにせられよ」と、是に於て、穰侯秦の昭王に言上して、齊を伐ちたれば、呂禮他國へ逃亡せり、
【又注】素黃の曰はく、呂禮の始末を收め束ねて殆ど盡くせりと、

後齊湣王滅宋益驕、欲去孟嘗君、孟嘗君恐、乃如魏、魏昭王以爲相、西合

於秦、趙、與燕共伐破齊、齊湣王亡在莒、遂死焉、」

【講義】其の後、齊の湣王、宋の國を滅ぼして、安心して、益〻驕り高ぶりて、孟嘗君を退け去らむと思ひたれば、孟嘗君之れを恐れて、魏の國へ往きたるに、魏の昭王、之れを宰相として、西の方秦、趙二國と合體して、燕と共に齊を伐ち破りたれば、齊の湣王、其の都を逃亡して、莒の地に滯在して、其の處にて遂に死去せり、

齊襄王立、而孟嘗君中立爲諸侯、無所屬、齊襄王新立、畏孟嘗君、與連和、復親薛公、文卒、謚爲孟嘗君、諸子爭立、而齊、魏共滅薛、孟嘗絕嗣無後也、」

【講義】齊の襄王、其の跡目に立ちたれば、孟嘗君局外に中立して、諸侯となりて、何方へも附屬することなかりけり、齊の襄王新たに立ちて、內外の事情も分からざりければ、孟嘗君を畏れ憚りて、共〻に連合和睦して、重ねて薛公と親みけり、其の後、田文卒去せしかば、孟嘗君と薛公とは、一時に盛名を博したる孟嘗君は、世嗣ぎを絕ちて、後世子孫なくなりぬ、

【文法】淺稚陸の曰はく、絕嗣無後の字、暗に前の五月の子の說に應じたりと、

初馮驩聞孟嘗君好客、蹠屩而見之、孟嘗君曰、先生遠辱、何以教文也、馮驩曰、聞君好士、以貧身歸於君、孟嘗君置傳舍十日、孟嘗君問傳舍長曰、客何所爲、答曰、馮先生甚貧、猶有一劍耳、又蒯緱、彈其劍而謌曰、長鋏歸來乎、食無魚、孟嘗君遷之幸舍、食有魚矣、五日、又問傳舍長、答曰、客復彈劍而歌曰、長鋏歸來乎、出無輿、孟嘗君遷之代舍、出入乘輿車矣、五日、孟嘗君復問傳舍長、舍長答曰、先生又嘗彈劍而歌曰、長鋏歸來乎、無以爲家、孟嘗君不悅、居朞年、馮驩無所言、」

【訓讀】【蹠屩】……草履を足に突き掛くるなり、【傳舍】……下等の長屋なり、傳は、驛傳の義なり、【蒯緱】……劍は、茅の類にして、緱にするものなり、緱は、劍の柄なり、劍の柄を緱にて捲きたるなり、【謌】……歌に同じ、【長鋏】……長き劍の柄なり、【歸來】……來は、添へ字なり、【幸舍】……中等の長屋なり、幸は、客人を寵幸する義なり、【輿】……馬車の箱なり、卽ち馬車のことなり、【代舍】……上等の長屋なり、代は、交代して給仕する義なり、【嘗】……常と通ず、【爲家】……一家の暮らしを立つるなり、【朞年】……滿一箇年なり、

【講義】さて、孟嘗君の一代の經歷は、右にて終はりを告げたれば、是れより食客の馮驩の事を述ぶべし、最初に、馮驩は、孟嘗君の食客を世話することを好める由を聞き及びて、其の思顧を受けたく思ひて、極貧の身なれば、何の支度もなく、草履を足に突き掛けて、尋ね來りて、面會を請ひたるに、孟嘗君一見して曰はく、「先生の遠方より來臨を辱くせるは、滿足の至りなり、如何なる事をもて、已れに敎へ示されむか」と、馮驩の曰はく、「僕は、決して左樣なる謂ひにて參りたるに、あらず、唯〻貴君の士人を愛し好みたまふ由を聞き及びたれば、貧困の身をもて、貴君にたよりたるまでなり」と、孟嘗君之れを聞きて、傳舍といへる下等の長屋に入れ置くこと、十日目になりて、傳舍の長に尋ねて曰はく、「此の度の客人は、何事をしてか日を暮らし居るぞ」と、傳舍の長答へて曰はく、「馮先生は、甚だ貧乏にして、唯〻一振りの劍を所持せるのみ、其の上に又、其の劍の柄は、綱にて捲きたる、至りて粗末なる品なり、而して、毎日其の劍を彈じて、調子を取りて、歌ひて曰はく、『長き劍の柄よ、汝と共に故鄕へ歸らむか、此の長屋にては、食事の膳に一匹の魚なし』と、馮先生は、かやうに不足を申し居れり」と、孟嘗君之れを聞きて、馮驩を幸舍といへる中等の長屋へ引き移らせたれば、其の日より、食事の膳に、魚は添はりたり、それより五日目になりて、孟嘗君又傳舍の長に馮驩の樣子を尋ねしに、傳舍の長答へて曰はく、「彼の客人は、重ねて例の劍を彈じて、調子を取りて、歌ひて曰はく、『長き劍の柄よ、汝と共に故鄕へ歸らむか、此の長屋にては、外出するに馬車の用意なし』と、馮先生は、かやうに不足を申し居れり」と、孟嘗君之れを聞きて、孟嘗君重ねて傳舍の長に馮驩の樣子を尋ねしに、傳舍の長答へて曰はく、「彼の先生は、又常に例の劍を彈じて、調子を取りて、歌ひて曰はく、『長き劍の柄よ、汝と共に故鄕へ歸らむか、此の長屋にては、故鄕の母を迎へ取りて、一家の暮らしを立てられぬなり』と、馮先生は、かやうに不足を申し居れり」と、孟嘗君之れを聞きて、餘りの事に、而白く思はずして、其の儘に棄て置きしに、代舍に居ること、滿一箇年移立ちて、馮驩重ねて何事をも言はざりけり、

【文法】掌坤の曰はく、以下の食客の事、前に敍せる所と相屬せず、故に別に爲めに之れを後に蹠せりと、○淺稚陸の曰はく、驩の事を敍せるは、大に圖讀の文を變へて、おのづから佚宕なりと、○又曰はく、國策には、無以爲家の下に、左右皆惡之、以爲貧而不知足、孟嘗君聞馮公有親乎、對曰、有老母、孟嘗君使人給其食用無使乏子、是馮驩不復歌とあり、史記に、左右惡之を以て、孟嘗君不悅せるは、誤まれるに似たりと、

孟嘗君時相齊、封萬戶於薛、其食客三千人、邑入不足以奉客、使人出錢於薛、歲餘不入、貸錢者多不能與其息、客奉將不給、孟嘗君憂之、問左

右、何人可使收債於薛者、傳舍長曰、代舍客馮公、形容狀貌甚辯、長者無他伎能、宜可令收債、

【考證】【奉】……仕送るなり、【與其息】……其の利息を拂ふなり、【伎能】……藝前なり、

【講義】孟嘘君、此の時、齊の宰相を勤めて、家數の萬軒もある薛の地に封ぜられたれど、其の食客は、三千人もあることなれば、知行の年貢だけにては、食客に仕送るに引き足らずして、人をして、錢を薛の人民に貸し出さしめて、其の利息をもて、食客の費用に充てむと思ひしに、一年餘りになりても、其の元金の入らざるのみならず、錢を借用したる者は、多く其の利息をだにも拂ふこと叶はざりしかば、食客の仕送り、難なく供給せざらむとせり、孟嘘君之れを心配して、左右の近習に「何人を差し向けて負債を薛より取り立てさすべきか」と尋ねしに、傳舍の長の曰はく、「代舍の客人の馮公は、其の樣子柄といひ、頗立ちといひ、甚だ辯才あり、寬大の長者なれども、外には何の業前もなし、此の人ならば、薛の負債を取り立てさするに宜しからむ」と、

孟嘘君乃進馮驩而請之曰、賓客不知文不肖、幸臨文者三千餘人、邑入不足以奉賓客、故出息錢於薛、薛歲不入、民頗不與其息、今客食恐不給、願先生責之、馮驩曰、諾、

【講義】孟嘘君、傳舍の長の言葉を聞きて、馮驩を前へ進めしめて、之れに頼みて曰はく、「四方の賓客、己れの不肖なることを知らずして、幸に己れの家に來臨せる者、三千餘人に及びたれば、知行の年貢だけにては、賓客を奉養するに引き足らざるが故に、利息の附きたる錢を薛の地へ貸し出したるに、薛の地よりは、一年立ちても、元金の入らざるのみならず、其の人民は、頗る多く其の利息をだにも拂はざれば、今となりては、賓客の食料の供給せざらむことを氣遣はるゝなり、願はくは先生彼の地へ出張られて、之れを催促せられむことを」と、馮驩の曰はく、「委細承知せり」と、

辭行、至薛、召取孟嘘君錢者、皆會、得息錢十萬、乃多釀酒、買肥牛、召諸取錢者、能與息者皆來、不能與息者亦來、皆持取錢之券書、合之、齊爲會日、殺牛置酒、酒酣、乃持券如前合之、能與息者、與爲期、貧不能與

息者、取其券而燒之、曰、孟嘘君所以貸錢者、爲民之無者、以爲本業也、所以求息者、爲無以奉客也、今富給者以要期、貧窮者燔券書以捐之、諸君彊飲食、有君如此、豈可負哉、坐者皆起再拜、

【考證】【取孟嘘君錢者】……孟嘘君の錢を借用するなり、【券書】……證書なり、【期】……返濟の期限なり、【燔】……燒き棄つるなり、【捐】……帳消しにするなり、

【講義】馮驩やがて暇乞ひして、出立して、薛の地へ到著して、孟嘘君の錢を借用したる者共を呼び寄せたれば、一同に皆寄り會ひたり、其の時、馮驩利息の錢を十萬錢だけ先づ手に入れたれば、其の錢にて、擇山に濁り酒を醸造せしめ、肥え太りたる牛を買ひ入れて、錢を借用したる者共を呼び寄せて曰はく、「利息を拂ふことの出來る者は皆來れ、利息を拂ふことの出來ぬ者も亦來れ」と、さて、追ひ〳〵に來りたる者共の錢を借用したる證書を殘らず手に取りて、之れを一〻元帳に引き合はせて、一同に齊し〳〵寄り合ふべき日を取り極めて、歸らしめ、其の日になりて、彼の買ひ入れたる牛を殺し、醸造したる酒を置きて、其の者共に馳走して、酒の酣よ〳〵廻りたる頃に、馮驩再び證書を手に取りて、前の通りに、元帳に引き合はせて、利息を拂ふことの出來る者には、相對にて、返濟の期限を取り極め、貧乏にして、利息を拂ふことの出來ぬ者には、其の證書を取り上げて、之れを燒き棄てつ、さて、一同に向ひて曰はく、「昨年より、孟嘘君の錢を貸し出されたる譯けは、人民の元手なき者の爲めに、融通を付けて、銘〻の家業を營ましめむとてなり、利息を求められたる譯けは、此の知行所の年貢だけにては、三千餘人の食客に仕送るべき餘裕なければなり、此の譯けなれば、今、人民の富みて事足る者は、期限過りに返濟すべし、貧窮の者は、證書を燒き棄てゝ、帳消しにしたれば、返濟するに及ばず、薛君は、強ひて遠慮なく飲み食ひせよ、薛の邑には、孟嘘君の如き仁君あれば、いかで恩義に負くことあるべき、一同に有難く心得て、精〻上を大切にせよ」と、此の一言を聞きて、坐したる者共、皆起ちて、再拜して感謝せり、

孟嘘君聞馮驩燒券書、怒而使使召驩、驩至、孟嘘君曰、文食客三千人、故貸錢於薛、文奉邑少、而民尚多不以時與其息、客食恐不足、故請先生收責之、聞先生得錢、卽以多具牛酒而燒券書、何、

【考證】【奉邑】……知行なり、【收責】……催促して取り立つるなり、

【講義】孟嘘君馮驩の證書を燒き棄てたる由を聞き及びて、立腹して、使者を差し立てゝ、馮驩を呼び戻したれば、馮驩參著せしに、孟嘘君の曰はく、「己れの家の食客は、三千人もあるが故に、其の仕送りの足し前にせむとて、錢を薛へ貸し出したるに、己れの知行の上がり高の少なきのみならず、人民は、尙ほ其の上にも多く約束の期限をもて、其の利息を拂はざれば、食客の食料の引き足らざらむことを氣遣はれたる

るが故に、先王に賴みて、之れを催促して、取り立てむとせり、然るに、聞けば、先生は、錢を手に入るれば、卽座に、それにて多く牛と酒とを用意して、人民に聽走して、證書を燒き棄てたる由なるが、是れは、如何なる譯けなるぞ」と、

馮驩曰、然、不多具牛酒、卽不能畢會、無以知其有餘不足、有餘者爲要期、不足者雖守而責之十年、息愈多、急卽以逃亡、自捐之、若急、終無以償、上則爲君好利、不愛士民、下則有離上抵負之名、非所以厲士民、彰君聲也、焚無用虛債之券、捐不可得之虛計、令薛民親君、而彰君之善聲也、君有何疑焉、孟嘗君乃拊手而謝之、

【抵負】……恩義に負くことを仕出だすなり、【拊手】……輕く手を拍つなり、

【馮驩】馮驩の曰はく、「如何にも仰せの通りなり、其の譯けは、譯山に牛と酒とを用意せざれば、卽座に大勢の人民を殘らず寄り合はしむこと能はずして、其の身代の餘りある者と足らざる者とを見分けむやうなし、餘りある者は、それが爲めに、期限過りに返濟せしむる約束をせり、足らざる者は、之れを見張りて催促すること、十箇年に及ぶといふとも、利息の愈〻多くなるのみなれば、嚴しく之れを催促せば、卽座に逃亡して、自ら之れを帳消しにするならむ、若し其の時に又嚴しく催促せば、終に債ひ返すことなからむ、さらば、上に取りては、貴君は、利益を好み、金貸しをして、士民を愛せられずと言はれ、下に取りては、人民は、上に離れ、恩義に負くことを仕出だす惡名あらむ、是れ士民の心を勵まし、貴君の名聲を顯はす仕方にあらぬなり、役にも立たぬ空虛なる負債の證書を燒き棄てゝ、手に入り難き空虛なる計算を帳消しにしたるは、薛の人民をして、貴君を慕ひ親ましめて、貴君の著き名聲を顯はさしめたるなり、貴君何の疑ひ怪まるゝことかあらむ」と、孟嘗君之れを固きて、思はず輕く手を拍ちて、能く計らひたりと謝禮せり、

【文注】後稚陸の曰はく、戰國策に、馮驩笑二薛債券一、後秦年、孟嘗君免レ相、就二國于薛一、未レ至百里、民扶レ老携レ幼以迎とあるを、太史公の脫せざるは、始末を缺けるに似たりと、

齊王惑於秦、楚之毀、以爲孟嘗君名高其主而擅齊國之權、遂廢孟嘗君、

【馮驩】其の後、齊王秦、楚の兩國より手を廻しを、孟嘗君の事を讒言せるに惑ひて、孟嘗君の名前は、其の主君よりも高く聞こえて、齊の國の權柄を自儘にせりと思ひて、遂に孟嘗君を廢して、宰相の役を免じたり、

【文注】李東陽の曰はく、此れ又一文法を換へて、田文の實を識せりと、

諸客見孟嘗君廢、皆去、馮驩曰、借臣車一乘可以入秦者、必令君重於國、而奉邑益廣、可乎、孟嘗君乃約車幣而遣之、

【約車幣】……馬車と土產物とを取り揃ふるなり、

【馮驩】大勢の食客共孟嘗君の廢せられたるを見て、皆其の家を立ち去りしに、馮驩の曰はく、「臣に秦の國へ乘り込まるべき程の馬車一輛を借し與へたまはゞ、屹度貴君の實目を齊の國よりも重からしめて、其の知行所を益〻廣からしめむと存ずるが、宜しからむか」と、孟嘗君喜びて、望みの馬車と土產物とを取り揃へて、馮驩を秦の國へ遣はしたり、

馮驩乃西說秦王曰、天下之游士、憑軾結軥、西入秦者、無不欲彊秦而弱齊、憑軾結軥、東入齊者、無不欲彊齊而弱秦、此雌雄之國也、勢不兩立爲雄、雄者得天下矣、

【憑軾】……軾は、車の前の橫木なり、馬車に乘れば、正しく立つが常なれど、敬ふことあれば、前へ屈みて、此の橫木に憑りもたるゝなり、【結軥】……馬の胸ぶひを結び付けて、車の心棒を引かするなり、

【馮驩】馮驩西の方秦の國へ入り込みて、秦王に說きて曰はく、「天下中の游說の士の、車の前の橫木に憑りもたれ、馬の胸ぶひを結び付けて、車の心棒を引かせて、馬車を驅り立てゝ、西の方秦の國へ入り込む者は、秦を强めて、齊を弱めたく思はざる者なし、又車の前の橫木に憑りもたれ、馬の胸ぶひを結び付けて、車の心棒を引かせて、馬車を驅り立てゝ、東の方齊の國へ入り込む者は、齊を强めて、秦を弱めたく思はざる者なし、此の秦と齊とは雌雄を爭ふ國柄なれば、其の勢は、兩方竝び立たずして、雌なる方は、天下を失ひ、雄なる方は、天下を得るならむ」と、

秦王躊而問之曰、何以使秦無爲雌而可、馮驩曰、王亦知齊之廢孟嘗君乎、秦王曰、聞之、

【躊】……兩膝を地に付くるなり、

【馮驩】秦王之れを聞きて、兩膝を地に付けて、敬禮して曰はく、「さらば、如何なる手段をもて、秦の國をして、雌となることなからしめらるべきか」と、馮驩の曰はく、「大王も亦齊の國にて孟嘗君を廢せしことを知りたまへりや」と、秦王の曰はく、「其の事は、聞き及びたり」と、

馮驩曰、使齊重於天下者、孟嘗君也、今齊王以毀廢之、其心怨、必背齊、背齊入秦、則齊國之情、人事之誠、盡委之秦、齊地可得也、豈直爲雄也、君急使使載幣、陰迎孟嘗君、不可失時也、如有齊覺悟、復用孟嘗君、則雌雄之所在、未可知也、秦王大悅、乃遣車十乘、黃金百鎰、以迎孟嘗君、

【字解】【委】……委しく告げるなり、【直】……但なり、【鎰】……二十兩を鎰といふ

【講義】馮驩の曰はく、「齊の國の實目をして、天下に重からしめたる者は、孟嘗君なり、されば、孟嘗君の心には、之れを怨みて、屹度齊に背くならむ、齊に背きて、秦へ入らば、齊の國の事情をも、世間の事情をも、殘らず委しく秦に告げるならむ、さらば、齊の土地は、容易く大王の御手に入るべし、いかで但に雄となるのみならむ、それに就きては、君王には、急ぎて、使者を差し立てゝ、土產物を車に載せて、內々にて、孟嘗君を迎へ取らしめたまへ、此の好機會を外してはならぬなり、若し齊の國にて、孟嘗君の罪なきことを心付きて、重ねて之を用ゐることあらば、秦と齊との雌雄の相違の在る所は、執れならむか、まだ分からぬなり」と、秦王之れを聞きて、大に滿足して、使者を差し立てゝ、十輛の馬車と、百鎰の黃金とを遣はして、孟嘗君を迎へしめたり、

馮驩辭以先行、至齊、說齊王曰、天下之游士、憑軾結軝、東入齊者、無不欲彊齊而弱秦者、憑軾結軝、西入秦者、無不欲彊秦而弱齊者、夫秦、齊雌雄之國、秦彊則齊弱矣、此勢不兩雄、今臣竊聞秦遣使車十乘載黃金百鎰、以迎孟嘗君、孟嘗君不西則已、西入相秦、則天下歸之、秦爲雄而齊爲雌、雄則臨淄、卽墨危矣、王何不先秦使之未到、復孟嘗君而益與之邑、以謝之、孟嘗君必喜而受之、秦雖彊國、豈可以請人相而迎之哉、折秦之謀、而絕其霸彊之略、

【講義】馮驩秦王に暇乞ひして、秦の迎への使者に先立ちて、出立して、齊の都へ到著して、齊王に說きて曰はく、「天下中の游說の士の、車の前の橫木に憑りもたれ、馬の胸かひを結び付けて、車の心棒を引かせて、馬車を驅り立てゝ、東の方齊の國へ入り込む者は、齊を强めて、秦を弱めたく思はざる者なし、又車の前の橫木に憑りもたれ、馬の胸がひを結び付けて、馬車を驅り立てゝ、西の方秦の國へ入り込む者は、秦を强めて、齊を弱めたく思はざる者なし、全體、秦と齊とは、雌雄を爭ふ國柄なれば、秦の方强くば、齊の方弱からむ、此の勢は、兩方共に雄たることを得ずして、一方は屹度雌たるべし、今、臣內々秦の使者を遣はして、十輛の馬車に黃金百鎰を載せて、孟嘗君を迎へむとする由を聞き及びたり、孟嘗君秦王の招きを斷りて、西の方へ往かざらば、それまでならむ、若し西の方へ入り込みて、秦の宰相となりたらば、天下の諸侯、之れに屈服すべければ、秦は、雄となりて、齊は、雌となりたらば、雄に攻められて、臨淄の都、卽墨の城は、屹度危からむ、大王には、何とて、秦の使者のまだ到著せぬ中に、孟嘗君を復職せしめられて、之れに知行を加增せられて、是までの無禮を詫びたまはざる、大王にして、此のやうに仕向けたまはゞ、孟嘗君は、屹度喜びて、之れを受くるならむ、さらば、秦は、强き國にて、侍若無人なりとはいへど、いかで他人の宰相を請ひ求めて、之れを迎ふることあるべき、秦の謀計を挫折して、其の天下の諸侯の旗頭となりて强き威勢を振はむとする策略の根を絕ち切らむこと、今日に在り」と、

齊王曰、善、乃使人至境候秦使、秦使車適入齊境、使還馳告之、王召孟嘗君、而復其相位、而與其故邑之地、又益以千戶、秦之使者、聞孟嘗君復相、齊、還車而去矣、

【字解】【候】……窺ふなり、

【講義】齊王之れを聞きて曰はく、「至極尤なり」と、是に於て、其の實際を見むとて、人を國境まで遣はして、秦の使者の來る樣子を窺はしめたるに、秦の使者の車、丁度齊の國境に入りたれば、齊の使者急ぎ戻りて、之れを注進せり、是に於て、齊王始めて馮驩の言葉を信じて、孟嘗君を召し出して、其の宰相の位を復して、其の以前の知行の土地を與へたる上に、又家數の千軒もある土地を加增せり、秦の使者孟嘗君の重ねて齊の宰相となりたることを聞きて、餘儀なく車を引き返して、西の方へと立ち去りけり、

自齊王毀廢孟嘗君、諸客皆去、後召而復之、馮驩迎之、未到、孟嘗君大息歎曰、文常好客、遇客無所敢失、食客三千有餘人、先生所知也、客見文一

日廢、皆背文而去、莫顧文者、今賴先生得復其位、客亦有何面目復見文乎、如復見文者、必唾其面而大辱之、

【失】……禮を失ふなり、

【齊王】齊王の讒言を信じて、孟嘗君を廢せしより、大勢の食客共、皆其の家を立ち去りしが、其の後、齊王孟嘗君を召し出して、之れを復職せしめたれば、馮驩齊の都より辟へ出向きて、孟嘗君を迎へて、同車して、其の地を立ちて、まだ齊の都へ到着せぬ中に、孟嘗君車の中にて、溜息を突きて、歎息して曰はく、「己れは、日頃、食客の世話をすることを好みて、食客を待遇するに、決して禮を失ひたることなし、我が家に食客の三千餘人もあることは、先生の知らるゝ通りなり、然るに、此の暫己れの一日廢せられたるを見て、皆己れに離れ去りて、立ち去りて、一人として己れを顧みる者なし、今、幸に先生の周旋に賴りて、其の位に復することを得たり、如何に輕薄なる食客なりとも、何の面目ありて、重ねて己れに逢はるべき、若し重ねて己れに逢はむ者あらば、屹度其の面上に唾吐を吐き掛けて、大に之れを辱めむ」と、

馮驩結轡下拜、孟嘗君下車接之曰、先生爲客謝乎、馮驩曰、非爲客謝也、爲君之言失、夫物有必至、事有固然、君知之乎、孟嘗君曰、愚不知所謂也、

【結轡】……馬車の手綱を結び止めて、車を留むるなり、

【馮驩】馮驩之れを聞きて、馬車の手綱を結び止めて、車を留めて、車より下りて、孟嘗君を拜したれば、孟嘗君も車より下りて、之れに接近して曰はく、「先生は、食客共の爲めに詫びむとせらるゝか」と、馮驩の曰はく、「食客共の爲めに詫びむとするにはあらぬなり、貴君の言葉の過失を知らせ申さむが爲めなり、其の譯けは、全體、物は、是非とも其の處まで行き止まることあり、事は、固より然るべきことあり、貴君は、之れを知りたまへりや」と、孟嘗君の曰はく、「愚昧なる拙者は、其の譯はれを知らぬなり」と、

曰、生者必有死、物之必至也、富貴多士、貧賤寡友、事之固然也、君獨不見夫朝趨市者乎、明旦側肩爭門而入、日暮之後、過市朝者、掉臂而不顧、非好朝而惡暮、所期物忘其中、今君失位、賓客皆去、不足以怨士、而徒絕賓客之路、願君遇客如故、孟嘗君再拜曰、敬從命矣、聞先生之言、敢不奉教焉、

【明旦】……夜の引き明けなり、【側肩】……肩を突き出すなり、【門】……市場の門なり、【市朝】……朝の字は、餘計なのならむとも、門の字の誤まりならむとも、〔〕……大手を振るなり、【忘】……一本には、亡に作れり、從ふべし、品物のなきなり、

【掉臂】馮驩の曰はく、「知りたまはずば、御話し申さむ、凡そ世に生きとし生ける者は、屹度死ぬることあるは、物の是非とも其の處まで行き止まる譯けなり、又其の身の富貴なるときは、共に交はる朋友少なきは、事の固より然るべき譯けなり、貴君は、獨り俠の朝なく、市場へ出向く者を見たまはざるか、俠の市場に出向く者は、夜の引き明けに、肩を突き出して、市場の門を我れ後れじと、爭ひて進み入れども、日暮れの後に、市場の門前を通行する者は、大手を振りて、悠然として歩むのみにて、市場の中を顧みる者なし、此のやうに朝と暮れとに人情の相違するは、朝を好みて、暮れを惡むが爲めにてはなく、夕方になれば、其の心中に期し望む品物の市場の中になければなり、今、貴君には、宰相の位を失はれたれば、賓客之れを見限りて、皆立ち去れり、是れ當然のことなれば、士人の無情輕薄を怨むには足らぬなり、若し之れを怨みたまはゞ、益もなく賓客の恭ひ來るべき通路を絕ち切りて、世の人望を失はるゝならむ、願はくは貴君の食客を待遇したまふこと以前の如くならむことを」と、孟嘗君之れを聞きて、感心して曰はく、「敬みて先生の命令に從はむ　先生の言葉を聞きて、押して教へを奉ぜざらむや」と、馮驩の事は、是れにて盡きぬ、

【文法】張之象の曰はく、傳末に復た此の一段を申ねて、孟嘗君の客を遇すること故の如くなることを見せり、亦一例なりと、

太史公曰、吾嘗過薛、其俗閭里率多暴桀子弟、與鄒魯殊、問其故、曰、孟嘗君招致天下任俠姦人入薛中、蓋六萬餘家矣、世之傳孟嘗君好客自喜、名不虛矣、

【太史公】……太史公孟嘗君の事跡を論贊して曰はく、「吾れ前方に薛の地を通行せしに、其の村里の風俗は、大概氣象の荒々しき子弟多くして、禮義を守る節、魯の國とは違ひたれば、所の者に其の譯けを尋ねしに、答へて曰はく、『昔し、孟嘗君、天下中の人の賴みを引き受くる男立て、さては、姦惡の人々を招き寄せて、薛の中へ入れたること、多分六萬餘軒もあらむ、其の人々の子孫なればこそ、荒々しきも道理なれ』と、世に、孟嘗君は食客を世話することを好みて、自ら之れを喜び樂みきと言ひ傳へたるが、其の評判は、此の地の子弟の荒々しき事實に徵して空しからず」と、

【文法】茅坤の曰はく、孟嘗君の傳を讀めば、能く人をして士を好みて、躬を俯さしむと、○許相卿の曰はく、此の傳、國策の語を錯へ用ゐたり、

其の孟嘗君の士を養ひて、士を養ひたる報いを得たることを称賞するに至りては、太史公の手筆なりと、○陳仁錫の曰はく、太史公四君の傳を作りて、其さに客を好める意を見せり、孟嘗には、以故傾二天下之士一といひ、平原には、故爭相傾以待レ士といひ、信陵には、傾二平原客一といひ、春申には、招致賓客以相傾奪といへりと、○董份の曰はく、此れ其の客を好めることを賞して、美刺並びに顯はれたりと、○淩約言の曰はく、此の傳、田文の客を好めることをもて柱を立てたり、其の初めに、父に殺さて、門下不レ見二一賢者一といへるを觀れば、客を養ふ心已に萌せり、既にして、食客數千、擇ばずして、鷄鳴狗盜の流、卒に其の力に頼りて、虎口の危きを脫せり、而して、魏子の宮門に自刎せしも、馮驩の其の封邑を復せしも、皆食客の効なり、文に背きて去りたる者なきにしもあらずといへども、文の卒に之れを過することなかりしは、其の天性の然るにあらざらむや、太史公の其好レ客自喜、而名不レ虛と謂へるは、其れ是れを以てなるかと、

平原君虞卿列傳第十六

平原君趙勝者、趙之諸公子也、諸子中勝最賢、喜賓客、賓客蓋至者數千人、平原君相趙惠文王及孝成王、三去レ相、三復レ位、封於東武城、

【講義】平原君の趙勝は、趙の公子の一人にして、趙の惠文王の弟なり、公子總の中にて、勝は、最も賢才ありて、賓客の世話をすることを喜び樂みたれば、賓客の寄り來れる者、多分數千人もありきとぞ、平原君は、趙の惠文王及び孝成王の宰相となりて、三たび宰相を退き去り、三たび其の位に復しけり、東武城に封ぜられぬ、

【又注】王延陳の曰はく、喜賓客の三字は、是れ一篇の綱領なり、後の凡べての四節は、皆是れ賓客を喜みたる實跡なりと、

平原君家樓臨二民家一、民家有二躄者一、槃散行汲、平原君美人居二樓上一、臨見、大笑之、明日、躄者至二平原君門一、請曰、臣聞君之喜レ士、士不レ遠二千里一而至者、以二君能貴一レ士而賤レ妾也、臣不幸有二罷癃之病一、而君之後宮、臨而笑レ臣、臣願得二笑一、臣者頭、平原君笑應曰、諾、躄者去、

【訓義】【躄者】……ちんばの男なり、【槃散】……足を引きて歩むさまなり、【罷癃】……腹の曲がりて、せむしになりたるなり、

【講義】平原君の家の二階は高くして、其の土地の人民の家を一目に見おろせり、或る人民の家に、一人のちんばの男ありて、槃散として、ちんばを引きて、水を汲みたるに、平原君の腰元の美人、二階の上に居て、其の見苦しき歩みざまを見おろして、大に之れを笑ひたり、其の翌日に、ちんばの男平原君の門に至りて、取り次ぎを請ひて曰はく、「臣は、當家の御主人の天下の士人の世話をすることを喜び樂まるゝ由を聞き及べり、天下の士人の、千里の遠路をも厭はで、寄り來れるは、當家の御主人の能く士人を貴び重んじて、妾婢を賤み輕んぜらるゝをもてならむ、臣は不幸にして、腰の曲がりて、せむしになりたる病氣あり、然るに、當家の御主人の奥向きの女中、昨日二階より見おろして、臣の樣子を笑ひたり、臣願はくは臣を笑ひたる者の首を申し請けて、腹の蟲を直したし」と、平原君之れを聞きて、笑ひて返答して曰はく、「委細承知せり」と、ちんばの男此の鍵授を聞きて、立ち去りたり、

平原君笑曰、觀二此豎子一、乃欲以二一笑之故一、殺吾美人、不亦甚乎、終不殺、居歲餘、賓客門下舍人稍稍引去者過レ半、平原君怪之曰、勝所以待二諸君一者、未嘗敢失二禮、而去者何多也、門下一人前對曰、以君之不殺笑、躄者、以君爲愛色而賤レ士、士卽去耳、於是平原君乃斬笑、躄者、美人頭、自造門、進二躄者一、因謝焉、其後門下乃復稍稍來、

【訓義】【豎子】……小僧といはむが如し、ちんばの男を指す、

【講義】平原君ちんばの男の立ち去りたる跡にて、笑ひて曰はく、「此の小僧の了簡を觀るに、唯だ一度其の見苦しき歩みざまを笑ひたる譯けをもて、吾が腰元の美人を殺したく思へり、其の了簡も亦甚しからずや」と、終に其の申し入れを聞き流して、美人を殺さゞりけり、其の後、一年餘りになりて、賓客及び門下舍人の追ひ〳〵に其の家を引き去りたる者、半分以上になりたれば、平原君之れを不思議に思ひて曰はく、「己れの諸君を待遇する仕方は、今まで一度も決して禮を失ひたることなし、然るに、近頃、人々の立ち去れる者、何故に多きぞ」と、門下の一人前へ進みて、對へて曰はく、「貴君のちんばの男を笑ひし者を殺したまはぬをもて、貴君は、女色を愛し重んじて、士人を賤み輕んぜらる人なりと思ひて、士人の卽座に立ち去りしまでなり」と、是に於て、平原君ちんばの男の約束を反故にせしことを後悔して、之れを笑ひし美人の首を切りて、自身に其の男の門口まで往きて、其の切り首を差し出して、それに就きて、延引したる廉を詫びて歸りしに、平原君は、美人に替へても、ちんばの男を大切にせりとの評判高くなりて、其の後、門下の人々、重ねて追ひ〳〵戻り來れり、

【又注】茅坤の曰はく、平原君實を好みて、記すべき者甚だ衆し、獨り美人を斬りたる一節を擧げたるは、此れ要領を剝く法なりと、○張之象の曰はく、前後稍稍の二字相照應して、賓客去就の本末あることを見せりと、

是時齊有二孟嘗一、魏有二信陵一、楚有二春申一、故爭相傾以待レ士、

【講義】是の時、齊の國には、孟嘗君あり、魏の國には、信陵君あり、楚の國には、春申君あり、されば、此の人まは、趙の平原君と共に、我れ後れじと、先を爭ひて、互に先方を押し傾けて、天下の士人を優待せり、

秦之圍邯鄲、趙使平原君求救、合從於楚、約與食客門下有勇力、文武備具者、二十人偕、平原君曰、使文能取勝則善矣、文不能取勝、則歃血於華屋之下、必得定從而還、士不外索、取於食客門下足矣、得十九人、餘無可取者、無以滿二十人、

【合從】……解は、蘇秦の傳に見えたり、【使文能取勝】……文は、文事上の談判なり、【歃血於華屋之下】……立派なる會堂の下にて、血を口の端に塗りて、武力をもて威し付けて、强ひて盟ふなり、

【講義】秦の兵の趙の都の邯鄲を圍みしとき、趙王平原君を楚の國へ遣はして、救ひを求めて、楚と合從して、秦に抵抗せしめむとせり、平原君之れを心得て、其の家の食客及び門下の者の、勇氣力量ありて、文事と武事とを兼ね具へたる者二十人と同行せむことを約束せり、而して、平原君の曰はく、「文事上の談判をもて、首尾能く楚の國に勝ちを取りて、楚の國をして、我が注文に應ぜしむることを得ば、此の上もなきことなれど、若し文事上の談判にて、楚の國に勝ちを取ること能はずば、立派なる會堂の下にて、血を口のはたに塗りて、武力をもて威し付けて、强ひて盟ひて、是非とも合從の約束を取り極めて、立ち戻ることを得るやうにせむ、此の掛け合ひに隨行せしむべき士は、外に求むるに及ばず、己れの家の食客、及び門下の者より擇び取らば、事足らむ」と、新く官ひて、其の家の食客、及び門下の者を人選せしに、十九人を手に入れたれど、餘の一人は、取り用ゐるべき者なくして、二十人には滿たざりけり、

【又注】茅坤の曰はく、太史公士を好むことを事實として、孟嘗に於ては、最下坐者といひ、平原に於ては、無以滿二十人といへりと、

門下有毛遂者、前自贊於平原君曰、遂聞君將合從於楚、約與食客門下二十人偕、不外索、今少一人、願君卽以遂備員而行矣、

【自贊】……自ら其の身を推薦するなり、

【講義】其の時、門下に毛遂といふ者ありて、平原君の前へ進み出でゝ、自ら其の身を平原君に推薦して曰はく、「己れ貴君の楚の國と合從せむとて、食客及び門下の者二十人と同行すべし、其の人物は、外に求めずと約束せられしに、今、一人不足せりとの趣きを聞き及びたれば、願はくは貴君の卽座に己れをもて其の人員に差し加へられて、出發せられむことを」と、

平原君曰、先生處勝之門下幾年於此矣、毛遂曰、三年於此矣、

【講義】平原君の曰はく、「先生の己れの門下に居らるゝことは、此の年までにて、幾年になりたるぞ」と、毛遂の曰はく、「此の年までにて、三年なり」と、

平原君曰、夫賢士之處世也、譬若錐之處囊中、其末立見、今先生處勝之門下、三年於此矣、左右未有所稱誦、勝未有所聞、是先生無所有也、先生不能、先生留、毛遂曰、臣乃今日請處囊中耳、使遂蚤得處囊中、乃穎脫而出、非特其末見而已、

【穎脫】【稱誦】……擧め立つるなり、【穎脫】……錐の穗先の殘らず脫け出づるなり、一說には、穎は、穎の誤りなり、穎は、錐の柄なり、柄まで殘らず脫け出づるなりといへり、

【講義】平原君の曰はく、「全體、賢才ある士の世間に居るは、譬へば、錐の囊の中に居るが如く、其の穗先の卽座に見はれ出づるものなり、然るに、今、先生の己れの門下に居らるゝことは、此の年までにて、三年なりとのことなるが、己れの左右の近臣は、まだ先生の腕前を擧め立つる者なく、己れも、まだ先生の腕前を聞き及びたることなし、是れ先生には何の腕前もなきなり、先生には此の度の仕事は出來難からむ、先生は、先づ隨行を見合はせて、己れの留守をせられよ」と、毛遂の曰はく、「臣は、今日より、囊の中に居らむことを請ふのみ、己れをして早く囊の中に居らしめたらむには、錐の穗先は、殘らず脫け出でゝ、囊の外へ出づるならむ、但し其の穗先の見はれ出づるばかりにはあらざらむ」と、

【又注】楊慎の曰はく、四つの先生の字を疊用せるは、檀弓の沐浴珮玉の句法と同じと、

平原君竟與毛遂偕、十九人相與目笑之、而未發也、毛遂比至楚、與十九人論議、十九人皆服、平原君與楚合從、言其利害、日出而言之、日中不決、十九人謂毛遂曰、先生上、

【目笑】……目を見合はせて笑ふなり、【未發】……まだ嘲弄の言葉を發せざるなり、

【講義】平原君此の辯解に感服して、終に毛遂と同行せしに、前に選ばれたる十九人、之れを侮りて、共々に目を見合はせて笑ひたれど、まだ嘲弄の言葉を發するまでには至らざりけり、然るに、毛遂楚の國へ到著する頃までに、十九人と議論して、片端より說き伏せたれば、十九人皆其の說に服しけり、さて、平原君楚の國と合從せむとて、合從すれば、雙方の利益なり、合從せざれば、雙方の損害なりといふことを、朝日の出づる頃より、日中正午に及ぶまで、繰り返して述べ立てたれど、楚の考烈王異議を唱へて、何とも決定せざりしかば、十九人毛遂に物語りして曰はく、「此の分にては、何時果つべしとも見えざれば、先生一たび堂に上りて、雄辯を試みよ」と、

毛遂按劍歷階而上、謂平原君曰、從之利害、兩言而決耳、今日出而言從、日中不決、何也、楚王謂平原君曰、客何爲者也、平原君曰、是勝之舍人也、楚王叱曰、胡不下、吾乃與而君言、汝何爲者也、

【按劍】【按劍】……劍の柄に手を掛くるなり、【歷階而上】……片足づゝ階段を上り越ゆるなり、【兩言】……利益と損害となり、【胡】……何ぞなり、【而】……汝なり、

【講義】毛遂斯くと聞くや否や、佩劍の柄に手を掛けて、片足づゝ階段を上り越えて、堂の上に飛び上がりて、平原君に物語りして曰はく、「合從の利益と損害とは、先刻より仰せられたる通り、合從すれば、雙方の利益なりといふ兩言にて決定せむのみ、今、朝日の出づる頃より、合從の相談を開かれて、日中正午に及ぶまで、決定せざるは、何事ぞ」と、楚王平原君に物語りして曰はく、「此の客人は、何をする者ぞ」と、平原君の曰はく、「是れは、己れの舍人なり」と、楚王怒りて、叱り付けて曰はく、「無禮なり、何ぞ堂より下らざる、吾れは、汝の主君と共に相談せり、汝は、何をする者ぞ」と、

毛遂按劍而前曰、王之所以叱遂者、以楚國之衆也、今十步之內、王不得恃楚國之衆也、王之命、懸於遂手、吾君在前、叱者何也、

【講義】毛遂偽劍の柄に手を掛けて、楚王の前へ進み出でゝ曰はく、「大王の己れを叱り付けらるゝは、楚國の人數を恃まれてならむ、今、大王と己れとの距離は、僅に十步なり、此の十步の內にて、大王は、楚國の人數を恃まるゝことを得ざるなり、大王の一命は、最早己れが手に懸かれり、吾が主君目の前に在り、之れを差し置きて、己れを叱り付けらるゝは、何事ぞ、

且遂聞湯以七十里之地、王天下、文王以百里之壤、而臣諸侯、豈其士卒衆多哉、誠能據其勢而奮其威、今楚地方五千里、持戟百萬、此霸王之資也、以楚之彊、天下弗能當、白起小豎子耳、率數萬之衆、興師以與楚戰、一戰而舉鄢、郢、再戰而燒夷陵、三戰而辱王之先人、此百世之怨、而趙之所羞、而王弗知惡焉、合從者爲楚、非爲趙也、吾君在前、叱者何也、

【講義】【一戰而舉鄢郢、再戰而燒夷陵、三戰而辱王之先人】……白起の傳に據るに、後七年、白起攻楚、拔鄢、郢五城、其明年、攻楚拔郢、燒夷陵、遂東至竟陵、楚王亡去郢、東走徙陳とあり、後七年は、楚の頃襄王の二十年に當たり、王の先人は、即ち考烈王の亡父の頃襄王なり、舉鄢、郢、の郢は、郢の誤まりならむ、

【講義】しかのみならず、己れが微ぬ〳〵聞き及びたるには、殷の湯王は、僅に七十里四方の土地をもて、諸侯を臣下としたまへりとなり、是れいかで其の士卒の多人數なるが爲めならむ、誠に能く其の形勢に據りて、其の威力を奮はれたればなり、今、楚の土地は、五千里四方の廣さありて、戟を手に持つ兵卒は、百萬人に及びたり、此れ天下に敵者たり王者たるべき資本なり、楚の强大なる兵力をもて立ち向はゞ、天下は決して敵對すること叶はざらむ、然るに、秦の白起の如きは、取るに足らぬ小僧なるに、數萬の人數を引き連れて、單身興として、楚と戰ひて、一たび戰ひて、鄢、郢の五箇所の城を丸取りにし、再び戰ひて、鄢の都を乘り取り、夷陵を燒きて、御歷代の墳墓を荒らし、三たび戰ひて、大王の御先代に恥辱を與へて、都を陳へ徙しめたり、此れ楚の國の百世の御子孫までの怨敵にして、趙に於ても、片腹痛く思ひたまはずして、之れに臣とし事へむとしたまへり、今、合從して、秦に敵對せむとするは、楚の爲めにして、趙の爲めにはあらざるなり、吾が主君目の前に在り、之れを差し置きて、己れを叱り付けらるゝは、何事ぞ」と、以上、毛遂の言葉なり、

楚王曰、唯唯、誠若先生之言、謹奉社稷而以從、毛遂曰、從定乎、楚王曰、定矣、

【唯唯】【唯唯】……はい〳〵と惡事をするなり、

【講義】楚王毛遂の雄辯に感服して曰はく、「はい〳〵、誠に先王の言葉の如し、謹みて社稷國家を捧げ持ちて、先王の說論に從はむ」と、毛遂の曰はく、「すらば、合從の御相談は、取り極まりたるか」と、楚王の曰はく、「取り極まりたり」と、

毛遂謂楚王之左右曰、取雞狗馬之血來、毛遂奉銅盤而跪進之楚王曰、

王當歃血而定從、次者吾君、次者遂、遂定從於殿上、毛遂左手持盤血、而右手招十九人曰、公相與歃此血於堂下、公等錄錄、所謂因人成事者也、

【訓】【取雞狗馬之血來】……雞は、大夫以下の盟ひに用ゐるもの、狗は、諸侯の盟ひに用ゐるもの、馬は、天子の盟ひに用ゐるものなり、此の三種の血を取りて來れとは、盟ひに用ゐる血を總べて言ひたるなり、【錄錄】……碌碌に同じ、衆人の凡庸にして役に立たぬまなり、

【講】毛遂定王の左右の近習に物語りして曰はく、「只今、盟ひを始むべければ、雞と狗と馬との血を取りて來れ」と、毛遂やがて其の血を入れたる銅盤を捧げて、兩膝を地に付けて、敬禮して、之れを楚王に進めて曰はく、「大王には、此の血を御口のはたに塗りたまひて、合從の約束を取り極めたまふべし、大王の次ぎは、吾が主君なり、吾が主君の次ぎは、己れなり」と、遂に合從の約束を御殿の上に取り極めたり、まて、毛遂は、左の手に銅盤の血を持ちて、右の手にて十九人を招きて曰はく、「御身達は、一所に此の血を堂の下にて口のはたに塗りて、今日の約定の仲間入りをすべし、御身達は、錄錄として、凡庸にして、河の役にも立たぬなり、御身達は、世間にて取り沙汰せる、人の力に因りて仕事を仕遂ぐる者なり」と、

平原君已定從而歸、歸至於趙、曰、勝不敢復相士、勝相士、多者千人、寡者百數、自以爲不失天下之士、今乃於毛先生而失之也、毛先生一至楚、而使趙重於九鼎大呂、毛先生以三寸之舌、彊於百萬之師、勝不敢復相士、遂以爲上客、」

【訓】【相】……人相を見るなり、【九鼎】……夏の禹王の九州の地方官より納めたる金にて鑄たる鼎なり、【大呂】……周の廟の大鐘にして、其の音大呂に合する者なり、

【講】平原君已に楚王と合從の約束を取り極めて、立ち歸りて、趙へ到著して曰はく、「人の骨相は、人相にては分からぬ者と感じたれば、己れは決して重ねて士の人相を見ざるべし、己れは、是れまで、士の人相を見たること、多くいへば千人、少なくいへば百人の數にも及びて、自分の考へにては、吾が眼力ならば、天下中の士の器量を見失はじと思ひたるに、今は、反りて、毛先生にて見失へり、毛先生は、一たび楚へ到著して、趙の實目をして、世々の天子の寶物なる九鼎、大呂よりも重からしめられたり、毛先生は、僅に長さ三寸の舌をもて、百萬人の軍勢よりも強き働きをせられたり、人の器量は、人相にては分からぬ者と感じたれば、己れは、決して重ねて士の人相を見ざるべし」と、遂に毛遂をもて、上等の客客とせり、

【文法】楊慎の曰はく、又三つの毛先生の字を疊用せりと、

平原君既返趙、楚使春申君將兵赴救趙、魏信陵君亦矯奪晉鄙軍、往救趙、皆未至、秦急圍邯鄲、邯鄲急、且降、平原君甚患之、邯鄲傳舍吏子李同說平原君曰、君不憂趙亡邪、平原君曰、趙亡則勝爲虜、何爲不憂乎、

【訓】【矯】……詐るなり、國君の命令なりと詐るなり、【傳舍吏】……傳馬所の役人なり、

【講】平原君の既に趙へ立ち戻りたる後に、楚は、春申君をして、兵に將として、趙を救はしむることゝなり、魏の信陵君も、平原君とは親戚の間柄なれば、楽て盟き難しとて、國君の命令なりと詐りて、晉鄙の受け持ちたる軍兵を奪ひ取りて、往きて趙を救はむとせしが、此の南國の加勢の皆まだ到著せぬ中に、秦は、火急に趙の都の邯鄲を圍みたれば、邯鄲危急に逼りて、程なく敵に降らむとせり、平原君甚だ之れを心配せしに、邯鄲の傳馬所の役人の子の李同といふ者、尋ね來りて、平原君に說きて曰はく、「貴君は、趙の滅亡せむことを心配せられぬか」と、平原君の曰はく、「趙既亡せば、己れは、敵の生け擒りとならむ、何として心配せざるべき」と、

李同曰、邯鄲之民、炊骨易子而食、可謂急矣、而君之後宮以百數、婢妾被綺穀、餘粱肉、而民褐衣不完、糟糠不厭、民困兵盡、或剡木爲矛矢、而君器物鍾磬自若、使秦破趙、君安得有此、使趙得全、君何患無有、今君誠能令夫人以下、編於士卒之閒、分功而作、家之所有、盡散以饗士、士方其危苦之時、易德耳、

【訓】【綺穀】……紗綾縮緬の如き美服なり、【粱肉】……粱は、粟の誤まりならむ、米と肉となり、【褐衣】……毛織りの布子なり、賤しき者の著物なり、【剡木】……棒切れを削り尖らするなり、【鍾磬】……鐘は、銅なり、磬は、石にて作りたる樂器なり、【自若】……平日の通りに飾り立つるなり、【編】……組み込むなり、【分功而作】……女のすべき針仕事などの手分けをして働くなり、【易德】……恩德を施し易きなり、

【講】李同の曰はく、「邯鄲の人民は、炭き物無きて、死人の骨にて食物を炊ぎ、米麥も無き、野菜も無きて、我が子と人の子とを取り易へて、之れを殺して食ふ程になりたれば、今日の有樣は、實に危急なりといふべし、然るに、貴君の奥向きの女中は、百人をもて數ふべくして、其の召し使はるゝ婢妾の輩は、紗綾縮緬の如き美服を著用し、米をも肉をも食ひ餘せども、人民は、粗末なる毛織りの布子をだにも滿足に著用せ

ず、酒の粕、米の糠にだにも飽き足らぬなり、又人民は困窮し、兵器は壺き果てたれば、戟は棒切れを削り尖らして、矛を作りて、値に敵を防がむとせるに、貴君の家の諸道具樂器の類は、自若として、平日の通りに飾り立てられたり、若し明日にも秦をして趙を破らしめば、貴君は、いかで美人寶物などを所持して、獨り樂まるゝことを得べき、若し又趙をして安全なることを得しめば、貴君は、何とて美人寶物などのなきことを心配せらるべき、今、君誠に能く愛情を忍びて、奥方より以下の女中をして、士卒の間に組み込ましめて、女のすべき針仕事などの手分けをして、働かしめて、貴君の家にある品々を殘らず散らして、士卒を窒慰せられよ、士卒は、危急困苦の最中には、少しばかりの惠みを受けても、喜ぶものなれば、今の場合には、恩澤を施し易しと、

於是平原君從之、得敢死之士三千人、李同遂與三千人赴秦軍、秦軍爲之卻三十里、亦會楚、魏救至、秦兵遂罷、邯鄲復存、李同戰死、封其父爲李侯、

【敢死】……必死の覺悟をするなり、

【是】是に於て、平原君李同の勸めに從ひて、其の通りにせしに、必死の覺悟をしたる士卒三千人を得たり、李同は、遂に此の三千人と共に、秦の軍勢に駈け向ひて、命限りに戰ひたれば、秦の軍勢は、之れが爲めに、三十里程退却せり、折りから、楚、魏の兩國の救ひの兵も、到著したれば、秦の兵は、遂に圍みを解きて、引き揚げて、邯鄲の都は、重ねて無事に存在せり、さりながら、此の合戰に、李同は、戰死せしかば、平原君氣の毒に思ひて、國君に申し立てゝ、其の父に領地を與へて、李侯となせり、

【又注】淺稚陸の曰はく、此の至の字、正に上の皆未レ至の字に應じたり、是れ針線の處なりと、

虞卿欲以信陵君之存邯鄲、爲平原君請封、公孫龍聞之、夜駕見平原君曰、龍聞虞卿欲以信陵君之存邯鄲、爲君請封、有之乎、平原君曰、然、龍曰、此甚不可、

【時】時に、虞卿といふ者、魏の信陵君の加勢に來りて、邯鄲を安全にせしに、其の戰慄の平原君の手柄として、平原君の爲めに、封土を與へむことを趙王に申し請はむと思ひたり、辯士の公孫龍之れを聞き及びて、夜中に馬車の支度をして、平原君に面會して曰はく、「已れは、虞卿の信陵君の邯鄲を安全にせし廉をもて、貴君の手柄として、貴君の爲めに、封土を與へむことを趙王に申し請はむとする由を聞き及びたるが、全く左樣の事實ありや」と、平原君の曰はく、「さなり」と、公孫龍の曰はく、「此れ甚だ宜しからぬことなり、

且王擧君而相趙者、非以君之智能、爲趙國無有也、割東武城而封君者、非以君爲有功也、而以國人無勳、乃以君爲親戚故也、君受相印、不辭無能、割地不言無功者、亦自以爲親戚故也、今信陵君存邯鄲而請封、是親戚受城、而國人計功也、此甚不可、且虞卿操其兩權、事成、操右券以責、事不成、以虛名德君、君必勿聽也、平原君遂不聽虞卿、

【國人計功】……國人の心をもて手柄を計るなり、【操其兩權】……兩樣の權力を握るなり、【操右券】……金錢の借用證文は、左右の二通を綴へて、之れを引き合はせて、證據とするものなれば、其の一方の證文を握りて催促するやうに、報酬を談ずるなり、

【無能】其の譯けは、先づ趙王の貴君を擧げ用ゐて、趙の國の宰相とせられたるには、あらぬなり、又東武城を割き與へて、貴君を封ぜられたるは、貴君を、手柄ありとして、國人をもて、手柄なしとせられたるにはあらぬなり、貴君を宰相とせられたるも、東武城を割き與へられたるも、貴君は、趙王の弟なりといふ戰慄たる譯けをもてなり、貴君の宰相の印章を受けて、己れの働きなきことを辭退せられず、東武城を割き與へられて、已れの手柄なきことを言はれざるも、亦自ら趙王の弟なりといふ戰慄たる譯けをもてなり、今、信陵君の邯鄲を安全にせし廉をもて、貴君の手柄として、封土を申し請はれむには、是れ、最前は、戰慄たる譯けをもて、東武城を受けられながら、此の度は、國人の心を失はれたるものといふべし、此れ甚だ宜しからぬことなり、しかのみならず、虞卿は、其の兩樣の權力を握りて、貴君の爲めに封土を申し請ひたる事成就せば、金貸しの證文を握りて催促するやうに、貴君に對して、其の報酬を得むことを談ずるならむ、若し又其の事成就せずば、貴君は、是非とも此の請願に同意せらふ、空虛なる名義をもて、貴君に恩德を愛り付くるならむ、孰れにもせよ、貴君の害になるべければ、貴君は、是非とも此の請願に同意せらるゝことなかれ」と、以上、公孫龍の言葉なり、平原君此の忠告を聞きて、遂に虞卿の周旋に取り合はざりけり、

平原君以趙孝成王十五年卒、子孫代、後竟與趙俱亡、

【平原君】平原君趙の孝成王の十五年をもて卒去せしかば、其の子孫代はりて跡目に立ちけるが、其の後、終に趙の國と共に滅亡しき、

平原君厚待公孫龍、公孫龍善爲堅白之辯、及鄒衍過趙、言至道、乃絀公孫龍、

虞卿者、游說之士也、蹻蹻擔簦、說趙孝成王、一見賜黃金百鎰、白璧一雙、再見爲趙上卿、故號爲虞卿、

【堅白】……白を守るなり、己れの說を堅く執るなり、【至道】……至極の道理なり、【論】……論と通ず、退くるなり、

平原君は、手厚く公孫龍を待遇せり、公孫龍は、堅白の辯とて、己れの說を堅く執る論辯を上手にせしが、鄭衍の趙の國に立ち寄りて、至極の道理をいふに及びて、平原君は、其の論に感服して、公孫君を退けゝり、

【蹻蹻】……草履を足に突き掛くるなり、蹻は、屩に同じ、【簦】……柄のある笠なり、【鎰】……二十兩を鎰といふ、【一雙】……一對なり、

虞卿は、游說の士なり、貧乏にして、何の支度もなく、草履を足に突き掛けて、柄のある笠を擔ひて、趙の國へ往きて、孝成王に說きて、一たび謁見して、黃金百鎰と、白き璧玉一對とを賜はり、再び謁見して、趙の上卿となりしが故に、虞卿と號せり、

淺羽隆の曰はく、此の傳、全く圖說を翻ひて、前後布置少し異なりと、

秦、趙戰於長平、趙不勝、亡一都尉、趙王召樓昌與虞卿曰、軍戰不勝、尉復死、寡人使束甲而趨之、何如、樓昌曰、無益也、不如發重使爲媾、虞卿曰、昌言媾者、以爲不媾軍必破也、而制媾者在秦、且王之論秦也、欲破趙之軍乎、不邪、王曰、秦不遺餘力矣、必且欲破趙軍、虞卿曰、王聽臣、發使出重寶以附楚、魏、楚、魏欲得王之重寶、必內吾使、趙使入楚、魏、秦必疑天下之合從、且必恐、如此、則媾乃可爲也、趙王不聽、與平陽君爲媾、發鄭朱入秦、秦內之、

【附復死】……此の復の字は、又と解くべし、戰國策の註に、官不能軍敗、都尉又死、王怒之甚とあり、【束甲】……甲冑を括り束ねるなり、軍勢を滑めて、不意擊ちを仕掛けむ爲めなり、【重使】……輕使の反對にして、手重き使者なり、【媾】……和睦するなり、

秦の兵と、趙の兵と、長平の地に戰ひて、趙の兵勝たずして、一人の都尉を討たれしかば、趙王樓昌と虞卿とを召し出して、相談して曰はく、「此の度の合戰に、我が軍勢の勝たざるのみならず、都尉又戰死せり、如何にも殘念なることなれば、拙者は、兵士の甲冑を括り束ねて、荷物として、車に載せて、戰場へ向はせて、秦の軍勢に不意擊ちを仕掛けさせむと思ふなり、此の計略は如何」と、虞卿の曰はく、「そは、益もなきことなり、さる危險なる事をせむよりは、手重き使者を差し立てゝ、秦と和睦せむには如かじ」と、樓昌の曰はく、「そは、益も言へるは、和睦せずば、我が軍勢は、屹度敗亡するならむと思ひてのことならむ、さりながら、和睦の事を切り盛りするは、秦の手心に在ることにて、和睦するか、和睦せざるか、分からざるなり、しかのみならず、大王の秦の事を論じたまへるに就きて、秦は是非とも趙の軍勢を打ち破らむと思へりや否やの御臣定は如何」と、趙王の曰はく、「秦は、全力を殘さゞれば、屹度程なく趙の軍勢を打ち破らむと思へるならむ」と、虞卿の曰はく、「大王臣が說を聽き納れたまひて、使者を差し立てゝ、貴重なる寶物を出だして、進物として、楚、魏の二國を手に附けたまへ、楚、魏の二國は、大王の貴重なる寶物を手に入れたしと思はゞ、屹度吾が使者を受け入るゝならむ、趙の使者楚、魏の二國へ入りたりと聞こえなば、秦は、屹度天下の諸侯の合從せむことを疑ひ、且つ又屹度之れを恐るゝならむ、此の如くならば、和睦をせらるべきなり」と、趙王虞卿の說を聽き納れずして、樓昌の說に從ひて、平原君の同腹の弟なる平陽君の趙約と相談して、貴人の鄭朱を差し立てゝ、秦の國へ入らしめしに、秦は、之れを受け入れたり、

淺羽隆の曰はく、此の段、秦に媾すべからざることを論ぜりと、

趙王召虞卿曰、寡人使平陽君爲媾於秦、秦已內鄭朱矣、卿以爲奚如、虞卿對曰、王不得媾、軍必破矣、天下賀戰勝者、皆在秦矣、鄭朱貴人也、入秦、秦王與應侯必顯重以示天下、楚、魏以趙爲媾、必不救王、秦知天下不救王、則媾不可得成也、應侯果顯鄭朱以示天下賀戰勝者、終不肯媾、長平大敗、遂圍邯鄲、爲天下笑、

趙王重ねて虞卿を召し出して曰はく、「拙者は、平陽君を主任として、秦へ和睦を仕向けさせたるに、秦は、已に使者の鄭朱を受け入れたり、御身は、如何に成り行かむと思ふぞ」と、虞卿對へて曰はく、「臣が考へにては、大王には、秦と和睦することを得たまはずして、我が軍勢は、屹度敗亡して、天下の諸侯の戰爭に勝ちたることを慶賀する使者は、皆の秦の國へ寄り合ふならむ、其の譯けは、鄭朱は、當國の貴人なれば、秦の國へ入りたらば、秦王は、應侯の范雎と相談して、屹度鄭朱を目立つやうに手重く扱ひて、天下の諸侯に見せ示すならむ、然るときは、楚、魏の二國は、趙は秦と和睦したりと思ひて、屹度大王を救はざらむ、秦は、天下の諸侯の大王を救はざることを知らば、趙を輕蔑せむ餘に、和睦は成就することを得られざらむ、臣が見込みは、此の如し」と、應侯果たして鄭朱を目立つやうに手重く扱ひて、天下の諸侯の戰爭に勝ちたることを慶賀する使者に見せ示して、終に和睦を承知せず、長平の合戰に、趙は、大に敗軍し、遂に邯鄲の都を圍まれて、天下

の諸侯の物笑ひとなりぬ、

【文法】 後推陸の曰は〜、此の段、鄭朱の秦に讓せむとして成らざることを論ぜりと、

秦既解邯鄲圍、而趙王入朝、使趙郝約事於秦、割六縣而媾、虞卿謂趙王曰、秦之攻王也、倦而歸乎、王以其力尚能進、愛王而弗攻乎、王曰、秦之攻我也、不遺餘力矣、必以倦而歸也、虞卿曰、秦以其力攻其所不能取、倦而歸、王又以其力之所不能取、以送之、是助秦自攻也、來年秦復攻王、王無救矣、

【字解】 【事】……和睦の事なり、

【講義】 秦既に邯鄲の圍みを解きければ、趙王秦の機嫌を取らむとて、秦へ入朝し、別に趙郝といふ者をして、和睦の事を秦と約束せしめて、其の證として、六箇所の縣を割きて、秦に與へて、和睦を結ばしめむとせしに、虞卿趙王に物語りして曰はく、「秦の兵の大王の國を攻めて、其の戰爭を止めたるは、攻めあぐみて歸りたる譯けなるか、又大王には、其の兵力は、尚は能く進擊せらるれども、大王を愛憐して、攻むることを見合はせたりと思ひたまへるか」と、趙王の曰はく、「秦の我が國を攻むること、全力を注ぎて、餘力を殘さゞれば、屹度攻めあぐみて歸りたるならむ」と、虞卿の曰はく、「然らば、秦は、其の兵力をもて、其の取ること能はざる土地を攻めたるをもて、攻めあぐみて歸りたるを、大王には、又其の兵力にては取ること能はざる土地を、此方より强ひて差し遣りて、先方のものにせらるゝ譯けなれば、是れ取りも直さず、秦の手傳ひをして、自ら己れの國を攻むるに當たるなり、來年になりて、秦若し重ねて大王の國を攻めば、大王には、最早自ら救ひたまふ手段なからむ」と、

王以虞卿之言告趙郝、趙郝曰、虞卿誠能盡秦力之所至乎、誠知秦力之所不能進、此彈丸之地弗予、令秦來年復攻王、王得無割其內而媾乎、

【字解】 【彈丸之地】……巖魂玉程の小さき土地なり、【其內】……國內の土地なり、

【講義】 趙王虞卿の說を趙郝に告げたるに、趙郝の曰はく、「虞卿は、誠に能く秦の兵力の至り屆くべき極點までを知り盡くせりや、秦の兵力は、いかで是れにて止まるべき、誠に秦の兵力の進擊すること能はざることを知らば、此の巖魂玉程の小さき土地をも割き與ふるに及ばざらむ、さりながら、若し秦をして、來年になりて、重ねて大王の國を攻めしめば、大王には、其の國內の土地を割き與へて、秦と和睦しかまふことなきことを得むや、屹度左樣にしたまはずは叶はざるべし」と、

王曰、請聽子割矣、子能必使來年秦之不復攻我乎、趙郝對曰、此非臣之所敢任也、他日三晉之交於秦相善也、今秦善韓、魏而攻王、王之所以事秦、必不如韓、魏也、今臣爲足下解負親之攻、開關通幣、齊交韓、魏、至來年而王獨取攻於秦、此王之所以事秦、必在韓、魏之後也、此非臣之所敢任也、

【字解】 【負親之攻】……以前の懸親に背きたるに因りて、秦より攻めらるゝなり、【幣】……同等にするなり、

【講義】 趙王の曰はく、「御身の說は尤なれば、之れを聽き納れて、六箇所の縣を秦に割き與へたし、さりながら、御身は、能く來年になりて、秦をして、重ねて我が國を攻めざらしめむことを、屹度受け合ふべきか」と、趙郝對へて曰はく、「此の儀は、臣が押し切りて引き受け申さるゝことにあらぬなり、其の譯けは、先頃までは、韓、魏、趙の三晉は、軌れも秦と中善く交はりしが、今、秦は、韓、魏の兩國とは相變らず中善くして、大王の國のみを攻むるは、大王の秦に事へたまふ仕方の屹度韓、魏に及ばざればならむ、今、臣は、大王足下の爲めに、以前の懸親に背きたるに因りて秦より攻めらるゝ困難を解きて、一旦締め切りたる關門を明けて、進物を差し出して、秦と交際することを韓、魏と同等にせむ、さりながら、折角それまで運びたりとも、來年になりて、大王のみ獨り秦より攻めらるゝ失策を取りたまはゞ、此れ大王の秦に事へたまふ仕方の、屹度重ねて韓、魏の後に在りて、韓、魏に劣りたる故なるべければ、此の儀は、臣が押し切りて引き受け申さるゝことにあらぬなり」と、

王以告虞卿、虞卿對曰、郝言不媾、來年秦復攻王、王得無割其內而媾乎、今媾郝又以不能必秦之不復攻也、今雖割六城、何益、來年復攻、又割其力之所不能取而媾、此自盡之術也、不如無媾、秦雖善攻、不能取

六縣、趙雖不能守、終不失六城、秦倦而歸、兵必罷、我日六城收天下、以攻罷秦、是我失之於天下、而取償於秦也、吾國尚利、孰與坐而割地、自弱以彊秦哉、

【訓讀】【自盡】……自ら其の地を削り盡くすなり、【日】……以の古字なり、

【講義】趙王趙郝の對へを虞卿に告げたるに、虞卿對へて曰はく、「趙郝の說にては、『今、秦と和睦せずば、來年になりて、秦は、重ねて大王の國を攻めむ、其の時になりて、大王には、其の國内の土地を割き與へて、秦と和睦したまふことなきことを得むや、屹度左樣にしたまはずば叶はざるべし』とのことなれど、今、和睦したりとも、趙郝は、又秦の重ねて攻めざることを屹度受け合はれずといへば、今、六箇所の城を割き與へたりといふとも、何の利益があるべき、來年になりて、重ねて攻め來らば、又其の兵力にて取ること能はざる土地を此方より强ひて割き與へて和睦せらるゝならむ、此の如く、年々土地を割き與へむには、此れ自ら其の地を削り盡くす手段に當たるなり、此の譯けなれば、決して秦と和睦することなきに如かじ、たとひ秦は、上手に我れを攻むといふとも、六箇所の城を失はざらむ、秦は攻めあぐみて歸らば、其の兵屹度疲弊せむ、我れは六箇所の城を秦に國を守ること能はずといふとも、終に六箇所の城を失はざらむ、秦は攻めあぐみて歸らば、其の兵屹度疲弊せむ、我れは六箇所の城を秦に與へずして、天下の諸侯に配分して、天下の諸侯の氣を取りて、其の兵力を合併して、疲弊せる秦を攻めむには、是れ我れは、六箇所の城を秦に天下の諸侯に失ひたる代はりに、其の埋め合はせを秦より取ること、なるべければ、我が國には、尙ほ利益あらむ、空しく坐して手を束ねて、土地を割き與へて、自ら國を弱めて、秦の力を强めむ仕方とは、孰れか增しならむ、

今郝曰、秦善韓、魏、而攻趙者、必以爲韓、魏不救趙也、而王之軍必孤、有以王之事秦、不如韓、魏也、是使王歲以六城事秦也、卽坐而城盡、來年秦復求割地、王將與之乎、弗與、是棄前功、而挑秦禍也、與之、則無地而給之、語曰、彊者善攻、弱者不能守、今坐而聽秦、秦兵不弊、而多得地、是彊秦而弱趙也、以益彊之秦、而割愈弱之趙、其計故不止矣、且王之地有盡、而秦之求無已、以有盡之地、而給無已之求、其勢必無趙矣、

【訓讀】【有以】……此の有は、又なり、【故】……戰國際には、因に作れり、

【講義】今、趙郝の說に曰はく、『秦の韓、魏と中善くして、趙を攻むるは、屹度孤立するなりと思ひたればなり、又大王の秦に事へたまふことの韓、魏に及ばざるをもて、之れを攻むるなり』と、是れ大王をして、年毎に六箇所の城を割き與へて、秦に事へしむる仕方なり、卽ち空しく坐して、手を束ねて、我が城は、盡き果つるならむ、來年になりて、秦は、重ねて土地を割き與へむことを望み求めば、大王には、之れを割き與へたまはざらむには、是れ前に割き與へたる骨折りを棄てゝ、水の泡として、更に又秦の禍を受けむことを、此方より持ち掛くることに當たるなり、さりとて、之れを割き與へむには、之れに供給すべき土地なからむ、古語に曰はく、『强き者は、上手に人の國を攻むるなり、弱き者は、己れの國を守ること能はざるなり』と、今、空しく坐して、手を束ねて、秦の所望を承知せば、秦の兵は、疲弊せずして、多く土地を手に入るゝならむ、是れ秦の力を强めて、趙の國を弱むるなり、强きが上にも益々强き秦の威權をもて、弱きが上にも愈々弱き趙の土地を割き取らば、秦の慾心增長して、趙の土地を取り盡くさむとする計略は、無論中途にて止むことなからむ、しかのみならず、大王の土地は、盡き果つることなきに、秦の要求は、止むことなからむ、盡き果つることある土地をもて、止むことなき要求に供給せむには、其の際限なき勢ひは、屹度趙の國は皆無になりて、滅亡するに至るべし、大王には、此の譯けを篤と勘考したまひて、只今秦に六箇所の縣を割き與ふることを是非とも見合はせたまふべしなり、

【文法】淺稚隆の曰はく、此の段、趙郝に因りて、秦に據ることの不可なることを歸ぜりと、

趙王計未定、樓緩從秦來、趙王與樓緩計之曰、予秦地何如毋予、孰吉、緩辭讓曰、此非臣之所能知也、

【講義】趙王は、趙郝の說に從ひて、秦に土地を割き與へむか、虞卿の說に從ひて、之れを見合はせむか、兩方の說に迷ひて、其の肚案のまだ決定せぬ中に、樓緩といふ者、秦より來りたれば、趙王樓緩と相談して曰はく、「秦に土地を與ふることゝ、與へぬことゝは、孰れか吉事なるべき」と、樓緩謙遜辭讓して曰はく、「此の儀は、臣が能く辨へ知れることにあらぬなり」と、

【文法】楊慎の曰はく、此非臣之所能知は、上の非臣之所教任と、寥大に相反せりと、

王曰、雖然試言公之私、樓緩對曰、王亦聞夫公甫文伯母乎、公甫文伯仕於魯、病死、女子爲自殺於房中者二人、其母聞之弗哭也、其相室曰、焉有子死而弗哭者乎、其母曰、孔子賢人也、逐於魯、而是人不隨也、今死、而婦

人爲之自殺者二人、若是者、必其於長者薄、而於婦人厚也、故從母言之、是爲賢母、從妻言之、是必不免爲妬妻、故其言一也、言者異、則人心變矣、今臣新從秦來、而言勿予、則非計也、言予之、恐王以臣爲爲秦也、故不敢對、使臣得爲大王計、不如予之、王曰、諾、

【考証】【房】……部屋の中なり、【相室】……公甫文伯の附き添ひの老女なり、【是人】……我が子と思はぬ言葉なり、

【講義】趙王の曰はく、「さりながら、兎に角に、試みに貴公の一存だけを申し述べて見よ」と、樓緩對へて曰はく、「大王にも、亦彼の公甫文伯の母の事を聞き及びたまへりや、公甫文伯は、魯の國に仕へけり、文伯の病死せしとき、歴元の女子の、文伯の爲めに、愛慕の情に堪へずして、部屋の中にて自害して、其の跡を追ひたる者、二人ありけり、然るに、文伯の母、其の死去せしことを聞きて、聲を放ちて泣かざりしかば、文伯の附き添ひの老女の曰はく、『御母公は、人情なきかな、いづかたに我が子の死にて聲を放ちて泣かざる者あるべき』と、文伯の母の曰く、『孔子は、賢き人にして、魯の國より逐ひ出されしに、是の人は、孔子に隨行せざりき、今、病死して、婦人の之れが爲めに自殺せし者二人あり、此のやうなる者は、屹度其の大人長者に對しては、手厚くして、婦人に對しては、手薄きが故に、女子に殉死せられたるならむ、斯かる心得違ひの者は、我が子とも思はねば、さばかり飲き慈まぬなり』と、されば、此の一言は、母の口より出づるときは、物の道理の分かりたる賢き母たるべけれども、妻の口より出づるときは、屹度嫉妬の深き妻たることを免れざらむ、されば、其の言葉は一つなれど、之れを發言する者の異なるときは、聞く人の心も變はるなり、今、臣は、新たに秦より來りたることなれば、秦の爲めを思ひて、趙の爲めを思はざらむと疑はるゝ身なり、されば、大王の御尋ねに對して、秦に土地を與へたまふなと申さば、趙の國を安全にする計策にあらざらむ、さりとて、秦に土地を與へたまへと申さば、大王の臣をもて秦の爲めにする者なりと思し召されむことを恐るゝなり、されば、此の儀は、押し切りて御對へ申さぬなり、さりながら、臣をして、大王の爲めに公平に計ることを得しめたまはゞ、秦に土地を與へたまはむには如かじ」と、趙王の曰はく、「委細承知せり」と、

虞卿聞之、入見王曰、此飾說也、王奮勿予、

【考証】【奮】……愼の古字なり、

【講義】虞卿趙王の樓緩の對へを聞きて、秦に土地を與ふることを承知せし由を聞きて、御殿へ出仕して、趙王に謁見して曰はく、「樓緩の申し上げたる口上は、至極尤なるやうに聞こゆれど、全く言葉を取り飾りて、秦の爲めを計りたる說なれば、大王には、愼みて大事を取りて、秦に土地を與へたまふことなかれ」と、

樓緩聞之、往見王、王又以虞卿之言告樓緩、樓緩對曰、不然、虞卿得其一、不得其二、夫秦趙構難、而天下皆說、何也、曰、吾且因彊而乘弱矣、今趙兵困於秦、天下之賀戰勝者、則必盡在於秦矣、故不如亟割地爲和、以疑天下、而慰秦之心、不然、天下將因秦之彊怒、乘趙之弊、瓜分之、趙且亡、何秦之圖乎、故曰、虞卿得其一、不得其二、願王以此決之、勿復計也、

【考証】【構難】……萬藤を結ぶなり、【瓜分】……瓜を斬ち割りたるやうに、其の國を分け取るなり、

【講義】樓緩虞卿の趙王を說めたることを聞きて、御殿へ出仕して、趙王に謁見せしに、趙王は、又虞卿の言葉を樓緩に告げたれば、樓緩對へて曰はく、「臣が愚見は、左樣なる譯けにあらず、全く御爲めを思ひたるなり、虞卿は、其の利害の一つを見ることを得ず、眼前の考へのみありて、後日の考へなき者なり、其の譯けは、全體、秦と趙と萬藤を結びたるを見て、天下の諸侯の之れを面白く思ひて居るは、何故ぞ、そは、外の事にてはなし、天下の諸侯の了簡になりて曰はむに、『吾れは、種々騷き秦の國に依賴して、弱き趙の國の困難に付け込まむ』と、天下の諸侯の了簡は、此の如くなれば、今、趙の兵は、秦に困められたるに、天下の諸侯の戰爭に勝ちたることを慶賀する使者は、屹度殘らず秦の國へ寄り合ふならむ、此の譯けなれば、悉に土地を割き與へて、和睦をして、一方には、天下の諸侯をして、趙は秦の加勢あらむと疑はしめて、其の弱きに付け込むことなからしめて、又一方には、秦の望みを遂げさせて、秦王の心を慰めむには如かじ、さもなからむには、天下の諸侯は、秦の强き怒りに依賴し、趙の疲勞したるに付け込みて、趙の國を瓜を斬ち割りたるやうに分け取りするならむ、さらば、趙は程なく滅亡すべければ、何とて秦に勝たむことを圖る暇あるべき、此の譯けなれば、『臣は、虞卿は、其の利害の一つを見ることを得て、其の利害の二つを見ることを得ず、眼前の考へのみありて、後日の考へなき者なり』と申したるなり」と、

【文法】宮黃の曰く、……王以虞卿之言告趙郝……王以告虞卿……王又以虞卿之言告樓緩……此れは是れ宮中の通語なりと、

虞卿聞之、往見王曰、危哉、樓子之所以爲秦者、是愈疑天下、而何慰秦之心哉、獨不言其示天下弱乎、且臣言勿予者、非固勿予而已也、秦索六

城於王、而王以六城賂齊、齊、秦之深讎也、得王之六城、并力西擊秦、齊之聽王、不待辭之畢也、則是王失之於齊、而取償於秦也、而齊、趙之深讎、可以報矣、而示天下有能爲也、王以此發聲、兵未窺於境、臣見秦之重賂至趙、而反媾於王也、從秦爲媾、韓、魏聞之、必盡重王、重王、必出重寶、以先於王、則是王一擧而結三國之親、而與秦易道也、

【講義】虞卿樓緩の趙王に辯解したることを聞きて、御殿へ往きて、趙王に謁見して曰はく、「さても危險なることよ、樓子の秦の爲めにする仕方は、土地を割き與へて、秦と和睦をせば、愈〻天下の諸侯をして、趙は秦の手に附きたるかと疑はしむるのみにして、何とて秦王の心を慰むるに足らむ、獨り趙の弱きことを天下の諸侯に示すものなりとは言はるまじきか、全く弱きことを示すものならむ、しかのみならず、臣が秦に土地を與ふることなかれと申したるは、一概に與ふることなきばかりにはあらぬなり、秦は、六箇所の城を大王に要求せり、さるを、大王には、六箇所の城を秦の方へ與へたまはずして、齊の方へ賄賂に遣はしたまはむには、齊は、秦の深き仇讎なれば、大王の六箇所の城を手に入れて、趙と共に力を合はせて、西の方秦を擊たむといふことを、齊の速に大王に對して承知せむこと、我が使者の口上の濟むをも待たざらむ、さらば、大王には、六箇所の城を齊に失ひたまひて、其の埋め合はせを秦に取りたまふこと〻ならむ、而して、齊と趙との深き仇讎の秦に對しては、其の宿怨を報いらるべくして、天下の諸侯に對しては、趙の能く大仕事をする力あることを示さる〻ならむ、大王には、此の處置をもて、名譽を發し揚げたまはゞ、齊、趙の兵の、まだ秦の國境を視かぬ中に、臣は秦の鄭重なる賄賂の趙の國へ到着して、反對に秦の方より大王に和睦を願ふやうになることを見るならむ、秦の方より和睦せば、韓、魏の二國は、之れを聞き及びて、屹度殘らず大王を敬ひ重んずるならむ、大王を敬ひ重んぜば、屹度貴重なる寶物を差し出して、第一に大王に獻上するならむ、さらば、大王には、一たび事を擧げ行ひて、齊、韓、魏の三國の懇親を取り結びて、趙の土地を割き取りて、和睦を承知せむとする、秦の仕方と取り易へて、秦より鄭重なる賄賂を受けて、和睦を承知したまふやうにならむ」と、

趙王曰、善、則使虞卿東見齊王、與之謀秦、虞卿未返、秦使者已在趙矣、樓緩聞之亾去、趙於是封虞卿以一城、

【講義】趙王始めて虞卿の說に同意して曰はく、「至極尤なり」と、是に於て、虞卿を東の方齊の國へ出張せしめて、齊王に謁見せしめて、齊と共に秦を伐たむことを相談せしめしが、虞卿の未だ趙へ立ち戻らざる中に、秦に於ては、齊、趙二國の合體せる由を聞き及びたるものと見えて、秦よりの和睦の使者、已に趙へ來りたれば、樓緩之れを聞き及びて、後難を恐れて、逃げ去りたり、趙は、是に於て、虞卿に一箇所の城を與へて、之れを封じて、其を功を賞したり、

【文法】淺雜隆の曰はく、此の段、樓緩に因りて秦に媾することの不可なることを辯ぜりと、

居頃之、而魏請爲從、趙孝成王召虞卿謀、過平原君、平原君曰、願卿之論從也、虞卿入見王、王曰、魏請爲從、對曰、魏過、王曰、寡人固未之許、對曰、王過、

【講義】其の後暫く程立ちて、魏の國より、趙と合從せむことを請ひ來りたれば、趙の孝成王、虞卿を召し出して、其の利害を相談せむと思ひたり、折りから、虞卿は、平原君の許に立ち寄りたれば、平原君の曰はく、「願はくは御身の魏と合從する利害を論ぜむことを」と、虞卿之れを承知して、御殿へ出仕して、趙王に謁見せしに、趙王の曰はく、「此の度、魏より我が國と合從せむことを請ひ來れり」と、虞卿對へて曰はく、「そは、魏の失策なり」と、趙王の曰はく、「拙者は、無論まだ其の請ひを許さぬなり」と、虞卿對へて曰はく、「そは、大王の失策なり」と、

王曰、魏請從、卿曰、魏過、寡人未之許、又曰、寡人過、然則從終不可乎、對曰、臣聞小國之與大國從事也、有利、則大國受其福、有敗、則小國受其禍、今魏以小國請其禍、而王以大國辭其福、臣故曰、王過、魏亦過、竊以爲從便、王曰、善、乃合魏爲從、

【講義】趙王の曰はく、「此の度、魏より我が國と合從せむことを請ひ來れりといへば、御身の曰はく『そは、魏の失策なり』と、拙者は、まだ其の請ひを許さぬなりといへば、御身又曰はく、『そは、拙者の失策なり』と、さらば、合從することは、到底宜しからざるか」と、虞卿對へて曰はく、「臣が兼ね〴〵聞き及びたるには、小國の大國と組み合ひて仕事をするときは、利益あれば、大國は、其の幸福を受けて、小國は、其の禍害を受けず、失敗あれば、小國は、其の禍害を受けて、大國は、其の禍害を受けぬものなりとなり、今、魏は、小國をもて、我が大國と組み合ひて、仕事をして、其の禍害を受けむことを請ひ、大王には、魏の小國と組み合ひて仕事をしたまはずして、其の幸福を辭退したまはむとす、臣は、此の謂けをもて、『大王の許したまはぬは失策なり、魏の請ふも亦失策なり』と申したるなり、臣は、內〻、魏と合從するは、我が國の便利ならむ、と思へり」と、趙王の曰はく、「至極尤なり」と、是に於て、趙王魏と合從して、親睦せり、

虞卿既以魏齊之故、不重萬戶侯卿相之印、與魏齊間行、卒去趙、困於梁、魏齊已死、不得意、乃著書、上採春秋、下觀近世、曰節義、稱號、揣摩、政謀、凡八篇、以刺譏國家得失、世傳之曰虞氏春秋、

【訓讀】【間行】……抜け道をして行くなり。【刺譏】……非難するなり、

【講義】是れより以前に、魏の宰相の魏齊、秦の宰相の范雎と宿怨ありて、秦の魏齊を求むることの急迫なるに因りて、魏齊、魏を出奔して、虞卿の許へ身を寄せたるに、虞卿友誼を重んじて、之れを引き受けたり、それが爲めに、己れの受けたる家數の萬軒もある萬侯籍の領地をも、卿相の印章をも棄んぜずして、投げ棄てゝ、魏齊と一所に、人に知られぬやうに、抜け道をして行きて、遂に趙の國へ往きて、信陵君に依賴せしに、信陵君秦を恐れて、早速に引き受けざりしかば、是れにて大に困却して、梁即ち魏の國を立ち退きて、梁即ち魏の國へ往きて、信陵君に依賴せしに、信陵君秦を恐れて、早速に引き受けざりしかば、是れにて大に困却して、魏齊は憤りて自殺せり、魏齊己に死去して、虞卿も、己れの思ふこと屈かざりしかば、隱遁して、書物を著はして、上は、孔子の春秋を採び採り、下は、近世の戰國の有樣を觀察して、節義といひ、稱號といひ、揣摩といひ、政謀といへる、凡そ八篇を編次して、國家の事業の得失を非難して、世を去りき、世に之れを傳へて、虞氏春秋といふ、

太史公曰、平原君、翩翩濁世之佳公子也、

【訓讀】【翩翩】……鳥の高く飛ぶさまなり、當時の諸公子と異なるをいふ、

【講義】太史公平原君、虞卿の事跡を論贊して曰はく、「平原君は、翩翩として、鳥の高く飛ぶが如く、當時の諸公子と異なりて、濁りたる戰國の世には、得難き佳眞なる公子なり、

【文法】揚愾の曰はく、濁世に在りては佳公子たりと言へば、清世には、否らず、蓋貶言外に在りと、

然未睹大體、鄙語曰、利令智昏、平原君貪馮亭邪說、使趙陷長平兵四十餘萬衆、邯鄲幾亾、

【講義】さりながら、まだ國を治むる大體を見ぬ人なり、世間の野鄙なる諺に曰はく、「利慾は、人の智慧を昧ますものなり」と、平原君は、前に擧げたる白起の傳に見えたる如く、韓の上黨の太守の馮亭の、上黨をもて趙に降服せむといふ、筋の善からぬ說に迷ひて、其の地を貪り取りて、秦の兵難を被りて、長平の戰ひに、趙の兵卒四十餘萬を陷ちいらしめて、此の大勢を失ひて、邯鄲の都は、危く滅亡せむとせり、

虞卿料事揣情、爲趙畫策、何其工也、

【講義】虞卿は、世事人情を推し測りて、趙の爲めに畫策謀議して、秦の方より和睦を請はしめたるは、何ぞ仕事の巧みなる、

及不忍魏齊、卒困於大梁、庸夫且知其不可、況賢人乎、

【訓讀】【庸夫】……凡夫なり、

【講義】さりながら、魏齊の難儀を見兼ねたるが爲めに、一所に趙を立ち退きて、遂に大梁にて困却せしは、無智文盲の凡夫にてすら、其の宜しからぬことを知り抜きたるを、況して虞卿の如き賢人にして、先の見えぬは、餘りに淺墓なることなり、

然虞卿非窮愁、亦不能著書、以自見於後世云、

【講義】さりながら、虞卿は、己れの思ふこと屈かずして、困窮憂愁せしにあらずば、亦書物を著はして、自分の意見を後世に示すこと能はざりしならむとぞ」と、

【文法】陳仁錫の曰はく、二句畧掉して甚だ佳し、范、蔡の賢の二子不困厄、惡能激と同一の文法なりと、○後藤陸の曰はく、窮愁するにあらずば、書を著はすこと能はざらむ、太史公も亦因りて以て自ら見せりと、○楊愾の曰はく、虞卿窮愁するにあらずば、書を著はして、自ら見ずして、能はざらむは、韓子柳子厚の墓誌を作りて、此の意を用ゐたりと、

信陵君列傳第十七

魏公子無忌者、魏昭王少子、而魏安釐王異母弟也、昭王薨、安釐王卽位、封公子爲信陵君、

【訓讀】【異母弟】……腹違ひの弟なり、

【講義】魏の公子の無忌は、魏の昭王の末子にして、魏の安釐王の腹違ひの弟なり、昭王薨去して、安釐王位に卽きて、公子の無忌を封じて、信陵君とせり、

【文法】顧璘の曰はく、孟嘗、平原、春申は、皆封邑をもて系けたり、此れ獨り公子といへるは、蓋し之れを尊びて、國をもて系けたるならむと、○陳仁錫の曰はく、一篇の中に、凡そ公子と言へる者、一百四十七あり、大奇大奇と、

是時范雎亾魏相秦、以怨魏齊故、秦兵圍大梁、破魏華陽下軍、走芒卯、魏王及公子患之、

【講義】是の時、范雎魏の宰相の魏齊の爲めに半殺しに逢ひて、魏の國を脱走して、秦の國へ入り込みて、其の宰相となりて、魏齊を怨める故をもて、魏の國を攻めたれば、秦の軍兵大梁の都を圍み、魏の華陽の城下の軍勢を破りて、其の將軍の芒卯を逃げ走らしめたれば、魏王及び公子の信陵君之れを心配せり、

公子爲人、仁而下士、士無賢不肖、皆謙而禮交之、不敢以其富貴驕士、士以此方數千里、爭往歸之、致食客三千人、當是時、諸侯以公子賢多客、不敢加兵謀魏十餘年、

【講義】公子は、仁心深くして、士人の下手に出でゝ、士人とあれば、賢不肖の差別なく、皆謙遜して、禮儀をもて交際して、快して己れの富貴を鼻に掛けて、士人に嚇り高ぶらざりければ、天下の士人、此の譯けをもて、數千里四方より、我れ後れじと、先を爭ひて、公子の許へ往きて、身を寄せたれば、食客の數、三千人となりぬ、是の時に當たりて、列國の諸侯は、公子の賢才ありて、食客の多きをもて、押し切りて兵を加へ戰爭を仕掛けて、魏の國を取らむことを謀り企てざること、十年餘りに及びたり、

【考證】後稗隆の曰はく、公子爲人の一句は、一篇の綱領にして、賢多客の三字は、又此段の綱領なり、故に傳に賢の字凡そ三たび見えたり、客の字凡そ二十四たび見えたりと、

公子與魏王博、而北境傳舉烽、言趙寇至、且入界、魏王釋博、欲召大臣謀、公子止王曰、趙王田獵耳、非爲寇也、復博如故、王恐、心不在博、居頃、復從北方來傳言曰、趙王獵耳、非爲寇也、魏王大驚曰、公子何以知之、公子曰、臣之客有能探得趙王陰事者、趙王所爲、客輒以報臣、臣以此知之、

是後魏王畏公子之賢能、不敢任公子以國政、

【講義】【博】……雙陸の遊びなり、【烽】……相圖の花火なり、【田獵】……毛物狩りなり、【陰事】……内密の事なり、【輒】……其の度毎になり、

【講義】公子或る時魏王と雙陸の遊びをして居たりしに、北の國境より相圖の花火を都の方へ段々に傳へ舉げて、趙の國攻め寄せて、程なく國界に入らむとする樣子なりと注進せしかば、魏王雙陸を棄て置きて、大臣達を召し出して、防禦の事を相談せむと思ひしに、公子魏王を押し止めて曰はく、「趙王は、毛物狩りをせるのみ、寇をするにはあらざるなり」と、かやうに言ひて、重ねて雙陸の遊びをすること、元の通りなれど、魏王は恐れて、雙陸盤に向ひても、其の心雙陸に在らずして、何となく落ち著き兼ねたり、然るに、少し程立ちて、重ねて北の方より注進ありて、其の口上を傳へて曰はく、「趙王は、毛物狩りをせるのみ、寇をするにはあらざるなり」と、魏王大に驚きて曰はく、「公子は、何を以て、其の實際を知りたるか」と、公子の曰はく、「臣が家の食客に、能く趙王の内密の事を探り得る者ありて、彼王のする事は、何に限らず、其の食客より、其の度毎に、臣に報告せり、臣は、此の譯けをもて、之れを承知せり」と、是の後、魏王は、公子の賢能ありて、餘りに智慧の廻ることを畏れ憚りて、決して公子に國の政事を委任せざりけり、

魏有隱士曰侯嬴、年七十、家貧爲大梁夷門監者、公子聞之、往請、欲厚遺之、不肯受、曰、臣修身絜行數十年、終不以監門困故、而受公子財、

【講義】魏の國に隱遁したる士あり、其の姓名を侯嬴といふ、年は七十歲なり、其の家貧乏なりければ、大梁の城の夷門といへる東の門の番人となりて、幕らしけり、公子之れを聞き込みて、態々往きて、面會を請ひて、手厚く之れに進物を贈らむとせしに、侯嬴之れを受納することを承知せずして曰はく、「臣は、身を脩め、行ひを潔くして、利慾に心を穢さゞること數十年なれば、此の後とても、門番にて困窮せる故をもて、公子の貨財を受納することはせざるべし」と、

公子於是乃置酒、大會賓客、坐定、公子從車騎、虛左、自迎夷門侯生、侯生攝弊衣冠、直上載公子上坐、不讓、欲以觀公子、公子執轡愈恭、侯生又謂公子曰、臣有客、在市屠中、願枉車騎過之、公子引車入市、侯生下見其客朱亥、俾倪、故久立、與其客語、微察公子、公子顏色愈和、當是時、魏將相宗室賓客滿堂、待公子舉酒、市人皆觀公子執轡、從騎皆竊罵侯生、侯

生視公子色終不變、乃謝客就車至家、

【字釋】【置酒】……酒宴を設くるなり、【虛左】……昔は、馬車に乘るときは、尊き者は左に在り、御者は中に在り、又一人は右に在りて、目方の釣り合ひを取れり、されば、左の座位を明け置くは、侯生を尊ぶなり、【攝衣冠】……破れたる衣冠の端を拾い摘まみて、威儀を整ふなり、【執轡】……馬車の手綱を執るなり、【市屠中】……市中の雜多の仲間なり、【俾睨】……睥睨に同じ、横目に見るなり、

【講義】公子是に於て侯生を特別に扱ひて、交際を結ばむと思ひて、其の家に酒宴を設けて、大に賓客を集會して、一同の座席の極まりたる後に、公子は、馬車騎馬を從へて、侯生の爲めに、己れの馬車の左の席位を明け置きて、自ら夷門の侯生を迎へしに、侯生は、破れたる衣冠の端を拾い摘まみて、威儀を整へて、何の遠慮もなく、直ちに馬車に飛び乘りて、公子の上座に立ちて、推し辭らずして、公子の樣子を觀察せむと思ひしに、公子は、御者の役目をして、馬車の手綱を執ること、愈々慇しかりけり、侯生は、又公子に物語りして曰はく、「臣に一人の惡意なる客人ありて、市中の雜多の仲間に在り、願はくは、此の馬車騎馬を枉げ寄せられて、其の者の家に立ち寄りたまはむことを」と、公子は、委細承知して、其の儘馬車を引き廻して、市中へ入りたるに、侯生は、馬車を下りて、其の客人の朱亥といふ者に逢ひて、横目を使ひて、公子の方を窺ひながら、殊更に久しく立ちて、其の客人と話しをして、内々にて、公子の樣子を觀察せしに、公子の顏色、愈々温和にして、少しも侯生の氣儘無禮を咎むる氣色なかりけり、是の時に當たりて、魏の將軍、宰相、國王の一門などの賓客は、公子の家の堂上に充滿して、公子の歸り來るを待ちて、酒宴を始めむとせり、又市中の人々は、皆公子の馬車の手綱を執りたるを怪みながら見物し、公子に附き添ひたる騎馬の者共は、皆内々にて、侯生の氣儘無禮を罵りたり、さて、侯生は、公子の顏色の始終温和にして、變はらざるを見留めたる上にて、其の客人に喝乞ひして、公子の馬車に乘り込みて、公子の家へ到著せり、

公子引侯生坐上坐、徧贊賓客、賓客皆驚、酒酣、公子起爲壽侯生前、侯生因謂公子曰、今日嬴之爲公子亦足矣、嬴乃夷門抱關者也、而公子親枉車騎、自迎嬴於衆人廣坐之中、不宜有所過、今公子故過之、然嬴欲就公子之名、故久立、公子車騎市中、過客以觀公子、公子愈恭、市人皆以嬴爲小人、而以公子爲長者能下士也、於是罷酒、侯生遂爲上客、

【字釋】【贊】……名前を披露するなり、【客】……祝杯を差すなり、【抱關者】……門の開閉を掌る者なり、【不宜有所過】……外に寄り道をするには及ばぬなり、

【講義】公子は、侯生を引き連れて、一座の客の上座に坐せしめて、懇遇なく侯生の名前を賓客に披露したれば、賓客は皆驚けり、それより、酒の

酣よく廻りたる頃に、公子己れの座を起ちて、侯生の前へ進み出でゝ、祝杯を差したるに、侯生之れを受けながら、公子に物語りして曰はく、「今日、己れが公子の爲めに盡くしたることも、亦十分なりと存ずるなり、其の譯は、己れは、夷門の開閉を掌る下賤の者なり、さるを、公子は、親しく馬車騎馬を枉げ寄せられて、自ら己れを衆人廣坐の中に迎へられたることなれば、外に寄り道をせらるゝには及ばぬことなり、さるを、今、公子は、殊更に己れの知人の朱亥の家に立ち寄りたまへるは、御氣の毒なるに似たり、さりながら、是れは、己れが公子の名譽を成就せむと思ひてのことなり、されば、久しく公子の馬車騎馬を市中に立てゝ、己れの友の客人の許に立ち寄りて、公子の樣子を觀察せしに、公子は愈々謙し、市中の人々之れを見て、皆己れをもて、禮儀を知らぬ小人なりとして、公子をもて、寬大の長者にして、能く士に下りたまへりとせり、是れ、己れが公子の爲めに盡くしたることも亦十分なりと存ずる譯なり」と、是に於て、酒宴を罷めて、人々殘らず退散せり、而して、侯生遂に公子の家の上客となりぬ、

【文法】侯嬴隆の曰はく、殊釋之の傳に、王生の語を載せたるも、亦此の意なりと、○又曰はく、前に欲顧公子とあり、微察公子とある、兩段の形容は、皆侯生因謂公子の一段の張本たりと、

侯生謂公子曰、臣所過屠者朱亥、此子賢者、世莫能知、故隱屠閒耳、公子往數請之、朱亥故不復謝、公子怪之、

【講義】侯生公子に物語りして曰はく、「臣が前日立ち寄りたる雜多の朱亥は、賢才ある者なれど、世の中に能く其の人物を知りたる者なき故故に、雜多の仲間に隱れたるのみ」と、公子之れを聞きて、頗る往きて、度々面會せんことを請ひたるに、朱亥は、一度謝禮を述べたるのみにて、其の後は、何度尋ねられても、殊更に重ねて謝禮を述ぶることなかりしかば、公子は、禮儀を知らぬ者ならむかと疑ひ怪みたり、

【文法】屠隱の曰はく、此の處、臣所過屠者朱亥を伏せて、下文の存用の張本とせりと、

魏安釐王二十年、秦昭王已破趙長平軍、又進兵圍邯鄲、公子姊爲趙惠文王弟平原君夫人、數遺魏王及公子書、請救於魏、魏王使將軍晉鄙將十萬衆救趙、秦王使使者告魏王曰、吾攻趙、旦暮且下、而諸侯敢救者、已拔趙、必移兵先擊之、魏王恐、使人止晉鄙、留軍壁鄴、名爲救趙、實持兩端以觀望、

【字釋】【觀望】……旗色を見物するなり、

【講義】魏の安釐王の二十年に、秦の昭王、已に趙の長平の軍勢を打ち破りて、又兵を進めて、邯鄲の都を圍みたり、公子の姉は、趙の惠文王の弟の平原君の奥方なれば、平原君は、度々魏王及び公子に手紙を差し遣りて、救ひの兵を魏に請ひたれば、魏王將軍の晉鄙をして、十萬人の大勢を引き連れて、趙を救はしめしに、秦王使者を差し向けて、魏王に告げしめて曰はく、「吾れ趙を攻めて、敵は最早朝夕の間に降參せむとす、さるを、此の場合ひに、然後の中に、押して趙を救はむ者あらば、我れ已に趙を乘り取りたる後に、屹度其の兵を振り向けて、先づ其の救ひたる者を擊たむ」と、魏王之れに恐怖して、人をして晉鄙の進軍を差し止めさせて、其の軍勢を庇留して、鄴の地に取り手を築きて守らしめて、其の名目は、趙を救ふといふ體にして、其の實際は、趙を救ふともつかず、救はぬともつかぬ、兩端を構へて、秦と趙との旗色を見物せり、

【文法】 犀隆の曰はく、此の處、又一の文法を換へたりと、

平原君使者冠蓋相屬於魏、讓魏公子曰、勝所以自附爲婚姻者、以公子之高義、爲能急人之困、今邯鄲且暮降秦、而魏救不至、安在公子能急人之困也、且公子縱輕勝、棄之降秦、獨不憐公子姊邪、公子患之、數請魏王、及賓客辯士說王萬端、魏王畏秦、終不聽公子、

【字釋】【冠蓋相屬】……使者の冠りと馬車の日除けと絶え間なく打ち續くなり、【萬端】……手を變へ、品を變ふるなり、

【講義】晉鄙の加勢、中途にて止まりたれば、平原君の援兵を請ふ使者の冠りと馬車の日除けと絶え間なく趙より魏へと打ち續きて、引きも切らずに催促して、果ては、魏の公子を責め咎めて曰はく、「己れの自ら公子に附き從ひて、姉上を申し請けて、緣組みをせし譯は、公子の高き義俠心の能く人の困難を棄て置かれざる評判あるに因りてなり、然るに、今我が邯鄲の都は、朝夕の間に、秦に降參せむとする、危急存亡の場合ひなるに、魏の救ひの兵の中途に止まりて、到著せざるは、何事ぞ、此のやうな 譯けならば、何とて公子は能く人の困難を見棄てられずといはるべき、しかのみならず、公子は、たとひ己れを輕蔑せられて、之れを見棄てゝ、秦に降參せしむることを眼はれずとも、獨り公子の姉の共々に秦に降參することを氣の毒なりと思はれざるか」と、公子は、かやうに迫られて、心配に堪へ兼ねて、度々魏王に晉鄙の加勢を進ましめむことを請ひ、及び公子の家の賓客辯士の輩よりも、魏王に說くこと、手を變へ、品を變へたれど、魏王は、秦を長れ憚りて、終に公子の請願を聽き納れざりけり、

【文法】 後稚隆の曰はく、平原の親の公子を讓むる言に、急二人之困一の一語を以て、相抑揚せるは、魯仲連の平原を議する語と同じと、

公子自度終不能得之於王、計不獨生而令趙亡、乃請賓客、約車騎百餘乘、欲以客往赴秦軍、與趙俱死、行過夷門、見侯生、具告所以欲死秦軍狀、辭決而行、侯生曰、公子勉之矣、老臣不能從、

【字釋】【約】……支度するなり、【辭決】……決は、訣に同じ、生き別かれの暇乞ひをするなり、

【講義】公子は、魏王の請願を聽き納れざるを見て、自ら終に援兵の許可を魏王より得ること叶はざるべしと勘考し、又獨り此の儘生き長らへて、趙を滅亡せしむることもなるまじと勘考せり、是に於て、已れの家の賓客に賴みて、車騎百餘輛を支度して、其の賓客を引き連れて、趙へ往きて、秦の軍勢に駈け向ひて、趙の人と共に、切り死にせむと思ひたれば、夷門の番所に立ち寄りて、侯生に面會して、秦の軍勢に駈け向ひて切り死にせむと思ふ情狀を委しく告げて、生き別かれの暇乞ひをして、出で行かむとせしに、侯生の曰はく、「公子は、折角骨折りて、趙の爲めに盡くしたまへ、年老いたる臣は、手足も自由ならざれば、隨行することは叶はざるなり」と、只々是だけの援援をせり、

公子行數里、心不快、曰、吾所以待侯生者備矣、天下莫不聞、今吾且死、而侯生曾無一言半辭送我、我豈有所失哉、復引車還問侯生、侯生笑曰、臣固知公子之還也、曰、公子喜士、名聞天下、今有難、無他端而欲赴秦軍、譬若以肉投餓虎、何功之有哉、尙安事客、然公子遇臣厚、公子往而臣不送、以是知公子恨之復返也、

【字釋】【無他端】……他の奇策の端を發することなきなり、

【講義】公子出で行くこと數里にして、心の中に快からずして曰はく、「吾れ今日まで侯生を待遇する仕方の行き屆きたることは、天下中の人も、聞き及ばざることなからむ、今、吾れは、秦の軍勢に駈け向ひて、切り死にせむとする場合ひなるに、侯生は、一言半句も我れを見送る深切なる言葉なし、我れは、いかに侯生に對して禮を失ひたることにてもあるか」と、斯く考へて、重ねて車を引き返して、侯生に逢ひて、其の意を稟ねしに、侯生笑ひて曰はく、「臣は、因より公子の立ち戻りたまはむことを承知せり」と、更に言葉を改めて曰はく、「公子の日頃士を喜みて、手厚く待遇せらるゝ評判は、天下中に聞こえたり、今、急難ありて、必死の場合ひなるに、他の奇策の端を發することなくして、秦の軍勢に駈け向はむと思し召さるゝは、譬へば、一切れの肉をもて、餓えたる虎に投げ與ふるが如く、唯々一口に食ひ盡くさるゝのみにして、何の功能かあるべき、尙ほ何をもて賓客を賴みにせられむ、さりながら、公子の臣を待遇せらるゝことの手厚きに、今、公子の趙へ往き

たまはむとするを、臣の見過り多らする言葉なければ、公子は、屹度之れを恨みて、重ねて戻りたまはむことを承知せり、其の再應の御入來を待ちて、公子の爲めに一策を獻ぜむものをと存じたり」と、

公子再拜因問、侯生乃屏人閒語曰、嬴聞晉鄙之兵符、常在王臥内、而如姬最幸、出入王臥内、力能竊之、嬴聞如姬父爲人所殺、如姬資之三年、自王以下、欲求報其父仇、莫能得、如姬爲公子泣、公子使客斬其仇頭、敬進如姬、如姬之欲爲公子死無所辭、顧未有路耳、公子誠一開口請如姬、如姬必許諾、則得虎符、奪晉鄙軍、北救趙、而西卻秦、此五霸之伐也、

【閒語】……密談なり、【兵符】……軍兵を進退する割り符なり、【臥内】……臥所なり、【竊】……人に資本を與へて、復讎せむことを頼むなり、【爲公子泣】……公子に對して我が身の事の爲めに泣くなり、【虎符】……虎の形をしたる兵符なり、

【講義】公子再拜して、侯生の厚意を謝して、それに就きての一策を尋ねしに、侯生人拂ひをして、密談して曰はく、「己れが兼ねて聞き及びたるには、晉鄙の軍兵を進退する割り符の半分は、常に國王の臥所に在りて、大切に保護せられたり、而して、國王の愛妾の如姬は、最も國王に寵幸せられて、國王の臥所に出入りする由なれば、如姬の働きならば、之れを盜み出すこと出來るならむ、又己れが兼ねて聞き及びたるには、如姬の父親は、何者にか殺されしかば、如姬は、人に資本を與へて、復讎せむことを頼むこと、三年に及びたり、しかのみならず、國王より以下の人までも、其の父親の仇を報いむことを求めたく思はれたれど、能く其の仇を手に入るゝことなかりしかば、如姬は、殘念の餘りに、公子に對して、我が身の事の爲めに打ち泣きて、是非とも之れを手に入れたしと願ひたり、公子は、之れを引き受けられて、賓客をして、其の仇を尋ね出さしめて、首を切らせて、敬みて如姬に進上せられたれば、如姬は、非常に喜びて、此の恩返しには、公子の爲めに、一命をも投げ棄てたしと思ひて、何事をも辭退せざる覺悟なる由なり、さりながら、今日までも、其の恩返しをせざるは、臣が考へにては、まだ其の機會なきまでのことならむ、さらば、公子は、眞實に一たび口を開きて、如姬に御頼みあらむには、如姬は、屹度其の御頼みを許諾するならむ、さらば、如姬の働きにて、國王の臥所に祕藏せられたる、虎の形をしたる割り符の半分を手に入れらるゝならむ、然る上にて、其の割り符を晉鄙の陣屋に持參せられて、先方の手に在る割り符の半分と引き合はせて、其の軍勢を奪ひ取りて、北の方趙の急難を救ひて、西の方、秦の强敵を打ち拂ひたまはゞ、昔の齊の桓公、晉の文公、宋の襄公、秦の穆公、楚の莊王の五人の覇者の征伐にも劣らざる立派なる事業となるべし」と、

公子從其計、請如姬、如姬果盜晉鄙兵符與公子、公子行、侯生曰、將在外、主令有所不受、以便國家、公子即合符、而晉鄙不授、公子兵、而復請之、事必危矣、臣客屠者朱亥、可與俱、此人力士、晉鄙聽、大善、不聽、可使擊之、

【講義】公子斯くと聞きて、其の計策に從ひて、如姬に頼みしに、如姬は、果たして、晉鄙の軍兵を進退する割り符の半分を盜み出だして、公子に與へたり、公子は之れを受け取りて、出で行かむとせしに、侯生の曰はく、「將軍は、外に在るときは、國君の命令をも受けざることありて、國家に便利なるやうに、其の手限りにて、物事を取り計らふものなり、公子若し晉鄙の陣屋にて、其の割り符を引き合はせて、國王の命令なれば、軍勢を引き渡すべしと申し渡されたらむとき、晉鄙之れを承知せずして、公子に兵を授けずして、重ねて國王に將軍職を繼續せむことを申し請はゞ、其の事吃度面倒になりむ、それには、兼ねて御聞きに達したる、臣が客人の屠多の朱亥を同伴したまふべし、此の人は、勇力ありて、大事の場合には頼むべき者なり、晉鄙割り符を引き合はせて、異議なく、軍勢を引き渡すことを承知せば、至極結構なれど、萬一承知せざらむには、朱亥をして、即座に之れを擊ち殺さしめて、其の軍勢を奪ひ取りたまふべし」と、

【屠】【嘑咤】……嘑語に同じ、剛健なるさまなり、

於是公子泣、侯生曰、公子畏死邪、何泣也、公子曰、晉鄙嘑咤宿將、往恐不聽、必當殺之、是吾泣耳、豈畏死哉、

【講義】是に於て、公子は、何を思ひけむ、さめ〴〵と泣きたれば、侯生の曰はく、「公子は、死ぬることを長れたまへるか、何とて左樣に泣きたまへる」と、公子の曰はく、「晉鄙は、嘑咤として、剛健なる老將なれば、吾れ其の陣屋へ往きて、割り符を引き合はせて、軍勢を引き渡さむことを申し渡すとも、多分承知せざるべければ、是非とも之れを擊ち殺さねばならぬことゝなるべし、此の譯けをもて、晉鄙の事を氣の毒に思ひて泣けるのみ、いかで我が身の死ぬることを長るべき」と、

於是公子請朱亥、朱亥笑曰、臣乃市井、鼓刀屠者、而公子親數存之、所以不報謝者、以爲小禮無所用、今公子有急、此乃臣效命之秋也、遂與公子俱、

【市井】……市中の者は、大勢にて一つの井戸を使ふが故に、市中のことを市井といふ、【鼓刀】……庖丁を振り廻すなり、【存】……見錄ふなり、【效命之秋】……一命を差し出すべき時節なり、

【要旨】是に於て、公子は、朱亥の許へ往きて、侯生に教へられたる事柄を内談して、晉鄙の陣屋へ同伴せむことを頼みしに、朱亥笑ひて曰はく、「臣は、市中の屠多町にて、庖丁を振り廻して、牛羊などを屠り殺す屠多なり、さるを、公子は、御自身に度々見舞ひたまひたれば、疾く〳〵に御禮を申すべき筈なるに、今まで御禮を申さゞる譯けは、些細の御禮にては、何の御役にも立つまじと存じたればなり、然るに、此の度、公子には、棄て置き難き急難あり、此れ臣が一命を差し出して、日頃の御恩に報ゆべき時節なれば、御頼みの一儀は、委細承知せり」と、斯く快諾して、遂に公子と同伴せり、

公子過謝侯生、侯生曰、臣宜從、老不能、請數公子行日、以至晉鄙軍之日、北鄉自剄、以送公子、

【要旨】公子は、重ねて夷門に立ち寄りて、侯生に禮を述べしに、侯生の曰はく、「本來は、臣も御供をすべき筈なれど、年老いて、手足も自由ならずして、御供をすること叶はざれば、其の申し譯けに、公子の出で行きたまふ日數を數へて、晉鄙の陣屋へ到著せられむ當日をもて、其の方角の北へ向ひて、自ら首を掻き落として、公子を見送り參らせむことを誓ふ」と、

【文法】黄淇憲の曰はく、侯生と公子との語を敍せること、宛然として、眉睫の間に在りと、

公子遂行、至鄴矯魏王令、代晉鄙、晉鄙合符、疑之、舉手視公子、曰、今吾擁十萬之衆、屯於境上、國之重任、今單車來代之、何如哉、欲無聽、朱亥袖四十斤鐵椎、椎殺晉鄙、

【矯】……詐るなり、擠へ事を言ふなり、【擁】……抱ふるなり、【鐵椎】……戟鎚なり、

【要旨】公子は、遂に出で行きて、晉鄙の守れる鄴の取り手へ到著して、魏王の命令なりと偽り詐りて、其の軍勢を受け取らむとせしに、晉鄙は、公子の示したる割り符の半分と、己れの所持せる割り符の半分とを引き合はせて、之れを怪み疑ひて、手を擧げて、公子の顔を見詰めて曰はく、「今、吾れは、十萬人の大勢を抱へて、國境の上に竈して、國君の重き委任を受けたるに、今、公子には、單獨の車に乘りて來られて、手輕く之れに代はらむとせらるゝは、如何なる譯けか、心得難し」と、斯く言ひて、受け引く氣色なかりしかば、朱亥は、袖にて用意せる、四十斤の目方の戟鎚を、袖の下より取り出して、其の戟鎚にて、即座に晉鄙を擊ち殺したり、

公子遂將晉鄙軍、勒兵、下令軍中、曰、父子俱在軍中、父歸、兄弟俱在軍中、兄歸、獨子無兄弟、歸養、得選兵八萬人、進兵擊秦軍、秦軍解去、遂救邯鄲、存趙、

【勒兵】……兵隊を纏めて勢揃へをするなり、

【要旨】公子は、遂に晉鄙の軍勢に將として、其の兵隊を纏めて、勢揃へをして、號令を軍中に下して曰はく、「父も子も、共ともに此の軍中に在らば、父は歸りて、弟だけ殘るべし、兄も弟も、共ともに此の軍中に在らば、兄は歸りて、弟だけ殘るべし、獨り子にて、兄弟なくば、歸りて父母を養ふべし」と、斯く厳れ流して、選び抜きたる決死の兵卒八萬人を得たり、此の兵卒を押し進めて、秦の軍勢を擊ちたれば、秦の軍勢詐易して、邯鄲の圍みを解きて、引き去りたり、是に於て、公子は遂に邯鄲の危急を救ひて、趙を保存せり、

【文法】楊慎の曰はく、公子の侯生を禮し、及び晉鄙の兵を奪ひて、趙を救ひし事を敍せること、極めて筆力ありと、○蘇份の曰はく、國語に、越王の吳を伐たむとして、軍士を遣恤せる所以の者を敍せるも、亦此の意なり、但し彼れは、數十百言を用ゐ、此れは、惟ゞ三句にして、之れを盡くせり、而して、道勢にして遣さず、簡き所以なりと、○茅坤の曰はく、太史の詳かにせる處は、信陵君の士を得たる所以に在り、略せる處は、秦の軍の卻きたる所以に在りと、

趙王及平原君自迎公子於界、平原君負鞬矢、爲公子先引、趙王再拜曰、自古賢人未有及公子者也、當此之時、平原君不敢自比於人、

【鞬矢】……箙に盛りたる矢なり、【先引】……先導するなり、

【要旨】趙王及び平原君は、自ら公子を國界まで出迎へて、「平原君は、箙に盛りたる矢を背負ひて、公子の爲めに先導せり」とて、趙王は、公子に向ひて、再拜して曰はく、「昔より世に賢人は多けれど、義理を重んじ、身命を輕んじて、人の國の急難を救ひ取ること、まだ公子に及ぶ者あらぬなり」と、此の時に當たりて、平原君は、己れの力にて趙を救ふこと能はざりしを恥ぢ入りて、決して自ら世間の人に肩を比ぶる心なかりけり、

公子與侯生決至軍、侯生果北鄉自剄、

【要旨】是れより先に、公子の侯生と生き別かれの暇乞ひをして、晉鄙の陣屋へ到著せしとき、侯生は、公子に誓ひたる通り、果たして、其の日に夷門に於て、北へ向ひて、自ら首を掻き落として死亡せり、

【文法】唐順之の曰はく、侯生の事を敍せること、衆ふとして孫を貫くが如しと、

魏王怒、公子之盜其兵符、矯殺晉鄙、公子亦自知也、已卻秦存趙、使將將

其軍歸魏、而公子獨與客留趙、

【解釋】魏王は、公子の其の寢所に慈藏せし軍兵を進退する割り符の半分を盜み取りて、國君の命令に事寄せて、晉鄙を殺したることを立腹せしが、公子も亦自ら其の仕方の善からぬことを知りたれば、已に秦の軍勢を打ち拂ひて、趙を保存せし後に、一將をして、其の軍勢を引き連れて魏へ歸らしめて、公子は、獨り隨行したる賓客と共に、其の儘趙に居殘りたり、

趙孝成王德公子之矯奪晉鄙兵而存趙、乃與平原君計、曰、五城封公子、公子聞之、意驕矜而有自功之色、客有說公子曰、物有不可忘、或有不可不忘、夫人有德於公子、公子不可忘也、公子有德於人、願公子忘之也、且矯魏王令、奪晉鄙兵、以救趙、於趙則有功矣、於魏則未爲忠臣也、公子乃自驕而功之、竊爲公子不取也、於是公子立自責、似若無所容者、

【解釋】【驕矜】……高ぶり誇るなり、【無所容】……身の置き處なきなり、

【解釋】趙の孝成王は、公子の魏王の命令なりと矯め詐りて、晉鄙の兵を奪ひ取りて、趙を保存せしことを恩德ありとして、平原君と相談して、五箇所の城をもて、公子を封ぜむとせり、公子は、之れを聞き及びて、其の意高ぶり誇りて、自ら之れを手柄なりとする樣子ありしに、賓客の中に、公子に說く者ありて曰はく、「物事は、忘れてはならぬことあり、忘れずしてはならぬことあり、全體、他人より公子に恩德を施したることあらば、公子は、之れを忘れたまはむことを願ふなり、しかのみならず、公子は、魏王の命令なりと矯め詐りて、晉鄙の兵を奪ひ取りて、趙を救ひたまひしことなれば、趙に對しては、手柄あれど、魏に對しては、まだ忠臣とは申されぬなり、さるを、公子は、反りて自ら高ぶりて、之れを手柄としたまふやうに見受けたり、臣は、內ゝ公子の爲めに善きことゝして取らざるなり」と、是に於て、公子は、卽座に自ら己れの心得違ひを責めて、身の置き處なきやうに恥ぢ入りたる風情ありけり、

趙王掃除自迎、執主人之禮、引公子就西階、公子側行辭讓、從東階上、自言幸過、以負於魏、無功於趙、趙王侍酒至暮、口不忍獻五城、以公子退讓也、公子竟留趙、趙王以鄗爲公子湯沐邑、魏亦復以信陵奉公子、

【解釋】【西階】……客の昇降する階段なり、【側行】……横さまに歩むなり、【東階】……主人の昇降する階段なり、主人は、東の階段より昇降し、客は、西の階段より昇降す、客若し主人より身分の劣りたるときは、主人の階段より昇降するが、昔の禮なり、【挈】……罪の古字なり、【湯沐邑】……湯は、湯に入るなり、沐は、髮を洗ふなり、其の邑の租稅をもて湯沐の費用に供するなり、賄料のことなり、

【解釋】趙王は、平原君と相談して、折りもあらば、五箇所の城を公子に與へむと思ひたれば、或る日、趙王は、公子の來る道筋を掃除せしめて、自ら出迎へて、已れは、主人の禮を執り、公子を已れと伺等の客人として、西の階段より昇らしめむとせしに、公子は、身を縮めて、横さまに歩みて、其の待遇を謙遜辭讓して、主人より身分の劣りたる者に比べて、東の階段より昇りて、自ら魏王の命令に事寄せて、晉鄙の兵を奪ひ取りたる罪過を述べて、魏の國に背きて、不義をしたる旨上に、趙の國にも、さまで手柄のなきことを語りたり、此の日、趙王酒宴に陪席して、日の暮るゝまで、五箇所の城を獻上せむといふことを發言し兼ねたるは、公子の謙遜推讓せるをもてなり、それより、公子は、終に趙に逗留したれば、趙王は、五箇所の城の代はりに、鄗の地をもて、公子の湯殿の入用に供する邑とせしに、魏も亦一旦取り上げたる信陵の地を戴ねて公子に差し贈りたり、

公子留趙、公子聞趙有處士、毛公藏於博徒、薛公藏於賣漿家、公子欲見兩人、兩人自匿、不肯見公子、公子聞所在、乃閒步往、從此兩人游、甚歡、平原君聞之、謂其夫人曰、始吾聞夫人弟公子天下無雙、今吾聞之、乃妄從博徒賣漿者游、公子妄人耳、

【解釋】【處士】……士の家に居て仕へざる者なり、浪人のことなり、【賣漿家】……漿は、飲み物なり、漿水を賣る家なり、【閒步】……抜け道をして歩むなり、【妄人】……思慮分別なき人なり、

【解釋】公子は、其の錢、引き續きて、趙に逗留せしが、公子は、趙に二人の浪人ありて、其の一人の毛公は、雙陸の掛け事をする仲間に藏れ、其の一人の薛公は、漿水を賣る家に藏れたる由を聞き及びて、公子は、此の兩人に面會したゝ思ひしに、兩人は、自ら逃げ匿れて、公子に面會することを承知せざりしが、公子は、其の居る處を聞き込みて、人に知られぬやうに、抜け道をして歩みて、其の隱れ家へ尋ね往きて、此の兩人に從ひて游びたれば、兩人も遂に公子の心を知りて、互に甚だ打ち解けて交はりたり、平原君之れを聞き及びて、其の奥方に物語りして曰はく、「最前、吾れは、御身の弟の公子は、天下に雙ぶ者なき賢人なりと聞き及びたるに、今、吾れ之れを聞き及べば、反りて妄りに雙陸の掛

け事をする仲間、衆水を愛る者などに從ひて游べりとなり、之れを思へば、公子を無賴の人物なりと言ひはやせるは、世間の人の間違ひにて、公子は、實に思慮分別なき人ならむのみ」と、

又曰 陳仁錫の曰はく、……公子欲レ見二兩人一……以下兩人を用ゐたること五たびなりと、

夫人以告二公子一、公子乃謝二夫人一去、曰、始吾聞二平原君賢一、故負二魏王一而救レ趙、以稱二平原君一、平原君之游、徒豪舉耳、不レ求レ士也、無忌自レ在二大梁一時、常聞二此兩人賢一、至レ趙恐不レ得レ見、以二無忌一從レ之游、尚恐二其不一我欲一也、今平原君乃以爲レ羞、其不レ足二從游一、乃裝爲レ去、

字解 【稱】……誉みを叶ふるなり、【豪舉】……豪傑の擧動なり、【從】……旅支度をするなり、

事解 平原君の奥方之れを聞きて、其の言葉を公子に告げしに、公子大に憤りて、奥方に暇乞ひして、趙の國を去らむとして曰はく、「最前、吾れは、平原君の賢才あることを聞き及びたるが故に、魏王に背きて、一方ならぬ心勞をして、趙を救ひて、平原君の望みを叶へたり、さるを、平原君は、其の深切を忘却して、吾れの毛公、薛公に交はりたるを非難して、思慮分別なき人なりとまで言はれたるは、何事ぞ、全體、平原君の人と交はり游べるは、益なく騙者虛飾を事とする、豪傑の擧動なるのみ、眞實に己れの相談相手となるべき天下の賢士を求められぬなり、己れ魏の大梁の都に在りし時より、常に此の兩人に從ひて游ぶことを聞き及びたれば、趙の國へ到著して、面會することを得ざらむことを心配せり、さるに、今、平原君は、反りて此の兩人に交はることを恥辱なりとして、從ひて游ぶに足らずとせられたるは、其の意を得ず」と、斯く言ひ棄てて、旅支度をして、趙を去らむとせり、

夫人具以語二平原君一、平原君乃免レ冠謝、固留二公子一、平原君門下聞レ之、半去二平原君一歸二公子一、天下士復往歸二公子一、公子傾二平原君客一、

事解 平原君の奥方、公子の言葉を事細かに平原君に語りしに、平原君大に恐縮して、公子の旅館へ往きて、冠を脱ぎて、其の失言を詫び入りて、是非とも滯在せられたしとて、固く公子を引き留めたり、平原君の門下の人々、此の事を聞き傳へて、其の半分は、平原君の家を立ち去りて、公子の方へ身を寄せたり、又先年魏にて世話になりし天下の諸士も、蜂ねて趙へ往きて、公子に身を寄せたり、されば、公子は、平原君の賓客を押し傾くる勢ひになりぬ、

公子留レ趙十年不レ歸、秦聞二公子在一レ趙、日夜出レ兵東伐レ魏、魏王患レ之、使二使往請二公子一、公子恐二其怒一之、乃誡二門下一、有敢爲二魏王使一通者死、賓客皆背レ魏之趙、莫敢勸二公子歸一、

事解 公子は、趙に逗留して、十餘年まで、魏へ歸らざりけり、秦は、公子の趙に滯在せることを聞き及びて、晝夜の別なく、兵を出だして、東の方魏を伐ちたれば、魏王之れを心配して、使者を趙へ差し向けて、公子に歸國せむことを請はしめたり、されども、公子は、魏王の怒りのまだ解けずして、歸國の後に罪を得むことを掛念して、門下の人に言ひ含めて、強ひて魏王の使者の爲めに取り次ぎをする者あらば、殺さむと言ひたれば、賓客は、皆魏に背きて、趙へ往きて、強ひて公子に歸國を勸むる者なかりけり、

毛公、薛公兩人、往見二公子一、曰、公子所以重二於趙一、名聞二諸侯一者、徒以有レ魏也、今秦攻レ魏、魏急而公子不レ恤、使レ秦破二大梁一、而夷二先王之宗廟一、公子當何面目立二天下一乎、語未レ及レ卒、公子立變レ色、告二車趣一駕、歸救レ魏、魏王見二公子一、相與泣、而以二上將軍印一授二公子一、公子遂將、

字解 【夷】……破壞するなり、【告車趣駕】……馬車の支度を催促するなり、

事解 其の時、毛公、薛公の兩人、公子の旅館へ尋ね往きて、公子に面會して曰はく、「公子の趙に貴び重んぜられて、名譽の諸侯に聞こえたるは、中に、若し秦をして、大梁の都を攻め破りて、魏の先代の君王の宗廟を破壞せしめば、公子は、何の面目ありて、天下に身を立て置かるべき」と、此の口上のまだ濟まぬ中に、公子忽ち面色を變へて、馬車の支度を催促して、急ぎ歸りて、魏を救ひたれば、魏王公子に面會して、手を執り合ひて、嬉し泣きに打ち泣きたり、斯くて、魏王は、上將軍の印章をもて、公子に授けたれば、公子は、遂に魏の大將となりぬ、

魏安釐王三十年、公子使使遍告二諸侯一、諸侯聞二公子將一、各遣二將將一兵救レ魏、公子率二五國之兵一、破二秦軍於河外一、走二蒙驁一、遂乘勝逐二秦軍一、至二函谷關一、抑

秦兵、秦兵不敢出、當是時、公子威振天下、」

【講義】魏の安釐王の三十年に、公子は、使者を列國へ差し向けて、此の度歸國せしことを漏れなく諸侯に告げ知らせたれば、諸侯は、公子の大約となりたる由を聞き及びて、各〻將軍を遣はして、兵を將として、魏を救はしめたり、是に於て、公子は、韓、魏、趙、燕、楚の五箇國の兵を引き連れて、秦の軍勢を河外の地に破りて、其の將軍の蒙驁を逃げ走らしめて、遂に勝ちに乘じて、秦の軍勢を逐ひ攻めて、函谷關まで詰め寄せて、秦の兵を抑へ止めたれば、秦の兵は、押し切りて、函谷關より出でざりけり、是の時に當たりて、公子の威名は、天下中に轟き渡りけり、

諸侯之客進兵法、公子皆名之、故世俗稱魏公子兵法、秦王患之、乃行金萬斤於魏、求晉鄙客、令毀公子於魏王曰、公子亡在外十年矣、今爲魏將、諸侯將皆屬、諸侯徒聞魏公子、不聞魏王、公子亦欲因此時定南面而王、諸侯畏公子之威、方欲共立之、秦數使反閒偽賀、公子得立爲魏王未也、魏王日聞其毀、不能不信、後果使人代公子將、

【名之】……公子の兵法と名づけたるなり、【毀】……讒言するなり、【定南面】……君主たるべき南面の地位を定むるなり、南面の解は、伍子胥の傳の北面の下に見えたり、【反閒】……二義あり、昨りて敵國の人となりて、其の軍中に入り、間隙を伺ひて、反りて其の主に報ずるなりとも、其の敵人の來りて我れを間する者に因りて、偽りて知らざる眞似して、僞情を示して、之れを縱てば、其の者歸りて、見たる所を其の將に告ぐ、然るときは、其の者反りて我が間となるなりともいへり、

【講義】諸侯の賓客、公子の雷名を慕ひて、色〻の兵法の書物を進呈せしに、公子皆之れを公子の自著なりと思ひて、魏の公子の兵法と稱せり、さて秦王は、公子の魏にて用ゐらるゝ間は、列國に手を出すことの叶はざることを心配して、一萬斤の大金を魏の國に振り蒔きて、先年、公子の殺したる、魏の將軍の晉鄙の家の食客を搜し求めて、之れを手先に使ひて、公子の事を魏王に讒言せしめて曰はく、「公子は、魏を逃亡して、他國の趙に滯在せしこと、十箇年に及べり、今、魏の將となりたれば、諸侯の將は、皆之れに附屬せり、諸侯は、徒に魏の公子の名前を聞けるのみにて、魏王あることを聞かず、公子も、亦此の好機會に付け入りて、君主たるべき南面の地位を定めて、魏王となりたく思ひたり、諸侯は、公子の威光を畏れ憚りて、共〻に之れを押し立てむと思ふ最中なり」と、秦は、度〻廻し者を使ひて、僞りて公子に慶賀せしめて曰はく、「公子は、まだ立ちて魏王となられぬか」と、魏王日毎に晉鄙の家の食客の讒言を聞きて、信用せざること能はず、其の後、果たして別人をして、公子に代はりて、將たらしめて、公子を退役せしめたり、

公子自知再以毀廢、乃謝病不朝、與賓客爲長夜飲、飲醇酒、多近婦女、日夜爲樂飲者四歲、竟病酒而卒、其歲、魏安釐王亦薨、秦聞公子死、使蒙驁攻魏、拔二十城、初置東郡、其後秦稍蠶食魏、十八歲而虜魏王、屠大梁、」

【長夜飲】……晝も戸を締めて、酒宴するなり、【醇酒】……強き酒なり、【屠】……殺だ多く人を殺すことなり、

【講義】公子は、自ら再度まで讒言をもて廢せられたることを知りて、遂に魏王を見限りて、病氣なりと申し立てゝ、出仕せず、常に自宅に引き籠もりて、賓客と共に夜明かしの酒宴をして、強き酒を飲み、多く婦女子を近づけて、日夜遊樂爲飲すること、四箇年程になりたれば、終に酒毒に中たりて、卒去せり、其の年、魏の安釐王も、亦薨去せり、秦は、公子の死去せしことを聞き込みて、最早長れ憚ることなしとて、先年敗北したる蒙驁を將として、魏を攻めしめたれば、蒙驁二十箇所の城を乘り取りて、初めて其の地に東郡を置けり、其の後、秦は、蠶の桑の葉を食ふやうに、少しづゝ迫ひ〳〵に魏の領分を侵し取りて、十八年目に、魏王を生け捕りて、大梁の都の人を片端より切り殺して、遂に魏の國を滅ぼしき、

【又注】唐順之の曰はく、魏の亡びたることをもて、信陵の傳に系けたるは、信陵は國の存亡に關れることを見せるなり、

高祖始微、少時、數聞公子賢、及即天子位、每過大梁、常祠公子、高祖十二年、從擊黥布還、爲公子置守冢五家、世世歲以四時奉祠公子、

【守冢】……墓番なり、

【講義】我が漢の高祖は、最初は、微賤の御方にて、幼少の頃より、度〻公子の賢才あることを聞き及びたまひけれども、及びて、大梁の地を通行したまふ毎に、常に公子の墓參りをしたまひき、高祖の十二年に、黥布を擊ちて、立ち戻りたまひしより、公子のために、五軒の墓番を置かせられければ、それより、漢の世〻の天子は、毎年春夏秋冬の四季に、公子の祭りを營ませたまへり、

太史公曰、吾過大梁之墟、求問其所謂夷門、夷門者、城之東門也、

【墟】……城跡なり、

【講義】太史公信陵君の事跡を論賛して曰はく、「吾れ大梁の城跡を通行して、其の世間にて取り沙汰せる彼の侯生の住居せし夷門といへる處を求め尋ねたるに、夷門は、城の東の門なり、

天下諸公子亦有喜士者矣、然信陵君之接巖穴隱者、不恥下交、

訓讀 當時、天下の列國の公子總も、亦士を喜む者ありて、孰れも數千の食客を養ひき、さりながら、信陵君の如く、人の知らざる、山林巖穴の間に隱遁せる者を接待し、下賤の者と交はることを恥ぢずして、矣生、朱亥、毛公、薛公の輩を重んじたるは、餘の公子總の及ばざる所なり、

有以也、公冠諸侯、不虛耳、高祖每過之、而令民奉祠不絕也、

字解 【以】……故なり、理由なり、【冠】……頭に立つなり、

訓讀 其の名聲の赫々として、當時の諸侯の頭に立つなり、

文法 過行したまふ毎に、其の地の人民をして、公子の祭りを營ませられて、永代香花を絕えざらしめたまひつれ」と、

を過行したまふ毎に、其の地の人民をして、公子の祭りを營ませられて、永代香花を絕えざらしめたまひつれ」と、

訓讀 茅坤の曰はく、信陵君は、是れ太史公の胸中に得意の人なり、故に本傳も、亦太史の得意の文なりと、○陳仁錫の曰はく、四君の傳、信陵の篇を最とすと、○淺稚隆の曰はく、此の傳は、國策を翻はずと、○董份の曰はく、賢帮に感嘆あるは、諸公子の中に於て、蓋し信陵に取れることあらむと、

春申君列傳第十八

春申君者、楚人也、名歇、姓黃氏、游學博聞、事楚頃襄王、

訓讀 春申君は、楚の國の人なり、名は歇、姓は黃氏といふ、諸國に遊學して、學問をして、博く物事を見聞せり、楚の頃襄王に奉公せり、

頃襄王以歇爲辯、使於秦、秦昭王使白起攻韓、魏、敗之於華陽、禽魏將芒卯、韓、魏服而事秦、秦昭王方令白起與韓、魏共伐楚、未行、而楚使黃歇適至於秦、聞秦之計、當是之時、秦已前使白起攻楚、取巫、黔中之郡、拔鄢、郢、東至竟陵、楚頃襄王東徙、治於陳縣、黃歇見楚懷王之爲秦所誘而入朝、遂見欺、留死於秦、頃襄王其子也、秦輕之、恐壹舉兵而滅楚、

字解 【辯】……都を說くなり、

訓讀 頃襄王、黃歇をもて辯者なりとして、秦の國へ使者に遣はしたり、其の前方に、秦の昭王、將軍の白起をして、韓、魏の二國を攻めしめしに、白起之れを華陽の地に敗りて、魏の將の芒卯を生け捕りたれば、韓も魏も服從して、秦に事へたり、今、又秦の昭王、白起をして、韓、魏の兵と共に、楚を伐たしめむとする最中にて、其の軍勢のまだ出發せざる折りから、楚の使者の黃歇は、丁度秦へ到著して、秦の楚を伐つ計略を聞き込みたり、是の時に當たりて、秦は、已に其の前方に、白起をして、楚を攻めしめしに、白起楚の巫の地と黔中郡とを取り、鄢と郢との兩地を乘り取りて、東の方竟陵まで押し込みたれば、楚の頃襄王、郢の都より東の方へ徙りて、陳縣に都を置けり、黃歇は、楚の懷王の、先年秦に誘引せられて、秦へ入朝して、遂に僞り欺かれて、引き留められて、秦に死去せしことを見知りたるが上に、頃襄王は、懷王の子なれば、秦は、之れを輕蔑して、一たび兵を擧げて、楚を滅ぼさむことを心配せり、

文法 淺稚隆の曰はく、此れ春申君の國を盜ふる意を擔事せりと、

歇乃上書說秦昭王曰、天下莫彊於秦、楚、今聞大王欲伐楚、此猶兩虎相與鬬、兩虎相與鬬、而駑犬受其獘、不如善楚、臣請言其說、

字解 【駑犬】……駑き犬なり、【受其獘】……其の疲弊したるに乘ずるなり、

訓讀 是に於て、黃歇秦の出兵を止めさせむとて、書面を差し出して、秦の昭王に啟きて曰はく、「天下中に、秦と楚とより强き國はなし、然るに、此の度、大王には、楚を伐たむと思し召さるゝ由を聞き及びたり、此れさながら二匹の猛虎の互に鬪爭するが如し、二匹の猛虎互に鬪爭せば、容易く勝負つかずして、孰れも怪我をしたる時、取るに足らぬ駑き犬、其の疲弊したるに乘じて、遂に兩虎を斃すべし、之れと同じく、秦、楚の二國合戰して、楚方共に困難せば、他の駑き國に利益を占めらるゝならむ、之れを思へば、大王には、楚と中睦くしたまはむには如かじ、臣其の說を申し上げむことを請ふ、

文法 淺稚隆の曰はく、文字層々相街み、節々相生ず、其の極めて緊しき處は、皆聞く力より之れを出だせりと、

臣聞物至則反、冬夏是也、致至則危、累棊是也、今大國之地偏天下、有其二垂、此從生民已來、萬乘之地未嘗有也、先帝文王、莊王之身、三世不忘、接地於齊、以絕從親之要、今王使盛橋守事於韓、盛橋以其地入秦、是王不用甲、不信威、而得百里之地、王可謂能矣、王又擧甲而攻魏、杜大梁

之門、舉河內、拔燕、酸棗、虛、桃、入邢、魏之兵雲翔、而不敢捄、王之功亦多矣、王休甲息衆、二年而後復之、又并蒲、衍、首垣、以臨仁、平丘、黃、濟陽嬰城、而魏氏服、王又割濮、磨之北、注齊、秦之要、絕楚、趙之脊、天下五合六聚、而不敢救、王之威亦單矣、

【講義】【物至則反】……物事は、行き止まりまで行けば、元の處へ立ち戻るなり、【致至則危】……致は、物を取りて、物の上に置くなり、物を積み上げること、行き止まりまで積み上げれば、傾覆の憂へありて、危險なるなり、【累棊】……雙陸の駒を積み累ねるなり、【徧三天下】……天下總體の上より見るなり、【二垂】……西南の二垂なり、垂は、邊境なり、秦の地を指す、西北の二垂なりといへるは、非なり、【先帝、文王、莊王之身、三世不忘】……楚は、久しく王號を僭稱したるが故に、先帝といへるなり、文王は、熊文君なり、戰國策には、先帝文王、武王、王之身三世とあり、蓋約は、約束なり、一說には、要は、腰なり、天下の地勢を人の腰に譬へたるなりといへり、【使盛橋守事於韓】……盛橋は、秦の人なり、守は、待つなり、盛橋をして、事の起こらむことを韓に待たしむるなり、【不信威】……信は、伸ぶるなり、武威を張らざるなり、【杜】……塞なり、【雲翔】……雲の如くに散亂するなり、【捄】……救に同じ、【復】……重ねて兵を擧げるなり、【嬰城】……籠城するなり、【注齊、秦之要】……注は、連ぬるなり、要は、腰なり、齊と秦との腰を連ぬるなり、腰は、其の地勢を人の腰に譬へたるなり、【單】……殫と通ず、盡くすなり、

【講義】臣が幾ねがね聞き及びたるには、總べて物事は、行き止まりまで行けば、元の處へ立ち戻るものなり、極寒の冬と、極暑の夏との如き是れなり、又物を積み上げること、行き止まりまで積み上げれば、傾覆の憂へありて、危險なるものなり、雙陸の駒を積み累ねたるが如き、是れなりとなり、今、秦の大國の土地を天下總體の上より見るに、其の西南の二方の邊境を所有せられたり、世の中に人類の成り立ちしより以來、事ある時に、兵車一萬輛を出だすべき、秦のやうなる廣大の地は、今まで一度もありたることなし、されば、我が楚の先帝の文王、武王、及び當今の四王の身は、三世共に秦、楚の交はりを忘れずして、齊の國とは地續きなれど、合從親睦の約束を絕ちて、只管秦に懇情を表したり、今、大王には、盛橋をして事の起こらむことを韓に待たしめたまひしに、盛橋は、果たして韓の土地をもて秦へ入れたり、是れ大王には、甲兵を用ゐず、武威を張らずして、百里の土地を手に入れたまへるなり、大王は、仕事を上手にしたまへりと申すべし、大王には、又甲兵を繰り出して、魏を攻めしめたまひしに、其の甲兵は、大梁の郊の門を塞ぎ、河內の地を丸取りにし、燕、酸棗、虛、桃の諸邑を乘り取り、邢の地へ押し入りたれば、魏の兵陣易して、雲の如くに散亂して、押し切りて、之れを救はざりき、大王の御手柄も、亦多分なりと申すべし、大王には、又此の勝ち軍にて、引き揚げたる、甲兵人數を休息せしめて、二年の後に、重ねて兵を擧げられしに、其の軍勢は、又魏の蒲、衍、首垣の諸邑を併呑して、仁、平丘の諸邑に臨み通りたれば、黃、濟陽の諸邑、手を束ねて籠城して、魏の國遂に服從せり、大王には、又濮水と磨の地との北を割き取りて、齊と秦との腰部を連ね、楚と趙との背部を絕たれたれば、天下の諸侯、五たび合ひ、六たび聚まりて、相談したれど、結局

秦を畏れ憚りて、押し切りて之を救はざりき、大王の御威光も、亦至り極まれりと申すべし、

王若能持功守威、絀攻取之心、而肥仁義之地、使無後患、三王不足四、五伯不足六也、王若負人徒之衆、仗兵革之彊、乘毀魏之威、而欲以力水、濡其尾、此言始之易、終之難也、

詩曰、靡不有初、鮮克有終、易曰、狐涉

【講義】【絀】……黜と通ず、退くるなり、【肥仁義之地】……仁義の土臺を手厚くするなり、【仗】……倚るなり、【詩】……詩經の大雅の部の蕩の篇なり、【鮮】……無に同じ、【克】……能くなり、【易】……易經の未濟の卦なり、

【講義】大王にして、若し能く今日までの御手柄を維持せられ、今日までの御威光を保守せられ、人の國を攻め取らむとする慾を抑へ退けられて、仁義の土臺を手厚くせられて、後日の難儀なからしめたまはゞ、夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王の三王も、大王を加へて、四王とするに足らずして、大王には、三王よりも遙に上に立ちたまふべく、齊の桓公、晉の文公、宋の襄公、秦の穆公、楚の莊王の五伯も、大王を加へて、六伯とするに足らずして、大王には、五伯よりも遙に上に立ちたまふやし、之れに反して、大王にして、若し人徒士卒の衆きを恃み、兵革武器の強きに倚りて、魏を破壞せし餘威に乘じて、兵力をもて、天下の人主を臣下とせむと思し召したまはば、臣は、其の後日の難儀あらむことを氣遣ふなり、詩經に曰はく、『何事も、初めあらざることなけれど、能く終はりありて、始終を全くする者は寡なし』と、又易經に曰はく、『狐といふ獸は、尾を大切にして、川水を渉るときには、尾を振り上げて、濡らさぬやうに用心すれど、久しくなれば、氣力疲れて、其の尾を濡らすやうになるなり』と、是れは、軌れも、物事の始めの容易くして、終はりの困難なることを言へるなり、

何以知其然也、昔智氏見伐趙之利、而不知榆次之禍、吳見伐齊之便、而不知干隧之敗、此二國者、非無大功也、沒利於前、而易患於後也、吳之信越也、從而伐齊、既勝齊人於艾陵、還爲越王禽三渚之浦、智氏之信韓、魏也、從而伐趙、攻晉陽城、勝有日矣、韓、魏叛之、殺智伯瑤於鑿臺之

下、今王妬楚之不毀也、而忘毀楚之彊韓、魏也、臣爲王慮而不取也、詩曰、大武遠宅而不涉、從此觀之、楚國援也、鄰國敵也、詩云、趯趯毚兔、遇犬獲之、他人有心、余忖度之、今王中道而信韓、魏之善王也、此正吳之信越也、

【注釋】【後利於前而易患於後也】……眼前の利益に溺れて、後日の難儀と取り易ふるなり、【詩】……逸詩なり、【大武遠宅而不涉】……宅は、定むるなり、威武の盛大なる者は、遠く之れを安んじ定めて、必しも其の地を涉らざるなり、【鄰國】……韓、魏を指す、【詩】……詩經の小雅の部の巧言の篇なり、【趯趯】……跳ね走るさまなり、【毚兔】すばやき兎なり、【忖度】……推量するなり、【中道】……中途なり、

【講義】何の譬けにて、大王の御身に後日の難儀あらむことを知りたるかとの御尋ねもあらば、其の仔細を御話し申さむ、昔し、智伯は、趙を伐つことの利益なることを見て、楡次縣にて、身に禍を受けむことを知らず、吳王の夫差は、齊に伐つことの便利なることを見て、干隧の地に敗て失敗せむことを知らざりき、此の智伯と吳王の夫差との二諸國は、大なる手柄なきにはあらざれど、眼前の利益に溺れて、後日の難儀と取り易へたるなり、吳王の夫差は、越王の勾踐を信用して、己れの供に連れて、齊を伐ちて、既に齊の人に艾陵の地に勝ちて、其の本國へ立ち戻りて、越王の爲めに、三渚の浦にて、生け捕られき、智伯は、韓康子と魏桓子とを信用して、己れの供に連れて、趙襄子を伐ちて、晉陽城を攻めて、程なく勝たむとせしに、韓康子も、魏桓子も、之れに叛きて、眞切りをして、智伯の瑤を楡次縣の鑿臺の下に殺害しき、今、大王の楚の國の毀損せざるを妬み惡みたまひて、楚の國を毀損するは、韓、魏を强くする基なることを忘れたまへるは、臣大王の爲めに熟慮して、等きことなりとして取らざるなり、詩經に漏れたる逸詩に曰はく、『威武の盛大なる者は、遠く之れを安んじ定めて、必しも其の地を涉らず』と、此の詩に由りて、觀察するに、遠き楚の國は、反りて秦の味方にして、近き鄰國の韓、魏は、反りて秦の敵なれば、近きを攻めて、遠きを伐つべからず、又詩經に云はく、『趯趯として跳ね走る、すばやき兎は、犬に出逢ひて、生け捕らる、が如し』と、今、大王の御心を推量するに、兎の犬に生け捕らるゝが如く、後日の難儀を求めたまふことあらむ、大王には、始めは韓、魏を信用したまはざりしに、今、中途にて韓、魏の大王と中等くせるを信用したまふは、此れまさしく吳王の夫差の越王の勾踐を信用せしに同じからむ、

臣聞之、敵不可假、時不可失、臣恐韓、魏卑辭除患、而實欲欺大國也、何則王無重世之德於韓、魏、而有累世之怨焉、夫韓、魏父子兄弟接踵而死於秦者、將十世矣、本國殘、社稷壞、宗廟毀、刳腹絕腸、折頸摺頤、首身分離、暴骸骨於草澤、頭顱僵仆、相望於境、父子老弱係虜束手爲羣虜者、相及於路、鬼神孤傷、無所血食、人民不聊生、族類離散流亾、爲僕妾者、盈滿海內矣、故韓、魏之不亾、秦社稷之憂也、今王資之、與攻楚、不亦過乎、

【注釋】【假】……見逃すなり、【接踵】……身を寄せ合はするなり、【社稷】……社は、土地の神なり、稷は、五穀の神なり、此の二神は、國に取りての大切の神なり、【卑辭】……腹を裂かるゝなり、【折頸】……喉頸を折らるゝなり、【摺頤】……下顎を挫かるゝなり、【暴】……晒すなり、【頭顱】……髑髏なり、【係虜】……首筋に繩を掛けらるゝなり、【不聊生】……安堵して生活せられぬなり、【孤傷】……孤獨となりて、傷み悲むなり、【血食】……牛、羊、豕の肉を供へて祭ることなり、【不聊生】……安堵して生活せられぬなり、【資】……資給するなり、

【講義】臣が兼ねく聞き及びたるには、敵は見逃すべからず、時は失ふべからずといへり、韓、魏の敵は、少しも容赦すべからず、今日の機會を取り外してはならぬなり、臣は、韓、魏の表面は、秦に對して、言葉を卑下して、敬ひ事へて、秦より受くる患害を取り除けて、內實は、秦の大國を僞り欺かむことを氣遣ふなり、何とならば、大王には、韓、魏に對して、世を重ねたる恩德なくして、世々の怨恨を受けらるゝことあればなり、全體、韓、魏の人民の、父子兄弟の、身を寄せ合はせて、秦の軍に戰死せし者、三代五代のことにてはなく、十代程も前よりのことにして、其の本國は殘害せられ、社稷の二神の祭殿は破壞せられ、國王の宗廟は毀損せられ、人民は腹を裂かれ、腸を絕たれ、喉頸を折られ、下顎を挫かれ、首と胴とは二つになりて、骸骨を草原水澤の間に晒し、髑髏は地上に伏し轉びて、見渡す限り、國境に散亂し、父子老弱は、首筋に繩を掛けられ、兩手を縛り束ねられて、珠數繋ぎの生け捕りとなりて、秦へ引き立てらるゝ者、道路に打ち續きたれば、其の家々は斷絕し、祖先の鬼神は、孤獨となりて、傷み悲みて、牛、羊、豕の肉を供へて祭らるゝことなく、跡に殘れる人民は、安堵して生活せられず、一族親類八方に離散流亡して、他國へ往きて、下男下女となりて、辛く露命を繋ぐ者、四海の內に充滿せり、此のやうに韓、魏の人民は、秦に虐待せられて、其の怨恨は、骨髓に徹したれば、韓、魏の滅亡せざるは、秦の社稷國家の心配なり、さるを、此の度、大王には、此の恐るべき敵國の韓、魏の爲めに、兵力を資給して、共々に楚を攻めむとせらるゝは、亦間違ひたることならずや、

且王攻楚、將惡出兵、王將借路於仇讎之韓、魏乎、兵出之日、而王憂其不返也、是王以兵資於仇讎之韓、魏也、王若不借路於仇讎之韓、魏、必攻